

摩天楼の忍たち



古見蔵しか

1 東大生、藤林悠輔

わが国最高峰の名門東都大学にこの日最後のチャイムが鳴り響く

六限目の授業が終わると窓の外は闇の中。

日は長くなったといってもこの時間になると真っ暗になるのは仕方がない

ふじばやしゆうすけ

藤林 悠輔は窓の外を見た後、大きなため息をつきGショックで時刻を確認した。

時刻は午後八時半。いつもの木曜の帰宅時間。

悠輔の木曜日はどういうわけか単位取得に関わる授業が畳み込むように入ってしまう、さらにこの時間に授業があるため開放されるのがとにかく夜遅くなってしまう。

嫌だなあ——

悠輔はそのことがとても憂鬱で思わず顔をしかめた。

そこらへんに居る普通の学生はなんとも思わないだろう。

これから家に直行するなりバイトするなり合コンするなり思い思いの時間がすごせるのだから。

でも、自分は違う。そんな自由があるのならわけて欲しいほどなのに——

「よお、藤林。おっつー」

そんな悠輔に声を掛けてきたのはひょろりと茶髪で背の高い同級生の^{いしのまこと}石野 誠であった。

だか、その問いに悠輔は不機嫌そうに黙ったまま机に出してある教科書やルーズリーフを片付け始めた。

「おいおい、シカトかよー。まあいつものお前らしいっちゃお前らしいけど」

「用件があるなら早くしてくれる？」

「……ホントお前って愛想ないな～。まあいいや」

そんな悠輔を見て石野は骨っぽい顔に苦笑いを浮かべ言葉を続けた

「今日さあ～、合コン入ってるんだ。」

「断る」

「おいおい。内容聞かなくていいのかよー。相手は美人ぞろいの日立川女子大っていうのに……」

「今日、僕は忙しいんだ」

「嘘つけ。ホントはこの前の合コンでゲットした彼女に示しがつかないからだろ」

「……………」

——本当に能天気な奴だ。

そんな彼を見て悠輔はもう一度かれをじろりと睨んだ。

軟派者で不真面目そうに見える石野だが、こう見えても名門私立紅明高校出身で将来の夢は外務官僚とか言っている絵に描いたように典型的な東大生だ

だが、悠輔はそんな同級生たちの見た目と野望のギャップを見るたびに心の中で生まれる苛つきをどうしても隠すことが出来なかった。

「でも、いいよなあ～。初めて合コンに行ったお前が合コンのプロである俺よりも早く女をゲットできるなんて……世の中って本当に理不尽にできてるよなあ」

その一言が悠輔の中に決定的な亀裂を生んだ。

悠輔はドンと机をたたくようにして席から立ち上がると、黒縁の眼鏡をぎらりと光らせて石野を睨み付け一言言った。

「どいてくれる？」

その一言だけでおしゃべりの石野はぴたっと黙り込んだ。

いつも決して愛想のいい相手ではない藤林悠輔ではあるが、今の彼の眼鏡の奥の瞳は怒っているとかという次元を超えて恐ろしく冷たく不気味に光ったのだ。

それを見た以上、石野は息を呑んで黙って道を譲るしか出来なかった。

悠輔はそれを見て、悠輔は挨拶もせず急いでリュックを背負い講義室を出た。

——少しやりすぎたかもしれない。

会談を駆け下りながら先ほどの石野の表情を思い出して悠輔は少し反省の色を見せた。

だがその反省は軽蔑している軟派者の石野に対してではなく、同級生にほんの少し本当の自分の顔を見せてしまった自分自身への反省だった。

それを隠すかのように悠輔は平然とした顔をして第四講堂から出てきた。

外はどっぷりと日が暮れ、小さな街灯が古臭い第一講堂をぼんやりと照らしていた。

日本最高峰の学校として燦然と輝かしい歴史のある東都大学——

藤林悠輔は出身地である三重県内のさほど有名でもない進学校から現役合格を果たした十九歳の二期生だった。

見た目は暗い茶色に染めた髪に黒縁の眼鏡、背はさほど高いわけでもないが雰囲気はどこか大人びているように写るかもしれない。

二期生だから大学にはまあ慣れた方。単位はギリギリの状態だけどとりあえず留年しない程度にがんばっている。

だけど悠輔はそれほど大学生活に固執しているわけではなかった。

ほかの同級生が口走る総理大臣や事務次官とか言う大きな野望なども自分にはあまり存在しない

——否、彼はそんな野望を持つことを極端に避けてきた。

理由はただ一つ。それが彼の家の問題であった。

藤林家は地元である伊賀上野ではかなりの名家であり、家長である悠輔の父親は地元選出の県議会議員もする地元の名士中の名士という存在だ。

自分の家がただの地元の名士であるだけならまだ事は複雑ではない。

自分の家は普通じゃない。そして自分自身も普通ではない——そのことは悠輔が生まれたときにはもう頭の中にすり込まれていた

結論から言えば悠輔は忍者であった

今の時代に忍者？ 冗談を言うものではない——と言われそうだが、実際に今——この時代に忍者をしている者たちが本当に影で存在している。

それを裏で取り仕切っている悠輔が育った藤林家——否、伊賀藤林流であった。

そして、悠輔は一介のエリート大学生である前に、伊賀藤林流の奥義継承者である次期家元として現代の伊賀忍者を率いる若きリーダーであり、それこそが自分の本来あるべき姿だと思っていた。

でも、だとしたら僕は何故東都大学を目指したのだろうか？

それを考えると小一時間理由を考えるのに苦慮してしまう。たいした夢も野望も抱かず自分試しに入った学校なのだから。

ただ、今言えるのは軟派者の癖に野望だけはでかい同級生たちと自分は明らかに立場が違うということ。

それ故に悠輔はアフターを好き好きに過ごしている同級生たちが恨めしく羨ましく思えた。

僕は君たちとは違う。僕にはやるべき任務があるんだ——

帰宅を急ぐ学生たちを横目に悠輔はずっと前を向いた。

日本一有名な校門といわれる東都大学の赤門前には一台の黒い車が止まっていた

それは決して目立つような外車ではなく、ごく普通のブルーバードシルフィであったが校門前で帰りを急ぐ学生たちはその様子に思わずはっとさせられた。

それは悠輔が知らず知らず放つ気高い空気に一瞬だけ気づいたのだろうか。

だが、悠輔は彼らを気にするそぶりも見せなかった。

どうせあと十分もたったら僕のことなど当に忘れてしまうだろう。目の前には輝くほどの娯楽が彼らを待っているのだから――

迎いの車に乗り込んだその瞬間、悠輔は昼間見せている平凡な学生の顔を一気に脱ぎ捨てる。

この車に乗り込んだそのときには自分はまだ別の顔――東京においての伊賀忍者を統べる若き頭目の顔に変わる。

悠輔は眼鏡の奥に潜む威圧的な鋭い瞳で若い男の運転手に合図を送る

それと同時に無言のまま車はゆっくりと校門を離れていった。

「お疲れ様です――家元」

運転手の男は悠輔よりも一回り近く年が離れているのかかわらず丁寧な言葉で彼に話しかけた。

その一言を聞いて悠輔は後部座席にゆっくりもたれながらむっとした様子頭をかいた

「やれやれ……木曜日にこんな約束とはね」

「そんなこと言わないでくださいよ。家元」

「だってさ、横目で同級生どもがこの後遊ぶだの何だの聞かされてみてよ。こっちだって気持ち抑えられないじゃんか！」

「それはまあ……そうですが」

「僕だって伊賀藤林流の家元である前に一介の大学生なんだよ。もっと自由な時間が欲しい」

後部座席でぶつぶつと文句を言う悠輔の顔は一瞬だけ天才忍者から我が侷な学生の顔に戻っていた。

それを見て運転手の男は苦笑を浮かべた

「家元、忘れないでくださいよ。あなたは大学生である前に我々伊賀東京部隊を束ねるべき首領なのですよ。もっと自覚をもってください」

「——少し口が過ぎるんじゃないか？ ^{もちづき}望月」

悠輔は一言そう言い放つと、口元にひやりと冷たい笑みを浮かべた。

バックミラー越しに悠輔のその笑顔と鋭い瞳を見たその瞬間、望月と呼ばれたその忍者はそれ以上何も言うことができなくなった

「僕は別に他の奴らみたいに好き勝手に遊びたいなんて思ってないよ。気持ちが抑えられないって言うのは奴らに対して苛々しているだけ。それだけさ？」

運転手の望月にそういわれたのが相当心外だったのだろうか——悠輔はさらに不機嫌そうになりながら一息にそういつて見せた。

「申し訳ありません。そういう意味でしたか……」

「でも、まあ君たちの言い分もわからないわけじゃないよ」

そう言うと悠輔は深いため息をついて足組みした。

「東都大に入学する際も父さんにしつこく言われたからね。学業よりも忍者家業を優先しなさいって。ま、おかげで単位はいつもギリギリでこんな時間まで授業出る羽目になってるけどね」

「はあ……」

「でも、僕ってすごいと思わない？」

そう言うと悠輔は目を輝かせながら身を乗り出した

「伊賀——否、忍者の長い歴史を見てこれほどまでに忍術と学業を両立したのって僕だけじゃない？ 東都大出身の忍者なんて後先考えても僕しかいないかも！」

「そうですね……」

「まあ、父さんに言われた東京に進学する条件が伊賀東京部隊の指揮なんだから、学業が忙しいなんて文句にもならないね。それに、僕はこう見えても今の状況を楽しんでいるんだから」

「はあ……」

自信満々にそう言い放つ悠輔の表情を見て望月はそれ以上何も言うことができなかった。

彼の表情には自分より年若き青年に対して深い畏怖の念があるようにさえも見えた。

「ところで、今日僕に会いたって人は誰なんだい？」

「は……」

そう言うと望月は前を見たまま落ち着いた口調で説明し始めた。

「その資料にも書いてあると思いますが……今日あなたにオファーを出したのは警視庁情報管理室の相馬^{そうまやすし}泰 警部。おそらくですが——」

「警察が僕の——否、伊賀の力を求めているってことか……」

悠輔はそう言うと深いため息をついて後部座席に深く座りなおし、手前の座席ポケットに入っていた資料にざっと目を通した。

警視庁の相馬泰警部か——その名をつぶやきながら悠輔は資料に添付されていた顔写真を見た。

歳は38歳、それにしても髪は灰色っぽく顔もやせこけていて悠輔の目には記載されてる歳の割りに老けて見えた。

「しかし38歳の警察幹部か……向こうも僕たちのこと少しは勉強してきてるのかな？」

「さあ……それは」

「どうも信じられないところがあるんだよね。こう言う関係の依頼って……警察が僕たちに協力を仰ぐのなんて今更って感じがあるし、裏でどこかと両天秤かけてんじゃないかなって思っ

やう」

「……………」

その問いに望月はそれ以上何も答えず黙ったまま車を進めた。

悠輔を乗せた車はどんどん都心へと向かっていく。

窓からは様々な街の光が絵の具のように混ざり合っ窓から車内を煌々と照らした。

悠輔はその光に照らされた資料をじっと睨みつけそのまま恐ろしいくらい押し黙った。

その顔にはもはや今時の大学生の顔などひとかけらもない。鋭い眼光と静かな殺気をまとった彼は完璧に伊賀忍者を統べるべき若きリーダーの顔になっていた。

その時だった。しんと静まり返った車内に携帯の着信音がけたたましく響いた。

悠輔は表情を崩すことなくゆっくりと携帯電話を取り出しディスプレイを見た。

かのうよういちろう

叶 陽一郎 ——悠輔にとって従兄であり彼が最も信頼する参謀であった。

「よう、悠輔。学校終わったか？」

着信すると電話の向こうの声は思いのほか明るい声で悠輔に話しかけた

「今そっちに向かっているところ」

悠輔は陽一郎のその声に笑いもせずに冷たく答えた。

「で……何かわかったの？」

「まあな、お前の言われたとおり時間が許せる限り今日の件を調べたぜ——まったくお前って人使い悪いよな。おかげでこっちは時間ギリギリで——」

「いいから、情報だけ教えてくれない」

「……わかったよ」

呆れたような声で一言そうつぶやいた陽一郎は一息置いて今まで調べた限りの情報を悠輔に教えた。

それを悠輔は黙ったまま聞き取った。その表情はやはり先ほどとさほど変わらない。むしろ先ほどより険しさと近寄りがたさが強くなったような——そんな感じが受け取れた。

「わかった……」

悠輔はじっと目を閉じると一言そう言った。

「僕がそっちに行くのはあと十五分ほどだ。そういうことだから、後は任せたよ」

2 警視庁幹部、相馬泰

今まで忍者など過去の遺物、または漫画やゲームの中での空想物と思っていた――

都心の一等地にある『ハリーアットホテル東京』の一室でソファに座り込み、ある人物を待っていた警視庁情報管理室の相馬はしかめっ面でそう思った。

最初は悪い冗談かとも思った。

直属の上司である阿部^{あべ まさひろ}雅弘に今日の夜とある人物と秘密裏にあってきてほしいといわれたが、その人物がなんと十九歳の東大生。

まさか、こんな時期に東大生の就活につき合わされるのか言うのかと思って反論しようとしたら阿部の口から信じられない言葉が飛び出したのだ。

「彼は忍者だから手ごわい相手だぞ。こちらの真意を感じられないように心がけてくれ」

忍者――！ その言葉を相馬は何度も口にし阿部に確認した。

何かの間違いであって欲しい。

今の時代に忍者だなんて――フィクションの上だけの話にしてほしい。

だが、阿部の口から出てきたのは現代の忍者たちと警察組織の強い秘密のつながりであった。

阿部が言うにはこうだ。

「私も最初は驚いた。実際の忍者なんて時代とともに消え去った存在だといつ最近まで思っていたよ。しかしだな、相馬君。本当の忍者は消え去ってしまったわけじゃない。様々に変わる時代の色に合わせて彼らも変容してきたのだよ」

――じゃあ、何でそんな忍者が警察組織に関わってくるんですか？

「早く言えば彼らと我々の利害関係が一致した結果だよ。信じられないかもしれないが彼らの情報伝達能力に機動力さらには戦闘能力すべて我々の想像を超える高さを誇っている。我々はそんな彼らを情報力を少し利用しているだけ。そして彼らも現代を生き抜くために我々を利用しているのだよ」

——と言われても、そんな現実離れした話など若い相馬には到底信じられない話であった。

半信半疑のまま相馬は警察と忍者との深いつながりを知り、機密事項である今回伊賀の若き頭目に会う理由をすべて教えられた。

阿部はその秘密を伊賀の若き頭目に絶対に悟られないようにしろと何度も釘を刺された。

しかし、相手は自分より二周りも年の離れた大学生だ。

いくら東都大学のエリート学生だとは言え警察官で情報管理の仕事をしている自分より優ることなどないと思ったのだ

彼に謙ることなどない。自分の方が絶対に立場が上に決まってる

そう息巻いて彼との待合場所である『ハリーアットホテル東京』の一室についたが、交渉相手の東大生忍者はまだ着てはいなかった

その代わり部屋に待ち構えていたのは無精髭をはやしたひょろりと背の高い男と反対に身なりの整った体型のいい男。どちらも三十前後の年齢だった。

こいつらもやはり忍者なのだろうか——相馬は瞬時にそんな疑念を覚え二人を不審の目で見たが二人はあまりにもあっさり自分の身分を明かした。

無精髭を生やした背の高い男の名は叶陽一郎と名乗った。日の丸テレビの報道記者をしていると言う。やたら陽気で明るいのが目に付き、緊張していた相馬に対し何回か冗談を飛ばして見せた。

そして、もう一人の身なりの整った男の方はあおばそうじ青葉宗司。驚くことに相馬と同業者——警察庁の人間だと名乗った。だが口数が少なく物静かな性格なのかそれ以上のことは彼の口から聞き出すことが出来なかった。

彼らは表こそマスコミ関係や警察などそれなりの地位のある機関に所属している。だがその裏の意味を考えると相馬はなんとも重たい気分を味わわざるをえなかった。

警察もマスコミも日本の根幹を作っている重要な機関。もし彼らが仮に忍者だとしたら表の顔と裏の顔を使い分け彼らの意向でこれらの機関が動かしているでも言うのだろうか？

——まさかな。

阿部に打ち明けられた警察の秘密と二人の男たちの見えない本性を考えた挙句それを何とか否定しようとした。

冗談じゃない。過去の遺物みたいな忍者に今の日本を牛耳られているなんてあってたまるか。

俺は絶対に信じない。今の時代に忍者なんていることなんて絶対に——信じられない！

「おい。まだ君たちのボスは来てないのか!？」

急いで理論武装した相馬は少しだけ強気な口調で二人の男に噛み付いた。

「すみませんね」

それを言ったのは社交的な性格の叶陽一郎の方だった。

「彼、こう見えても多忙な学生でしてね……確か今日はびっしり授業がつまっているとか」

「まったく……たかが大学生風情にここまで待たされるなんて心外だな。君たちは悔しくないのかね？自分たちより若い人間がトップだって事を——」

相馬のその一言に陽一郎と宗司は思わず顔を見合わせた。その口元はどこか苦笑いが浮かんでいた

「あなたはまだわかっていないようですね」

陽一郎は少し呆れたような顔を浮かべ言った。

「家元は確かに年齢は若く年功序列の組織を生きている相馬さんには彼が若輩者にしかみえないかもしれませんね。でもあなたは彼の恐ろしさをまだ知らない。彼が『あの名』を継いだ時点で我々伊賀藤林流の門下の者は彼に絶対服従するのです」

「……はあ？」

陽一郎の答えは相馬にはまるでちんぷんかんぷんの異国の呪文のように思えた。

『家元』だの『あの名』だの——まるで謎の単語が相馬の頭をさらに混乱させた。その答えを考えているだけで相馬はだんだん自分の頭に血が上るのを覚えた。

だが、そんな相馬の様子を他所に目の前の陽一郎と宗司はもう一度顔を見合わせた。

そして客人の相馬にまったく悟られることない秘密の会話術『心読』で話し始めた。

(どうやら今日のお客さんは本当の素人さんかもしれねえな)

(警視庁も我々を舐めているようですね。こんな話のわからない相手を差し出すなんて)

(まあ向こうも二股かけてるんだから仕方ないだろ)

(それを家元には報告を——?)

(一応は入れておいた。悠輔もこの話がアブナイってことは気づいていたらしい)

(なるほどね……家元らしいですね)

(まあこの分からず屋の警察さんは悠輔が脅せば何とかなるだろう。後の問題は——警視庁が二股かけてるもう一方の相手はどう出るかってことかな?)

(甲賀ですか——)

「——おい！」

どっかりとソファーに座っていた相馬はむっとした表情で二人の間に割ってきた。

「本当にいつまで待たせるんだ！ まったく……大学生風情に舐められたもんだ！」

「誰が大学生風情って言ったの？」

しんと静まり返った一室にその声が凜と響きわたる。

そこにいたすべての人々がその声にはっとして入り口に視線を集中された。

そこにいたのは黒い眼鏡をかけたいかにも頭のよさそうな二十歳前後の若者が立っていた。

「彼が——？」

相馬はその姿に驚き思わず息を大きく呑んだ。

その姿は彼が想像していたような、就活学生のようなスーツを着せられた若輩者の姿とは明らかに違う。

真っ黒なスーツ姿は様になっており、雰囲気は確かに若くはあるがそれを補うかのように彼の表情は落ち着き払っている。否、あまりにも落ち着きすぎて逆に近寄りがたささえ感じたのだ。

「お待たせいたしましたね。相馬泰さん」

彼は相馬を待たせたことを一言謝りはしたが、物怖じすることなく堂々とした足取りで近づいてくる。

その時、先に部屋にいた叶陽一郎と青葉宗司は彼が来たのを見てすっと足を一步引いて彼の後ろについた。

なるほど、家を継いだものにはどんなに若くても絶対服従か——彼らの行動を見て相馬は背筋を伸ばし気持ち負けしないよう彼らを威嚇した。

「ああ、ずいぶん待たされたよ。あと五分もしてたら帰っていたところだった」

「……そうですか」

相馬の威嚇の言葉にも彼は平然とした表情を崩すことはなかった。

その態度は年長のはずの相馬よりずっと堂々としているように思えて、相馬はさらに頭に血が上った。

「——で、君が例の『家元』か？」

「ええ、そうですよ」

そう言うと彼はニコッと始めて表情を解した。

「僕が伊賀藤林流次期家元の藤林悠輔です。まだ家を継いだわけじゃないんだけど、実質的にはここ東京の部隊を指揮してるのは僕だからみんな僕のことを『家元』って呼ぶんですよ」

あどけない笑顔を浮かべそう説明する藤林悠輔は一瞬だけだが今時の若者の顔を見せた。

この若者が『家元』——その言葉を聞くと何か茶道や踊りなどの芸事の家元制度を連想させてしまう。

彼らにとって忍者の忍術もいわゆる芸事なのだから『家元』だっているという理屈なのだろうが、まったく係わり合いのない相馬にとってはそのことが疑問だしおかしくも思えた。

「——それで、今回警察が僕たちに依頼したいことって何でしょう」

藤林悠輔は口元に浮かべた笑みをやめじっと相馬の顔を見た

その瞬間、相馬は彼の眼鏡の奥の瞳に鋭く心臓を射抜かれたような気分になり、思わず顔を引きたらせそうになったが何とか悟られないようにすばやく繕った。

「今日は……なんだ、その……君たちの組織の情報力を見込んで提携の話をしようと思ってね」

「へえ……」

「僕もイマイチ君たちの組織ってというのがわかんないんだけどね……上司が言うには君たちは表ざたにはなってはいないけどすばらしい智恵と能力を持っているらしいじゃないか。そんな君たちと我々警察が組まないわけにはいかないだろう」

そう言うと相馬は取り繕ったかのような笑顔を藤林悠輔に見せた。

だがそんな彼を藤林悠輔は冷めた目でじっと見つめると深いため息をついて一言言った

「その言葉は本心ですか？」

「——は？」

「だから、僕たちと組みたいって言うのはあなたにとって本音ですか建前ですか？」

藤林悠輔のその言葉に相馬は頭に血がカッと上っていくのを覚えた。

彼のあまりにも上から目線な態度に相馬は強烈な怒りを覚え膝の上で握ったこぶしをわなわな振るわせた。

だがそれを見過ごすことなく藤林悠輔は呆れたような顔を浮かべ言った。

「僕は本当のことを知りたいだけですよ」

そう言うと悠輔は物怖じすることなく怒り心頭の相馬を見た。

「話を聞いている限り、あなたは僕たちのことを信頼しているようには思えない。むしろ上の命令だからしぶしぶやってきたという感じがしてなりませんね」

「それは……」

「警察が何を恐れるんですか？」

目の前の若者に一言言われたその言葉に相馬ははっと顔を上げた。

「僕たちはあなたに何を言われようとも気にはしませんよ。ただ僕はあなたの本音を知りたいだけです」

その言葉を聞いて相馬は一瞬戸惑いの顔を見せた

だがこの『家元』と呼ばれる若者にこうもかくにも言われるともはや黙っているわけにはいかなかった。

「ああ、あんたたちのことは信じられない。信じてたまるかって思うよ！」

そう言うと相馬はキッと怒気のこもった視線を藤林悠輔に向けた。

「こんな平和で豊かな時代、何故我々警察が前世紀の遺物のような忍者と提携しなければならないんだ？ まったく……ちゃんちゃらおかしいよ！ あんたたちがどんな優れた能力を持っているのかは知らないが、えらそうな顔される筋合いなんてまるでない。どこの馬の骨だかわからないあんたたちを——信頼なんかできるか！」

相馬の渾身の罵声はしんと静まり返った室内にむなしく響いた。

あまりの勢いで罵ってしまったためか相馬は席を立ったままハアハアと息を切らした。

だが、ちらっと確認した藤林悠輔の顔はまるで先ほどの罵声などなかったものかのようになんとか平然とこちらを見ていた。

「言いたいことはそれだけですか？」

そう言うと藤林悠輔は口元に笑みを浮かべ優しい言葉をかけた

「あなたの言いたいことはよくわかりました。大体最初はみんなそういう反応だよ。まさか現代に本当に忍者がいるなんて信じられないのが当たり前だよ」

「そう……そうだろう！」

予想外の彼の態度に相馬は安心したように彼の会話に乗った。

「今でも思うんだよね、今日の仕事が悪い夢で終わって欲しいって……だってあんたたちが本当はこの国の行く末を裏ではたいているなんて正直悪い冗談で終わらせて欲しい——」

「それが冗談じゃないんだよ」

その言葉を放った藤林悠輔の顔を見て相馬は先ほど抱いた安心を打ち砕かれた。

先ほどの柔和だった瞳はその言葉を言ったとたん激しい鋭さを見せたのだ。

「昔でも今でも知らなくてもいいことなんてそこら中たくさんある。あなただってこんな仕事していなければ僕たちのことなど知らなくてもよかったかもしれないのに……残念だったね。真実を知ってしまって」

その言葉を聞いて相馬は思わずきょとんとしてしまった。

真実——そう、それは前世紀の遺物だと思っていた忍者が現代にしぶとく生きているということ。そして彼らがこの国の根本に関わっているということ。

ああ、やっぱり自分が懸念したことは本当だったんだ——そう思った瞬間、相馬は急激に身体の力が抜けていくのを感じた。

へたりと座っていた椅子に腰掛けると目の前にはいつしか勝てない強敵と化していた大学生の若き家元が表情一つ変えずに座っていた。

「一つ聞いていいかな？」

その一言に相馬はもう答える元気もなかった。

それを見て藤林悠輔は初めて身を乗り出して気力を失った相馬に聞いたのだ。

「あなたは僕たちに会う前に警察と忍者との関係を一通り聞いたはずだと思うけど……」

「ああ、聞いたけどそんなの信じられる——」

「だとしたらあなたの上司から僕たち以外の忍者の存在も聞いているはずだね」

「——え？」

藤林悠輔のその一言を聞いて相馬はやっと我に返った。

彼ら以外の忍者の存在——それは上司の阿部雅弘が明かした警視庁のもう一つの提携者の名前だった。

阿部曰く、今日会う伊賀よりもいち早く警視庁の協力を取り付けた勢力が存在し、その勢力は伊賀と長年の対立関係にあると言う。

警察といち早く提携し伊賀と対立する者の名前——その名は甲賀

信じられないことに時代劇や小説とまったく同じ軸で二つの忍者勢力は現代でも対立していると言うのだ

——つまり、我々はその対立する二つの勢力といわゆる二股をかけるってことですか？

相馬のその問いに阿部は笑いながら答えた。

『向こうは不快に思うかもしれんがこちらは選ぶ権利があるんだよ。どちらが優れている流派なのか——それを見極めてから決めてもいいだろう』

「相馬さん、聞いてます？」

藤林悠輔のその言葉に相馬は再び我に返った。

目の前の彼はいつになく険しい表情でじっと相馬を見ていた——否、不快そうな目で睨んでいた。

「素直に教えてくださいよ。あなたは重大なことを隠しているってことはこちらはわかっているのですから」

「——なんのことだか。わからないな」

そう言うと相馬はとぼけたように笑ったが、藤林悠輔は表情一つ変えなかった。

「率直に聞くよ」

その瞬間、藤林悠輔はつけていた相馬を睨み付けて一言言った。

「警視庁は僕たち伊賀と先客の提携先の甲賀——両天秤にかけようとしているのかい？」

相馬はそんな彼を見て思わず息を呑んだ。

その時の彼の瞳は先ほどより色が違っていた。すべての心を見透かすような澄んだ瞳から怒りに燃えたような真紅の瞳に変わっていた。

その瞬間、相馬は初めて目の前のこの若者が怖いと全身全霊で感じたのだった。

「あなたたち警視庁の考えは伊賀と甲賀どちらが優れているか図りかねているんだろうね。出来ることなら一番優れている流派にすべてを預けたい——本当の本音はそんなところだろう」

「そんなこと……俺が知るか！」

「もちろんあなたには聞いていない。僕たちの存在をつい最近知ったあなたに聞いても納得する答えは返ってこないだろうから」

そう言うと藤林悠輔は呆れたように一息吐いた。

そんな彼の態度に文句は言いたいのだが、もはや相馬に反論する力など残ってはいなかった。

「まあ、どちらにしろ今日はあなたみたいな何も知らない素人が交渉相手でもよかったですよ。警視庁の真意もわかりましたし、こちらが有利に話がすすめられたし——」

そう言うと藤林悠輔はすっと椅子から立ち上がった。

「でも、甲賀と比較されるのであれば僕たちも逃げるわけにはいかないね。この話とりあえず保留させていただくよ——」

彼がそう言った次の瞬間だった。

バリーン!!

相馬のすぐ後ろにそびえていた東京の摩天楼を移していた窓が大きな音を響かせて一瞬で粉々に砕け散った

その様子を相馬は心臓が止まるかと思うくらい驚きを隠すことが出来なかった

まるで車が衝突したような衝撃だったが、ここは三十階のホテルの高層階。

そんなところに一枚ガラスが割れるほどの衝撃など——ありえない話だった。

「何なんだ——！」

相馬は思わず身体をのけぞらせるように割れた窓を見た

きらきらと輝きながら零れ落ちるガラスにはたはたと吹き込んだ風になびくカーテン。

驚くべきことにその向こうに一人の人影がしゃがみこんでいた。

「……これはずいぶん派手なお登場だな」

藤林悠輔は少し感心したようにあごを上げた

彼は少なくとも驚いてはいない様子だったが、その瞳は先ほどと比べ物にならないほど険しい

表情だった。

彼は知っている。この人物が何者なのか、何の目的でここにやってきたのか——

「こいつ、あんたの知り合いか？」

相馬は怯える子供のように椅子のクッションを年甲斐もなくぎゅっと抱き寄せながら藤林悠輔に聞いたが、もはや彼に相馬の声など聞こえてなどいなかった。

窓を突き破った侵入者と立ち向かう若き伊賀の家元——二人同時におぞましいほどの殺気がカッと放たれた。

もはや後の戦いは誰にも止められない、止めることの出来ないことだということを相馬はその空気だけで悟るしか彼には出来なかったのだ

3 侵入者

「悠輔！」

部屋の異変に気づきその場に駆け込んだ叶陽一郎を悠輔は手を黙ってかざして制止させた。

悠輔は周囲が騒ぐほどのこの緊急事態に焦りはさほど感じてはいなかった。

むしろそのあまりの落ち着きっぷりが周囲の者にとっては恐ろしくさえ思えたのだ。

「手出しは無用だ」

悠輔は一言そう言うとかけていた眼鏡を取り外した。

その瞬間、悠輔の瞳は燃えるような赤色に光り侵入者を鋭くにらみつけた。

「君たちは事をこれ以上大きくしないよう働いて欲しい。こいつの相手は——僕一人で十分だ」

そういった瞬間、悠輔は陽一郎に向かって眼鏡を放り投げた。

それを受け取った瞬間、陽一郎は一瞬面食らった表情を浮かべたが悠輔に言われたとおり何も言わず部屋から出て行った。

「さて……と」

窓を破り冷たく強い風が部屋に吹き込んでいく。

侵入者はぼさぼさの黒髪と黒いコートの裾をその風に任せるようになびかせた。

そして、彼はすっと立ち上がると両手につけたまるで中世の騎士のような手甲を横に広げた。

その瞬間、鋭い音を出しまるで日本刀のようなまっすぐで長い爪が手甲から生えた。

来る——！

そう思った瞬間、一際強い風が部屋に叩きつけるように吹き込んだ。

それと同時に侵入者は動き両手の爪を振りかざして悠輔に襲い掛かった。

だが、悠輔にとってそれは予想済みの行動であった。

侵入者の爪が悠輔の顔を抉り取ろうと振りかざしたその瞬間、彼は表情一つ変えることなくその爪を軽々とかわして見せた。

その瞬間、悠輔は初めて侵入者と目が合った。

なんと冷たい顔をした男なのだろう——その冷たい表情はどこか機械的に見え、そして瞳はたえず青白い光を出し悠輔を射抜き続けた。

だがそれはあまりにも一瞬であった。

次には白くきらめく爪がまたしても悠輔を襲ったが彼は見切ったかのようにそれを身体をそらしてかわす。

そのままの体勢で悠輔は飛び上がりぐるりと宙で体勢を変えた。

そして着地する直前にそばにあったベッドのシーツを掴むとそれを侵入者めがけて翻し投げつけた。

しかし、その奥の手に侵入者は臆することなく投げつけられたシーツを横一文字に切り裂いて見せた。

だが、シーツが裂け視界が一瞬開けたその瞬間、まるで襲い狂う狼のごとく黒い影が侵入者の喉下めがけて突進してきたのだ。

侵入者は体勢を変え深く腰を沈めかがめると爪が伸びる元の手甲でその攻撃を防御したその瞬間、乾いた金属音と激しい衝撃が侵入者の右腕にのしかかった。

衝撃でずるずると引いていく侵入者の足。先ほどの一撃の衝撃は相当な力であった。

侵入者は防御した手甲とは逆の手の爪を伸ばし、悠輔の顔めがけて付きたてた。

だが、それと同時に右手にかかった攻撃はすっと糸を引くように引き下がった。

悠輔は無表情のまま顔に手をやる。

頬をぬらす赤い液をぐっと拭い取ると両手で釵と呼ばれる一対の十手のような武器を回転させた

侵入者に向かってシーツを投げつけたその場所に悠輔は釵を隠していた。

つまり彼は知っていたのだ。この会談は甲賀に筒抜けであり今日彼らが何かしらの邪魔をしてくることを――

ただ、そんな用意周到の悠輔にとってたった一つの誤算は、邪魔しに来た侵入者がとてつもない強さを誇っていたこと。

自分と互角に戦える実力を誇りながらまだその力を隠している。それを悟った悠輔は落胆するどころか大きな喜びさえ感じた。

にやりと笑みを浮かべたその瞬間、悠輔は床を強く蹴り侵入者めがけて三度襲い掛かった。

だが、侵入者もさるもの。悠輔の釵の一撃を爪の刃の部分で封じた。

しかし、それも悠輔の狙いでもあった。彼は封じられた釵を柔らかい手のスナップを使ってぐるりと裏返す。

次の瞬間、侵入者の爪が逆に封じられた。

彼は一瞬焦ったように黒い前髪の間から青白い瞳をかつと見開いた。

だが、悠輔はその隙に間髪入れることなく大きく息を吸い込んだ次の瞬間、彼の口から炎が立ち上った。

巻き上がる熱気、立ち昇る赤々とした大きな炎――あまりのその大きさにホテルの火災報知機が鳴り響き瞬時に部屋からスプリンクラーのシャワーが降り注いだ

。

だが悠輔はその攻撃ですべてが終わったとは思ってもいなかった。

もくもくと上がる水蒸気の中ゆらりと立ち上がる人影が浮かぶ。侵入者は瞬時にあの炎を避け後ろに引いていたのだ。

火に焦げた壁紙のにおいに降り注ぐスプリンクラーの水しぶき、そして割れた窓からひゅううううと吹き込む強い風――

侵入者は黒コートを風にはためかせ息を切らしながら気味なほど青白く光る目で悠輔をにらみつけた。

「火遁……か」

それが彼が発した初めての言葉だった。

気のせいかもしれないが彼の顔もどこか喜んでいるような表情に悠輔は見えた。

どちらも気持ちは同じであった。最強かつ最高の相手に出会えた——その喜びに打ちひしがれているのだ。

「どうするの？」

悠輔は意を決して侵入者に話しかけた。

「僕はここで決着をつけたってかまわないよ。でも、そうなれば騒ぎはこれ以上大きくなるのは君だってわかるよね」

侵入者に交渉に入っても悠輔は固く閉ざされた表情を崩すことはなかった。

否、戦っていたときよりもずっと濃度の高い殺気を彼は絶え間なく発しているようにさえ見えた。

相手に舐められるわけにはいかない。勝負を捨てたと相手に思われるのが悠輔は最大に嫌悪していた。

「今なら僕たちの力でこの騒ぎをなかったことにすることは可能だ。そっちの方が君たち甲賀にとってもいい選択だと思うけど？」

悠輔はあえて伊賀の威光をかざすかのように侵入者に話しかけた。

幾分かハツタリも含んではいるが、これも侵入者より少しでも優位な立場で交渉を進めるためだ。

「ふ……おもしろい」

その問いに侵入者は初めて口を開いた。

口元に柔らかそうな笑みを浮かべてはいるが、やはり表情はどこか機械的で冷たい印象だった。

「お前たちの力でこの騒ぎを収めるだと……それは見ものだな」

「ちゃんと僕の質問に答えろよ」

そう言うと悠輔は侵入者をキッと睨み付けた。

「君に残された道は2つ。このまま手を引いて騒ぎを収めるか、またはこのまま戦って騒ぎをさらに焚きつけるか——選んだからにはこの後は君たち甲賀の責任でお願いしたいところだ」

「手を引けといたいのか？」

「——だって、今日は場所が悪いと思わない？ これ以上このホテルに迷惑かけられないからさ」

その一言に侵入者は一瞬考え込むように顔をうつむけたが、すぐに彼は蔑んだような笑みを浮かべて悠輔を見た。

「お前……その若さで伊賀の頭目なのか？」

「まあ、そういうことになるかな」

そう言うと悠輔はくすっと笑った。

「そういう君も相当な実力者だね。甲賀の幹部クラスだろ」

「それはお前の想像にお任せするよ」

そう言うと侵入者は破壊した窓ガラスのほうへと一步また一步引いた。

絶え間なく吹き付ける風で彼の黒コートは音を立ててはためいた。

「今日は楽しいショーをありがとう。伊賀の若き家元さん」

侵入者は悠輔を見てにやっと笑みを浮かべた次の瞬間、そのまま後ろへ飛びホテルの高層階から飛び降りた。

すぐそばにいる警察幹部相馬泰はそれを見て驚きを隠せない様子だったが、悠輔自身はさほど驚きは感じなかった

彼のことだ。ここから飛び降りたといっても無事に地上に降りれる段取りは出来ていることだろう。

「やれやれ、本当に厄介な相手と出遭ったものだ」

悠輔はため息混じりに一言そう言うと、先ほど侵入者に傷つけられた頬の傷にもう一度触れた。

彼は悠輔の問いに明確な答えは示さなかったが、間違いない。あの実力にくわえてこの秘密の会談を知っていたのだ——彼は幹部どころか自分と同じ頭目クラスの間人だ。

そう思うだけで悠輔は少し悔しい思いもしたがわくわくする気持ちも抑えられなかった。

彼と別れた後に急にもう一度彼と刃を交えたいという気分悠輔は襲われていた。

「……おい」

やっと落ち着いた悠輔を見て、呆然と経緯を見ていた相馬はびくびくしながら彼に話しかけた

それを見て悠輔は少し気の張ったように鋭い表情で相馬を振り返ったが、すぐに少し蔑んだような瞳で彼を見返した

「まだ、そこにいたんですか」

「そう言われても……」

——逃げる暇なんかなかったんだ。仕方ないだろ。

相馬はそう言いたげな視線で悠輔をにらんだが、その視線はどこか迫力がなかった。

「ともかく、これが僕たちのやり方です」

そう言うと悠輔は踵を返して相馬をじっと見つめた。

「あなたは現代に忍者なんて信じないって言いましたが、これを見て存在を少しは思い知ったでしょう」

「ああ、まあ……」

「あなた方が伊賀か甲賀どちらと提携するか——それは今すぐ結論を出せなんていいませんよ。今日の事を見て決めろなんて……ちょっと酷ですよ」

「……………」

その一言に相馬は顔を引きつらせるばかりだった。

驚愕の事実に慣れているはずの警察なのにとにかくにもここまで次元の違うものを見せられてしまうと——驚きを通り越してもはや何も言えなかった。

「まあ、いいです」

悠輔は一言そういうと相馬から目をそらし部屋のドアの方へ歩いていった

それを相馬は静止しようとしたが、その前に彼はにこっと優しげな笑みを浮かべ相馬を振り返った。

「相馬さんは何も手出ししないでくださいね。この事態は僕たちで処理しますから」

「でも、こんな大事件……」

「僕たちの力を見くびらないでください」

そう言う悠輔の顔は笑っているのだがその視線は鋭くどこか気高く怖い空気が出ていた

そんな彼を見てもはや相馬に出す口など残ってはいなかった。

悠輔はそれを見て満足げな表情を浮かべ悠然とした足取りでガラスが粉々に割れた部屋を出た

そして、この『ハリーアットホテル』であった一件は翌日にはどのマスコミにも報道されずに彼の言った通りなかったことになってしまったのだった

1 そして、平凡な一日が始まる

どんなに非日常の夜をすごした後でも日常の朝は必ず悠輔の前に訪れる

いつもと変わらない曇りの日の金曜日。

昨日のことで若干節々が痛む中、悠輔の単位取得危機は変わることなくいつもと同じように大学に通わなければならないのだ。

だが、朝の東都大キャンパスはどこことなく落ち着きが足りない。

無理もない。一大イベントである年に一度の東都大学若葉祭があと二週間に迫っているのだから

いつもなら静かな朝のキャンパスだけどこ最近に限って言えば、大工仕事をする者、看板のイラストを書くもの、ストリートダンスの振り付けをチェックする者、演劇のチラシを配っている者たちでにわかな活気に帯びている。

だが、大学生活にさほど固執してない悠輔にとっては年に一度の学祭もどうでもいい存在であった。

それ故に学祭で浮かれほうけている学生が目障りで仕方がなかったのだ。

演劇のチラシを渡そうとした女子学生を悠輔は片手で追い払って深いため息をついたたかが学祭で浮かれるなど考えられない。まるで別世界のことのように感じたのだ。自分にはそんなことをしている暇なんてない。

そう思うとキャンパスで思い思いに表現している彼らがどこか疎ましくさえ思えた。足早に教室に向かいながら悠輔は頬に手をやった。

そこにはあまりにも大きな絆創膏が強い存在感を放っている

さすがにこれは目立つであろう——そう思うとなんとも不名誉な気分が彼を襲った。それは昨日あの黒コートに傷つけられた爪あと。

本当ならこんな情けない傷をさらして大学など行きたくなんかなかったけど、ギリギリの単位の中なのだから休むわけには行かない。

しかし、同級生たちにこの傷をつっこまれたらどうやって返そう——そう思うとどこか気持ちが

少しソワソワしてしまった。

そう思いながらやってきた小さな講義室。大きな絆創膏を貼った悠輔が部屋に入ると一同みなそちらに目が行った。

ヤバイな。

そう思った悠輔はあえて学生が固まっていない窓際の席へ移動すると頬杖をついてその絆創膏を手で隠した

だがそんな偽装工作が学生たちには余計怪しく見えたのだろう。

そんな悠輔を遠巻きに見ながらひそひそと内緒話をする者、いぶかしげにじっと見つめる者、そして、彼に直接真意を聞こうとする者も――

「おいおい、藤林よお」

その声を聞いて悠輔はさらに頑なにそっぽを向いた。

声を掛けてきたのはあの大嫌いな軟派者の石野誠だったのだ。

「おまえ、あの後一体何をやらかしたんだ？」

「別に……」

「別にじゃねえよ。そのでっかい絆創膏はなんなんだよ」

「これは……」

その問いに悠輔は思わず答えを言い淀んだ。

まさか、言えるはずがない。昨日忍者に襲われてちょっと怪我をただだなんて――

「――わかったぞ」

石野はそんな悠輔を見てにやっと笑みを浮かべた。

「お前、あの後女とデートだったんだろ」

「はあ？」

「隠すんじゃねえよ。俺の誘いの合コンに行かなかったのはそういう意味だったんだなあ……」

——何を勘違いしてるんだ、コイツ

悠輔は訝しげな表情を浮かべ悦に入って語る石野を見つめた。

だが、馬鹿な勘違いしてくれたほうが今の悠輔にとっては都合がいいのかもしれない。

下手にしゃべって自分の正体がばれるよりは人に虚像を見せているほうがまだ安全だ。

「で、昨日は相当大変だったのか？」

「——さあね」

「さあね、じゃねーよ。あれか、例の彼女と喧嘩したのか？ その絆創膏の下は昨日彼女に食らった平手打ちで痣ができたんだろ？」

「勝手に言えよ」

そういうと悠輔は隣で勝手に妄想と鼻の穴を膨らます石野を無視するようにリュックから教科書を出した。

「ところでさ、お前の彼女ってなんて名前だったっけ？ たしか冷泉大学の娘^コだったとおもうけど……」

「早紀。進藤早紀だよ」

「そうそう、早紀ちゃん。あの娘かわいかったよねえ～。あのときのメンツでは一番の上物だったあ」

名前も忘れてたくせに——悠輔は石野のことを馬鹿にするように鼻で笑った。

「で、結局あれから早紀ちゃんと仲直りしたのか」

「別に喧嘩したなんて言ってないよ」

「あれ？ そうなの？」

その言葉に石野は思わず目を丸くした。

まずい——その瞬間、悠輔は思わず口を手でふさいだ。

「喧嘩じゃなかったらその絆創膏は何の傷なんだ？」

「それは……」

その問いに悠輔は再び口を濁した。

ああ、なんて馬鹿なことをやってしまったのだろう。悠輔は思わず頭を抱えそうな気分になった

あのまま喧嘩で収めていればこの下世話な馬鹿にここまで苦しめられなくてすんだと言うのに——

そのときだった。

悠輔と石野の間でけたたましく響いた着信メロディ。

それを聴いた瞬間、悠輔は助かったと安堵のため息を漏らした。

「あ、早紀からメールだ」

悠輔はポケットから赤い携帯電話を出すと、石野のことなど無視してメール画面に集中した。

そんな彼を見てお馬鹿な石野は何を期待したのかそわそわと背伸びしながらその様子をのぞき始めた。

「え？ なんて書いてあるの？ 昨日のお詫びかな——」

そんな石野を軽くあしらうように悠輔はさらりと一言言った。

「石野君。ちょっと邪魔だから向こう行ってくれない？」

「えええー！いいじゃん、ただのメールだろ」

「人の彼女のメールを覗き見するほど君は下世話な男なのかい？」

「それは……」

「人のことより自分のことを心配したらどうなんだ」

悠輔のその心無い一言に石野は完璧に返す言葉を失った。

その言葉に仕方なくおずおずと引き下がり自分の席に戻る石野を横目で見た後、悠輔は自分を救ってくれたメールにもう一度目を落とした。

【悠輔、明日暇かなー？ もし暇ならメールちょうだい!! 渋谷で新しい服とか見たいからさ！ ついでにデートしようよ☆】

なんとも女の子らしいデコメと顔文字でチカチカするほど眩い早紀のメール。

それを見て悠輔は初めて顔を和らげ口元に笑顔を浮かべた。

明日ね……

悠輔は一瞬現実に戻り予定を考えたが、その前に自然に指が動き真っ先に返信メールを送っていた。

【いいよ。付き合っただけでも】

2 女子大生、進藤早紀

翌日――

土曜の午前中、絶え間なく人々が交じり合う交差点、渋谷。

そんな雑踏に身を任せながら、いつものようにあの日本一有名な犬の像の前で悠輔は待ちぼうけを食らっていた。

ふと横を見ると自分と同じ立場の男や女がひしめき合っている。

だけどそのメンツは常に絶え間なく入れ替わっている。

ハチ公前で待ち合わせしている者は皆、連れ合いが来ればすぐにそこから雑踏の中へと姿を消していく。

その男女のローテーションのスピードは驚くほど早く、5分も経たないうちにまったく新しい男女に生まれ変わっていた。

――それなのに、僕は一体何なんだ？

悠輔はそんな見知らぬ男女の出会いと別れを見て思わず大きなため息をついてしまった。

ハチ公前で行われている男と女の早いローテーションに悠輔だけはまったく置いてけぼりにされているのは目に見える。

まるでこの人の足が速い渋谷にただ一人時間を止められているかのような錯覚を覚えながら悠輔はただそこでじっと時間にルーズな恋人を待ち続けた。

別に今日が特別ってわけでもない。早紀の遅刻はもはやデートのお約束化している感もある

だが、慣れたことだとはいえハチ公前の相手を見つけて去っていくカップルを永遠と見送っていると、やはりその怒りはふつつつと心の中に蓄積していく

いつから待ったか覚えてないけど、その間メールを8通も送ったことはよく覚えている

だけど、早紀から帰ってくる言葉は【ごめん!!あとちょっとだから☆】というこれまた眩いばかりのデコメだ。

東京の女の子ってみんなこんな感じなのだろうか。

悠輔は携帯片手に待ちぼうけを食らいながらただ気まぐれで我がままな恋人のことを思った。

そういえば出会ってから今までわがままな早紀に振り回されっぱなしだ。

数合わせのヘルプで行った冷泉大学の女の子との合コンで初めて出会ったのは3か月前。同時に彼女のほうから積極的にアピールされて、悠輔はその気がないのになぜかその日のうちに男女の仲になった。

それからメアドを交換したはいいものの、多いときは5分に一回のメール攻撃。

任務中にまでラブメールが入ってしまうものだからこっちはたまったもんじゃなかった。

デートをすれば時間にルーズだし遅刻するのは当たり前。

だけど主導権は完璧に早紀のもので、自分の好きなブティックや雑貨屋を見つけると悠輔ほったらかしでずっと居座ってしまう。

それにとんでもなくわがままですぐ拗ねる気分屋のところも手を焼いている。

まったく——忍者の世界では誰もが恐れる伊賀忍者の次期家元として君臨している僕が、東京生まれの女の子相手にどうしてここまで振り回されなきゃならないのだろう。

だけどそんな早紀を悠輔はどうしても嫌いにはなれなかった。

最初は少し疎ましく感じていたラブメールも、最近は少しだけ来るのが待ち遠しく感じられるようになっていた。

彼女のわがままなところも少しずつだが認めるようになってきている自分があるのだ。

不思議なことにこれが恋って奴なのだろうか……

弱点なんてないと思っていた僕だけど、今は完璧に早紀が弱点だ。

そう思うとなんかこんな彼女に振り回されている自分がなんとも情けなく感じるのだ。

そんなことを諸々考えてまた深いため息をついたその時だった。

「やっほー。悠輔、待ったあ〜」

そんな甲高い声に悠輔は不機嫌そうな顔をむっと上げた。

そこにはゆる巻きのロングヘアに青いチェニックとシフォンスカートを合わせた早紀がニコニコしながらこちらに寄ってきた。

「ああ、何分待ったかわからないくらいに——」

「ちょっとー！」

「……ん？」

「悠輔、何その絆創膏ー！」

「え……」

そう言われて悠輔はふと自分の頬の絆創膏を触った。

そういえばこれをつけたままだったのをすっかり忘れていた。

「ああ、これねえ……」

「どーしちゃったの？ 一体……なんか怪我しちゃったの？」

「うーん、話せば長くなるんだけど……」

そう言って悠輔は苦笑いを浮かべた

「この前、ちょっとした不注意でさ……こけちゃったんだ」

「へえー、それでこんな大きな絆創膏ねえ……」

そう言うと早紀は訝しげな顔をしながら悠輔の顔をじろじろと見つめた

やっぱり、今の嘘を怪しんでいるのだろうか……ただこけただけでこんな絆創膏だ。怪しまないほうがおかしい話だ。

でも、現実離れした事実を話より見え見えの嘘を吐いたほうが彼女のためだ。

自分の本当の正体が知られてしまったら彼女だって危ない立場になるのだから……

そんな沈黙がしばし流れたその瞬間、早紀はふっと顔を和らげ笑った。

「やだなあ。悠輔って意外におっちょこちょいなんだねー」

「あ……ああ」

「でもさ、私、悠輔のそういうところ好きだよ。なんか情けないところが守ってあげたい気分になっちゃう」

「情けない……」

悠輔は引きつったような笑顔を浮かべながら一言そうつぶやいた。

見せてあげられるならば、自分の本当の顔を早紀に見せてあげたい。

それさえ見せれば自分のことを情けないモヤシ大学生だなんて思わないだろうに——

「でさ、今日行きたいお店なんだけど……」

「そうそう、それどこにあるの？」

「えーっとね……最低でも5件あるのよ」

「はあ？」

「とにかく私についてきて。早くしないと目玉商品売り切れちゃう！」

早紀は一言そういうと悠輔の手首を不意に握り締めるとそのまま雑踏の中へと走っていった。

それを見て悠輔は「ちょっと待って！」といったが時は遅し、彼女に誘われるまま雑踏うごめく渋谷

のスクランブル交差点へと吸い込まれていった

3 渋谷の通り魔

最低五件とは言っても――

たくさんのブティックの紙袋に囲まれながら悠輔はファッションビルの待ち合わせで不機嫌な顔をして立ち尽くしていた。

かれこれ何時間彼女のショッピングにつき合わされているだろう

悠輔はデートのつもりでやってきたはずなのに、いつの間にか決まったように便利な荷物運びになってしまっているではないか。

なんて情けないだろう……

悠輔は疲れて落ち込んだようにその場にうずくまった。

こんな姿門下の忍者たちに見られたらどうしよう――とは言っても、彼らのことだ。

もうとっくに次期家元が一人の女の子に振り回される姿は彼らの笑い種になっているに違いない。

日本最強の忍者集団の長である僕がただの女の子相手にこれほど四苦八苦するなんて……

なんて情けないんだ。泣けてくるほど情けない……

でも、落ち込んでばかりもいられない。

悠輔はまた深いため息をついて立ち上がると、ちらっと腕時計で時間を確認した。

PM 1 : 4 5――そろそろ本気で昼御飯を食べたいところ。

これ以上早紀に付き合ってもらえないと思った悠輔は、大きな紙袋を両手に握り締めながら早紀が居座っている雑貨屋に向かった。

かれこれ三〇分早紀はアロマ石鹸の品定めを続けているような気が悠輔にはしていた。

店から漂うなんとも鼻につくたくさんのアロマが混ざった複合臭に悠輔は顔をしかめながら、店先の早紀に一言声を掛けた。

「ねえ、おなかすかない？」

「うーん。そうかな？ 今何時だっけ」

その問いに悠輔は「僕は便利な道具じゃない」といつもの調子で言いそうになったが、その言葉を飲み込んで言葉少なに彼女に言った

「もう2時になる」

「へえー。もうそんな時間なんだ」

そういうと早紀はショッピングピンクの石鹸をかごの中に入れてとスタスタとレジのほうに向かった

「悠輔、ちょっと待ってくれる？ これだけ買ってからお昼にしょ！」

「ああ……」

その気持ち悪い色の石鹸も買うんだ――

早紀の買い物好きに悠輔は半ばあきらめの笑顔を浮かべそう思った。

しかし、やっと買い物地獄から抜け出せてお昼にありつけると思うとなんともいえない安堵感が悠輔の心の中を包み込んでいった。

そして、ふうっともうひとつため息をついて店から出ようとしたそのときだった。

「きゃあああああっ！」

女の悲鳴がショッピングビルのフロア内に響き渡った。

悠輔ははっとそちらのほうを振り向くと、数人の若い女性が腹や腕を押さえぐったりと倒れこんでいた。

その隣では包丁を持った狂気めいた表情を浮かべた男。その様子はこのファッションビルに似つかわしくない狂気に包まれていた。

「通り魔よ!!」

近くを通りがかった女の人が全ホールに響き渡るような声でそう叫んだ瞬間、周りの買い物客たちはなだれを打つように彼から逃げ出し始める

それに反応して彼も声にならない叫び声を上げ包丁を振りかざしこちらめがけて走ってくる。

途中、追いついた人や転んだ人の足や胸を刺しながら、ずんずんと早紀のいるブティックへと近づいてきたのだ。

「悠輔——！」

周囲のおかしな様子に焦って早紀は悠輔の下へ駆け寄ろうとしたが、彼は彼女に向かって手をかざして強く言った

「来るな！」

それは彼女にとって今まで聞いたことのない悠輔の凜とした声であった。

その一言に早紀はぴたっと足を止めるしかなかった。

悠輔の眼鏡の奥の瞳は自然と鋭い光を放ち始める。その時、彼は知らず知らずのうちに忍者としての顔へと変化していた。

逃げ惑う人をなぎ倒しどんどんとこちらへ吸い寄せられるようにやってくる通り魔——

そして、ついにその場に仁王立ちする悠輔めがけて彼は包丁を付きたてた。

早紀は思わずその様子に目をそらした。その場にいる誰しものが青年に降りかかる惨劇を予想したに違いない。

だが、こんな怒りに任せて振られた刃を交わすことなど悠輔にとっては朝飯前の出来事であった。

悠輔は身体を表情ひとつ変えず身体を少し横にそらせただけで通り魔の包丁を軽く避けていた

。

そして、その反動で通り魔の身体は大きくぐらっとふらついた。その瞬間を悠輔は見逃すことはなかった。

悠輔はがらんどうになった通り魔の肩甲骨の辺りを狙って裏拳をたたきつけた。

次の瞬間、通り魔は強い衝撃で派手に吹っ飛ぶ。

5メートルほど飛ばされた通り魔はそのままフロアに大の字に寝そべりそのまま動かなくなった。

あまりにも冷たい瞳でそれを見ていた悠輔であったが、周囲のギャラリーの多さに思わずはっと我に返った。

——やばい。ついつい本気を出してしまった……

悠輔はあわてて通り魔の男に近寄り手を触って脈を図ったが、案の定、彼は心肺停止状態だった。

「ねえ、ちょっと大丈夫!？」

その様子を見て早紀は真っ先に店から飛び出し呆然とする悠輔に駆け寄った。

「——悠輔、怪我ない？」

「ああ……」

「ああ、じゃないわよ！　だってあなた通り魔をやっつけちゃったんでしょ」

「——早紀」

そういうと悠輔は早紀の手をぎゅっと握った。

「え——？」

「とにかくここから逃げよう！」

「何で？　どう言うこと？」

「説明は後でするから！」

悠輔は一言そう叫ぶと早紀の手を強く引き囲んでくる野次馬たちを割るようにその場を後にした。

おそらく早紀はまだ何が起きたかわかってないだろう。

だからこそ彼女が事実気づく前に悠輔はその場から早く逃げたかった。

これは間違いなく大事になる。

渋谷の超有名ファッションビルに出現した通り魔を取り押さえるどころか半殺しにしてしまったのだから――

でも英雄になどなりたくない。なってはいけないのだ。

伊賀忍者のトップとして自分の正体をやすやすとあらわにするわけにはいけないのだ。

「ねえ、本当にどうしちゃったの？」

急いで事件のあったファッションビルを抜け出した瞬間、早紀はいぶかしげな顔して悠輔の手を払いのけた。

「なんで悠輔があ那场から逃げ出さなきゃならないの!? 理由を教えて！」

「それは……」

「犯人が動かなくなってテンパっちゃったのはわかるけど、それっていわゆる正当防衛ってヤツだから悠輔にはなんの罪もないと思うけど……」

「そういう問題じゃないんだ！」

そういうと悠輔は下にうつむき拳をぎゅっと握った

「今は君に深い訳は話せないけど……とにかく、目立つのが嫌だっただけさ」

「目立ちたくないって……どうということ？ 恥ずかしいの？」

「そうじゃない……訳は話せないけど」

「もう、それじゃあ意味がわかんない」

そういうと早紀はむっとした表情で悠輔の顔を覗き込んだ。

「私たち、これでも立派な恋人同士だよな？ 隠し事ってあんまりよくないんじゃないかな」

「そうはいうけどさ……」

本当のことなんて絶対に話せない。自分が忍者の頭目だなんて口が裂けても言えない。

もし打ち明けたとしても早紀がその現実離れした話を信じてくれるかどうかもわからない。

そんな前にも後ろにもいけない状況なのに、どう早紀に説明すればいいのか——悠輔にはまったくわからなかった。

「——もう、何その沈黙！」

黙りこんでしまった悠輔を早紀はむっとした表情で見つめて言った。

だけど、悠輔はそんな彼女に何もいえなかった。

「ねえ、悠輔。私に話していない秘密でもあるの？」

「あるよ……」

そういうと悠輔は早紀に背を向け一言いった言った

「当たり前じゃないか。君に言えない秘密なんて星の数ほどあるよ」

「じゃあさ——！」

「でも、今は話せない！」

悠輔の強いその一言に早紀は思わず出しかけた不満を引っ込めた。

彼の背中はずっととは違いどこか物悲しいものを感じた。

「——ごめん。今日はこれでデート中止してもいいかな？」

「え？」

「こんな気持ちで君と付き合ったら君に不快な思いをさせてしまう気がする。それなら、今日はもうやめたほうが——」

「でもさ、そんなこと私気にしないよ？」

「気が進まないんだ」

悠輔は一言そういうとうつむき加減に先を急ぎだした。

早紀はそんな悠輔に一瞬付いていこうと足を速めたが、初めて近寄りがたい空気を出す彼を見てすぐに足を止めてしまった。

そのうち悠輔は渋谷の雑踏の中に煙のように消えていく。

そんな彼を呆然と見送りながら早紀は今日初めて見せた彼の別の顔にもう一度とり肌を立てた。

今までただの無愛想で情けない彼氏だったのにほんの少し別の面を見ただけでどうしてこうときめくのだろう。

そう思うと早紀はますます藤林悠輔という男のすべてを知りたくなった。

1 事件現場

「今日の午後二時ごろファッションビル『シャイニーズ渋谷店』でまたしても通り魔事件が発生しました。午後のショッピングを楽しんでいた若い女性たちでにぎわっていた店内は大混乱。犯人は女性4人男性2人を切りつけ、うち2人は重傷を負って近くの病院に運ばれました」

悠輔たちが去ってまもなくしてあのファッションビルは黄色の規制線がぐるぐると張られていた。

いつも人でごった返している場所であるが、今日だけはさすがに様子が違う

たくさんのテレビカメラ、記者やレポーターなどのマスコミ関係者に制服を着た警察官、そして何十にも重なった若い野次馬たちがその店をぐるりと取り囲んでいた。

「しかし、この店にある救世主がいたと言うのです。目撃者によると犯人はある青年によって取り押さえられたという話です。彼はその後騒ぎのそばから姿を消してしまい行方がわかりませんが、彼がいなければこの事件はもっと大惨事になっていたことでしょう——」

能天気カメラに向かってピースサインをする馬鹿な野次馬たちを抑えながら年配の女性リポーターは淡々と原稿を読んでいる。

その横を一人の男が規制線に向かってのそのそと近づいていった。

ぼさぼさの黒髪にいかにも眠たそうな瞳、服装は制服の警官であるがどことなく着崩していてどこかだらしない印象を与えた。

そんな彼を見て、近くにいたかっちりと制服を着た警察官は声を掛けざるを得なかった。

「ちょっと、君。どこの署の者だ？」

「俺？ 渋谷署だけど？」

彼はぼりぼりと頭をかきながら一言言った。

「じゃあ所轄のところのか……それよりも、君。何だねそのだらしない服装は！」

「これが普通ですけど？」

「そうじゃなくて……一応ここは事件現場で一般市民やマスコミがたくさん見ているんだ。そういうところくらいいつもより気合入れて——」

「どうでもいいけど、早く入れてくれませんか？ 俺、仕事あるんで」

「仕事——」

その言葉に警察官は彼を訝しげに見つめた。

いくら自分が警察官だと名乗っても彼の年や背格好を考えて中で捜査する立場の人間じゃない。

そんな彼を入れるべきなのか、否か——

「聞いているのか？」

彼は特段にゆっくりと警察官に語りかけた。

いつの間にか眠たそうだった彼の瞳は奥で不思議な青白い光を放ち始めていた。

「俺はこの中に入らなければならないんだ。後で後悔したくなければそこをどいてもらいたい」

彼のその言葉を聞いて警察官は不思議な感覚に襲われた。

自分より年若く階級も明らかに低そうな男であるのに、彼の身体からは強い威圧感が見る見ると吹きだしている。

それに彼の眠そうであり鋭そうでもある不思議な瞳を見つめると、自然と彼の言ったことこそ正しいと思えてくるのだ。

頭の中がその不思議な感覚でぼんやりともやに覆われていった次の瞬間、警察官の身体は無意識のうちに動き出し彼に道を譲っていたのだ。

「どうぞ……」

その言葉もまったくの無意識のうちのもの。

次の瞬間、警察官はふと我に返りその言葉を訂正しようとしたがもう時は遅し。彼は悠々と現場のファッションビル内へと入っていった。

一体、何なんだ……あいつ。

頭を覆っていたもやを振り払うかのように頭を振るう彼の横でテレビ局のレポーターは原稿の結を読み始めていた。

「——なお、容疑者の男は心肺停止の状態です。病院に運ばれ治療中です」

2 警察官、上月静夜

ファッションビルの中は水を打ったようにがらんと静まっている。

いつもなら女性客でごった返す午後のひと時、人っ子いない館内は寂しげに照明が落とされている。

館内にいるのは刑事や鑑識などの警察関係者に、それを心配そうに眺める店の従業員くらい。

そう、このファッションビルは突如として事件現場へと転落した。

午後のひと時急に現れた通り魔の男にそれを制止させた男——二人がこの場所に残した衝撃はあまりにも大きすぎた。

「しかしまあ……」

スーツを着込んだ若い刑事海原は思わず感嘆の声を上げた。

「何でもまたこんな場所で通り魔とはねえ……若い女の子にそんなにうらみでもあったのかな？」

「さあな、それは犯人に聞いて見なきゃわからんだろ」

フロアに点々と置かれた鑑識札をしゃがみこんで見ていた彼の上司である中堅っぽい刑事細川は不機嫌そうな声で一言言った。

「でも、犯人の田上明央は今生死をさまよっているとかいう話じゃないですか」

「そうだ……」

「大体わけがわかりませんよ。何が起きたか知らないけど通り魔のほうで心肺停止状態って——どういことですか」

「つまり……あれだよ」

そういうと細川は困った表情を浮かべその場に立ち上がった

「目撃者の話では犯人を取り押さえた青年がいたというじゃないか……そのときの格闘で犯人側がそうなったとしか……」

「まさか細川さん、それを信じるわけじゃないでしょうね？ 刃物で武装した相手をねじ伏せるなんて警察でもなかなか出来ませんよ」

「まあ、そうなんだが……」

「まったく信じられませんよ。ただの大学生風の青年が犯人を取り押さえた反動で犯人が心肺停止なんて——本当ならその青年、とんでもない相手ですよ。このまま野放しにしてたら通り魔より危ないかも」

——最近の若い奴は好き勝手なことばかり言うなあ……

隣で不満をたらたらと言う後輩海原の話を話半分聞いていた細川は少しむっとした表情を浮かべそう思った。

だが、彼の言い分もわかる。

こんなことありえない。武装した通り魔を素手で普通の青年が取り押さえるなんて——相当な訓練がないとそんなこと一般市民には無理だ。

それどころかその青年との格闘で通り魔の犯人は心配停止に陥っているなんて——海原の言うとおり確かにそれはとても恐ろしい話かもしれない。

だが、一番事情を知っているはずのその青年は騒ぎに乗じてこのビルから消えるように去ったという。

犯人の意識も戻らず、彼も行方不明——こんな状況でどう捜査をすればいいというのだ？

「あ……」

海原はふとフロアの別の場所に目を移した瞬間、急に怪訝そうに顔色を変えた。

「——どうした？」

「何で？ 何で上月がここにいるんだよ」

「上月——？」

彼の言葉を聞いて細川はふと顔を上げると、その目の前にはいかにも場違いと言われんばかりのだらしなさそうな警察官がじろじろと現場を見つめていた。

「まさかあいつが？」

「そう。上月静夜、俺の同期なんですけど、コイツがまたやる気がなくてだらしない男でね……今は多分うちの署で資料係してると思うんですけど」

「資料係!? 何でそんな奴が現場にいるんだ！」

「そんなこと俺に聞かないでください。大現場に上月がいるなんて……明日多分雪ですよ」

「お前、そうは言ってもあいつの同期なんだろう。それくらい聞いて来いよ」

「そうは言いますが……」

細川のその命令に海原は一瞬嫌そうな表情を浮かべたが、先輩の無言のプレッシャーに負けしぶしぶと彼のほうに近づく。

同期の海原でさえいつも資料室でぼけーっとしている姿しか頭に浮かばない上月静夜だが、今日の雰囲気はどことなくいつもと違う。

それは普段現場になんか出ないからそう見えるだけだろうけど、今日の上月は真剣を乗り越してどこか近寄りがたいくらい雰囲気を出しているように思えた。

「……よう。上月」

海原はそんな静夜の横に行き、彼の右肩をぼんと軽くたたいた。

その瞬間、上月静夜は強く反応し鬼気迫る表情でそれを強く振り払ったのだ。

「何をする！」

上月は海原にたたかれた右肩を持ちながら彼をきっとにらみつけた。

その様子はどこか右肩をかばっているような風にも写った。

「何もしてねえよ！ 何勘違いしてるんだ！」

その様子に海原はむっとした様子で反論したが、それを無視するかのようには上月はまた現場をじろじろ眺めだした。

「って——聞いているのかよ！」

その一言に上月は淡々と一言言った。

「邪魔だから向こう行ってくれないか？」

——それは俺たちの言う台詞だつーの！

あまりにもつれない上月の態度にそう言いたかったが、なぜか今日はその一言が出なかった。

今日の上月静夜は自分の知ってる顔とは少し違う。

あのやる気がなくてとぼけている彼が何をかぎつけたかは知らないけど怖いほど真剣になっているのだ。

「なあ……」

海原はそんな上月の横にしゃがみこむと下手に一言聞いた。

「一体何の風の吹き回しだ？」

「何が？」

「だって、お前現場の人間じゃないだろ。なのに今日に限って……」

「個人的に興味を持っただけだよ」

そういうと上月は海原を避けるように立ち上がった。

「興味って……この犯人か？」

「いいや、違うね」

上月はそういうとにやっと不気味な笑顔を浮かべた

「通り魔を意図も簡単に心配停止させてしまった彼に——ね」

「……はあ？」

その言葉に海原は思わず頭をひねった。

上月が何に興味を持ったかは知らないが、いつもはやる気がない警察官で有名な彼がこれほどまで燃えている姿はとても奇妙に思えた。

「でもさあ、その男を捕まえてどうしようっていうの？ もし容疑者がこれで死んじゃっても状況からして彼はどう考えても正当防衛だし、犯人逮捕に協力してくれたんだから警察は彼を表彰するしかできないだろう……」

「表彰か……それも面白いね」

そう言うと上月は海原のほうを向いて一言聞いた。

「容疑者が心停止してから何分立つかな？」

「そうだな……かれこれ事件が起き三〇分程度経つからなあ。もう容疑者はあの世かも知れんな」

「そうかな。案外息を吹き返してるかもしれないよ」

「へ？」

——どうということ？ そう聞きかけたその時だった。

静まり返ったフロアに携帯の着メロが響き渡った。

上月は表情一つ変えずに携帯電話を取り出すと恐ろしく冷静な口ぶりで淡々と電話に淡々と答え始めた。

何を話しているかわからないが、ただ海原には電話の対応をしている彼は近寄りがたい殺気に

似た何かを出しているように思えてならなかった

やがて上月にかかってきた電話はすぐに切れた。

彼はひとつ息を吐くとチラッと横の海原を見て言った

「容疑者、息を吹き返したらしい」

「え？ それホントなのか——？」

でも待てよ——上月の情報で少しだけ希望が持てたが、次の瞬間海原に大きな疑問がわいた。

容疑者が息を吹き返した情報が何故真っ先に彼に来るのだろう。

やる気のない警察官である彼にそれを知る権限などない——はずなのに。

それを問いただそうと海原が上月に向かって口を出そうとしたその時だった。

「それじゃ……俺、用事思い出したから」

「ちょっと待てよ。一体何の用事なんだ」

「あんたには関係ない話だ」

上月はそう一言言い放つと足早にフロアを去って言った。

一体あいつは何様なんだ——出世をあきらめたはずの同期の男を呆然と見送りながら海原はむっとした表情でそう思った。

ただひとつだけ言い切れること。今日の上月静夜がいつものやる気のない男とは違う顔をしていたということだけ。

それ以外はまるで何もわからなかった。

3 容疑者、田上明央

この事件の一報を聞いたときから上月静夜は不思議な胸騒ぎを覚えていた。

これが渋谷のファッションビルを襲った単なる通り魔事件だけだったのであれば、わざわざ現場に向かうことなどなかった

普通の事件など無能な刑事たちに事件を任せておけばそれでいいのだ。

渋谷署の資料系の自分が出る幕などないことは静夜にも重々わかっていた。

——だけど、今回はただの通り魔事件とはまったくの別次元の大事件が静夜の胸を響かせた。

それは通り魔がある若者によっていとも簡単に取り押さえられたという非常事態であった。

初めてそれを知ったとき、静夜はほかの誰よりも早くその青年がどんな顔を持つ人間なのかわかってしまったのだ。

それを教えてくれたのは、彼が通り魔を心停止にまで追いやった技だった

死の拳——人の神経が集中している肩甲骨あたりを強く殴打することで敵を一瞬にして気絶させるという忍者独特の技。

ただ加減が強いと一撃食らわせただけで心停止しかねない文字通りの死の拳——

彼も手加減すればよかったものの素人である通り魔ごときに加減を怠ったせいでこの俺に忍者であるというシグナルを出してしまったのだから——本当に馬鹿な奴だ。

だが、そのおかげで彼を捜す手間が省けた。

ここまで来たら警察も彼の居所を捜すことに腰を上げなくてはならないだろう。そうすれば自然と自分を彼の元へ連れて行ってくれる。

それにこれほどまでの使い手だ。もしかしたら自分の捜し求めている相手かもしれない。

そう、おととい刃を交えたあの若き伊賀の頭目に行き着くかもしれない。

それを思うと静夜は高揚感を抑えることができなかった。

滅多に行かない現場にも足を運び、ついには犯人の田上明央が入院している病院にまで来てしまった。

すべては誰よりも早く通り魔を抑えたあの男に出会うため。

そして、いち早くその相手と刃を交わせるため――

静夜は誰にとがめられることなく、病院の奥へとゆっくりと歩いていく。

本来ならば入院している容疑者がいる病棟など自分みたいな平警察官が入れるような場所ではない。

だけど、彼はここに入るため少しだけ裏の人脈を使っていた。

普段は冴えない男を演じて隠し続けている本当の顔、それを知るものはほんのごく僅かな警察幹部の協力者だけである。

そしてそんな彼らの力を使って静夜は面会謝絶の田上明央の病室に入り込んだ。

すべては田上から件の男の情報を聞き出すため。その男を探し出すため――

それは警察のためでもなんでもない。すべては甲賀のためだった。

静夜は面会謝絶と書かれた病室のドアをゆっくり開けると、部屋の奥で寝ている田上明央をじろりと見た。

息を吹き返したとはいえ彼は酸素吸入器を口に付け完璧なるこん睡状態だ。

だが、静夜はそれを気にするそぶりもなく淡々と田上のそばに近づいた。

そして、何を思ったか静夜はこん睡状態で絶対安静の田上の胸をすばやく一突きした。

その瞬間、田上はカッと目を見開いた。

そしてそんな彼の耳元に口を近づけある言葉を吹き込み始めたのだ。

「おはよう。田上くん。君はある男によって深く眠らされていたのだよ。でも俺が君の深い眠りを覚ましてあげる。だから、俺に真実を話して欲しいんだ。君を眠らせた男のことを俺に話してほしいんだ」

その言葉を聞いて田上はぎょろりとした目でゆっくりと静夜のほうを向いた。

それを見て静夜はにやりと不適な笑みを浮かべた。

「俺の手が君の胸から離れれば君は永い眠りから目覚める。そうしたら真実をすべて俺に話すんだ。これは命令だ」

そういうと静夜は田上に突き立てた手をゆっくりと離れた次の瞬間、田上はごほごほと咳き込み始めた。

そして、誰に言われることなく彼は勢いよく酸素吸入器を口からはずした。

荒く息をしながら意識が完璧に戻った田上はゆっくりと静夜の顔を見上げた。

彼は冷たい視線で田上を見下ろしながら、先ほどの暗示を促し始めていた。

「あ、あいつに……こ、殺される！」

田上は悲壮な声を絞り上げて一言そう叫び冷たい瞳で見下ろす静夜にすがりついた。

「な……何なんだ、あの男は——まるで機械のように、俺に襲い掛かってきやがった。俺は……あいつが怖い。あの赤い瞳が……怖い！」

「赤い瞳——？」

その一言に静夜の表情が変わった。

自然と高揚する胸騒ぎを抑えながら彼はゆっくりとした口調でさらに彼の真意を問うた。

「君を襲った彼はどんな風貌の男だったのかい？ 何でもいいから覚えてることを言ってごらん」

そう言うとき静夜は彼の目の前に手をはらって見せた。

すると先ほどの緊張し怯えきった田上の顔がふっと糸が切れたように無表情になった。

そして淡々とした口調でまるで機械のように語りだした

「あの男の風貌は……背格好は175センチほど、髪の毛は短く渋い感じの茶髪、赤く鋭い瞳の上にはインテリ風な眼鏡をしてたけど、あれは完璧なイミテーションであるのは間違いない。それに——」

「それに？」

「ここに……」

そう言うと田上は右頬にかかるく触れて言葉を続けた

「ここに大きな絆創膏をしてあった」

「右に……大きな絆創膏？」

その言葉に静夜の細い目を大きく見開いた。

右頬の傷——それに静夜は大きな心当たりがあったのだ。

すべては3日前、あのホテルで激突してしまった我が甲賀と因縁の宿敵伊賀——

あの時出会った若い伊賀の頭目と刃を交えたその瞬間、静夜は彼にその場所に傷を負わせたことをしっかりと覚えていた。

なるほど、そういうことか——

疼くような鈍い痛みと同時に心のそこからこみ上げてくる熱い思いを感じながら静夜はぎゅっと右肩を手で押さえた。

あの時、彼の頬を傷つけたのと同時に受けた彼の一撃——まるで彼の動きに連動するようにそれが急に痛み出したのだ。

だが、その痛みは彼にとってとても心地のいいものであった。

なにせ、まさかもう一度刃を合わせたいと思っていた相手がこんな形で自分に形跡を残してくれたのだから——

それを思うと静夜はうれしくてたまらなかったのだ。

「——ありがとう」

静夜は一言そういうとまた田上の目の前で手をゆっくりとかざした。

するとまるで深い眠りに落ちるかのように田上はぐったりと意識を失っていく。

彼が再び目覚めるとき、自分にあつたことはすべて忘れてしまっている——静夜はそういう暗示を田上にかけていた。

すうすうと気持ちよさそうにベッドで眠る田上を確認すると、静夜は音もなく彼の病室を去っていった。

しんと静まり返った誰もいない病棟の廊下——静夜は平然とした顔で携帯電話を取り出し通話し始めた。

「もしもし……俺だ」

前に進みながら電話をする彼の瞳は普段見せるダメ警察官のものではない。鋭い光と殺気じみた何かを秘めた誰しもが恐れおののく甲賀忍者の頭目の青白い瞳へと変貌していた

「伊賀の者のことは大体頭に入っているだろうけど、少し詳しく調べてもらいたい人物がいる。奴らを率いている人物の中に特段に若い忍者がいるはず。年は二十歳前後といったところだろうか——身なりからして都内の大学に通っているらしいから、彼の身辺を徹底的に洗いなおして欲しいんだ、それに——」

そういうと静夜は歩んでいた足をぴたっと止めた。

そして口元にうっすらと笑みを浮かべて一言付け加えた。

「彼の居場所がわかったらすべて俺に報告しろ。それをどうするかって？ 後は俺に任せろ。今回の件で彼を罠にかけるのはそう難しくない話だ——」

1 テレビ記者、叶陽一郎

本棚に並べられた分厚い哲学書や心理学の参考書を悠輔はごっそり取り出し乱暴にダンボール箱の中に詰め込んだ。

大学生の一人暮らしだから荷物なんて大したことないと思っていたけど、いざ引越しとなるとそれ相応に荷物はいろんなところから出てくる。

それをまとめるだけで貴重な時間が奪われていると思うと悠輔はなんとも憂鬱な気分になった。

「しかし、家元がこんな時期に引越しを決めるとはなあ……」

どこからか出てきた模型飛行機を飛ばしながら叶陽一郎は一言つぶやいた。

「理由はなんだ？ やっぱり例の通り魔事件か？」

「それ以外に何かあるって言うんだ」

悠輔はその問いに連れない態度で答えた。

「でも、そんな夜逃げみたいに逃げることはないんじゃないの？ 第一お前が犯人じゃないんだしさ」

「君は認識が甘すぎる。だからこそ住所を変える必要があるんだ」

「ほう……まるで警察に住所がばれるのを恐れているようだな」

陽一郎のその言葉に悠輔は否定はしなかった。

ダンボールに本を詰め込み終わってガムテープで封をしながら悠輔はため息混じりに答え始めた。

「あんなことをしでかしてしまったんだ。警察は僕を事件の参考人として捜しているに違いない。それよりも恐れているのは——その警察内部に他流派の人間が混ざっている可能性があるからだ」

「ほう……それはありえない話じゃないな」

「この前のホテルで甲賀に襲われた件だって結局は警察がらみだ。奴らが今回の件を使って僕を——伊賀を追い詰めることのできるまたとないチャンスなんだからさ」

「なるほどな」

それを聞きながら陽一郎は戻ってきた模型飛行機をキャッチしながら言葉を続けた

「でもさあ、もし悠輔の予想が本当だとしたら——いまさら引っ越したって無理だと思うなあ。だって向こうも俺たちと同じ忍者だぜ？」

「それくらいわかってる。僕はただ時間を稼ぎたいだけだ」

悠輔は明らかに不機嫌そうに答えた。

「住所さえ変えてしまえば向こうだってまた調査のやり直しだろ。それだけの時間さえあれば伊賀の力を使って事件をもみ消すことだってできる」

「ほほう……自分の不始末のために俺たちを総動員するわけだ」

「……その言い方は悪意を感じるな」

そういうと悠輔は本が詰まったダンボールを後ろにまわすと、陽一郎のほうをじっと睨んだ。

「そういう日の丸テレビの記者さんはこんなところで油を売ってていいの？ あんまりサボりすぎるとクビになるよ」

「あっれー？ 俺一応取材に着ただけどなあ。渋谷の通り魔を取り押さえた英雄にさ……」

冗談をこぼす陽一郎を見て悠輔は深いため息を付いた。

叶陽一郎はこう見えても表の顔はテレビ局の報道記者をやっているのだから驚きだ。

しかし、彼の働きによって伊賀の意のままにマスコミ操作ができるという利点もあるのだ。

「何度も言うけど、例の通り魔事件はちゃんと僕の存在はもみ消してくれるよね」

「まあ、うちの会社は何とか報道操作はできると思うけど——すべてのマスコミが俺たちの意のままに動いてくれるわけじゃない」

「——だろうね」

そういうと悠輔は苦々しい顔をした。

「警察と同じようにマスコミにも他流が混じってる可能性があるもんね。一概にすべて握りつぶせるようなうまい話じゃないか」

「そういうことだ」

陽一郎はにやっと笑いながら煙草に火をつけた。

「でも本当のところあの事件の英雄が目の前にいるんだったら特ダネとして社にもって帰りたいところだ。そうしたら俺も少しは出世するかもしれないし……」

「そんなことしたら、殺すよ」

笑顔を浮かべながらそういう悠輔の顔を見て陽一郎は苦笑した。

「やらねえよ。俺、出世より命のほうが大事だし——」

その時だった。

雑然と散らかった悠輔の部屋にけたたましくインターホンが鳴り響く

悠輔はそれにはっとして対応しようかと立ち上がったが、それよりも先に陽一郎がそれに対応しようと扉を開けてしまっていた。

「はいはい、何の御用ですか……」

「あ……」

彼の目の前にいたのは一人の女子学生——悠輔の恋人である進藤早紀だった。

だが、早紀にとって叶陽一郎という人物と出くわすのはこれがはじめてであった。

180センチ強ある偉丈夫にくわえ無精髭に加え煙草——早紀にとっては彼の存在はとても威圧的にしか思えなかった。

「あの……悠輔います？」

「悠輔……？」

その言葉を聞いてさすがに鈍い陽一郎でも真実に容易に気づくことができた

早紀の顔を見るなりにやりとどこかいやらしそうな笑みを浮かべ彼女を見つめた。

「そっかー。君が悠輔を骨抜きにしちゃってる例の彼女ってわけねえ」

「馬鹿！ 余計なこと言うな」

その言葉を聞いて悠輔はお尻に火が付いたように陽一郎に食って掛かった。

いつもなら殺気じみた鋭い視線であるはずの彼の瞳は今日に限ってどこか迫力がなかった。

「ほら、彼女を目の前にするとそうやってムキになるんだからあー」

「——うるさい！」

そういうと悠輔はキッと牙を見せて唸り忍者のみ通じる心の会話『心読』で陽一郎を警告した

(早紀の前余計なこと言うな。本気で殺すよ)

(おーおー、家元は恐ろしいことを言うな。それ声に出して言ってみたら?)

(とにかく君は何の関係もないんだから消えてくれない? あんまり僕を怒らせると——どうなるかわかるよね?)

(脅しか……やっぱりそれも早紀ちゃんに聞こえる声で——)

その一言に悠輔は陽一郎の胸を軽く小突いた。さっさと部屋の奥に消えろと言わんばかりの視線とともに。

それを見て陽一郎は「しゃあないな」と苦笑を浮か段ボールがちらかる部屋の奥へ消えていった。

悠輔は彼を気にして早紀と一緒に部屋の外へ出ると、ぱたんとドアを閉めた。

「ねえ、悠輔……」

「ん？」

「さっきの人……だれ？」

やっぱりその質問からか——悠輔はそれを聞いて天を仰いだ。

「んー。あれ僕の従兄なんだ。一応テレビ局に勤めてるみたいだけど……」

陽一郎が従兄であるというのは本当の話。悠輔の父と陽一郎の母はきょうだい関係だ。

だが、何も知らない早紀にはそれ以上の秘密を喋ることは到底無理だった

陽一郎が伊賀忍者の幹部であることも、悠輔にとって右腕的存在であることも絶対に口外してはならないことだった。

「へえ……テレビ局の人なんだ。見かけによらないね」

だが何も知らない早紀はテレビ局員という単語だけに強く反応していた。

「——でしょ？」

悠輔はそんな彼女に乗っかるように言葉を進めた。

「僕も本当に謎だなんて思ってたんだ。あんな不良がよくテレビ局に入社できたなって」

「でも、すごいじゃん。マスコミ関係の親戚がいるなんて——やっぱり悠輔って本当に育ちのいい家系なんだね」

「育ちのいい？」

「だって前、言ってだじゃない。お父さんは地元三重の県議会議員だって言ってたじゃん」

「あ……」

先のその言葉を聞いて、悠輔はいまさらながら口を押さえた。

付き合っ間もないころだろうか——家族構成を聞かれたときうっかり喋ってしまったのかもしれない。

「本当に悠輔ってすごいよ。親は県議員だし親戚にテレビ局員はいるし——そんでもって本人は天下の東大生だよ。なんか……手の届かない存在みたいだわ」

「言いすぎ……」

そういうと悠輔は恨めしい目で早紀をチラッと見た。

「で、ここに来た用件は何？ そんな世間話しにきたわけじゃないんでしょ」

「——もう！ どうしてあなたはそう無愛想なのかなあ」

そんな悠輔の態度が不服なのか早紀は少しむくれながら言った。

「悠輔、こんな時期に本気で引っ越す気なの？」

「そうけど？」

「そうけどじゃないわよ。引っ越す理由がさっぱりわからない！」

「理由ねえ……」

その言葉に悠輔は困ったように頭をかいた

本当の理由など言えるはずがない。他流派の忍者にかぎまわれたくないから引っ越すなんて——早紀に通用する言葉じゃない。

「あんまり理由っていう理由なんてないんだけど——しいて言えば、この部屋……出るんだよ」

「出る？」

「そう……コレがね」

そういうと悠輔は幽霊のまねをしながら早紀に迫っていった

それを見て早紀は身体をびくっとさせて驚いた。

「きゃ！ それ……本当」

「ああ、本当さ。だってここら辺——昔、墓地だったらしいしさ」

悠輔はわざとおどろおどろしく早紀の方って見せた。

彼女はこの手の話が苦手なのだろうか——急に顔面蒼白になり緊張した面持ちになった。

「まあ……それなら仕方ないのかもしれないけど」

「そう、幽霊と一緒になんか寝てられないもんね」

「うん……」

早紀は言葉少なに一言そういうとぴたっと黙り込んだ。

そんな彼女を見て悠輔はふっと優しい笑みを浮かべ彼女の頬を軽く触った。

「大丈夫。新しい引越し先は君にちゃんとおしえるから……」

「本当？」

「今度は霊が出ないアパートだと思うから君も寄ればいいよ。まあ、どうなるかは先の話だけど」

くさい台詞だ——悠輔は自分が言った矢先カッと頬を紅潮させた。

だが、悲しいことにこうでも言わないと納得しないのが進藤早紀という女性なのだ。

「——ありがとう」

くさいくらい甘い言葉に早紀はにっこりと笑って見せた

とりあえず今日も自分の本心は偽れたようである。

「せっかく来てもらったんだけど、今日があいにく搬出日なんだ」

「うん……」

「大してかまってあげられないけどごめんね」

「ううん、いいの！」

そういうと早紀は気丈に笑って見せた。

「私は疑問が解決したからそれでいいの。それに従兄さんにずーっと手伝わせっぱなしもまずいんじゃない」

「ああ……」

あいつは別にいいんだ。僕のほうが上の立場なんだし——

悠輔はそういいたかったがその言葉を噛み砕きながらにっこりと作り笑いを浮かべた

「んじゃ、私——今日は帰るわ」

「本当にごめんね」

「ううん、気にしないで。引越し先、ちゃんと教えてね」

早紀はそう微笑むと学生用アパートの細い廊下を歩き始めた。

そんな彼女の後姿を見送りながら悠輔は深いため息をひとつ付いた

——いつまでこんな嘘ばかりつかなくちゃならないのだろう

そう思うと悠輔の心の中に何か重いものが垂れ込んだ。

正体を隠すための嘘は悪い嘘じゃない。

今までそう思っていたけど、何故今になってこんな罪悪感を覚えなければならないのだろう。昔は、こんなはずじゃなかったのに――

「大丈夫。新しい引越し先は君にちゃんとおしえるから――」

悠輔の耳元で低い声で響き渡った声に彼はびくっとそちらを振り返った。

そこには意地悪そうな笑顔を受けた陽一郎がニヤニヤと笑顔を浮かべて立っていた。

「――馬鹿！ 冗談が過ぎるぞ！」

悠輔はそんな陽一郎にムツとした様子で散らかった部屋に再び入った。

「でも、まさか家元の口からこんな甘い台詞が出るとはなあ」

「他の門下の者に言ったら殺すよ」

「俺が言わなくても直に噂になるんじゃない？」

「――」

その一言に悠輔は反論が出来なかった。

悔しそうに唇をかみながら悠輔は黙々と荷物をダンボールの中につめた。

しばらく雑然と散らかった二人の部屋の中に沈黙が垂れ込んだ。

悠輔も陽一郎もお互いにそれ以上しゃべろうとはしなかった。まるで暗黙の了解でそれ以上しゃべらないようにしているかのよう。

やっと荷物が一通り片付いて悠輔がふうとため息をついたその時、またしてもインターホンがけたたましくなった。

「待って、今度は僕が出る！」

また、来客に対応しようと立ち上がった陽一郎を制止するように悠輔は叫ぶと、大またで散らかる荷物をまたぎながらドアに近づいた。

まさかまた早紀が訪れることはないと思うけど、やはり陽一郎に対応させるのは不安だ。

だがドアを開いた瞬間、悠輔が予想だにできなかった人物が立っていたのだ

「あのう……」

そこに経っている人物を見て悠輔は愕然とした。

その男の服装は濃紺の警察官の制服だったのだ。

「——なにか？」

悠輔は引きつった顔を隠さずに一言聞いた。

「藤林——悠輔さんのお宅はこちらでいいんですよね」

「……………」

その言葉に悠輔は硬い表情のまま黙って頷いた。

それを見て警察官はにやっと笑顔を浮かべた。

「よかったー！ この情報で間違っていてなくて。信頼できる者からの情報じゃなかったから不安だったんですよね」

「あの……ご用件は？」

悠輔は一言そう聞くと、警察官は悪気のない笑顔を浮かべた

「この前、渋谷の方で起こった通り魔事件であなたが参考人になっています。とりあえず署のほうまでご同行願えませんか？」

2 激突－伊賀と甲賀

何故こんなに早く僕の居場所を突き止めたんだ——？

悠輔はその事実には愕然とするばかりだった。

日本の警察がそれほど優秀ではないことはその世界にいる悠輔にとって知り尽くした話だ。

それなのにこんな短期間で自分の居場所を突き止めるなんて——今の警察でそれほどまでに迅速に動けるものなのだろうか？

そんな疑問を持ちながら悠輔はしぶしぶ渋谷署に向かう羽目になった。

もちろんこみ上げてくるのはどこにも吐き出せない怒りばかり。

それが自分に向かっているのか警察に向かっているのかはわからないけど、ただただ怒りだけがこみ上げてくる

それは渋谷署の取調室に通された瞬間、ついに爆発した。

「ちょっと！ いい加減にしてください！」

悠輔は刑事が取調室のドアを閉めたらすぐに嘔み付いた。

「何で取調室になんか案内するんですか！ これじゃあ僕がまるで犯人みたいじゃないか！」

「まあまあ、落ち着いてくださいよ。藤林さん」

海原と名乗った若い刑事はお冠状態の悠輔をおろおろしながらなだめた。

「別にあなたを犯人扱いしてるわけではありませんよ。現に犯人は無事あなたの力添えで逮捕できたのですから」

「——逮捕？」

その言葉に悠輔は眉をひそめた。

「ええ、最初心配停止状態で見つかった容疑者の田上明央は無事回復して昨日逮捕できました。」

ご協力、本当にありがとうございます」

「え——」

犯人、死んでなかったんだ——それを知って悠輔は安堵のため息を付いた。

あまりにも唐突な事件であったため手加減をすっかり忘れてしまったことが気がかりだったためその朗報は少し悠輔の心を和らげた。

「——で、今日は何で僕を呼んだのですか？」

悠輔はゆっくりとパイプ椅子に座りながら、刑事の海原をじろりとにらみつけた。

それを見て海原は一瞬顔を硬直させた。悠輔の瞳には言いようのない威圧感がこめられていた。

「ええ……」

海原はそんな悠輔から目をそらすように、書類に目を通した

「まあ、参考に話を聞こうかなと——あ、怒らないでくださいよ。本当に参考程度なんで気を張らないでくださいね。その後で——通り魔の容疑者を捕縛した藤林さんを我が署で感謝状を送ることになりました——」

「何？ 表彰だって——？」

その言葉を聞いて悠輔は顔に色を浮かべた。

「そんなこと聞いてない！」

「まあまあ、そんな事言わないでくださいよ。今日は新聞やテレビ局も来るらしいですよー。なんせ渋谷のど真ん中でおきた通り魔を解決した張本人なんですから」

海原の話を書くたびに悠輔の顔は一気に青ざめていった。

警察で表彰？ テレビ局からの取材——？ 普通の一般庶民なら跳んで喜ぶようなシチュエーションなのかもしれないが悠輔にとっては絶望的な話だった。

それは最悪のシナリオだった。

自分の存在がこんな形で公になるなんて——それは忍者として最も犯してはいけない禁忌であった。

「あの、やめてもらえませんか？」

「え？」

自信なくつぶやいた悠輔に海原は意外そうな顔を浮かべた。

「表彰とか——本当にやめて欲しいんです。僕、シャイなんで……」

「ええ、でもこんなチャンスなかなかありませんよ？ ヒーローになれるんですから」

——ヒーローになんかなりたくないから断ってるんだ。

悠輔はそう言いたそうに海原をきっと睨み付けた。

「それよりも、藤林さん——あなた、天下の東都大学の学生さんなんですねえ」

「はあ……」

「すごいじゃないですか。その若さだと現役合格ですか？」

「はあ、一応——」

「ほほー。ということは頭脳も天才的なんだ」

東都大生ということのをえらく感心する海原を見て、悠輔は居心地の悪さを感じた。

褒められていることは素直に喜ばいいのだろうけど、今の悠輔にはまったくそういう気にならなかった。

「まあ、とりあえず……事件のことを詳しく聞かせていただけませんか？」

「僕が？ でも犯人は逮捕されたんでしょ？」

「そうなんです……とりあえず参考ですから——」

海原がそう言いかけたその時だった。

ぴたりとしまっていた取調室の扉がいきなり重々しく開かれた。

その人物の登場に悠輔も刑事の海原も驚いた様子で後ろを振り向いた。

そこに立っていたのは着崩した制服を着た眠そうでだらしのないある警察官。

「ちょ……上月！」

彼の姿を見た瞬間、刑事の海原は憤慨した様子で強い口調で責めた。

「ノックもなしに取調室に入ってくるなんて何事だ！ 大体、お前みたいな奴がここには入れないはずだぞ！」

刑事の海原が怒るのも仕方がない。

急にペエペエの制服警官が挨拶もなしに取調室に入ってくるなんて本当ならありえないはず。

だが、上月と呼ばれた制服警官は表情の欠けた顔で海原をずっと見つめていた。

「なんだあ〜!? 黙ってないで用件でも言ったらどうだ？ それとも用事も何もないのにここに来たのか!?!」

そんな彼にいらついで海原は彼の目の前に立つと威圧的ににらみつけた。

だがそんな刑事よりも無表情でじっと一点を見つめる制服警官のほうが悠輔にはずっと威圧的に見えたのだった。

その時だった。だらしなさそうな制服警官が一言言い放ったのは——

「お前は出て行け」

その一言に海原は間が抜けたように「へ？」と息を呑んだ。

だがすぐにその暴言に爆発したのか彼の胸倉をぎゅっつつかんで壁にたたきつけた。

「ふざけるな！お前そんな口たたける立場か——」

「お前は邪魔なんだ。さっさと取調室から出て行け。これは命令だ——」

「命令——！」

そう言われた瞬間、海原の表情が一気に固まった。

それを傍らから見ていた悠輔は思わずはっと息を呑んだ。

その変化は素人目ではなかなかわからないが悠輔はばっちり見抜いていた。

この上月と呼ばれた制服警察官が仲間に向かって催眠術に似た暗示をかけ始めていることを。

「お前にはこの男の真実を知るには少々役不足。それならその役を俺に代われ。彼だってそれを切に望んでいる。何も知らない庶民のお前には——この男を丸裸になんかになんかできない」

「俺だと——無理なのか？」

その言葉を聞いて海原は何かに取り付かれたようにぼそぼそとつぶやき続ける

それに畳み掛けるかのように制服警官はさらに言葉の綾をつなげた。

「さあ、この部屋から出て行け。お前はここでは必要のない人間なんだ。さあ、早くそのドアを開けて出て行くんだ。それがお前のためだ。さあ、早くしろ！」

「出て行く——！」

海原がそう言ったその瞬間、制服警官は海原の前でぱちんと指を鳴らした。

次の瞬間、まるで抜けていた魂が戻ってきたかのように海原はしゃきっと背筋を伸ばした。

そして何事もなかったかのように、制服警官と悠輔を残したまま取調室から足早に出て行ってしまった。

その様子を見送ることなく制服警官は不気味な笑顔を浮かべ続ける

そして、次の標的である悠輔を舐めるような青白い瞳を見た。

悠輔はその瞳を見てはっとした。その青い光には強い因縁があったのだ。

「まさか、君は——」

悠輔はそう言いながら警戒感で全身が総毛立つのを覚えた。

まさかこんな場所ですら先日刃を交えた相手と出くわしてしまうなんて思いもよらないこと
であった

「やっと気づいたようだな」

その男は呆然とする悠輔を見てにやりと笑った。

「藤林——否、^{もち}百地悠輔君」

その名前で呼ばれたことに悠輔は強い衝撃を覚えた。

「何故、その名前を——」

「とぼけないで欲しいな。俺たちの世界では有名な話じゃないか」

そう言うとその男は悠輔に対するように椅子に座った。

「昔、聞いたことはあった。伊賀の大頭目であった百地家はその存在を完全に隠すために別の^{なまえ}姓
を名乗りだした。それが伊賀ではポピュラーな名前の藤林という姓だった——それまでは半信半疑の話
だと思っていたけど、お前を調べてみるとそれが嘘じゃなかったってことに俺は驚いたよ」

男のその話を聞いて悠輔は悔しさで唇をぎゅっと噛んだ。

自分の正体がここまでも公になってしまったのも悔しいが、それをやってのけたのがあの時の
爪男だと思えば強い敗北感を覚え悔しくてたまらなかった。

「君こそ、本名を名乗れ——」

悠輔はゆっくりと顔を上げ目の前の男をにらみつけた

その眼鏡の奥の瞳は自然と真紅に染まっていた。

「そうだな、俺の方も名乗らなきゃフェアじゃないか——」

そう言うと男はひとつ息を吐いて彼を見た。

「俺は甲賀流第18代頭首、^{こうづきしずや}上月静夜。姑息なお前の家とは違って俺は表の世界でもちゃんと本名を名乗って生活している」

何が姑息だ——

悠輔は静夜のその一言に青筋を立てそうになったがぐっと唇を噛んで我慢した。

「やれやれ、君は本当に口が悪いね」

悠輔は一言そうため息を付いた。

「君は本名を隠しているって思っているらしいけど、君も一応警察官だろ。僕の戸籍の姓が『藤林』だってことは知ってるはずだけど？」

「お前の本当の姓は戸籍をいじってまで隠さなければならないのかい」

「甲賀の情報伝達能力っていうのはその程度のものなのか？」

そういうと悠輔は蔑んだ笑みを浮かべた。それを見て静夜の顔から初めて余裕の色がなくなった。

「君は『百地』って姓を勘違いして覚えているようだからおしえてあげるよ。僕たち伊賀忍者は『百地』と名乗るものには絶対服従しなければならない。なぜならその姓は伊賀忍術のすべてを極めたものにしか与えられない。そしてそ『百地』の名をもらった以上その者はその名を封印しなければならない——どうしてかわかるかい？ まあ、甲賀の君にこれ以上は語るわけにはいかないけど」

「ほう……それは面白い話だ」

そういうと静夜は机に頬杖を付いて悠輔を青白い瞳でじっと見つめた

「つまり『百地』という名前はお前を伊賀忍術の奥義継承者だと教えてくれているわけだな」

「君も人のことがいえるのかい？ 僕たちは流派は違えど同じ立場の人間。君だって僕と同じように甲賀の奥義を学んだはずだと思うけど？」

そういう悠輔の瞳も燃えるような赤い視線で静夜を睨んだ

「ふん、面白いことを言うな。伊賀の若き家元は」

静夜はその言葉を聞いてにやっと笑顔を浮かべた

「いいだろう。俺がお前をここに招待した目的をここで特別に教えてやろう」

「へえ、やっぱり君の差し金だったんだね」

そう言うと悠輔は納得したかのようなため息をついた。

どおりで警察にしてはやけに手回しが早すぎるとは思ったがやはり裏で甲賀が動いていた——というわけか。

「単刀直入に言うよ。お前ら、俺たちと組む気はあるか？」

「はあ？」

その言葉に悠輔は呆気にとられた。

だが静夜は全く動じもせずに淡々と言葉を紡いでいった。

「よく考えてごらんよ。伊賀の家元さんよ……俺達甲賀とお前ら伊賀が今手を組んだら日本を征服できるかもしれんぞ」

「まあ、それは否定しないけどね……」

「それにだな、もはや俺たちの争いは不毛なんじゃないかな？」

そう言うと静夜は長い足を組みなおした。

「甲賀と伊賀——一体何百年覇権争いをしている？ その間どんどん歴史は変わって行って今は傍目からみれば平和な時代。一体何のために俺たちは争うのだ？」

「それは……」

その問いかけに悠輔は困った表情を浮かべた。

「僕でもよくわからないな。君たちとの因縁が濃すぎて仲直りも不可能だったりして」

「ふん……つまり、まだ俺たちと戦うつもり——ってわけか？」

その一言に悠輔はむっとした表情を浮かべて反論した。

「喧嘩を吹っ掛けてくるのはいつもそっちでしょ？ それなのに今日は停戦か？ 悪い冗談すぎて明日は雪じゃないのか？」

「それが冗談じゃないんだな。家元さんよ」

そう言うと静夜はにやっと笑った。

「こんな長きに渡っていがみ合っていた俺たちだけど、もはやそれは古い——俺はそう思う。だからどうだろう？ この際甲賀と伊賀で停戦同盟してもおかしくはないだろうか？ 今更、うん百年前の遺恨を理由として争う必要なんてない」

「——」

その一言に悠輔は訝しげな表情を浮かべた。

確かに静夜の言い分を一理ある。

この現代の世に果たして自分たち忍者は必要あるのか、そして争う必要はあるのか。それは現代の忍者にとっていつも頭をもたげる永遠のテーマだった。

だけど——何故今更になって静夜は何を言うのだろうか。

元はといえばお互いに目の敵にしている存在である伊賀と甲賀。それなのにこんな場所で停戦同盟を持ちかけるとは

——この男のことだ何か大きな裏があるに違いない。悠輔はそう思えてならなかったのだ。

「どうした？」

黙りこんだ悠輔を静夜は舐めるような視線でじろじろと見つめながら言った。

「そう悪い話じゃないと俺は思うが、お前は何を迷っているんだ」

「別に……迷ってるわけじゃない」

そういうと悠輔は深いため息を付いていった。

「君は一体何を企んでる？」

「何がって……」

「いい加減本当の理由を言ってごらんよ。君が簡単に落とせるほど僕は馬鹿じゃない」

その一言を聞いて、静夜の表情が一気に硬直する。

その瞬間彼の身体から切り裂くような殺気が放たれた。

「やれやれ、まったく俺の暗示にかからないな。伊賀の家元は」

「残念だったね。僕は君がいつも操ってる相手とは精神構造がちがうんだよ」

でも一瞬だけだが静夜の暗示にかかりそうにはなった——しかし、悠輔はあえてそれは伝えようとはしなかった。

この男、おそらく調子に乗せると厄介だ。とくに今みたいな口での対戦だと時々負けてしまいそうになるのは確かだ。

「じゃあ、僕も単刀直入に聞くよ……甲賀の頭目であろう君がなぜ警察組織に入り込んでいる？
しかもその様子じゃ出世もあきらめてるみたいだし……」

そう言うと悠輔は静夜の格好を舐めるような目つきで見まわした。

だらしなく来た制服にぼさぼさの頭——おそらく左遷部署にいるのだろうと容易に想像できた。

「警察での出世なんてとうの昔に諦めた。それでもいるのはほかならぬ甲賀のため——さ」

「ほう……じゃあそこにいるってことは甲賀にとって得だと？」

「ああ、得だね。なにせ警察と信賴的關係が結べられるからな」

「ふーん」

そう言うと悠輔はじっと真紅の瞳で静夜を睨みつめた。

「つまり先週のホテルでの出来事は先客の甲賀より警察が伊賀に色目を使ったもんだからから怒ってやってきたんだね」

「まあ……そういところだ」

「それはよかった。君のあの時の怒り心頭の様子はおそらく僕を殺したあとあそこで怖かった相馬刑事もろとも殺すつもりだったんだね。でも僕が予想以上に強かったもんだから対応に苦慮した——と」

「……」

その一言に静夜は押し黙ったまま悠輔を青白い瞳でじろりと睨んだ。

どうやら悠輔の言ったことは凶星であったらしい。

「しかし残念だけど、君たちが思っているほど警察は意のままには操れないよ。そうしてもらったら僕たちが困るからね」

そう言うと悠輔の瞳からギラリと赤い光が発せられた。

しかし、静夜は一步も怯まなかった。逆に面白いと言わんばかりの笑みを浮かべて

「ほう……つまり俺たちの領域を侵す——ということか？」

「これ以上君たち甲賀の好き勝手にはさせられない。それが僕の答えさ」

その一言に静夜は狂ったかのように笑い転げた。

そして挑戦的な視線で悠輔を見ると静夜は一言言った。

「面白い！ 結局伊賀は修羅の道に行くと言うわけだな」

「ふん。僕たちが君たちと同じ土俵に上がった時点で停戦なんて考えてなかったくせに……」

「しかし残念だ。甲賀と伊賀が組めば本当に日本が簡単に支配できると思ったのに」

その言葉に悠輔は冷淡な視線で静谷を見ると笑った。

「僕は君みたいにそんな大それた野望なんてないから」

「ほう……」

「僕の主義は売られた喧嘩は3倍にして相手に返すってこと。それ以外のことは何も考えてないよ」

悠輔は無邪気にそう笑ったがその視線は鋭く赤い光を発し続けた。

僕はいつでも相手になってやるよ——そう言いたげな視線に静夜の興味は強くそそられた。

「やれやれ、伊賀の家元さんは好戦的だな」

そう言うと静夜は蔑んだような笑みをうかべ悠輔を見た。

「しかし、その余裕はいつまで続くだろうな。これからのお前の予定を見ると忍者として笑ってられる状況ではない」

「ああ……」

静夜にそう言われ悠輔は一気に顔を曇らせた。

そして不快感いっぱいの表情を浮かべ彼を睨みつけた。

「もしかして今日の感謝状授与も君たちの差し金？」

「いや。これは自然の流れってやつかな——」

「まあ……そうだろうね」

警察で表彰されるなど悠輔にとって不服であった。だが、ここで断るなどもうできないこともわかっていた。

——まあ、いいや。どうせ後で情報を握りつぶせば公になどならない。

僕たちにはそれができる力があるんだから……

「えらい余裕だな」

悠輔の落ち着き払った態度に静夜は感心したように言った。

「もしかしてお前……こんな表彰式伊賀の力を使って闇に葬ろうとでも思っているのか？」

「まさか……僕たちはそんなに万能じゃないし」

「でもおかしいよなあ……」

そう言うと静夜は悠輔の顔をじろじろと見つめた。

「この前の渋谷の通り魔事件でお前のこと報道したマスコミって少なすぎだと思うんだよなあ……」

その言葉に悠輔は訝しげに眉をひそめた

「——どういう意味だ？」

「おや、まだとぼけるつもりか？」

静夜はそういうとにやっと笑った。

「お前らの流派が情報操作が得意だってことは有名な話。それを使ってどうにかことを小さくしようとしたらしいが、今回ばかりはそうはいかないぞ」

「何——？」

「マスコミに内通しているのは伊賀だけじゃないってことだよ。百地君」

静夜の口からそれを聞いて悠輔は思わず顔色をガラッと変えた。

形勢逆転。それを見て静夜は誇らしげな表情を浮かべた。

「まあ、気にするな。ニュースを見てお前の正体に気づく奴なんてそう多くはないさ。そう思えば問題ないだろう」

その一言に悠輔は初めて悔しさを顔に出しに歯ぎしりした。

そうか。コイツそれが目的だったんだ——

静夜にとって今日悠輔を警察に呼び出したのは、彼を取り調べるためでも表彰するためでもない。彼の正体を如実に公に晒すのが目的だったのだ。

「覚えてろ……」

悠輔はまるで腹の底から出た呪いのような言葉で一言言った。

「僕は君の思うどおりにはならない！　そして君を——甲賀を絶対に忍者界のトップにはさせない！　それが僕の——『百地悠輔』としての意地だ」

そう言った悠輔の眼鏡の奥の表情は完璧に赤い瞳の伊賀の若き頭目にして秘伝の名を継いだ『百地悠輔』の顔になっていた。

それを見て、上月静夜は初めて嬉しそうな笑みを口元に浮かべた。まるで最高の好敵手を見つけたかのように

3 静夜の罨

彼は、表彰は自然の流れだと言った

それはそうかもしれない。あれだけのことをやってしまったのだ。大事になるのは仕方ないかもしれない。

だけどそれは図らずも彼にとって大きなチャンスを与えてしまった。

一つのきっかけさえあればそれを使って幾らでもこちらを陥れる罨は設置できる。

きっとこの表彰は自然な流れのうちに決まったのだろうけど、その中にどれだけ彼が罨を仕掛けているか——悠輔にとってそれが気がかりだった。

緊張した面持ちで渋谷署の署長室に通された瞬間、図らずも何台ものカメラが彼を睨み付けていた。

パシャパシャと跳ぶ眩いフラッシュに顔をゆがめながら悠輔は恐る恐るその部屋に陣取るカメラを数えだした

どこがマスコミが数社ほどだ。こんなの芸能人の会見並みの人数じゃないか。

悠輔はむっと眉間にしわを寄せながら部屋の中に入るとさらに痛々しいフラッシュが彼を襲った。

一体このしかめっ面が何社の新聞に載るのだろう。そして、何人が自分の正体に気づくのだろう——

そう思うと悠輔は目の前の表彰が憎々しくて仕方がなかった。

「いやああ、まさか一般市民の方に通り魔を確保していただくなんて……驚きですよ」

丸々と太った渋谷署の署長は悠輔とは180度違う満面の笑みで迎えた。

「でもまあ、藤林君も無事で本当によかったよ。もし君が犯人に向かったのがきっかけで一大事になっていたら——大変だもんなあ」

署長はそういうと悠輔の肩をなれなれしく叩いた。

それを聞いて悠輔は困った表情で「はあ……」と答えるしかできなかった。

「でも、君も無事だし犯人の意識も戻ったし、けが人は多少出てしまいましたが死者はナシ！こちらにとっては円満解決で万々歳ですよ！」

なにが円満解決で万々歳だ——

悠輔は不服そうな表情を浮かべながら署長を訝しげに見た。

すべては不幸な話だ。デート中に通り魔に遭遇してそれを制圧してしまったがために、警察組織に潜り込んでいた甲賀の頭目上月静夜の目についてしまった——これを運が悪いと言わずにはいられない。

そして彼は忍者が最も恐れることを最大の罠に仕掛けた——それがマスコミを使い自分の顔を日本中に晒すという今の状況だ。

上月静夜め……

悠輔はまるで呪いをかけるように彼の名をつぶやいた。

こんな形で僕の正体を公にして、奴はこの後何を企んでいるのだろう……

ここで顔が報道されたら、伊賀や甲賀以外の流派にも自分の顔が伝わるのは間違いない。

それを知って他流派はどう動くのか——それを考えると悠輔は頭が重くなりそうだった。

「もしもし、藤林さん？」

そう言われて悠輔はハッと顔を上げた。

目の前には蛸のようにきょとんとした顔の署長が賞状を持って立っていた。

「どうされました？ なれないフラッシュに立ちくらみしましたか」

「あ、いや……はい」

悠輔はその言葉に戸惑うかのように弱々しく答えた。

本当はそんなことより、裏の世界の動向のほうが気になるなど口が避けてもいえるはずかない。

「ほらほら、スマイルでさ。君は今日から英雄なんだから……」

英雄？ そんなものになんかなりたくもない——！

悠輔はそう口答えしたい気分になったがその言葉をぐっと飲み込んで目の前に差し出された賞状を無表情のままおずおずと受け取った。

「あの一、すみません。お二人さん握手しながら記念撮影したいんですが」

取材陣からそんな声がした瞬間、もう悠輔は我慢ならなくなった。

何に怒りを感じてるのだろうか？ 警察？ マスコミ？ それともすべてを仕掛けた上月静夜か？

否、全て違う。本当に怒りを感じているのはこんな簡単な罠のきっかけを作った自分自身だ。

そう思うと強い怒りとともに激しい情けなさも感じて穴に隠れたい気分だった。

警察署長と握手をし、カメラに向かってポーズすると激しいフラッシュが悠輔を襲った。

この光はこれほどまでに痛いものだっただろうか——悠輔は硬く顔をしかめながらそう思った。

襲い掛かるフラッシュの光にスキャンダルを抱えた芸能人のように今すぐその場から逃げ出したい気分になったけど、そうするわけにもいかない。

なぜならその行動こそが自分を陥れる罠そのもの。上月静夜の思い通りの結果になるのだから

「——OKで一す！」

カメラマンの一人がそう言った瞬間、悠輔に襲い掛かっていたフラッシュの嵐はパタッと止んだ。

それを見るなり悠輔はすっと踵を返し足早に署長室からでていこうとした

そこにいた署長やほかの刑事たち、マスコミの連中すべてが彼の行動に驚き引きとめようとしたが時は遅し。悠輔はまるで吹き去っていった風のように消えていった。

そして悠輔はそのままもらった賞状を乱暴にくるくると丸めながら薄暗い警察署の廊下を歩き出した。

だが、その足はすぐにぱたりと止まる。

悠輔は鋭い瞳ですっと前を見つめた。

目の前にはあのだらしのない制服姿の甲賀の頭目上月静夜が立ちはだかっていたのだ。

「よお、もう授賞式を後にしたのかよ、家元は」

彼は悦に入ったような笑みを浮かべながら悠輔にそう問いかけた。

そう言われて悠輔はもう我慢の限界を超えてしまった。

悠輔はその問いに答えることなく無言のままその足を静夜に向け歩みだした。

その瞬間、静夜は身体を硬直させ思わず攻撃の構えを取りそうになった。

ゆっくりと近づいてくる悠輔の周りには禍々しいほどの殺気が渦巻いていたのだ。

そして二人がすれ違うその瞬間、悠輔は静夜にまるで喉元に刃を突きつけるかのような一言を発した。

「覚えてろ……」

その言葉を聞いて静夜は悠輔のほうを振り返り言った。

「おや、ずいぶんお冠のようで」

「うるさい」

悠輔は凍て付くようなその一言を放つと暗闇の中真紅に光る瞳で静夜を射抜いた。

「今度会うときは君の命はないと思え……」

悠輔は一言そういい残すと、また何事もなかったかのように薄暗い廊下をゆっくりと下っていった。

それを冷めた視線で見送っていた静夜はふっと蔑んだような笑みを浮かべ言った

「命がないのはどっちのほうか……」

そう言うと静夜は悠輔とは逆のほうへ踵を返し薄暗い廊下を歩いていった。

4 追跡者たち

渋谷署を出るともうどっぴりと日が暮れて辺りは薄い夕闇に覆われていた。

それを見て悠輔はひとつ深いため息を付くと、駅に向かってゆっくりと歩き出した。

若者の街渋谷は夜を向かえさらに人が増えぎゅうぎゅうにごった返している。

普段ならここら辺でファーストフード店に入って軽い夕食をとるところだが、今日は疲れきってそんな気力もない。

街に繰り出す若い男女をよそに悠輔はうつむき加減に駅へと足早に消えていく。

そして、一気にホームに着くと悠輔はまたひとつ大きなため息を付いた。

「今、標的は渋谷駅山手線外回りのホームです……おそらく頭目の予想通りそのまま部屋に帰るでしょう」

悠輔は訝しげな表情を浮かべ周りを見回した。

山手線の短い待ち合わせ時間、回りは携帯電話をかけるサラリーマンにiPhoneを聞く若者、手鏡を覗き込む女子高生におしゃべりをする主婦たち――

彼らすべてが怪しいわけじゃない。むしろ素人目にみればまったく持って自然な形のホームの風景だ

だが悠輔は薄々ながら何か別の違和感を覚え始めていた

警察署を出たときから誰かに絶えず監視されているような視線を痛く感じていたのだ。

そのとき緑色の車体の山手線がホームに滑り込んできた

悠輔は首をひねりながら開いたドアからゆっくりと電車に乗り込んだ。

渋谷から最寄り駅まで電車を乗り継いで約三〇分。

その間もぴったりとマークされた視線は絶えず悠輔を襲った。

もはや疑問の余地はない。僕はあれからずっと甲賀の奴らに付けられているんだ。

それを確信した悠輔はあえて最寄り駅の二つ前の駅で電車を降りた。

だが、悠輔を付ける影は動じることなくぴたりと彼に寄り添う。

それどころか、時が立つごとにその影は一つ二つとみるみる数が増えていく。

なるほど、ここでケリをつけるつもりだな——背後を付ける影たちの気配を感じながら悠輔は微笑を浮かべた。

そのつもりでこうやって人気の少ない場所に奴らを誘導してやっているのだ。

それを気づいているのかどうかは知らないが、目的地を前にして影たちの殺気はどんどん強く禍々しいものになっていく。

その時、悠輔はふと足を止めた。

辺りはもう街の喧騒から大分離れ、街灯も一つもない薄暗い路地に入っていた。

その瞬間、彼を付けていた影たちの足音が砂利を踏みしめぴたっと止まった。

悠輔はにやっと笑った。そして彼らに気づかれないように眼鏡をすっと取り外した。

「僕が君たちに気づいてないとでも思ったかい？」

悠輔はそう一言言った瞬間、振り向きざまにベルトに付けた針を抜き取りそれを瞬時に放った

その瞬間、真っ先に彼を付けていたスーツ姿の男の喉下に針が刺さりそのまま崩れ落ちた。

「なんだ、たった十人ほどか……」

追跡者たちの数を見て悠輔は少し不満げな表情を浮かべながら右手で針を器用にくるくると回した

「上月静夜も僕を舐めすぎだね。これだけの手勢で僕と相手しようなんて」

そういうと悠輔はにやっと笑い左手で彼らを誘うような手招きをした。

そんな悠輔の挑発に甲賀の追跡者は皆カッと顔を赤くして憤怒し、次々と地を蹴り悠輔に襲い掛かった。

それに対し悠輔はギリギリまでその場を動かなかった。そして彼らをじっと見つめる瞳は目の覚めるような真紅に染まった。

襲い掛かった追っ手の一人が悠輔めがけ太刀を振り下ろしたその瞬間、その一撃はむなしく空を切った。

彼はハッと周囲を見回したがどこにも相手の姿はない。

だが次の瞬間、彼は上を向くとそこに左右の手にたくさんの針を仕込んだ悠輔が文字のごとく空高く浮き上がっていた

その瞬間、悠輔は左右に持っていた無数の針を同時に真下の追っ手たちに解き放った。

それはまさに激しく叩きつける針の雨であった。

あまりに不意な攻撃をかわすことが出来ず、急所に直撃を受け倒れるものもいれば防御したものの腕を負傷したものも居た。

だが、悠輔にはわかっていた。今の一撃は致命傷には程遠いことを――

針の雨の一撃が一通り終わった瞬間、彼らの前にもう悠輔の姿はどこにもなかった

先ほどの攻撃にへきへきしていた彼らの顔に一気に焦りの色が浮かぶ

傷ついた身体で刀を構えながら彼らはじっと悠輔の登場を今や遅しと待ち構えていた――

その時だった。悠輔はあまりに意外なところに姿を現したのだ。

「攻撃してこないの？」

その声にすべての忍者たちがぎょっとした表情を浮かべた

悠輔は彼らが集まる中央に悠々とした顔で居座っていたのだ。

「何もしないなら、遠慮なくこちらから行くよ」

そう言ったその瞬間、悠輔は近くに居た相手を一撃の手刀でなぎ倒していた。

それを見た彼らは急いで臨戦態勢に入り悠輔を取り囲んだ。

だが、それもすべて悠輔の想定の範囲内だった。

悠輔はまるで彼らを挑発するようににやっと笑って見せた。

それを見て彼らの一人が悠輔めがけ刀を振り落とす。それが口笛となった。

「すげえ……」

レンズ越しに悠輔を覗いていた甲賀の忍者は思わずそんな言葉を漏らした

悠輔の動きはまるで武術の演舞のごとく華麗であった。

どんなに複数の相手が襲ってこようとも悠輔はその筋を見極め鼻の差でその刃をかわしてみせた

。

悠輔にとってそれはどうってことのない作業であった。

彼の瞳は特殊であった。裸眼で動く物を見るとそれはすべて止まって見えてしまうのだから。

普段は日常生活に支障を来すから矯正用の特殊レンズをいれた眼鏡をわざわざかけているが、今はその並外れた動体視力が特別に力を発揮するときだった。

右から左から——双方向から襲い掛かる凶刃を赤く染まった瞳で見極め針の穴を縫うように掠め取ると、すかさず敵に出来たほんの一瞬の隙を悠輔は容赦なく突いた。

鮮やか過ぎるカウンターキックは一方の敵の顔を砕き、一方の敵には振り返りざまに鋭い手刀で一撃で沈めた

その直後を襲うようにまた数人の敵が悠輔めがけて襲いかかる。

得られる結果は同じなのに——そう思いながら悠輔はとまって見える刃の軌道を見極め最も効率的に避けられるルートをはじき出した。

振り下ろされた刃を悠輔は体がかがめて綺麗に避けるとそのままの体勢で足を高く上げ敵のあごを砕いて見せた。

それと同時にまた別の敵が一对の刃を振りかざし斬りかかってきた。

だがその攻撃でさえ悠輔の瞳の前では無力であった。

小さな動きで何気なくそれをかわして見せたたんそれよりも何十倍も鋭い悠輔のカウンターパンチが彼を襲った。

彼が崩れると同時に悠輔はまたしても数本の針を手にとっていた

「一体あいつ何本手裏剣を仕込んでるんだ……」

上からカメラで狙う彼はレンズ越しに悠輔を見つめながらそうつぶやいた。

針を握り締めた悠輔は今度はそれを狙いを定めて一本一本丁寧に放った。

百発百中——その針は敵勢の刃を持つ手首や一撃必中の首筋にことごとくヒットし動きを封じられた彼らはその場に崩れ落ちた。

「どうだい？ まだやるつもりかい？」

悠輔はまるで残った相手を挑発するかのよう一言そう言った。

その言葉に仲間を倒され残り少なくなった甲賀の忍者たちは目の前の若者の壮絶な強さに一歩また一歩と後退し始めた。

だが悠輔は彼らを生きのまま返す気など毛頭になかった。

そのとき悠輔は初めて自分で攻撃を仕掛けたのだ。

悠輔は地をぽんと蹴ると逃げ腰になっている彼らの懐に飛び込んだ。

次の瞬間、悠輔は彼らの目の前ですばやく回転するとそれと同時に回し蹴りを放った。

彼らはその瞬間、まるで鞠のように次々と宙を舞い、そして地に落ちたときにはもう意識を失っていた。

「……こんなものか」

あまりにも手ごたえのなさに悠輔は残念そうな声を上げた。

残ったのは腰を抜かした一人の甲賀者だけであった。

「頼む！命だけは……」

彼は年若き伊賀の家元を前にして完璧に恐怖で震えていた

「やれやれ、こんなところで命乞いかい……」

そんな彼を前にして悠輔は深いため息をついた。

「君はそれでも誇り高き甲賀の忍者かい？ 君のボスがそんな君を見たらそれこそ命がないと思うよ」

「——」

その言葉を聞いて甲賀の忍者は苦々しい表情で黙り込んだ。

「まあいい……」

そういうと悠輔はおびえる彼の胸倉をぐっとつかむと軽々と持ち上げた。

「じゃあ、取引をしようか？」

「と……取引？」

「そう、僕は君の命を保障する代わりに君は上月静夜が何をたくらんでいるか僕に教えて欲しい——どうだい？ 簡単な取引だろう？」

「それは——」

その言葉に甲賀の忍者は顔をこわばらせる。命と名誉——どちらを取るか最後の最後まで悩んでいるようだ。

「取引がダメなら君をここでひねりつぶしてもいいんだよ」

悠輔はクスクス笑いながら彼の胸倉にぐっと力を入れた。

ますます喉をつぶされ彼は苦しそうな表情を浮かべた。

「まあ、根性のある忍者だったら僕の誘いに乗るわけないか……なんせ証拠のビデオを撮ってる奴がいるんだから」

そう言うと悠輔は右上を向くと無邪気そうな笑顔を浮かべて見せた。

それを見た瞬間、電柱の上でレンズ越しに一部始終を眺めていた甲賀の忍者は思わずぎょっと顔色を変えた。

「ついでだ。上月静夜に伝えておけ」

そう言うと悠輔はびしっと決めたカメラ目線でゆっくりと台詞を続けた。

「僕を攻略するためにこんな雑魚を使って奥義を引き出そうとしようとしたのだろうけど、そんなことをしたって無駄なだけだよ。僕の真の強さを試したいんだったら君自身が真っ向勝負したほうが手っ取り早いんじゃないかな？——まあ、そんなことしたって君が伊賀の奥義を見破るなど出来るはずがないと思うけどね……」

そう言った瞬間、悠輔は目にも留まらぬ速さで針を打ち放った。

それはカメラを持っていた忍者の首に痛々しく刺さり、彼はそのまま電柱から地上へふらりと落ちていった。

「おっと、手加減するの忘れてた」

そう言うと悠輔は胸倉を掴んでいた甲賀者の存在に気づいた。

ふと、彼を見ると悠輔の締め技に口から泡を吐きながらぐったりと動かなくなっていた

悠輔はそんな彼を見て乱暴に放り投げると、深いため息をつきながら再び特殊レンズ入りの眼鏡をかけた。

しんと静まり返った路地裏——彼の周りにはただ男たちの軀が力なく横たわっていた。

1 お笑い芸人、風間英太

「次のニュースです」

画面に映るのは新東京テレビの看板女性アナウンサー中島雪季恵。

昼のニュースのメインが終わって六番ほど——息抜きのワールドニュースの後、彼女は顔色一つ変えずにそれを読んだ。

「五月十五日、渋谷で起きた男女五人を殺傷した通り魔事件の解決にかかわったとされる大学生に昨日渋谷署から感謝状が贈られました」

彼はそのニュースを新東京テレビその場所でたまたま目に入った。

楽屋とも呼べないフロアのロビー。地デジ化とうるさいテレビ局とは思えない旧式のブラウン管テレビにそれは映っていた。

「感謝状を授与されたのは東都大学2年生の藤林悠輔さん（19）渋谷通り魔事件の犯人を解決したとして渋谷署署長賞が贈られました。この事件は五月15日に渋谷の大人気ファッションビル『シャイニーズ渋谷店』で田上明央容疑者が男女5人を殺傷したもので、たまたま恋人と『シャイニーズ渋谷店』を訪れていた藤林さんが田上容疑者を勇気を持って取り押さえました——」

「藤林……悠輔？」

彼はまるで魂が抜かれたようにそのニュースに釘付けになり、まだ見ぬ英雄になった大学生の名を口走った。

だがそのニュースは無愛想に賞状を受け取る藤林悠輔の顔を一瞬だけ映しただけで、すぐに首都高の事故の話題に移り変わった

「——おい。エータ」

名を呼ばれ彼はハッと我に返った。

隣には小太りに眼鏡「綾波LOVE」という変なロゴの入ったTシャツを着た男——

見た目どおりオタクっぽい但实际上にもかなりのオタク湖川雅史、自称「秋葉原の申し子マサシ」だ。

「おまい、今のはないよおー。お前のぼんやりで完璧にツッコミタイミング逃してるおー」

「あ……ゴメン、ゴメン」

あまり迫力のないマサシの忠告に彼は軽々しく謝った。

小柄な身体に黒と金——ツートンカラーのソフトモヒカンに両耳にジャラジャラと付けたピアス——

オタクのマサと組むお笑いコンビ『トーキョーハンター』のツッコミ担当「渋谷の暴れん坊エータ」こと^{かざまえいた}風間英太はどことなく都会的な空気をかもし出していた。

「おまいさあー、本気で今日の仕事するきあるのかあ〜」

「バカ！」

そう言うと英太は勢いよくマサシの頭を叩いた

「あるに決まってるだろ！ 当たり前のこと聞くなよ」

「じゃあなじえ大事なネタ合わせのときによそ見なんか……」

「それは……あれだ」

そういうと英太は取り繕うようにしゃべりだした

「オレ、ずーっと前から中島アナのファンだったんだ。ユキエちゃん見ると魂が飛んで言っちゃって……」

「へえ……ああいうのがタイプなんだ。エータって」

「ま……まあな」

英太はそういうときこちない笑みを浮かべた。

だがそんなみえみえの嘘も鈍いオタクには何とか本当の目的を悟られはしなかった。

「じゃあ、しっかりしてよ。そんなことより今は爆笑エンターティナーのオーディションでそ」

「そうだな。これってゴールデンで視聴率高い番組からな」

そういうと英太はぐふぐふと笑った

「これに受かったらトーキョーハンター初のゴールデンだよな。ここは気合入れなきゃ！」

「そうそう、爆エンって色物芸人がひょっこり受かるらしいからさ、オタクとギャル男のコンビはきつとうまくいくお！」

「バカ！ ギャル男じゃねえよ！」

そういうとまた英太の激しいツッコミがマサシの二十顎にヒットした

「出来ることなら渋谷系ヒップホッパーって言って欲しいな。ギャル男だなんて言われると——寒気がするぜ」

「それじゃあ言いにくいでそ。ギャル男でじゅうぶ……」

「うるせー！ これでいいんだよ！」

英太の平手打ちに近いツッコミがまたしてもマサシのぷよぷよのほっぺをしばいた。

だがそれに対しマサシはいつもの調子にへらへらと笑いながら答えた。

「おお！ やっとエータのツッコミにいつものキレがもどったお！」

「バカ！ オレはコレが普通だぜ？ 爆エンオーディションはこれ以上のツッコミを……」

その時だった。

自分たちとそう年の離れていないADが書類を持ってロビーに出てきて一言言った

「えーっと……これから爆笑エンターティナーのオーディションを行いますので、番号の順に部屋にお入りくださいー」

「おっと、ついに始まったな」

そういうと英太はなんとも言えない不敵な笑顔を浮かべた。

「よーし、マサ。この番組を足がかりに全局のゴールデン制覇しようぜ！」

「おー！がんばろー！」

「そんじゃ……」

英太はそういうとマサシにしかわからないアイコンタクトを送って言った

「最後に決めギャグの練習といこうか！」

「ほい！」

そういった瞬間、マサシはすっと身体を下にかがめすっと両手を横に広げた。

そしてすかさず英太も彼の後ろに立ち手を真上に上げて一言言った。

「東京タワー！」

2 メイド、仁科ともえ

同時刻——秋葉原、某大型電器屋ビル

たくさん並んだ最新型薄型テレビがフロア中にびっしりと並べられ、それぞれバラバラの番組を映し出している。

彼女がこの店に来る目的は電化製品がほしいわけじゃなくただの近道。

秋葉原駅直結でこの店はずづいておりここから出た方が少しだけだが早くアキバを抜けられる、ただそれだけの話。

だから並べられたテレビなどいつもは何の興味もなく素通りしていける——はずだったのだ。

だが、彼女はあるテレビの前で厚底ブーツを履いた足を止めた。

液晶テレビに映るのはどこの局かさえわからないニュース番組。

普通なら目にも留まらないような存在のその番組に彼女は釘付けになっていた

「五月十五日、渋谷で起きた男女五人を殺傷した通り魔事件の解決にかかわったとされる大学生に昨日渋谷署から感謝状が贈られました」

「おや、お客さん……」

呆然とそのニュースを眺めていた彼女に一人の店員が話しかけてきた

赤い法被に鉢巻姿——いかにも暑苦しそうな店員だ。

「そのテレビいいでしょう。松芝のアクアって今一番当店で売れているモデルなんですよ。画質は見てのとおり最高！ ほら新東京テレビの中島アナがこーんなにも綺麗に写っちゃって——すごいでしょー！買うなら今ですよー！」

だが店員の問いかけにも彼女は黙ったままじっとニュースにかじりついていた。

それを見た店員は苦笑を隠しながら彼女の年恰好を観察した。

真っ黒なフリフリのレースのワンピースに真っ赤なりボンをあしらったツインテール。

太ももまで覆ったニーソックスをはいて靴はこれでもかというほど厚底だ。

確かに目立つ格好ではあるが、ここ秋葉原ではそう珍しくないゴスロリファッション。

それを見た店員は戦法を変えて彼女に売り込みを図りだした。

「お客さん、アニメとか好きでしょ～。わかりますよ、ここの土地柄そんなお客さんたくさん見てきましたからね。では、どうです？ このテレビだとアニメも信じられない高画質で見られますよ。最近のアニメはすべてデジタルで作ってますからね。それを受信するテレビもデジタルじゃないとねえ……遅れてるって感じがするじゃないですか？」

それでも彼女からの応答はない

手ごわい客だ——店員はそう思ったのだろう。

店員は近くにおいてあったチャンネルを手にとると、おもむろにニュースをCSのアニメ放送に切り替えてしまったのだ

「あ……」

彼女はそのとき初めて反応を見せた。

「どうですかあ～！ やっぱり見てみないと高画質の実感はわかりませんよ……」

だがその瞬間、彼女は怒った顔をして店員をにらみつけた。

それを見て店員から一気に余裕の色がなくなった。ゴスロリの彼女の激怒した姿は思っていた以上に迫力があったからだ。

「バーカ！ なにすんのよ！」

彼女はづけづけと店員にそう詰め寄ると一言そういった

「アタシはただニュースが見たかっただけ！なのに勝手にチャンネルなんて——この店やっぱりネットで言われているようにサイテーだね!!」

そう言うだけ言ったあと店員を置いて彼女は踵を返してエスカレーターの方へと歩きだした

あの空気の読めない店員に邪魔をされて重要なところは聞けずじまいだったが、彼女が特段そのニュースに固執するのにはわけがあった。

あの通り魔事件を取り押さえた東大生——間違いない。彼はあたしの運命の人だ。

そう思った瞬間、彼女の口元ににやりと笑みが浮かんだ。

彼の姿を見て彼女は凶らずもとてつもなくうれしい気分になり、心を躍らせながら軽々しい足取りでエスカレーターを降りていった。

「藤林——悠輔、か」

エスカレーターを降りきって秋葉原の街に出た彼女は一言彼の名をつぶやいた。

あの人も同じ町で同じように生活している。

それはそれで嬉しいけど、彼は忘れてないだろうか——彼の許婚になるはずであった^{にしな}仁科ともえという少女がいたことを……

「いらっしゃいませ！ご主人様！」

秋葉原の雑居ビルの最上階、ドアを開くとピンクの壁紙と大勢の若き乙女のメイドがエンジェルボイスをそろえて客人を迎え入れる。

メイドブームが去った今でも客足は盛況なメイド喫茶「ぶるーむ」に仁科ともえは働いていた。

「ご主人様はここは初めてですかぁ？あたしともえって言うんです。これからもよろしくね！」

メイド服姿のともえは一言そういうと、客人にお絞りをそっと手渡した。

客——と言ってもほぼ六割はアキバの常連のオタクたち。残り四割は観光がてらにやってきた

素人さん。

でもどちらも適当に愛想を振りまいていればかなりの確立で喜んでくれる——これが男ってやつなんだろうね。

「そっかあ、ともえちゃんって言うんだ」

眼鏡をかけた太った男——早く言えばキモデブってところだろうか。彼はともえの前に座るとしげしげと彼女の顔を見つめた。

「ともえちゃんは……何歳なんだな」

「えーっと、17歳で一す」

嘘だ。本当は19歳のれっきとした大学生だ。

でも、これもサービストーク。信じようが信じないが本人たちの勝手だ

「家は東京なの？」

「んー、一応……ね」

これも嘘。本当は長野の片田舎育ちだ。

「そっかあー」

キモデブ男はそう言いながら真顔な顔をしてともえを見た

「ところで、どうしてメイドなんかになったの？ もしかして自分からアピールして雇ってもらったの？」

「んー、ちがいますねえ」

そう言うともえは困ったような表情を浮かべた

「あたし、もともとアニメとか好きでさあ……秋葉原うろついてたらこの店にスカウトされちゃったの。まあ、普段着てるのもゴスロリだし、別に違和感はないです」

この話だけは本当。初めて大学進学のため上京して真っ先に秋葉原に行ったら、早速メイド喫茶のスカウトが入った。

メイド云々には興味はなかったけど、秋葉原で働けるってことだけで自分は即決したかもしれない。

そしたら、あれよあれよと言う間に人気メイドの一角を担い、裏では相当のファンが着くような——アイドル的存在になってしまったのだ

「へえーメイドもスカウトされる時代なんだ。なんか芸能界みたいだね」

「ですよねえー」

そう言うともえはケトルに入った紅茶をカップに注いだ

「あたし人気出過ぎで困っちゃってるんです。学校や家にもファンがおしよせて……ストーカー被害なんてしょっちゅうですよ」

「ええ！ ストーカーってそんなにひどいの？」

その問いにともえはこくりと頷いた

「じゃあ、そいつら僕がやっつけてあげるよ！」

「え……」

その言葉にともえは思わず絶句した

「ともえちゃんかわいいから絶対変な虫がやってくるでしょ！ そいつらを僕が追い払って——！」

「そこまでしなくていいですう！」

ともえの声は店内に響き渡った。

「あたし、これでも護身術習ってるんです。これで結構ストーカー撃退できるし……」

護身術——本当はそんなかわいいものじゃない。

自分が会得してしまったのは戸隠流忍術。下手すればストーカーを撃退どころか死の一步手前にまで追い詰めてしまう技ばかりだ。

でもそんな裏の顔はメイドになってるときにはご法度だ。

かわいくみんなに愛されるメイドにならなければ——

「あー、でもやっぱり守って欲しいかなあ……あたし、結構怖がりなんですう」

猫かぶりはこの店でバイトしているときに身に着けた技だ。今は忍術云々よりどれだけ人に愛されるかが大事なのだ。

「よかったあ」

その言葉を聞いてキモデブは深いため息をついた

「ともえちゃんがストーカーぼこぼこにするところ想像しかかったけど、よかった。やっぱり女の子だね」

「はい！ あたし、か弱い女子ですもん」

ぼこぼこね——本当は実際にそうしかかったストーカーばかりなんだけど……

ともえはその言葉を心の中でつぶやきながらキモデブの手前のカップに紅茶を注いだ。

だけど、本当に自分はストーカーをぼこぼこにするほど可愛い娘なんかではない。手加減を間違えればそのストーカーを血みどろにしてしまうほどの力を秘めている。

でも、そんなこと言えない。今の自分は戸隠流の継承者の仁科ともえではなく「ぶるーむ」の人気メイドのともえなのだから。

「あ……」

そう言うともえは店の時計を見上げた

「もう三時——」

「え？ 何か用事でもあるの？」

キモデブがそう聞いてきたのでともえは困ったような笑顔を浮かべて否定した。

「ううん、なんでもありません。気にしないで」

でも、本当は気にしないってレベルの話ではない。四時半から絶対に出なければいけない大学の授業が入っていたのだ。

この前担当の講師にこれ以上休むと単位をやらないよと言われてかなり危うい授業なのだ——

「だったら、いいや。僕、ともえちゃんとかうして話してるだけで幸せだからー」

「そうですかあ〜」

そう言うともえは引きつったような笑顔を浮かべた。

「そういわれると、ともえ……うれしいですう〜」

——さっさと帰れよ。このキモオタデブ!!

ともえは表ではピンク色の愛嬌を振りまきながらも心根の奥でブラックな毒をはき捨てた。

この客をさっさと帰らせれば、ギリギリ大学の授業は間に合うだろう。

ただ——このキモデブがどこまで居座るかが、問題だ。

ともえはキモデブに見られないように小さくため息をつくともまた輝くような笑顔を彼に向けた。

アイドルメイドともえの時間への戦いはまだ始まったばかりであった。

3 JAあおもり職員、応野邦彦

同時刻——銀座

彼は早めの昼食を軽くとりながら事務所にある小さなブラウン管テレビを見ていた

新東京テレビのニュースショー、人気アナウンサーの中島雪季絵が淡々と読むニュースに彼はおにぎりをもつ手を止めていた。

「五月十五日、渋谷で起きた男女五人を殺傷した通り魔事件の解決にかかわったとされる大学生に昨日渋谷署から感謝状が贈られました」

「……ほう」

そのニュースを聞きながら彼は手元のリモコンをつかって音量を上げた。

ずっと注目はしていたニュースであった。

凶器を持った通り魔を大学生ごときが簡単に制圧するなど普通ありえない。ありえるとしたらその大学生が普通じゃないという可能性しかない。

それを思うと彼はその大学生の正体が気になって気になってしょうがなかった。

だが、その大学生の名前と表情がブラウン管に映し出されたそのとき、事務所のドアが開き一人の同僚が彼を呼んだのだ。

「応野君、食事終わったかな？ 終わったんなら手伝って欲しいんだけど……」

それを聞いて彼は持っていたおにぎりを一口で食べ、ペットボトルのお茶を胃に急いで流し込んだ。

そして、席を立ち上がるとにっこりとやさしげな笑顔を浮かべた

「ええ、今すぐいきますよ」

同僚の男は思わず応野邦彦の姿を呆然と見上げた。

彼はまるで聳え立つ壁のように身体が大きくそして頑丈そうだった。

毎日彼を見ていて慣れているからとはいえ、立ち上がるとどうしてもその身体に見入ってしまうのであった

「応野君っていつからこんなに身体が大きくなったの？」

同僚の男のその問いに、邦彦は嫌な顔一つせず淡々と答えた

「そうですね……大きくなり始めたのは小学生の高学年あたりかな？」

「え!? そのころから……」

「仕方ないですよ。うちの家系は身体が大きな家系ですから——」

そう言うと邦彦はふふっと笑った。威圧感のある体型ではあるが彼の笑顔はとても柔和で親しみがもてるものであった。

「それで、何か問題でもあったのですか？」

「いや……ね、ちょっとお店の方が忙しいらしいからさ」

「ははあ……わかりました」

邦彦はそう答えると、椅子にかけてあった法被を大きな身体に羽織った

そこには『JAあおもり』とでかでかと書かれていた。

「じゃあ、そっちにいきます」

そう言うと応野は巨体を揺らしながらゆっくりと事務所の外へ出た

銀座の路地にある青森物産館。そこは昼時の買い物客で盛況で満ち溢れるような活気に沸いていた。

おうのくにひこ

応野邦彦は本来ならば青森の農協職員なのだが、半年前に転勤になり東京のアンテナショップに派遣されてきた。

主な仕事は各企業への青森の特産品の売り込みであるが、時々だが頼まれて店の手伝いも買ってでていた。

「お客さん！ 青森りんごのタイムセールス中ですよー！ これ3つで198円！ 東京では考えられない安さでしょー！ 買うなら今！ここで！ですよー！」

応野の先輩のJA職員安嶋がそう声を掛けたそのとたん、店内の買い物客がどっと押し寄せてくるような感覚に邦彦はおそわれた。

そう今のご時勢、誰しもが値段に敏感になっている。もともと物価の高い東京だとそれは尚更だった。

タイムセールが始まったとたんビニール袋に入ったりりんごの詰め合わせは飛ぶように売れ始めた。

まるで、デパートのバーゲンセールだ……邦彦はそう思い顔を引きつらせそうになったがすぐに考えを入れ替えにこやかに笑いながらりんごの入ったビニール袋を客に渡していた。

しばらくして、タイムセールス用のりんごの袋も少なくなり、客もそろそろまばらになってきたかと思ったとき、邦彦の前にワゴンよりも小さなお客さんが百円玉2つを握り締めた手を差し出していた。

それに気づいた邦彦はその手の持ち主をチラッと見た。

まだ5歳ほどの小さな女の子だ——それを見た邦彦は少し微笑ましい気分になった。

そして安嶋に気づかれないように袋の中にもう一つおまけのりんごを入れて彼女の前に出て身体をかがめた

その瞬間、女の子は顔を硬直させた。

いくら身体をかがめても190センチは超える偉丈夫の身体だ。子供が威圧感を感じないわけがなかった。

「はい、どうぞ……」

なんともこやかな笑顔でりんごの袋を渡そうとしたとき、応野の前で女の子は堰を切ったように泣き始めた。

それはどんどん大きくなり誰もが収集がつかなくなるほどだった

「応野君……君が子供の相手しちゃだめだろう」

それを見ておろおろしている邦彦を見上げながら安嶋はあきれた声を出した。

まるで、自分の身体が大きすぎるのが原因だと言わんばかりに。

「すみません……うちの子が」

騒ぎを聞きつけてか女の子の母親と思われる女性が彼女の前に駆けつけた。

しかし、彼女は泣き止むことはなくさらにいっそう何声を大きく上げた

「この娘なにかしましたか？困らせてしまってすみません」

「いえいえ、いいですよ。こちらこそ対応不足で……」

女の子の母親と先輩の安嶋が会話に気を取られている間、邦彦ははっと何かを察した。

ついさっきまでそばで泣きべそをかいていたあの娘の声がまったく聞こえなくなっていたのだ。

邦彦は込み合う店内をくまなく目で探した。そして一瞬だけアンテナショップの出入り口から出ていく彼女の靴を見つけたのだ。

その瞬間、邦彦はすばやく売り場から離れて彼女の後を追っていた。

「ちょっと、応野君——」

急に動き出した邦彦の巨体に驚いた安嶋は彼を制止しようとした。

だがその直後、母親はおろおろした様子で一言言った

「あれ、由美ちゃん——どこ？」

「え——？」

女の子の母親と先輩の安嶋が置いてけぼりにされているその時、邦彦はアンテナショップの外へと飛び出した。

彼の目の前の道路には女の子がりんごの袋を重たそうに持ってたどたどしく歩いていた。

邦彦はそれを見て声を掛けようか一瞬戸惑った。

先ほどみたいに自分の姿におびえ泣かれてしまっても困る話。だが、放っておくわけにはいかない——

そう思った瞬間、邦彦は何かの気配をすばやく感じ取り女の子の遙か前方を見張った。

そこには猛進してくる大型トラックの姿が見る見るうちに近づいてきたのだ。

その瞬間、邦彦の表情はガラッと変わった。細くて柔和だった瞳を鋭く見開いた瞬間、彼はアスファルトを強く蹴り、トラックの目の前の女の子めがけて走り出した。

けたたましく鳴り響くトラックのクラクション、それを見て呆然と立ち尽くす女の子——

駆け寄った邦彦が彼女を抱き寄せたそのときにはトラックはすぐ眼前にせまっていた。

それでも邦彦はまったく焦ることなく彼女を抱き寄せるとトラックに背を向け身体をかがめた。

次の瞬間、事態は最悪の結果を生んだ。

けたたましい急ブレーキ音とともに響く鈍い音。トラックは女の子がいた場所から少し流れてからゆっくりと停止した。

「由美ちゃん——！」

女の子の母親はそれを目撃して声にならない声を叫び駆け寄った。

ざわざわとただ回りのギャラリーの潜み声だけが大きく響く現場。

誰しものが少女とそれを守ろうと飛び込んだ青年の安否を絶望視したそのときであった。

「ママ……」

駆け寄った母親の耳に細い声大きく響いた。

母親ははっとトラックの足元を見た。そこにはまるで大きな岩のように立ちはだかった男に守られるように女の子がきょとんとした表情で周りを見回していた。

「由美ちゃん！」

それを見て母親は安堵の表情を浮かべ彼女に駆け寄った。

しかし、その次に襲われたのは娘の身を挺して守ったアンテナショップの店員への罪悪感だった。

トラックと激突したのだ。彼はきっと助かってはないだろう――

そう思ったその時だった。

彼はぱちっと目を開けると何事もなかったかのようにゆっくりと立ち上がった。

そして、ゆっくりと肩を回しながら一つため息をついた。

その様子を見て、周りのギャラリーは驚嘆のざわめきを強めた

――当たり前だ。大型トラックともろに激突したというのにけろっとしている男が目の前にいるのだから……

「――応野君？」

そこに焦った表情で駆けつけた安嶋が声を掛けた

「君、無事なのかい？ 怪我はないのかい？」

「え――？」

それを聞いて邦彦は不思議そうな顔をした。

ちょこちょこ肌の表面からは血が滲んでいたが、ただのかすり傷だとはわかっていた。

「別にどこも痛くありませんけど……」

「そういう問題じゃないでしょうが！」

そう言うと安嶋は少し怒った様子で言い放った

「君はトラックに撥ねられたんだよ。それでどこも痛くないなんてありえないでしょ」

「はあ……」

その問いに邦彦は返答に困った。

まさか言えるはずがない。自分は状況に応じて身体を鋼化できる特異体質だなんて——

「とにかく、今すぐ病院に行きなさい！」

「でも——」

「でももクソもないよ！ 君は車に轢かれた怪我人なんだから！」

「はあ……」

その言葉に邦彦は困ったように頭をかいた。

——少し問題があったかもしれないな。

邦彦は自分が激突したトラックのヘッドバンパーが大きくへこんでいるのを見て、事の重大さを痛感し始めた。

きっと渋谷で通り魔を鎮圧したあの大学生も同じような気持ちだったのだろう。

自分たちの力はこんな大勢の人の前で露にするにはあまりにも危険すぎる。彼らの前で自分の存在を世間に誇示するのは忍者としてあってはならないことだ——

だが彼も自分も同じ言い訳をするであろう。こうするしか他なかった——と。

救急車のサイレンが遠くから急激にこちらへ近づいてくる。

多分どこを診ても異常は見つからないとは思うけど、あれに乗るほか残った手段はなさそうだ

。

1 風魔の英太

「……はあ」

初めてのゴールデンの地となるはずだった新東京テレビの岐路、英太は電車のシートに座り深いため息をついた。

「ものも見事に……すべったな」

「……そうだね」

相方マサシは言葉少なにそういうと手に持った携帯ゲーム機の方を集中させた

何のゲームだかわからないが、きっとRPGのレベル上げだろう。先ほどから同じ動きしかしていない気がした

「しかし、なんでだろうな……前のコンビ俺たちよりすべってたはずだぜ？　なのにあいつらはオンエアに乗るなんて——なんか理不尽だよな」

「うん……」

「ここまで来たらプロデューサーの好みとしか言えないな。爆笑エンターティナーって某プロデューサーのお気に入りじゃないとオンエアされないって噂だし——」

「へー、そうなんだ……」

「俺たちの前に出てきたコンビ——なんていう奴らだったっけ？」

「ピクシーズじゃなかった？」

「そうそう、いい大人の男が妖精コントしだすから、痛いなのなのって——」

「……」

ゲームに没頭して沈黙するマサシを英太は苦々しく睨み付けた

「お前、よくこんな気分でゲームしてられるな」

「うん、嫌なこと忘れるから」

「そういう問題か？ オレにはお前の神経がわからん」

そういうと英太は腕組みを組んで窓の外を見た。

もう日はどっぷりと暮れていた。

「ところで、エータ」

マサシはDSのボタンを押す手を止めずに一言言った。

「……なんだよ」

「今年も学園祭のオフターの頃だよな」

「ああ、そうだな」

かったるい——英太はそう言いたげに深いため息をついた

お笑い好きが集まるライブハウスとはちがい、大学生しかいない学園祭の水はどうもトーキョーハンターの肌に合わない気がしていたのだ。

「なんかさー今年、うちの事務所すごい大学担当になったらしいお」

「すごい？ まさか東都大学とか言うなよ——」

「ピンポン！ すごいじゃんエータ。大正解だお！」

「……マジで？」

その一言に英太はくるっとマサシの方を振り向いた。

「どうするー？ 東都大学なんてインテリだらけで絶対においらたち受けないよー」

「お前、そんなことでびびってるの？」

「だって、あんな中でおいらたちのネタやったら公開処刑みたいなもんだお……」

「バカだなあ……お前」

そういうと英太は携帯ゲーム機に夢中のマサの目をじっと見るように言った。

「受けるか受けないかやってみなきゃわかんないだろ？ たとえお笑いとか知らないエリート大学生でももしかしたら——受けるかもしれないぞ」

その一言にマサシは初めて携帯ゲーム機から手を離し英太の顔を見た

「あれ？ エータ……心変わりしたの？」

「何が？」

「だって、大学生に俺たちのネタは受けないって言ってたのおまいじゃん……」

「ああ……そのことね」

そう言うとき英太は不敵な笑顔を浮かべた。

「そんな選り好みしてたら俺たちってビッグになれないような——そんな気がしてさ」

「それはそうだけど……」

「それにあの天下の東大生を笑わせてみろ、それだけでも俺たちに箔がつくんじゃね？ これってチャンスだと思わない？」

「うーん」

その言葉にマサシはしばしの間うなづいたが、すぐに頭を縦にふった。

「そうだお！ エータの言うとおりにだお！」

「だろ？」

「よーし、こうなったら東大生を爆笑させるネタ考えるっきゃないでそ！ エータこれからおいらのうちに——」

「それはパス」

英太その一言にマサは呆然とした顔をした。

「……なじえ」

「だって俺——今日これから人に会う約束あるからな」

「これから——？ エータって彼女いたっけな……」

「じゃ、俺はこの辺で……」

そう言うと英太は座席を立ち電車のドアのほうへと歩いていった。

マサシははっとした、話し込んでいて気づかなかったが英太が電車を乗り換えるターミナル駅に近づいていたのだ。

「エータ。明日は空いてるよな？」

「さあなあ……俺のバイト次第——だな」

「バイトねえ……」

——あれ、ところでエータって何のバイトしてるんだっけ？

その言葉を聞いてマサはふとそう思ったが、聞き返そうとしたときにはもう英太は電車を降りてしまっていた。

何故だろう——電車を降りてホームに向かうエータはマサの知ってる彼とはどこか違うような気がした。

摩天楼の底の底、世間の喧騒から離れたビルの谷間を彼は冷めた目で見下ろしていた。

ビルの屋上の縁にちょこんと腰をかけ、まるで何かを待ちわびているかのようにその下を見つめ続けていた。

風間英太は普段絶対に着ることのない黒のタンクトップを着ていた。

そして、その右腕に彫られているのは摩利支天の刺青——風魔忍者の旗印だった。

「何の用だよ？ 理沙」

英太は後ろを振り向くことなく背後から迫る女の影を一言静止させた。

彼女の腕にも摩利支天の刺青が彫られていた。

「いいえ、別に」

理沙と呼ばれた女は英太よりも若干年上に見えたが、彼女は彼に一言一礼し敬意を払った

「今日はえらくお早い登場と思ったのよ」

「夜が暇になった。ただそれだけ」

「ふーん。またオーディションにスベったのね」

その一言に英太は初めて表情を曇らせ理沙のほうをにらみつけた。

「……うるさい！」

「その様子を見ると凶星のようね」

そう言うと理沙は英太の横に立つと淡々とした表情で語りだした。

「ねえ、あなたいつまで売れない芸人やるつもりなの？」

「それは、俺が納得するまで……」

「あなた、自分の立場わかってるの？ あなたは風魔流に残された唯一の継承者なのよ！ それなのに忍ぶ世界とは正反対の芸能界めざすなんて……どうかしてるし！」

その言葉を聞いて英太はうんざりした表情を浮かべた

「あーあ、また理沙の説教が始まった」

「説教じゃないの！ 私はあなたのいるべき場所に戻れって言ってるの！」

「その話はもうやめよう」

そう言うと英太はビルの縁にゆっくりと立ち上がった

「俺は風魔を継ぐ前に小さい頃の夢を叶えたかっただけ！ それだけだよ」

「でも……さ」

「それに俺ちゃんと任務もそつなくこなしてるだろ！ それでも文句あるのかよ！」

「……………」

その一言に理沙は反論する言葉を失い、悔しそうな表情をかみ締めた。

「わかったわ。好きにすればいいじゃない」

「言われなくてもそうするよ」

「でもね、これだけは覚えておきなさい！ 英太！」

そう言うと理沙は険しい表情で英太をにらみつけた。

「もし他流派の連中が私たちが攻撃するような状況がこれから起きるかもしれない……そうになったら、あなた芸人をすっぱり辞めて私たちに率いて頂戴」

それを聞いて英太は無邪気な高い笑い声をあげた。

「おいおい。理沙、それマジで言ってるの？ こんな時代に忍者大戦みたいなことあるわけねえじゃん」

「……私は本気よ」

「本気かハツタリかは知らねえけどさ、そうになったら超面白いよな！」

「は？」

理沙は目を点にして英太を見た。彼はニヤニヤと不敵な笑みを浮かべながら期待に胸を躍らせているようだった

「だって、日本——いや世界で一番強い忍者がそれで決定されるんだろ？ そんな状況、俺は燃えちゃうね。最強って言葉、すげえ魅力的！」

その言葉を聞いて理沙は不思議そうな表情で英太を見た。

どうしてこんなに忍者としての素質があるっていうのに、この子はお笑いの道など選んでしまったのだろうか？

いくらお笑いの道が夢だと言っても、彼には許されない道だとわかっているはずなのに……

そう思うと理沙は英太のことがますますわからなくなり首を傾げるしかなかった。

「さて……と」

英太は一言そういうとビルの下の様子を鋭い瞳で覗き込んだ。

眼下には数人の人影がこちらの様子を先ほどからじろじろと伺っている。

「理沙、客が来たようだぜ」

「あら、本当」

「……なあ、今日は俺一人であいつら片付けていい？」

英太のその問いに、理沙は一瞬首をかしげた。

「えらい張り切ってるわね」

「当たり前だろ。俺は今モチベーションが上がってるの！」

そう言うと英太は懐から一本の短い棒を取り出した。

それは英太の手に握られるといとも簡単に三倍の長さに変化し、そして彼はその棒を軽やかに回して見せた。

「まあ、見てろよ。あんな雑魚5分で片付けてやるよ」

英太は一言そういうと、何のためらいもなくビルの屋上から宙へと踏み切った。

そして暗黒漂う谷間の中心へと変形棒を構えて急落下していった。

ビルの谷間で待ち構える人影たちは、その異変にぎょっと空高く見上げた次の瞬間、英太は棒を振りかぶり激突する地面めがけて振りぬいた。

その瞬間、衝撃で地面はえぐり上がり激しい衝撃波が彼らの身体を吹き飛ばしてしまった。

はらはらと宙に舞う土埃の中、くぼんだ地面の真ん中で英太は棒を構えて立ち尽くした。

目の前の敵は暗闇の中どこからともなく増えていく。

——そうだ、それでいいんだ。

英太はそれを見てにやりと笑みを浮かべ瞳を鋭く光らせた。

そして、無言のまま彼は好戦的に敵に棒を突きつけた次の瞬間、彼は地を蹴り敵に向かっていった。

2 戸隠のともえ

そのころ——

メイド喫茶のバイトをギリギリで切り上げた仁科ともえは久々に在籍する大学を訪れていた

冷泉大学——日本屈指のお嬢様学校と呼ばれる学校にともえは一応通っている

一応と付けたのはメイド喫茶のバイトが忙しくてあまり熱心に大学に通ってはいないから。

でも一応進学のために上京してきたのだから、行かないわけにはいかない場所——というべきなのだろうか

構内でも一際目立つピンクのゴスロリファッションでともえは堂々と通学する

屈指のお嬢様学校だからさすがにこんな格好をすると自分が浮きに浮きまくっているのは承知の上だ。

だがこの格好をして目立つということはともえにとってかなり心地いいものだった。

いくら白い目でみられようが陰口をたたかれようが、そんなのどうだっていい。

お嬢様たちのファッション雑誌のコピーのような服装よりか自分の方がずっと健全だとともえは心の中でそう思っていた

「なんとか間に合ったわ」

今日こないと単位が危ないと脅された授業会場につくと、ともえは一言そうつぶやいた。

そして席にすわると、ピンクのフリフリレースのあしらったバックからルーズリーフを余裕の鼻歌まじりに取り出した。

今日、受ける授業はあまり人気がないのだろうか……講義室は若干寂しく生徒がぼつぼつ座っているだけだ。

まあ、あたしを脅しにかかる講師の担当の授業だ。面白いわけがない。

それに人が少ないほうが落ち着いて自分の世界に浸れる——

本当は今日はバイトや授業どころなんかではない。

アキバの量販店で見たとあのニュースの中の彼のことを思い出すともえは自然と胸がときめいた。

藤林悠輔——会いたい！ でもどうやって彼の前に出ればいいのか。

あたしはあなたの元婚約者で今までずっとあなたのことを想って生きてきました——こんな本当のことをいきなり言ったらきっと引くに違いない。

それに——許婚とは言ってもともえと彼は一度も会い見えたことは一度もない。

もしかしたら、彼は自分のことなどとうの昔に忘れてしまっているかもしれない。

それでも、写真でしか見たことのない彼をともえはずっと愛していた。

伊賀と戸隠のお互いの事情で破綻となった婚約だけど、ただ一人ともえの中でだけそれはずっと生きていたのだ。

ともえが病んだようなため息をひとつ吐き出したその時、ひとがまばらでしんとした講義室ににぎやかな声が入ってきた。

それは3人組の女子学生。彼女たちは妙に盛り上がった状態でぺちゃくちゃとおしゃべりをしながらともえの前の席に座った。

「いいなあ～。早紀の彼氏……うらやましすぎるよー」

その中の一人少しぼっちゃりとした茶髪女は講義室に響くような声でそう言った。

「ねえねえ、そんな男どこで知り合ったの？」

「んーとね……合コンだったかなあ？」

「うそおー！ あたし何回も合コン行ってるけど当たりなんて一度もないよ」

「そうそう、大体は下心ミエミエのスケベな男子ばっかなんだよねー」

そう相槌を打ったのはひょろりと痩せた黒髪の女だった

「てかさあ、東都大学との合コンだなんてなんで私たちに誘わないのー？ 私、早紀と親友だと思ったのにい〜」

——東都大学？

その単語を聞いてともえははっと顔を上げた

最初はうるさいガールズトークだと興味のなかった3人組の話だったけど、それを聞いたとたんともえはそわそわと落ち着かなくなった。

「そう言われてもねえ」

困ったようにそう答えたのは3人の中で最も容姿の整った女、進藤早紀だった。

「私も東都大学って聞いてさほど期待はしなかったのよ……」

「そんなの嘘だあ。東都大だなんて未来のサラブレッドの卵の宝庫じゃない」

早紀のその言葉に連れ的女子たちはブーブーと反論した。

それに対し早紀はあきれたような笑みを浮かべた。

「でもね本当なのよ。向こうのメンツも対したことなかったし、あなたたちの言うとおりに下心ミエミエの男子ばかりだったの。最初はね」

「最初？」

「でもね、会が始まって程なくして向こうの一人が急用で帰っちゃったの。そしたら席が開いちゃってさあ。多分東都大側の男子焦ったんじゃないかな？ 急にトイレに籠って席を埋めるため友達に片っ端から電話したんじゃないかな？」

「それで来たのが——今の彼氏？」

「最初、彼が来たときさ……全然乗り気じゃなくて、むしろすっごい不機嫌そうで感じ悪かったわ。でもね、ルックスは私たちの中で一番人気だった。眼鏡かけてるけど全体的に整ったイケ

メンタイプだったわ」

「ふーん、顔は満点、態度は0点なんだ」

「でもね、確かに最初から無口で無愛想だったけど、私は逆にそこが気に入っちゃったな。彼、ほかの男子とは明らかに違う雰囲気出してたもん。なんか、そういうところがミステリアスでもっと彼のこと知りたかって思っちゃった」

「——で、アドレス交換したんだ」

「うん。最初断られるかなって思ったけど、快くアドレスは交換してくれたわ。それからちょこちょこメールしあって、2週間後二人きりで食事して——」

「あー！もういいわ！ 早紀ののろけにつきあってらんない！」

そういうとぼっちりの茶髪女は迷惑な高い声でそう叫んだ

「早紀、あんたラッキーよ。そんな男——このご時勢めったにいないんじゃない？」

「そうかな……」

「だって、大学は一流だし、顔はイケメンだし——性格はどうかは知らないけど、パーフェクトに近いじゃん。それに——」

そういうとひよろりとした黒髪女がにやっと絵顔を浮かべ続けて言った。

「あんたの彼氏、この前渋谷で通り魔取り押さえたんでしょ。それって腕っ節もそこそこ強くてことじゃん！」

それを聞いて後ろにいたともえは思わず息を呑んだ。

それは彼女が想っている男性そのものと同じだったのだ。

「シーッ！ それは内緒だって言ったじゃない！」

早紀はその言葉を聞いて急に声を潜めて注意した

おそらく彼女の恋人とこれは口外しないという約束でもしていたのであろう。

それを聞いた彼女の顔は若干不機嫌そうだった

「あっ！ごめん。ついつい……」

そう言うとひょろりとした黒髪女は軽く反省した。

「本当に勘弁して。彼、その件あまり喜んでないようだからさ……だから私もあまり人に言わないようにしてるのに」

「でもさ、昨日のニュース見た？ あんたの彼氏映ってたよ？」

その言葉を聞いて早紀は複雑な表情を浮かべて黙り込んだ。

それはどこか本当は自慢したいのだが必死で我慢しているような——そんな風にうつった。

「ほら、あんたの彼氏は誇れるようなことしたんだよ。だからじゃんじゃん自慢したっていいと思うよ」

「そうそう、のろけにうつるかもしれないけどさ。こういうことはじゃんじゃんアピールしないと——」

そういったその時、早紀はふっと後ろを振り返った。

彼女の背後にはどこか恨めしい表情でじっと前を見つめるゴスロリ姿の女子大生ともえがいた。

早紀と目が合った瞬間ともえははっと彼女から目をそらして、読んでもいない教科書に目を通した。

だが、彼女たちの話を聞いた動揺はさすがに隠すことはできなかった

——何、あの女……

教科書で顔を隠しながらともえは悔しさを思わず歯を食いしばった。

本当は自分の婚約者だった男を何故この東京女がものにしていていると思うともえは嫉妬で心

がいっぱいになった。

——あんたみたいな一般人に悠輔は似合わない！

ともえは前に座る何も事情を知らない早紀にそんな呪いの言葉を投げかけた

彼女のその手には呪いの藁人形がぎゅっと握り締められていた。

久々に大学の帰り道——

単位取得のための補習を受けてたせいで気づけばもうあたりは真っ暗になっていた。

ともえは疲れきったような深いため息を吐いて自宅近くの最寄り駅を出た。

下宿の住所はどちらかといえば都心の方だと思うけど、住宅街だからか夜の帰り道は街灯が少なく人気もない。

明らかに変質者が出没しそうな、不気味な夜の路地。

ともえが厚底ブーツを鳴らして夜道を歩いていると、明らかに異質に聞こえるもう一人の足音が高く響き渡った。

——また、来たよ。

尾行に慣れてないノンプロ的足音を聞きながら、ともえはあきれたようなため息をついた。

最近自分の周り嗅ぎまわるストーカーがいることは承知の上。

といっても相手は危険でもなんでもないもてないオタクたちばかり。放置していてもたいした被害はないのはわかっている。

だけど——ここまで、あたしを追いかけてくるなんて……いい度胸してるじゃない。あたしをどこの誰かと知ってやってきてるのかしら——

そう思った瞬間、ともえはくるりと後ろを振り返った。

それと同時に足音もぴたっと止まり、人影はさっと近くの電柱に身を隠した。

「……隠れても無駄なんじゃない？」

ともえは明らかに不愉快な表情を浮かべて彼にそう告げた。

「あたしはあんたが付けているのずーっと前から気づいてるよ。そんな幼稚な尾行はあたしには通用しないってば」

そういった瞬間、電柱に身を隠していた人影はにゅっと顔を出した

いかにも根暗そうな眼鏡をかけたやせた男——彼はのそのそともえの前に出ると一言言った。

「ともえちゃん……僕と付き合って！」

「そういうのお店で禁じられてるんだよね——」

「そんなの関係ない！」

そういうと男はどこからともなく花束を出し足を速めてともえに向かってきた。

「『ぶるーむ』で君と出合った瞬間運命を感じた。ともえちゃんがないと僕——どうにかなりそうだよ！ だから——お願いだよ。僕と付き合って——」

「断るわ」

そういった瞬間、ともえの瞳が暗く光った。

そして花束を持っていた男の手首を彼女は軽くひねって制したのだ。

「——ッ！」

その瞬間、男が持っていた花束と同時に小さな果物ナイフも乾いた音を出して地面に落ちていった。

それをともえは感情のない瞳で飄々と見つめていた。

「こういう物騒なもの、あんたみたいな甘ちゃんが持つものじゃないわ」

そう言うともえは地面に落ちた果物ナイフを拾った次の瞬間、それを彼の喉元に鋭く突きつけた。

彼女に手を固められる苦痛とナイフの鋭い脅威に男は半ベそをかいていた。

「あーあ。だから弱いオタクなんて嫌いなんだ」

その瞬間ともえは果物ナイフを宙に投げ捨てて一言言った。

「あたしはね、もう運命の人を決めてるんだ。だから誰がどんなにストーカーしようとも無駄無駄！ まあ、命の保障はしないのなら別だけどね……」

そう言うともえは強く握り締めていた男の手をやっと開放するとにこっと笑った。

次の瞬間、一陣の風がその場に強く吹きつけた。

季節はずれの木の葉がその強風にあおられて舞い上がると、彼女は男に向かってバイバイと手を振った。

そして、木の葉が彼女を隠した瞬間、風とともに彼女は消えた。

男は腰を抜かしながらともえの姿を探したが、彼女はまるで魔法を使ったかのように目の前いなくなっていたのだ。

「何者なんだ……」

男は地面にへたりこんで声を上ずらせそう言うしかなかった。

まるで幻だったかのような彼女の存在は男にとって小さな悪夢のようだった。

3 応変の邦彦

そのころ——

応野邦彦は浮かない顔をして病院から自らの足で歩いて出てきた。

何度診ても無駄だというのに——邦彦はそう思いながら不機嫌そうな顔をした。

確かに普通の人間なら命はなかったかもしれない。トラックに真っ向から衝突してしまったのだから——

しかし、邦彦の身体は生まれつき普通ではない。だが、事を目の当たりにしていた人々にそれを伝えるのは許されないことだった。

しぶしぶ救急車に乗って病院に着いたはいいものの、それから検査検査のオンパレード。

何度診ても無駄だというのに、医者はしつこく邦彦の悪い部分を見つけ出そうと躍起になっていた。

仕舞いにはどこも悪くないのに検査入院しろと散々医者にせがまれてしまい、半ば喧嘩別れのように病院飛び出してしまった。

一般ピープルには信じられない話だろうが、邦彦の身体は驚くほど頑丈に出来ている。

身体鋼化——それが邦彦の受け継いだ応変流忍術の奥義。どんな衝撃が彼を襲おうとも鋼鉄のように硬くなった身体は最小のダメージで切り抜けられるのだ

ただ、それを職場の同僚や医者にはたやすくは言ってはならないことは邦彦も重々わかっている。だからみんな過剰に心配するのだ。

なんか余計な気苦労ばかりだ。何も知らない人たちにそのことを説明するなんて——

邦彦は疲れたような深いため息をついてとぼとぼと街の路地を歩いていた。

カチカチと切れかけの点滅をする街灯に遠くでは番犬が吠えている声が聞こえた。

人気のない路地裏を歩いていたその時、対面側から一つの人影が目に入った。

邦彦は思わず足をぴたっと止め、そして鋭い視線でその前を見た。

どンドン足を速めて邦彦に近づく影。それは闇に白く光る刃を抜くと同時に勢いよく大地を蹴って邦彦に襲い掛かった。

だが、その行動は大分早くから邦彦は予想していたことだった。

彼は焦るそぶりも見せず、じっとその場に立ち尽くし男を細く鋭い瞳で見つめ続けた。

そして男の持つ刀が彼を断つために振りかぶられた瞬間だった――

今まで動かなかった邦彦は刹那のごとく男の懐へ飛び込み、そして大きな手をかざした。

次の瞬間、その手から驚くほどの衝撃波が走った。

日本刀を振りかざしていた男はその計り知れない力にあおられてまるで木の葉のように舞い跳んでいってしまった。

「やれやれ……」

邦彦はため息とともに一言そういと、くるりと後ろを振り返った

そこには四人の刺客が刀を構えて立ちはだかっていた

「こんなはた迷惑な刺客を送り込んだのはどこの流派だ……」

そう言った次の瞬間、刺客たちは無言のまま邦彦を取り囲んだ。

話がわかってくれそうな相手ではないようだ――

その瞬間、いつもは寝ているような邦彦の細い目がギラリと大きく見開かれた。

そして、まるでタイミングを計ったかのように同時に襲い掛かった刺客を一人、岩のように大きな拳で一気にねじ伏せた。

その隙に乗じて他の刺客たちも刀を振り上げ次々と邦彦に襲い掛かった。

だが、邦彦は焦ることも避けることもせず、まるで仁王立ちのごとく彼らの前に立ちはだかった。

そして、次の瞬間刺客の刃が邦彦の身体を切り裂いた——はずだった。

その刃はぴたっと動きを止めていた。邦彦の腕のすぐ前で。

斬れるはずがない——この身体は鋭い刃の一振りですえまったく通さない鋼鉄の身体なのだから。

腕一本だけで刃を受け止めて見せた邦彦に対し、刺客は明らかな焦燥感を浮かべていた。

鋼のような腕に思いっきり刀に力をこめ無理やり切り落とそうとしているようだがその刀は刃こぼれし始めていた。

それを見た邦彦は刺客の刀を払いのけると大きく息を吸い込んでもう一度刺客たちに手を大きくかざした。

次の瞬間、邦彦の手からまた眩い光と大気を揺るがす衝撃波が放たれた。

放たれた波動に刺客は対処する暇などなかった。あまりに強い衝撃は刺客を簡単に弾き飛ばし地面に叩きつけたのだった。

それを見て残りの刺客たちは恐れをなしたのか一歩また一歩と後ずさりし始めた。

邦彦は深いため息をつくとき、彼らとは反対側の電信柱をにらみつけた。

「いい加減降りてこい」

邦彦は一言そういうと掌をかざし光の弾を電信柱に放った。

だが、その光の弾は電信柱で高見の見物をしていた影を撃ち落とすことはできなかった。

音速のような光の弾を華麗に避けるようにその影はふっと地上に降りたのだ。

それを見て邦彦は初めて顔に警戒の色を見せた。

電信柱から降りてきたその男の服装はなぜか警官姿。だがそれ以上に邦彦を警戒させたのはその

男が持ち合わせる強い波動と殺気だった。

「ほほう……これが東北一といわれる応変流の闘気術って奴か」

警官姿の男上月静夜はニヤニヤと笑いながら邦彦を見た。

その瞳は寒気がするほどの青白い光を常に放っていた。

「それに、お前の身体はえらい硬いんだな。びっくりしたよ……刀は受け付けないわ、トラックに轢かれても平気だわ——」

その言葉を聞いて邦彦ははっとした。

何故昼間のあの事故をこの男は知っているのだろうか——？ まさかと思うがあのときからずっと監視してたのか？

「お前……何者だ？」

そんな不信感を吐き出すかのように邦彦は静夜に向かって訝しげにそう聞いた。

「そんなに警戒することはないだろう。別に俺はお前の流派を潰そうなんておもっちゃいない」

邦彦の質問に静夜ははぐらかしながら淡々と答えた。

「まあ、名乗るような者じゃないけどお前たちみたいな弱小流派じゃないって事だけは言っておこうか」

「何——？」

その一言に邦彦は明らかに怒りの感情がこみ上げた。

それを見て静夜はいやらしい笑みを浮かべて邦彦の前に近づいた。

「今回、お前を襲ったのは何の意図もないさ。ただ応変流最後の使い手って言われてる応野邦彦の戦いっぷりが見たかっただけ。それだけさ」

「ほう、それだけのためにわざわざかわいい部下を僕に差し出したのか？」

「俺の目標はすべての流派の奥義を破ること。そのためには研究が必要なんだよ」

何だこいつ——目の前に現れた謎の警官姿の男上月静夜の言葉に邦彦は明らかな不信感を募らせた。

どこの流派だか知らないが、彼の言うとおりに相当な大流派の幹部クラスの忍者であろう。

だが、彼がこの場に現れた理由が邦彦にはいまいちよくわからなかった。

巨大流派の忍者たちが覇権を争っている中、一つ東北地方に取り残された応変流の後継者である邦彦に一体今更何の用なのだろう——？

「しかし、非常にもったいないね」

静夜は一言そういうと深いため息をついて邦彦を見た。

「応変流はそれほどまでの力を持ちながら何故その力を発揮しようとしらないんだ？」

「今の時代、ボクたち忍者が活躍できるとでもおもっているのか？」

「ああ、今の時代だからこそ俺たちは生き残らなくてはならない」

その言葉を聞いて邦彦は初めて頬を緩めて笑った。

「何故、笑う？」

それを見て静夜は初めて怪訝そうな顔を浮かべて言った。

「今の時代だからこそ生き残る？ 馬鹿馬鹿しい。ボクはこんな時代だから忍者は消えた方がいいと思ってる」

「ほう……」

「お前が伊賀だか甲賀だか知らないが時代が変わっても覇権争いばかりしているお前らをボクは軽蔑するよ。むしろボクはそんな覇権争いを止めるために自分の力を使う」

その言葉を聞いて男はにやっと嫌な笑みを浮かべた。

「なるほど。正義のヒーロー気取りだな」

その一言に邦彦は黙ったまま静夜をにらみつけたが彼は表情を変えず淡々と言葉を続けた。

「まあいいさ。弱小流派に今の情勢など関係ないみたいだからな……せっかく俺が伊賀の若き家元の正体をばらしてやったって言うのに」

「何——？」

その言葉に邦彦ははっと顔を上げた。それを見て静夜は嬉しそうに微笑んだ。

「おや、やっぱり気になるようだね。あんなに覇権争いはゴメンだと言ってたのに」

「それは——」

「俺たちの争いを止めるために力を使いたって言うなら、俺よりまずあの青年を何とかしないと話のつじつまが合わないぜ。なんせ彼はあんなに若くて大手の伊賀の率いているのだからね」

そう言う静夜の顔は見ているこっちがむしゃくしゃするほど楽しそうに見えた。

邦彦は不機嫌そうに顔を背けると戦意を喪失したようにくるっと静夜から背を向けた。

「もう、やめだ。ボクは帰る」

「どうして、もっとめぼしい情報をあげるって言うのに？」

「伊賀や甲賀の覇権争いに巻き込まれる筋合いはボクにはない。それだけさ」

「ほう……じゃあ、戸隠のくノ一の情報はいらないのか？」

不意な静夜のその言葉に歩みだそうとした邦彦の身体は一瞬ぴたっと固まった。

それを見て静夜はさらに煽り立てるかのようには言葉を続けた。

「俺はずっと前から知ってたよ。お前らの流派と戸隠の浅からぬ因縁があるってことはね。だから今からお前が欲しがってる情報をあげようっていうのに……」

そう言うと静夜は深いため息をついて邦彦にむかって背を向けた。

「まあ、いらないうって言うんならいいんだけどね。俺には何の関係もない話だし——！」

その瞬間だった。静夜は急に踵を変え軽やかに宙を舞った。

それと同時に彼のすぐ真下を駆け抜けた強い衝撃波。

後ろからの強襲を予知したかのように静夜はそれを避けるように空を跳んでいった。

「不意打ちね……」

地面にすっと降り立った静夜はそう言うとじろりと邦彦をにらみつけた。

「この答えはどう取ったらいいんだろうな……」

「簡単さ」

邦彦は静夜に立ちはだかるかのように構えた。

「ボクはお前の計画にはそう簡単には乗らない」

「ほう……ではここで俺とやり合うっていうのか？」

「いや」

そう言うと邦彦はまた放ち続けていた殺気を納めまた静夜に背を向けた。

その態度に、静夜の顔は余裕から困惑へと変わった。

「あんたの言うとおりの応変流と戸隠流は強い因縁の歴史があってね……その決着だけはボクがけりをつけなくてはならないんだ。だから——」

「——情報が欲しいとでも？」

その言葉に邦彦は大きく頷いた。

それを見て静夜は、一瞬戸惑った表情を浮かべたがすぐにそれは気持ち悪いような笑みに変わった。

「やれやれ、虫のいい話だぜ」

そう言うと静夜はあきれたように両方の手のひらを上に向けた

「俺の計画どおりにならなくて自分の因縁にけりをつけようなんて——欲張りすぎもいいところだ」

「だからボクは力づくでもその情報をお前から吐き出させるつもりだ！」

その言葉を言ったとたん、邦彦の背中から這い出るような強く禍々しい殺気が発せられた。

それを真っ先に感じた静夜はまるで強く警戒するかのよう真顔で聞いた。

「お前……それ本気か？」

その言葉に邦彦はただゆっくりと頷くだけだった。

静夜はそれを見て一瞬考え込んだが、その決断を下すのは思っていたほど遅くはなかった。

「わかった。今回だけはお前に乗っかってみよう……」

1 ともえと悠輔

久しぶりに来た秋葉原は少しだけだが活気がないような、悠輔の目にはそう見えていた。

無理はない。折の不景気と去年の通り魔事件の影響をもろに受けているのだろう。

だが、逆にその方がアキバ独特の浮ついた嫌な雰囲気がなくどこか過ごしやすい町になったように悠輔には思えたのだ。

「——でさあ、悠輔。テレビのことどうするのー？」

駅ビルから直通で伸びる大型電気店に向かいながら一緒についてきた早紀は大声でそう聞いてきた。

「どうって……普通でいいよ」

「だから、その普通って何？」

「何って言われても……」

強い口調で早紀にそう言われて悠輔は困ったように閉口した。

先ほどからずっとこの調子だ。一応無事引越しが終わって一段落していた昨日、早紀が部屋を訪れたとたん言われたことが「何この旧式のテレビ！」という一言だった。

悠輔は今まで自分のテレビが旧式だとはこれしきも思ったことなどなかった。

ちゃんと写るし音も出るしどこが悪いのかよくわからなかったけど、早紀曰く「これからは地デジの時代！」と言うわけで彼女連れでしぶしぶ大型電気店に買いに来たのだ。

とは言うものの——テレビは壊れてないのに買い換えるってことに悠輔はどうも気が進まないところがあった。

地デジになって今のテレビが見えなくなるのにあと三年——それまで使えればそれはそれでいいじゃないか。

だが、都会っ子の早紀からすれば、自分の彼氏の部屋に真っ黒なブラウン管テレビがあることが許せないのだろう

それを証明するかのようにテレビの品定めは悠輔よりも早紀の方が熱心だった。

「悠輔の部屋の大きさと——32インチくらいがいいのかな」

「ええ、それ大きすぎるよ！」

「大丈夫よ。今液晶テレビは値崩れ起こしてるんだから。悠輔の予算で十分買えると思うよ」

「別に買うつもりなんか……」

悠輔はその言葉を続けようと思ったがそれを胸の奥に飲み込んだ。

たくさんの液晶テレビのディスプレイの前早紀は真剣な顔をして品定めしていたのだ。

「ねえ、そんなに本気にならなくても……」

「だーめ！ 悠輔はもう少し都会っぽくならないとだめだよ！ここは東京！三重の山奥とはちがうんだから！」

「……」

その一言に悠輔は重たいため息をついた。

テレビが古いか新しいかなんて自分の好き好きじゃないか。なんで人に指図されないと……

「こんにちはあ〜」

そこにまるで呼ばれてもないのに赤いハッピに鉢巻をした店員が割り込んできた

「お客さん。何かお探しですか。テレビのことなら私にお聞きください」

「そうなんですよ。32インチくらいで十五万くらいで買える液晶テレビ探してるんですけど」

早紀のその言葉は鉢巻の店員のスイッチを入れてしまった。

お客ゲット！という声が聞こえるかのようニカァと笑うと猛烈な勢いでしゃべりだした

「いやあ、若奥様お目が高い！　そういうことなら私にお任せくださいよ。まずこの松芝電気の液晶テレビこれは今当店のお勧めの一品ですよ。それに——」

何が若奥様だよ……しゃべりまくし立てる鉢巻の店員をじろっとにらみつけながら悠輔は心の中でそう思った。

きつとこの店員はきつと自分たちのことを新婚カップルだと勘違いしているのだろうけど、それはかなり迷惑な話だった。

延々とテレビの売り込みを図る店員のトークを話半分に聞きながら悠輔はもう一つため息を付いた——そのときだった。

「あのう……」

そのか細い女の声を受けて悠輔は思わず不機嫌そうな顔のまま振り返ってしまった。

だが、そこにいたのはピンクのフリフリのゴスロリファッションに身を包んだ明らかにアキバにいそうなコスプレイヤーが立っていたのだ

「藤林悠輔さんですよ？」

「え……」

その言葉を聞いて悠輔は思わず眉をひそめた。

彼にはこのゴスロリファッションの彼女にまったくの見覚えがなかったのだ。

「君は誰だい？」

悠輔は不審そうな表情を浮かべ彼女に冷たく一言そう聞いた

だが彼女はお構い無しにニコッと笑った。

「あら？　やっぱりあたしに見覚えがないんだ……まあ、半分覚悟はしてたけどね」

その言葉を聞いて悠輔はもう一度頭をひねった。

一体このゴスロリの少女は何者なのだろう。

まるで自分を知っているかのような口ぶりに悠輔は不快感しか浮かんでこなかった

「いいの。気にしなくて」

「は？」

「あたしはあんたの反応を確認したかっただけ。でも思っていたほど驚かなかったなあ……」

「……………」

その瞬間、悠輔はこの少女の存在を少しだけ警戒し始めた。

別に危険ってわけでもないが、この少女は何かが違う。それが何かと言うのは今はまだわからないけど、わからないから余計不安だった。

「君の名前は——」

「どうしたの？ 悠輔？」

緊張感を漂わせる悠輔を電器店店員とテレビの話しをしていた早紀が心配した様子で顔を覗かせた。

「やだ、怖い顔ねえ……なにかあったの——？」

「あら、進藤早紀さんじゃない」

早紀の顔を見てゴスロリの少女はまた裏表ありそうな笑顔をにっこりと作って見せた。

「え……？」

その言葉にさすがの早紀も戸惑いを覚えずにはいられないように悠輔には見えた。

早紀も知っているということは——ますますこの少女の正体が見えなくなったような。一体彼女は何者なんだ……

「ねえ、知り合い？」

悠輔は早紀に口を隠しながらひそひそとそう聞いたが、だが肝心の早紀は首をひねるばかりだった

「どこかで見覚えがあるんだけど……だれかは——？」

「やだあ。忘れちゃったの？ ダメじゃん……」

早紀の言葉に対しゴスロリの少女はあきれたような表情を浮かべて二人に近づいた。

「よく講義室で一緒になるじゃない。冷泉大学のさあ」

「あれ、私と同じ大学——？」

「そうだよー！あたしのこと気づいてないの～？」

「……」

少女のその言葉に早紀は頭をもたげてしばらく考え込んだ。

沈黙することしばし、早紀ははっと顔を上げて彼女の顔を見つめた。

「あ……！ あのときのゴスロリの——！」

「やだあ。今更思い出したの？」

そんな早紀の態度にゴスロリの少女はちょっと不満げな表情を浮かべた。

「あたし、こんな格好だからもう少し早く気づいてくれると思ったのにー。ショック……」

「ごめんごめん、すぐに頭に浮かばなかったんだ……」

「もう、信じらんない！」

そう言うとゴスロリの少女はぷんぷんと怒った表情を浮かべた

それを見つめる早紀はどこか戸惑っているような、見ていてそんな感じが悠輔はした。

おそらくこの二人、さほど仲良くはないのだろう。大学で顔見知り程度の間柄なんだろうなと容易に想像できた

「……ところでさ」

悠輔はそんな二人の間に割って入るように一言言った。

「君、僕の質問に答えてないだろ」

「え？ 質問って……」

「君は一体誰だって事」

そう言う悠輔の呆れた顔を見て少女はにやっと笑った。

「やだ、悠輔……覚えてないの？」

「はあ？」

その言葉に怪訝そうな目で彼女を見たが、当の本人はまったく気にせず話を続けた

「まあねえー、気づかないほうが普通なのかもしれないよねー。あたしたち写真でしか出会ってないはずだから」

「写真——？」

悠輔はその一言を聞いて一生懸命彼女の顔を頭の中の記憶から引っ張り出そうとした。

自分は人よりも数倍記憶力には優れていると思ってはいるものの、どんなに頭の中を引っ掻き回しても目の前の少女の面影は影も形も見当たらない。

やっぱり、この女——まったくもって見覚えがないな。

悠輔がそう確信したその瞬間、彼女はまた大きなため息をついて言った。

「覚えてないならいいわ。私は冷泉大学1年の仁科ともえ。彼女とは——同級生ってことにな

るね」

ゴスロリの少女はそう言うと悠輔の横にいる早紀をじろっと見つめた。

その目はどことなくじとっと湿ったような深い暗さを悠輔は感じた。

「へえ、仁科さんって言うんだ……」

だが早紀はそこまで深読みしてないのか、感心したように頷いた。

「ねえ、同じ大学って事だから今日から友達になろう！」

「え……早紀——」

——マジでそう思ってるの？

悠輔は驚いたように早紀のほうを振り向いた。

彼女は無邪気な笑顔を浮かべ問題のゴスロリ少女ともえに手を差し伸べていた。

そんな早紀の行動にともえは不気味なほど静かな対応だった。

ぴたっと黙り込んだまま彼女の手をジーっと見つめることしばし、やっと溶かしたように心を開くのに大分の時間がかかったような気が悠輔にはした。

「うん、いいよ！」

まるでとってつけたかのような笑顔をともえは浮かべ早紀の手をぎゅっと握った。

それに対し、深読みをまったくしない早紀は嬉しそうな微笑を浮かべた。

「じゃあ、携帯のアドレス交換しようよ！」

「いいよー」

そう言いながら女子たちはお互いの携帯電話を出し赤外線通信を始めだした。

悠輔はそれを遠巻きでじーっと見つめながら眉間にしわを寄せ深いため息をついた。

いくら同じ大学の同級生だからとは言っても、こんな得体の知れない女と早紀が知り合いになるなんて——

そう思うと悠輔はどうしても心の中に一端の不安を感じざるを得なかった。

それがどういう理由なのかはわからない。ただ一つの理由は——仁科ともえと名乗ったこの少女の素性がさすがの悠輔にも完璧に見通すことが出来ないことなのだろう。

第一、どうしてこの女は僕の顔と名前を知ってるんだ？ こっちにはまったく記憶がないっていうのに——

「あーっ！もうこんな時間じゃん！」

携帯電話をいじりながら仁科ともえはフロア中に響くような大声で叫んだ。

「ごっめーん！ 今日、あたしこれからバイトなんだー！」

「そうなの？」

「もっと悠輔と早紀ちゃんと話したいんだけどさあ……今日は時間がなくて」

「ううん、いいのいいの！ バイトのほうが大事じゃん」

ともえのその言葉に早紀は何の邪念もなくニコニコと受け止める。

だが隣の悠輔はどうしても解せない気分でいっぱいになっていた。

初体面に近いって言うのに、この女はどこまでなれなれしいんだ。僕なんてどうしてか呼び捨てだし……

「あたし、アキバでメイドやってるんだ！ そう、この名刺あげるね☆」

そういうとともえは頼んでもないのに悠輔と早紀にいそいそと名刺を配った

——メイド喫茶ぶるーむ 秋葉原店 ともえ☆……か

フリフリの黒レースをあしらった派手な名刺を見ながら悠輔は深いため息を付いた。

彼女が只者であろうがなかろうが、絶対に仲良くなりたくないタイプの人間なのは間違いない

。

できれば今回限りで会い見えるのは勘弁してほしい——悠輔は心の中からそう思っていた

「じゃあ、ばいばーい——」

彼女は高く大きな声で二人に大きく手を振りながら立ち去ろうとしたそのときだった。

それはその場にいた早紀や電器屋の店員に決して聞き取れられないだろう小さく潜んだ声で彼女は悠輔だけにある言葉を残したのだ。

「悠輔、眼鏡はずしていた方が絶対かっこいいよ」

「——!!」

その言葉に悠輔は思わず立ち去る彼女を振り返った。

だがいつの間にかあの目立つゴスロリ姿は煙のように消えてなくなっていた。

「——どうしたの？悠輔……」

そんな悠輔の様子を早紀は不安げに上目遣いに見上げた。

彼は身も凍るような鋭い瞳である一点をじっと睨み付けていた。まるで先ほどの少女を必死で探すかのような視線で——

「いや……なんでもない」

早紀の声を聞いて悠輔は視線を落とし深いため息をついた。

その顔は幾分か蒼白になっているようだった

「本当にどうかしたの？ 顔青いよ……」

「——別に」

そう言うと悠輔はもう一つ深く息を吐くと、どこに向かうでもなく歩みだした。

「ちょっとトイレ行ってくる」

「うん……」

そんな彼に困惑しながらも早紀は深く頷いた。

「テレビだけど——もう君が選んじゃっていいよ。まかせる」

悠輔は力なさげにそう言い残すとまるで幻鬼のごとくおぼろげな足取りでテレビコーナーから離れていった。

悠輔、眼鏡はずしていた方がかっこいいよ——

あの少女が最後に残したその言葉。その言葉は悠輔の胸を大きく動揺させていた。

何を目的にそれを言い放ったのか。それはまだわからないけど、唯一つわかること——彼女が見ていた自分は眼鏡の下の顔だったということ。

彼女は何者だ？ 何故僕を知っているんだ？ そして、何の目的で僕の前に現れたんだ——？

その疑問が晴れる時はもしかしたら彼女と敵同士で対峙した時になるのだろうか……

それを思うと悠輔の瞳は赤く不気味に光った。

2 帰り道

「本当に信じられない！」

秋葉原からの帰り道、同行してくれた早紀の態度は対応に困るほど不機嫌そのものだった。

「テレビのこと一言まかせるってどういうことよ！ それでトイレからすぐ帰ってきてくれれば話は別だけど——それから三十分一体何してたのよ！」

「何って——ちょっと迷子になっただけじゃないか」

「いいえ！ 嘘よ嘘！ 迷子になるなんて子供じゃないんだから！」

「と言ってもあの店すごく広いじゃん……」

「そう言うことを言ってるんじゃないの！ 私はあなたの無責任さを怒ってるの！」

「無責任ねえ……」

悠輔はその一言に困ったように頭をかいた。

無理もない。仁科ともえの一件で悠輔の頭の中からテレビなんて飛んでなくなってしまったのだ。

そうとは知らない早紀はあれ以降もずっとテレビの下調べをしていたらしく、戻ってきたときはちょうど悠輔の契約待ちの状態だったのだ。

だが、悠輔にもはやテレビなど買う気などないわけで、そこでまたしても早紀とのいざこざが巻き起こってしまったわけなのだ。

「とにかく！ 今度から大切な買い物にはもっと本気になってよね！ 悠輔どこか抜けてていつも自分は関係ないって顔するんだもん……それが腹が立って仕方ないわ」

そう言うと早紀は怒ったように腕を組みぷいとあさっての方向を向いた

だが悠輔には早紀がどうして怒っているのかさっぱりわからないのが本音であった。

最近の女の子って奴はそんな些細なことで怒るのか。それとも早紀がただ特殊なだけなのか——

悠輔にはまったく見当が付かなかった。

「ホントにもう……秋葉原まで来たのに無駄足になっちゃったじゃない」

「——そうかな？」

「え？」

その言葉に早紀は悠輔のほうを振り返った。彼は口元には含み笑いを浮かんでいた。

「僕にとっては若干の収穫があったと思うけど？」

「ふうん……」

そう言うと早紀は不機嫌そうに一つため息をついた。

それから彼女は先ほどの怒りを押しこらえるかのようにぴたっと沈黙し始めた。

やはり、彼女も薄々感づいているのだろうか。自分があのゴスロリ少女と対面してから様子がおかしいってことに——

でも感づいているとしてもそれは所詮女の勘。悠輔とともえの裏の顔なんてさすがの早紀にも想像もできるはずがない。

とはいえ——このまま早紀と不機嫌なまま別れるのもどこか忍びないと悠輔は思っていた。

自分は恋愛上手ではないことはわかっている。それ故に早紀の一挙手一等足に冷や冷やしてしまう自分があるのだ。

「ねえ……早紀」

悠輔のその言葉に早紀はじろっと彼の方を振り返った。

そんな彼女を安心させるかのように悠輔は輝くような笑顔を浮かべ言った。

「こんどさあ、僕の大学で学園祭があるみたいなんだ」

「ええ、知ってるわよ。東都大学の若葉祭って結構有名だし」

——そうなんだ。

早紀のその言葉を聞いて悠輔は少しだけ感心してしまった。

よくは知らないけれど、東京一の有名校だから学園祭も有名なのだろう。

「それでさあ、僕——君を案内したいんだ。うちの学校の学園祭をさあ」

「え……」

その一言を聞いて早紀の足がぴたっと止まった。

そしてもう一度悠輔のほうを振り向くと、先ほどの不機嫌そうな顔はどこへやら……眩いような笑顔を浮かべて彼に顔を寄せた。

「それ、本当!？」

「……うん」

それを聞いて早紀は急に態度を変えてはしゃぎだし始めた。

「わあー！ 私、悠輔の口からその言葉が出るの待ってたんだ～。一度でいいから若葉祭に行ってみたかったんだけど、さすがに一人で東都大っていうのもね……気が引けるって言うかなんていうか……だから悠輔が誘ってくれるのずーっ待ってたんだよ！」

なんなんだよ。一体——早紀のその態度の変化に悠輔は思わず戸惑いを見せてしまった。

女って奴はみんなこうなのか？ 自分の好みのことを言ってくれればころっと態度を変えてしまうのが普通なのか？ そう思うと悠輔は少しだけ女性不審になりそうになった。

「まあ、そういうことだから……今度の日曜日予定空けててね」

「うん！ まかせといて！」

早紀はそういうと悠輔の腕をぎゅっと掴んで彼の身体に身を寄せた。

それを見て悠輔は顔を赤くしながら困ったように顔を掻いた。

まるで猫みたいな気分屋の彼女に振り回されてる——そうは思っているものの、そこが愛しいと思う自分もいる。

まったく、恋ってやつは——そう思いながらも悠輔は恥ずかしながら早紀の肩に手を触れた。

1 東都大学若葉祭

5月15日——東都大学最大のイベントの一つである若葉祭当日の日。

その日ばかりはいつもはインテリ学生が難しい顔して歩いている構内は学園祭らしい華やいだ雰囲気にも包まれる。

曇天の空のもと、狭いキャンパス内の小路には各サークルが食品露店を繰り出し、軽音サークルやジャズサークルはいたるところで路上ライブ。

中には路上アーティスト気取りの学生も現れだしてパフォーマンスを繰り広げては学校職員に注意されている

殺風景な校舎もこの日ばかりは化粧したかのように色とりどりの横断幕が掲げられ非日常の空気がぶんぶん漂っている。

浮ついているなあ——

悠輔はこんがり揚がりすぎたフライドポテトをつまみながら物珍しげに自分の変貌した母校を見回した。

この学校で学園祭を迎えるのは2回目だが、1回生の時は目ぼしいサークルにも入っておらず、授業がないのなら休みたいと思って学園祭自体をすっぽかしてしまった気がする。

そして今年——おそらく自分の中で何かが変わったのだろう。

こんな騒々しい浮ついた学園祭のど真ん中に自分が立っているのだから——

「ねえねえ、悠輔見て見て！」

あまり楽しめない表情の悠輔に対し早紀は学園祭を謳歌しているかのように生き生きとした表情で彼に声をかけた。

「あそこでなんかポティペインティングしてる。人間真っ赤になってるし。うけるー！」

「そうだね」

「あ、あっちではミニ演劇してるー。ロミオとジュリエットかなあ？」

早紀はあまり形のよくない綿菓子をつまみながら人でごった返すキャンパス内を物珍しそうに見て歩きまわった。

そうだ。今年は早紀がいるんだ。

だから今まで興味のなかった学園祭にも行く気になれたのだった。

逆を言うと早紀がいなければ今年の学園祭も興味のないまま終わっていたかもしれない。

こんな浮ついた学校——一人で歩くのも御免だ。

「ねえ！ 悠輔！」

そう言うと早紀はきゅっと踵を返して悠輔の方を強く見つめた

「さっきから全然会話しないけど、ちゃんと学園祭楽しんでる？ 一応あなたの学校の学園祭なのよ」

「そんなこと言われても……」

どうやって楽しめばいいんだよ。このアホな学生たちと一緒に羽目を外せと？

「ああ！もうじれったい！」

早紀はそう言うと、戸惑う悠輔の手を握るとそのまま強引に手を引いた。

「ねえ、何かアトラクションに参加しようよ」

「アトラクションって——!？」

「もう、何でもいいよ。あなたが好きなところでいいからさあ」

「そう言われても……」

そう言われて悠輔は困った表情を浮かべながら学祭パンフレットをパラパラとめくった。

結構な分厚さを誇るそのパンフレットはいたるところにライブ予告や演劇の演目、落研の寄席案内や特別講義などの手作り宣伝で埋まっていた。

「そうだなあ、今1半時でしょ……これからだったら」

そう言うと悠輔はぺらっとパンフレットのあるページを開いた。

——PM14:00 メインステージにて爆笑お笑いライブ

「あれ？悠輔ってお笑い好きだったの？」

「いや、そうじゃないけど——」

——何でもいいから、アトラクションに参加したいって言ったのは早紀の方じゃないか

悠輔はそう言いたげに彼女をじとっと湿った視線で見た。

「うーん、ちょっと待って」

そう言うと早紀は悠輔の持っていたパンフレットを無理やり奪った。

「何何？ 出演芸人はトーキョーハンター、ピクシーズ、うどんやのむすこ、大麦小麦——あら、全員爆エン芸人ばかりね」

「バ……クエン??？」

「えー悠輔知らないの？ 今お笑いは新東京テレビの爆笑エンターティナーで生み出されてるのよ」

「……へえ」

悠輔はひきつった笑顔でそう頷くしかできなかった。

「で、どうする？ お笑いライブ見に行くの？」

「どうするって……早紀が決めたらどう？」

「そうね……じゃあ、見に行ってみますか」

そう言うと早紀はパンフレットをパンと閉めると、悠輔の手を再び引き始めた。

「よし、じゃあこの際だからそこ行ってみようよ！」

「う、うん……」

「ほら早く！」

早紀はそう言って悠輔の手を強くひき二人は雑踏の中に消えて行った。

2 舞台袖

講堂前のメインステージはまるでどこかのライブ会場に紛れ込んだかのような熱気に包まれている。

どうやら自分たちの出番の後有名ロック歌手がライブを行うらしい。

その影響でいつもとは違う客層がステージに集まっていた。

「東都大の学園祭——思っていた以上にはじけてるな」

英太はステージ裏から客の顔を逐一観察しながら一言そう言った。

「俺、もっとメガネかけたインテリばかり集まってお寒いのかと思ってたけど、意外と普通じゃん」

そう言いながら英太は目を皿にしながらか客の中からある一人の人物を探そうと躍起になっていた。

髪は茶髪の短髪、黒いメガネをかけた不機嫌そうな男子学生——そんな学生この東都大には星の数ほどいるのだろうが、英太が探しているのはそんなインテリ学生ではなかった。

おそらく一目見たらすぐわかるはず——あの男の正体もすべて——

「おいおい、エータ。さっきから何を見てるんだあ？」

ステージ裏からじろじろと客席を見る英太を見て、アキバ在住と書かれた謎のTシャツを着た相手のマサシは訝しげに彼に話しかけた。

「別に……お前には関係ないだろっ！」

「えッ！ かわいい子でもいるの？」

「だから、あっち行けよ！ 俺忙しいんだから！」

そう言うと英太はさらに真剣な顔をして客席を眺めた。

その表情を見てただ事ではないなと思ったのかマサシはそれ以上英太に声をかけようとはしなか

った

「あ——！」

その時だった。

エータの目に一番奥の座席に座った清楚そうな女子学生に紙コップを運んできた一人の男子学生が急に飛び込んできた。

インテリそうな黒ぶち眼鏡に髪は渋めの茶髪。

本人は周りに溶け込もうと努力しているようだが、英太の目からはわかる。

彼の底知れぬ強さと気高さがその身体からじわじわと滲みだしている

あれが『百地』の名を継いだ伊賀の若き頭目藤林悠輔——

それを見て英太はごくっとなをのんだ。

それは本当に遠巻きにしか見えず、本当の強さとかは計り知れないが、それでも遠くの彼からは重厚な存在感は漂ってくる。

本当の強さを計るためもっと近くから藤林悠輔の顔を拝みたいところだが、自分のステージが近い今そうもしてられない。

英太は悔しそうに舌打ちするとステージ裏から離れた

「あいつ、リア充かよ」

いいよなあ。大学生風情は……

こっちはお笑い芸人と忍者と二足のわらじで女と付き合う暇さえもないというのに——

幸せそうな藤林悠輔とその彼女の笑い顔を見ていると英太は無性に腹が立ってならなかった。

あの幸せをぶち壊したい。その笑顔を悲しみと怒りで満たしてやりたい——

嫉妬にも似たその破壊願望が英太の心を激しく覆う。

そう思うとこれからのステージ何かどうだっていい。

その後の藤林悠輔との対戦の方が英太の心を強く揺さぶっていた。

「おーい、エータ！ そろそろネタ合わせしようおー」

「ああ……」

相方のマサシにそう言われ英太はその気持ちを抑えるように彼のもとへとゆっくりと歩いて向かった。

とりあえず今は目の前にあるステージをこなさないで。

お楽しみは——その後だ。

3 トーキョーハンター

「東京タワー!!」

『オタクとギャル男の東京伝説』という謎のキャッチフレーズのついた新鋭の漫才コンビ『トーキョーハンター』の決まりギャグがステージで炸裂する。

——と言っても東都大学のお客の反応はイマイチだ。

大笑いしている声はごく一握り、大半は笑いもせずに呆然とステージ上の彼らを見つめている。
「いやぁ、今日もつかみはOKですなあ。オタクのマサシ君」

「さすが天下の東都大学！笑いのツボがいつもと違う」

「ほう、そうかい。どこが違うのかが行ってみちゃいなさい！」

「そりゃ、いつも見たいにガンダムネタじゃ笑いは取れないっしょ！だってここにいる人たち頭が3倍早く働くニュータイプなんでそ？」

「おいおい、いつものようにガンダムネタで攻めてるじゃないか。マサシ君」

「だっはー!! 今のところ笑うところよ」

——何だ、こいつら……

遠巻きに『トーキョーハンター』のネタを見ながら悠輔は思わず顔を引きたらせた。

全くもって笑う箇所が見当たらない。何が面白いのかさっぱりわからない。

おもしろいのは秋葉原のオタクと渋谷のチャライ兄ちゃんが漫才してるという絵面だけ。

それ以外はまったくもって素人以下の芸だ。

「いいか、エータ。オタクって人種はこうやって勉強するんだ」

「ほうほう……」

「今手元には3人のマリオがいます。このままでは到底クッパには勝てそうにありません。そこで

無限増殖を使うことにしました。さて何人マリオは増えるでしょう」

「んー……って、マリオって99人以上増えないじゃねえか」

「そうなの。だから俺99以上の算数は無理なんだ〜」

「おいおいー。それじゃあここの会場の東大生の皆さんにオタクは馬鹿だっておもわれるぞおー！」

「大丈夫、グラディウスだと149857298点言ったことあるから」

「それはそれで凄いけど、数学にはなってないじゃねえか」

「だっはー!! 今のところ笑うところよ」

悠輔は深いため息をつくとふと隣にいる早紀をちらっと見た。

信じられない——こんな笑えない芸人なのに早紀はおなかを抱えて笑っていた。

あの芸人のどこが早紀のツボだったのかはわからないが、彼女は何かに取りつかれたかのように笑い転げていた。

「あ……あのさ。早紀……」

悠輔は困惑しきった顔で彼女に話しかけた。

「あの芸人笑える？」

「何言ってるの？ めっちゃ笑えるじゃん」

「……そうかなあ？」

そう言うと悠輔は首をひねった。

ステージ上のオタクとチャラ男はまだ何かネタをやっているが、やっぱりどこかが気に入らない。

「ダメだ。僕、あいつらの芸風受け付けない」

「え？そうなの？ 私は今年のM1は彼らが躍進すると思うけどな」

「それマジで言ってるの？」

「うん、結構面白いじゃん。これからの芸人よ」

「そうかあ……」

そう言うと悠輔はしかめっ面をして彼らの芸を見たが、もはや大人しく座って見ていただけるクオリティではなかった

悠輔はイライラをかみしめるような表情を浮かべ席を立ちあがった。

「ごめん、トイレ行ってくる」

「え？でもまだまだ芸人出てくるよ」

「すぐ帰ってくるよ。我慢できないんだ」

悠輔は不躰にそう言うと人込みを割って客席から消えて行った。

「悠輔ー！ もうっ！ いっつも勝手なんだから……」

まるで煙のように消えて行った彼氏を呆然と見送りつつ早紀は、またしても繰り出された『トーキョーハンター』のギャグにげらげらと笑い転げた。

4 同業者

曇天模様の空を見上げながら悠輔は一人深いため息をついた。

この雲行きだともしかしたら夕方には雨になるかもしれない。しかも嵐を伴ったような大雨の可能性が高い。

これは早紀を連れてさっさと家路を急いだ方が身のためか——

校舎で用を足した悠輔は一人とぼとぼとバックステージのあたりを歩いていた。

お笑いライブの真っ最中だからかこのあたりにはあまり人は歩いていない。

華やかな学園祭の中どこか閑散としている空気さえ漂う道だ

——そんな時だった。まさかこの場所であの彼女と再会したのは

「あぁー!! 悠輔じゃーん！」

その甲高い声に呼び止められて悠輔はぎょっとした。

恐る恐る振り返ってみるとそこにいたのは真っ黒ふりふりのワンピースにリボンがたくさんついたヘッドセットに厚底ブーツのメイドの完全装備に身を固めたあのゴスロリ娘仁科ともえが手を振っていた。

え——

その姿を見て悠輔は呆気にとられた。

あの秋葉原の家電量販店で出会ってっきり一度もコンタクトがなかった普通じゃないメイドともえがまさか東都大学の大学祭にやってきていたなんて——

その瞬間、悠輔の身体に緊張が走った。

よもや忘れてはいない。

彼女が自分の裏の顔を見きっていたこと、普通の人間とは別の空気を醸し出していたことを——

「どうしたの？」

そんな悠輔に対してもえはまるで猫を被ったようにかわいい態度で彼を上目づかいで見た。

「——どうして君がここにいるんだい？」

悠輔は警戒した声でそう言った。

「何でって、あたしバイトに来たのよ～」

「バイト!？」

「そう、東都大若葉祭限定でメイド喫茶がオープンになるからそのゲスト出演」

そう言うともえは悠輔に一枚のピンク色のチラシを渡した。

——あの東都大にメイドカフェオープン！ 記念ゲストは秋葉原で大人気のメイドカフェ「ぶるーむ」の花形メイドともえちゃん！ さあみんな萌え～しませんか？

「萌え……ね」

悠輔は呆れた表情でそのチラシを眺めた。

その様子をもえは目を輝かせてじっと見ている

「ねえ悠輔も来てくれるでしょ？ あたし、悠輔来てくれたらまっ先に萌えなサービスしてあげるよ！」

「いや……僕、早紀待たせてるし……」

「ええー、早紀もいるのー」

悠輔のその言葉にもえは明らかに不満の声を出した。

「もう、さ……あんな^コ娘放っておいてさあ、あたしのお店に来てよおー！ねえ～お願い！」

「なんで君にそう言われる筋合いがあるんだ」

「だってえー！ 早紀と悠輔じゃ絶対に釣り合いが取れないし。一般ピープルと伊賀藤林流家元なんて比べ物にならないじゃん」

「——！」

悠輔はさらりと言いのけたともえの言葉に狼狽した。

ちょっと待て——何で彼女がそれを知っているんだ？

僕が伊賀藤林流の家元だという秘密中の秘密をなぜこの娘は知っているんだ？

「あら？ やーっと気づいてくれた？」

ともえはそう言うと悠輔の前で妖しげに笑った。

「あんたくらいの使い手ならすぐ気付いてくれると思ったけど意外と鈍感ね。悠輔そういうところがかわいい」

「君は——」

そう言うと悠輔は動揺を隠すようにメガネをくいっと上にあげ彼女を睨んだ。

「やっと謎が解けた。君は僕と同業者ってわけね」

「なにそれ！ 同業者なんて言うレベルじゃないし！」

その言葉になぜかともえは怒りだした。

「なあに？ 悠輔ってなーんにも覚えてないの？ あたしがあんたにとって大切な人になっていたなんてなーんにも覚えてないの？」

「一体どこの流派のくノーだい？ それくらい名乗ってからじゃないと僕もどうしようもない」

悠輔の態度はともえが忍者だと明かす前より明らかに冷淡になっていた。

それは明らかに彼女の存在を自分の敵だと警戒しているようだった。

「——もう！ それもわからないの!? 面倒な男ね！」

そう言うともえはツンと拗ねたような態度を取りながら不機嫌そうに語りだした。

「あたしの流派は戸隠！ 戸隠流忍術の次期女頭目の仁科ともえよ！」

「——ふーん」

妖術使いの戸隠か……随分面倒なところが関わってきたな。

悠輔は素っ気なく彼女に答えながら顔に色を出さずにそう思った。

「ちょっとお！ その態度何!?!」

そんな悠輔の態度が気に食わないのかともえはむかっとした表情で彼につっかかっていた。

「あんたさああたしのこと何だと思ってるの？ まさか昔のこと忘れたとは言わせないわよ！」

「昔のこと——？ 記憶にないな」

「——もう！ 最悪！」

そう言うともえは口を尖らしてうつむいた。

「あたしは悠輔のこと一日も忘れたことないのよ。ずっとずっと大好きだったのに——」

「……はあ？」

「覚えてない？ ずっと昔にあんたのお嫁さんになることを夢見てた少女のことを」

そう言ったとたんともえの目がギラリと病的な光を発した。

その瞬間、悠輔は思わず背筋が寒くなった。

彼女の言っていることは何が何だか意味がわからなかったけれども、率直に彼女の態度がどこか怖いと思った。

「君は僕の何なんだよ」

そう言うと悠輔は警戒したようにともえを睨みつけると、彼女から一歩引いた。

そしていつでも攻撃できるようにベルトに付けた針に手をかけた。

「あたしは……」

だがともえは一步も引かず病的な目をぎらつかせながら彼に迫ってきた

「あたしはあんたの——！」

「あ!! と、ともえちゃん?!!」

二人の間が殺気で包まれたその瞬間、まさに場違いな声その間を引き裂いた。

二人ははっとそちらの方向を見るとアキバ在住と言う謎のTシャツを着たオタク系の男子が猛烈な勢いでともえに近づいてきた。

「うわああああ！ おいら超カンドー!! こーんな場所でアキバの癒しの女神ともえちゃんと再開できるなんてえー！」

「あ……アキバの癒しの女神？」

——こいつが？

オタクのその言葉を聞いて悠輔は信じられない表情でともえを見た

ともえは先ほどの病的な笑顔から一転、営業スマイルと言った笑顔で彼に笑いかけていた。

「いらっしゃいませ、ご主人さま——あれ？ ご主人さまどこかで見たことなかったっけ？」

「お！ ともえちゃんさすがお目が高い！ おいらテレビとかテレビとかテレビとかで見たことあるでそ？」

「テレビね——」

その言葉にともえは少し困った表情を浮かべ考え込んだ。

あ———そういえば。

悠輔はニコニコと答えを待つオタクの顔と変なTシャツを見て彼が先ほどメインステージに立っていたまったく笑えなかった芸人『トーキョーハンター』のオタクの方だと感じた。

だがそれをともえに教えてあげようかと思ったが、その前にともえはにっこりと笑って甘えた声で一言言った。

「ごめーん、ともえちょっと思い出せなーい」

「あら……残念ー！」

その言葉にオタクは少し残念そうな顔をした

「じゃあ、正解教えてあげるよ！ おいらさお笑い芸人なんだお」

「え、芸人さんなの？」

「そそ、これでも今年のM1優勝を目指してるんだお！」

「へえー！すごーい!!」

オタクのその豪語にともえは本心なのか本心でないのかわからない感嘆の声を上げる。

M1優勝ね——

悠輔はその言葉に苦笑した。あの實力じゃ2回戦に残るのだって厳しいだろう。

「でもー。M1ってことは相方さんがいるってことだよな。相方さんってどんな人なんですかぁ？」

「あー、相方ねえ。見たことないかな？ ピアスじゃらじゃらして、髪の毛変な色に染めて、いかにも渋谷系って感じの——」

「おーい。マサシー」

その呼ぶ声にそこにいる誰もがそちらに注目した。

そこにいたのは両耳にピアスをじゃらじゃらとつけて、髪の毛を金と黒のメッシュのソフトモヒカンにした、だぶだぶバスケットウェアに半パンのいかにも軽そうな若者。

「なんだよ。こんなところにいたのか——ん？」

彼はマサシと呼んだオタクに近づいてきたその瞬間、悠輔とともえの存在に気がついた。

その次には彼の軽そうな印象はガラッと変わった。

彼はじろっと悠輔をちらりと睨みつけた。冷たく痛いくらい鋭い瞳で。その眼力は明らかにお笑い芸人には必要のないものだった。

「おー！エータ。来たの？」

「来たっていうかさ、おまえ小便行ってから帰ってこないからさ」

「あ、エータ！ 紹介するよ。この子が僕が大好きな癒しのメイドのともえちゃん」

「えーっと……ともえですう！よろしくね☆」

「ああ、よろしく……」

ともえとエータとの会話は明らかに不自然だ。

お互いに腹の中を探ろうとしているようなそんな空気がびんびん伝わっている

「ところで、エータさん？ あなたあたしと一度あったことない？」

「さあ……何の話だろうな」

「そっかあ……気のせいかな……」

そう言うともえはすっと悠輔の方を見て一言『心読』で会話した

(彼も……忍者よ)

伊賀と戸隠では『心読』の方法は若干違うので最初は急なメッセージに驚いたが、そう聞き取れたことは聞き取れた。

そうだ、ともえの言うとおりに彼も明らかに普通ではない。

そして彼も悠輔とともえの正体にもう気づいている。それ故にずっと殺気に似た警戒を怠らないのだ。

「やだなあー！　ともえちゃん。誰にもそう言うのかい？」

微妙な空気が流れたのを止めたのはこの中で唯一一般人だと思われるオタクのマサシだった

「そんなことはないですう～。私はみんなお客様だとおもってますう～」

そう言うとももえは繕うかのように笑って見せた。

「そ、そうだ。マサシ……さん？　お店の方にいきませんかあ～？」

「お店？　え？　東都大学にあるの？」

「そうそう。今日、あたし東都大のメイド喫茶に特別ゲストとしてやってきてたんですう。そろそろお店の方にかえらないとお～。スタッフの方が心配してると思うんでえ～」

「ええ～。マジで！行く行く！」

そう言うとももえはうれしそうなキモイ笑顔を浮かべた。

「というわけでさあ……エータ。おいらこれからちっくらメイド喫茶の方でまったりしてくるわ」

「ふーん。そうなんだ」

マサシのその言葉にエータは冷たいほどの無表情で答えた。

「いいんじゃないの？　いってらー」

「え？　いいの？」

「だって俺もこれから用事あるもん……なあ」

エータはそう言うと悠輔を舐めるような視線を見た。

こいつ——僕に用があるのか。

その態度に悠輔も彼を強く警戒するようにメガネを指で押し上げ鋭い視線で睨み返した。

「そっか……じゃあおいらちっくらくらいつてくらー」

そう言うとマサシはともえを連れてその場を去っていく

そんなマサシの態度にともえは少し不満げな表情は浮かべたがしぶしぶ彼を連れて行った

(気をつけてね。悠輔)

ともえはその場を去る前悠輔に『心読』でそう警告してきた。

そうだ、まだまだ気を抜いてはいけない。

悠輔の前にはまたしても得体のしれないお笑い芸人の忍者が立ちはだかっているのだから——

5 最強

「結局、あの女にマサシの相手をまかせちゃったな」

風間英太は一言そう言うと人込みの中に消えて行ったメイドとオタクを見送った。

「大丈夫かな。あの女、とんでもない妖術使いだぞ。マサシが奴に殺されると俺も相方として困る」

「へえ、少なからず仁科ともえのこと知ってるようだね」

「そりゃもう……俺あいつに一度痛い目に遭ってるからな……」

「……なるほど」

負けたんだな。そう言いたげな笑みを悠輔は口に浮かべた。

「って、おい！ 勝手に負けたとか結論付けない！ このインテリ忍者め！」

そんな悠輔の態度に英太はむっとした表情で食いかかった。

「いいか、あんたはあの女と戦ったことないからそう言えるけど、一度やってみろよ。ホントあの女恐ろしいぞ。おそらく日本最強のくノ一だぜ」

「ふーん。それは覚えておこう」

そう言うと悠輔は余裕を見せつけるかのように笑った。

「彼女とも君とも遅かれ早かれ戦うはめになるのはもう覚悟はしてるよ。だって君もそのために僕と会ってるんでしょ？」

「ほ一物わかりがいいじゃねえか。家元さんよ」

英太はそう言うとポケットの中にぐじゃぐじゃにいれた封筒らしきものを取り出してそれを悠輔の方に投げた。

果たし状……か

それを見て悠輔は彼を蔑むように笑いながらそれを拾い上げた。

「えらい古いやり方だね。ちょっとびっくりしたよ」

「うるさいな。さっさと読めよ」

そう突っ込まれ英太は少し居心地悪い表情を顔に浮かべた

「俺だってこんな古臭いやり方嫌だったんだぞ……でもさあ、うちの連中が伊賀と決闘するのなら果たし状くらい書けっていうからさー」

「ふーん」

悠輔はそう冷淡にうなづくとも果たし状の中身の手紙を取り出した。半紙の上に子供の習字並みの字ででかでかと書かれた文字

——お前をぶっ倒す。風魔軍団副総帥 風間英太

「今度は風魔か……」

これまた厄介な流派が絡んできたものだ……

そう言いたげな表情で悠輔は英太を睨みつけた。

「……で、こんなもの叩きつけた理由は？」

「さあ、特にないな」

その問いに英太はしれっとした表情で一言答えた。

「それはえらい迷惑な話だな……」

「まあ、ひとつだけなら理由はあるよ。お前を狙う大義名分が」

そう言うと英太はニヤッと冷たい笑みを浮かべた。

「俺は最強になりたいんだ」

「最強って……忍者の中で最も強くなりたかってこと？」

「まあ早い話を言えばそうだな。誰よりも強くなりたかって感じかな？」

「ふーん。悪い理由じゃないね……」

そう言うと悠輔は少し馬鹿にしたような瞳で英太を横目を見た。

「でも、そんな最強を目指す風魔忍者の君が何でお笑い芸人になってM1目指してるの？」

「それはだな……」

その突っ込みに英太はむっと表情を曇らせた。

「お笑いの世界でも最強を目指してるんだ！俺は!!」

「お笑いでも最強……ね」

悠輔はそう一言つぶやくとまた蔑んだような笑みを浮かべた。

あの程度の芸で最強と言うか……なんともレベルの低い話だ。

「てめえ……今笑っただろ」

そんな悠輔の態度に英太はどうやら腸が煮えくりかえってる様子だった。

それを見て悠輔はさらに口撃の手を強めた。

「さっき君たちのネタを見たけどさあ……はっきり言ってスベッてたよ。素人目の僕から見ても正直M1は無理かと」

「って……お前ははっきり言うな。本人の前で……」

「まあ君が忍術でもお笑いでも最強を目指そうっていうのは止めないけどね」

そう言うと悠輔はもらった果たし状を封の中にしまうと、すっと目を閉じた。

次の瞬間、英太の果たし状は一瞬で燃え上がり灰になった。

「——この話、乗ってあげる」

悠輔が目を開けたその時には彼の瞳は血の如く真紅に染まっていた。

それを見た瞬間、英太の表情が若干強張った。

しかし怯みそうになったのは一瞬だけ。すぐに彼は口元に楽しそうな笑みを浮かべそれに返すように睨み返した。

「カッコつけられるのも今のうちだぞ」

「それはこっちの台詞だ。君こそ僕に挑んで怪我どころで済まないかもよ」

「そんなのやってみなきゃわかんねえだろ」

そう言ったそのとたん英太の身体からカッと禍々しい殺気が放たれた。

それを見て悠輔もにやりと口に笑みを浮かべ、それに負けない強い気で答えを返した。

質感の違う激しい殺気のぶつかり合い——

今すぐにでもこの場所で彼とやり合ってもかまわない——しかし、それをするには少し邪魔者がいる。

「ところで……さ」

悠輔はその邪魔者の存在に気付きながらも英太を睨みつけたまま言葉をつづけた。

「先ほどから僕を監視してるのは君の流派の手の者かい？」

「いや……俺は表の仕事でこの学校に来たんだぞ。仲間なんぞ連れてくるか——」

「そうか……」

悠輔がそうつぶやいたその瞬間、彼は目にもとまらぬ速さでホルダーから針を抜き去りそれを

向い側の木の上に放った。

その瞬間、その木からどさっと落ちてきた黒い人影——

それはゆっくり起き上がると悠輔の針で負傷した肩をかばいながらその場から逃げだそうと足を一步引いたその時だった。

「逃がすか」

悠輔は一言そう言うと真紅の瞳を光らせその男めがけて両手をかざした。

次の瞬間その男は身体を凍りつかせたかのようにその場に動けなくなった。

ふるふると震える男の身体——それに両手をかざしたまま悠輔はゆっくりと近づいた

「なるほど、金縛り……か」

それを見て英太はごくりと息をのみつつニヤッと笑った。

相手にもよるがこれほどまで簡単に金縛りの術を掛けるとは驚きだった。

「そんなに怯えなくていいよ」

悠輔は泳ぐような手つきで両手を操りながら男の身体までも操った。

マリオネットの糸を紡ぐかのように彼は手をくいと動かすと男は悠輔の方に無理やり体勢を変えられた。

「伊賀藤林流の家元である僕を監視するとはいい度胸だね……いったいどこの流派だい？」

「それは……」

男は身体を硬直させながら悠輔の顔をおびえ切った顔で見た。

しかしそれ以上の答えは彼の口からは出てはこなかった。

「——口止めされてるんだね」

悠輔はニコニコと笑いながら一言そう言った。

その柔和な笑顔に男は一瞬心を許したかのように表情を和らげたその時、悠輔はかざした手をまた中を泳がせ力を入れた。

その瞬間、男の表情が急に苦痛に歪んだ

「やめ……ろ!!」

男は苦しそうな表情で呻き声をあげた。

悠輔は男に直接手を掛けることなく彼の腕を激しく締め上げた。

その瞬間、何かの力によって男の腕はあらぬ方向に捻りあげられ、肉と骨は悲鳴に似た音を出した。

「言わないとこのまま腕をへし折るよ……」

悠輔は相変わらずニコニコと口元に笑顔を浮かべていたが瞳は真紅に染まりあがり鋭く彼を見つめている。

そうか——！

遠巻きにその様子を見ていた英太はその術を見てハッとした。

これほどまで悠輔の術が完成するのは最初に食らわせたあの針がミソなんだ。

そしてあの針の傷口から気を送りこんで手を下さず腕をへし折ろうとしているのだから——この伊賀の家元、もしかしたらとんでもない使い手かもしれない。

「もう一回聞くとよ。君を差し出した首謀者はだれだい」

悠輔は右手に力を込めながらさらに男の腕を手をかけずに締め上げた。

男の悲鳴とともに筋肉が断裂する音があたりに響き渡る。

その瞬間、男は痛みに耐えかね「言う！言うから！」と叫び悠輔にすがりついた。

「俺は甲賀の者だ——！ 頭の命令で……お前を——監視してた！」

「頭——!? 上月静夜か！」

その名を言った瞬間、初めて悠輔は顔に怒りの色を浮かべた。

悠輔はどうしても許せなかったのだ。

自分の正体をここまで如実に晒すような罠を仕掛けてくれた甲賀の頭目上月静夜の存在を——

「だからお願いだ！助けて——！」

男がそう泣きついたその瞬間、悠輔はキッと男を赤い瞳で睨みつけた

そして、かけた術を強めるかのように手をギュッと硬く握った。

次の瞬間、男の上腕骨が砕け散る音がしたあと彼は悲鳴も上げる暇なく白目をむいて倒れこんだ。

「アイツ、許さん……」

そう苦々しく呟いた悠輔の表情はまるで鬼の形相だった。

悠輔は倒れこみそのまま意識を失った男を軽く脚で蹴ると、不機嫌そうな顔で英太を睨んだ。

「そう言うことだ。風魔のお笑い芸人さんよ」

「ち……結局伊賀は甲賀の方が気になるってか」

——それで俺らは無視ってわけか。

そう言いたげな表情で英太は不満げに舌打ちした。

「まあ、君の挑戦はそのうち受けてあげるよ。忙しくないときにね」

「俺の挑戦を暇つぶし程度に考えるなよ。お前本気で殺すからな！」

「はいはい、わかったわかった」

悠輔は英太の文句をそう軽くあしらうとふと手元のGショックで時刻を確認した

PM15:23……余計な客人ばかり合ったせいであれからもう30分も経ってる。

そう言えば早紀を置きっぱなしにしている——まずい、このまま向かっても確実にいつものように喧嘩になってしまうではないか……

「やれやれ、ちょっと話し込みすぎたな」

そう言うと悠輔は深いため息をついた。

「さっきも言ったけど今日は僕は忙しい。君やあのくノ一の相手なんてやってる暇ないんだ」

「デートの方が大事か。家元さんよ」

「——気づいてたのか」

英太のその言葉に悠輔は明らかに不快な表情を浮かべた。

「ステージ裏からこっそりお前を覗いてた。結構美人の彼女だったな」

「……こいつ」

そのことを言われ悠輔は初めて英太の前で狼狽した姿を見せた。

それを見て英太は少し勝ち誇った表情を浮かべ言った。

「でも、その彼女を一人にしてていいのか？」

「何？」

「誤解するな。俺らは女を狙う卑怯な真似はしないよ。だけど他流派は何をするかわからんぞ。特にあの戸隠の女忍者はお前にご執心らしいからな……」

「——！」

悠輔は驚いた様子で英太を見ると、次の瞬間焦ったように踵を返した。

「君、今度会ったら最期だよ」

そう言った瞬間、悠輔は英太の視界からぱっと消え去った。

たかが彼女の安否を確かめるためこんなところで『瞬間移動』など使わなくてもいいものの—

英太はそう蔑んだように笑うとすっと指で何かを合図した。

次の瞬間彼の前に一人のくノ一が一瞬で姿を現した。

「そう言うことだ。理沙。お前はあの家元を監視して居場所を突き止めろ」

「わかったわ。英太」

「下手に尻尾出すんじゃないぞ。こいつ見たいなことになりたくなければ」

そう言うとき英太は悠輔に腕をへし折られた甲賀の忍者の身体を軽く足蹴りした。

—しかし、あいつが気づいたのが甲賀のヘボ忍者で本当に助かった。

もし一歩間違っていればあの恐ろしい術に自分の仲間が引っ掛かるところだったわけだから—

「大丈夫よ。こいつ見たいなヘマはしない」

そう言うとき風魔のくノ一理沙は機械的に笑って見せた。

「気を抜くな。相手はもしかしたら日本最強の忍者の一人かもしれん」

「あら、あなたの口からその言葉を聞くななんて意外……」

理沙のその一言に英太は気を引き締めるように低い声で返した。

「だから俺は奴を倒さなければならない。あいつを乗り越えないかぎり俺は絶対に最強になれ

ない……」

悔しいがそう言って藤林悠輔を評価するしか今の英太はできなかった。

だが壁が高ければ高いほど乗り越えがいがある——そう思えば早く彼と刃を交わらせたいという気持ちが一段と強くなった。

「そう言うことだ。行け！」

英太はそう言うと目で理沙に合図する。

その瞬間、くノ一理沙は英太の前から一瞬で姿を消した。

——さて……と

英太はふと空を見た。

泣き出しそうな空はついに涙をこぼしぽつぽつと大粒の雨が降ってきた。

1 ともえと早紀

「もー！ 最悪！」

急に降りだしてきた雨に半分濡れてしまった早紀は怒りのあまり大きな声でそう叫んだ。

雨宿りの古い校舎内。

周りは急な雨に焦って撤収してきた屋台サークルや演劇サークルの人たちでごった返している。

しかし、なぜ自分はここで一人心細く待っているのだろう

大体きっかけは恋人悠輔がトイレだと言ってお笑いライブを途中抜けしたことだ

それから30分待てど暮らせど悠輔は戻ってこなかった。

そのうち大雨が降ってきてお笑いライブは急きょ中止、仕方なく近くの古校舎に非難するしかなかったのだ。

早紀は何度も何度も悠輔の携帯電話に電話した。しかしなぜかこういう時に限って悠輔の電話につながらない。

だれに会っているのか知らないけれども今日の今日は許せない。このあとごっそり絞りあげてやるんだから——

その時だった。

早紀の携帯電話の着メロがけたたましく鳴り響いた。

その名を確認すると藤林悠輔——勝手なアイツからの今更ながらの電話だ。

「もしもし——」

早紀はその電話にあえて不機嫌さを曝け出して出た。

電話の向こうの悠輔は焦った様子がびんびんに伝わってくる声で話しかけた。

「早紀——？ 今どこにいるの？」

「どこって——どっか古い校舎で雨宿りしてる……」

その言葉に悠輔は「そか……」とえらく低い声でつぶやくともう一言早紀に聞いた。

「もしかして、そこに誰がいる？」

「だれもいないわよ——ってさ！ 何なのよ一体！」

そう言うと理沙はついに悠輔に激怒した

「あなた一体私のことなんだと思ってるの？ 普通恋人を雨の中30分も放置するなんて絶対にありえない！信じられない！」

その舌鋒に悠輔はただただ「ごめん」としか返してこなかった。

その態度が早紀は余計気に入らなかった。

「ともかくどうするの？これから……こんな大雨になっちゃって学園祭どころじゃないでしょ」

「そうだね……」

そう言うと悠輔は急に真面目な声で返した。

「ともかくこれからそっちに向かうそれから——」

「それから？」

「見知らぬ奴が話しかけても絶対に無視して。心を絶対に許しちゃだめだ」

「——何言ってるの？」

悠輔のその言葉に早紀はちんぷんかんぷんだった。

「ともかく知らない奴について行ったらダメだ！ 厄介なことに巻き込まれる！」

「意味分かんないし！」

そう言うと早紀は怒り心頭の声で悠輔を怒鳴った。

「一体何なのよ！ 散々待たせといて、言いたいことはそれだけ？ もっと謝らなきゃならないことがあるでしょうが！」

「それは——」

「もういい！ 今日はこれで終わり！ じゃあね！」

そう言い放つと早紀は乱暴に携帯の電源ボタンを押した。

悠輔は何かまだ言いたげだったけどそんなことどうだっていい。

あの人はいつも身勝手だし反省がない。付き合うこっちばかりいつも大変な目にあう。

それをわかっていなくていつも同じ間違いばかりする悠輔が早紀は疎ましくてならなかった。

帰ろう——

そう思ったのはいいものの外は大雨だ。傘なんて持ってきてるわけないし、こんな中歩いて帰ったら確実にずぶ濡れになる。

早紀は深いため息をついて恨めしく暗い空を見上げたその時だった——

「あれえ？ 早紀——じゃない？」

その甲高い声に早紀ははっと振り向いた。

そこにはふりふりの黒いワンピースにリボンがついたヘッドセットを付けたメイドがニコニコとした笑顔で立っていた。

「あ、ともえ……ちゃん？」

その姿に早紀は呆然とした。

自分の大学の同級生の^コ娘がまさか東都大学の校舎の中にいるとは思ってなかったのだ。

「どうしたの？ここで……」

「あたし？ あたしはバイトしてるの。この校舎の4階のメイド喫茶で」

そういうとともえは早紀にむかい気持ち悪いくらいの笑顔で笑った

「へえ……東都大でメイドカフェねえ……」

——需要、あるのかしら？ 早紀はから笑いしながらそう思った。

「ねえ、早紀……うちの店こない？」

「え!? メイド喫茶に？」

「そそ、どうせこの雨でどこもいけなくて困ってるんでしょ。だったら、雨宿りついでに寄って行ってよー」

ともえのその誘いに早紀はしばらく考え込んだ。

確かに彼女の言うとおりで。この大雨で足止めを食らっていてどうしようもなかったのは間違いない。

「悠輔……待ってるんでしょ？」

ともえのその言葉に早紀ははっと彼女を見た

彼女は口元にニヤッと可愛いながら不気味な笑顔を浮かべていた。

「——あんな奴、知らない！」

早紀はそう言うとツンと彼女からそっぽを向いた。

それを見てともえはさらにモーションを掛けるかのように彼女の手を引いた。

「それならそれでいいじゃん！ どうせ早紀はこれから暇なんでしょ？ だったら私の店に来てえー」

「うーん……」

まあ、それもいいかな……

早紀はともえの誘いを悪いものだとは思わなかった。そして、しばらくした後彼女に屈託のない笑顔で答えた。

「うん。いいよ」

「ホント！」

その一言にともえは早紀の手をギュッと強く引いた。

「じゃあさ、早くお店行こうよ！　ともえちゃん特製ホットティだしてあげるよ！」

「ホント？　楽しみだなあ～」

そう言うと早紀は何の疑いもなくともえについて行った。

その決断が後々悠輔、早紀そしてともえを巻き込んだ愛憎劇のきっかけになるなど——今の早紀が気づくはずがなかった。

2 ツイてるともえ

東都大学第3研究棟の4階、の第5小教室――

そこが東都大学若葉祭のため急きょオープンしたメイド喫茶「わかば」だった。

しかし、急きょ立ち上げた仮店舗にしてはこのメイド喫茶「わかば」の店内はかなり凝ったものだった。

ゴシック調の壁紙に、どこから持ってきたのかアンティーク調の家具が置かれ、装飾や照明もかなりの出来だ。

まさかここが大学の構内とはだれも思うまい。否、そのまま秋葉原で営業したって遜色のないクオリティだ。

しかし、驚くのは内装のクオリティだけでなくそこで働くメイドのクオリティもなかなかのものだった。

中にはともえ見たいな他大学からのヘルプの人間もいるが、大半はあの日本最高峰の東都大生の女学生だ。

そんな彼女らがいつものインテリ姿を隠しメイド服に身を包んで今日に限ってはじめてメイドを演じている――

それだけでもアキバのオタクにはたまらないのだろうか。この店目当てで東都大の学園祭に来たメイドオタクも数多く見てきた。

でも――本当に一番かわいいのはあたし。

ともえはカウンターでアセロラホットティをカップに注ぎながら、そう思った。

いくら東都大生メイドが珍しいからと言って、一番の目玉はアキバで大人気のメイドであるともえのゲスト出演だ。

現にともえのもとには指名がガンガン入ってきた。根っからのともえファンもいればクソ真面目な東都大生もいた。

朝からそんな客たちの相手にへきへきしてこんなところ帰りたいたいと思っていたけど、昼から流

れは変わった。

それは悠輔とばったり会ったのがきっかけだろうか——彼とは邪魔が入って少ししかしゃべれなかったけど、そのおかげでこの前ちょっとしたイザコザで軽く泣かしてあげた風魔のお兄さんとも出会えた。そして——

ともえはふとカウンターの前にいる早紀をじろっと睨んだ。

そして彼女に気づかれないように懐から怪しい小瓶を出し、そこに入っていた粉末をアセロラホットティの中に混入した。

彼女に会えたのは幸運だ。しかも悠輔の邪魔なく店に誘導できたのだからこの上ない幸運だ。

これでこちらの計画が滞りなく進む——ってわけだ。今日は何かついてるきがする。

「早紀い〜。ホットティできたよー」

ともえは何事もなかったかのような笑顔を浮かべ粉末入りアセロラホットティをトレイに乗せて早紀の元に運んできた。

彼女は携帯電話のメール画面をみながら不機嫌そうな表情で言った。

「悠輔、サイテー」

「……どうしたの？」

「いや、ともえちゃんのお店にいるってメールしたら。さっさとそこから出るだって……何様!？」

早紀はそう言うと携帯電話をたたむと、何の疑いもなく出されたアセロラホットティに口を付けた。

勝った——

それを見てともえは不敵な笑顔を浮かべた。

「なんだろう……あたし、悠輔に嫌われてるのかなあ」

ともえはあえて演技するかのよう早紀の前でそう不安な様子を見せた

「そんなことはないと思うよ。だってあの秋葉原での1回しか会ってないじゃん」

「うん……」

それは嘘だった。本人はどうか知らないけどあたしと悠輔は周知の仲だ。

それはこんな小娘が中に割って入るような隙間もない深い仲だったはずだったのに——

「でも、なんかあたしあの時悠輔に避けられていた感じがする。何でだろう？」

「それは知らないけど……」

「ねえー。今度早紀とあたしと悠輔3人で会わないかな？ あたし悠輔の誤解といてあげたいし……」

「……」

その問いに早紀は一瞬とまとったような表情を浮かべたが、すぐに表情を和らげ笑って見せた

「いいよ。全然大丈夫」

「ホント！」

「大体悠輔もおかしいわよ。あんなにともえちゃんを警戒しなくてもいいのに——何考えてるのかしら？」

そう言うと早紀は怒りを飲み込むかのようにアセロラホットティをごくりと喉に流し込んだ。

——そう、どんどん飲んじゃって。

ともえはそう思いながらニコニコとした表情を変えずに彼女にメニューを出した。

「そうそう、サイドメニューもあるんだけど、何がいい？ お勧めはティラミスかなあ～オムライスが女の子には重いと思うし……」

「……あ、じゃあそれで」

早紀は一瞬ぼんやりとしていたが、ともえのその一言に咄嗟に反応した。

それを聞いてともえはニヤッと笑みを浮かべ言った。

「じゃあ、ティラミスね。待ってて」

ともえはそう言うとまたカウンターの奥へと引っ込んでいった。

早紀はそれから出されたアセロラホットティに口を付け続けた。

相当暖かい飲み物に飢えていたのだろう、彼女は一気にごくごくとそれを飲み干していた。

——やっぱり、今日のあたしツイてる！

遠巻きでその様子を見てともえはついつい嬉しくなった。

これで悠輔は絶対に邪魔できない場所に早紀を連れて行けることができる。無抵抗のまま彼女をさらって——

やがてカウンター越しの早紀は眠そうに目をこすりだし、そして崩れ落ちるようにカウンターで深い眠りについていく。

「あれえ？」

ともえはあえてとぼけるように早紀に近づいた。

「早紀ちゃん寝ちゃったの？ 困った娘ね……」

——どうやら眠り薬効いたみたいね。

それを確認するように巴は彼女の手を取り脈を確認する、そして営業スマイルのまま隣のカウンターに座る体格のいいスーツ姿の客を見た。

「あのう……お願いがあるんですけど……」

「なんだい？」

そう言うともえは身体をゆすりと蛇のようにぎょろりと鋭い目でともえを見た

だがともえはそんな男の目を見てもいつものあの態度を貫いた

「お客さんが寝ちゃったんですう～ここで寝られると困るんで別室に運んでいただけませんかあ？」

「ああ、お安い御用で——（お任せ下さい。お嬢様）」

男はともえに『心読』で一言そう伝えると、カウンター席から立ち上がりニヤッと笑みを浮かべた。

それを見てともえはにっこりと笑って手を叩いた

「本当ですかあ～。助かりますう——（頼むわよ。蓮堂——）」

ともえは『心読』と共に男にそう眼で合図する。

その病んだように暗い瞳は一瞬、優しい癒しのメイドの顔から誰もが恐れる戸隠の女頭目の顔に変化した。

アキバの人気メイドともえに頼まれた男蓮堂はともえに一礼するとぐったりと寝込む早紀を抱くとそのまま店を出て行く。

——やったあ。この戦、勝ったわ……

ともえはその後ろ姿を見送りながら軽いガッツポーズをした。

見ていらっしゃい。藤林悠輔——あなたに最大の苦痛を与えてやるわ。

許婚相手の私がいるのに彼女なんか作って浮気をした罰よ。覚えておきなさい——

「さあて、そううまくいくかな」

背後でその低い声を聞いてともえははっと振り返った。

そこには全くの気配を殺しオレンジジュースを飲むツートンメッシュのピアス男。お笑い芸

人『トーキョーハンター』の渋谷系のツッコミ担当の風間英太がいたのだ。

「あんた——いつの間に？」

彼の顔を見てともえは呆然となった。

何故、今まで気付かなかったのだろう——いくらともえが早紀に集中していたからとは言え英太ほどの忍者の気配を全く拾い損ねたなどあり得ない話だ。

それともこの男、完璧に気配を消す術でも使ってメイド喫茶に潜入してきたとでも言うのだろうか？

「ずっと見てたぜ。俺」

英太はそういうとオレンジジュースの中の氷をストローで突っつきながらともえを睨んだ。

「あの^こ娘どうするつもりだ？」

「どうするって……」

「どうせ、おまえの考えてることだ。あの^こ娘を出汁にして藤林悠輔でもおびき出すつもりか？」

「うっさいわね！ あんたに言われる筋合いないわよ！」

そう言うともえは彼の横のカウンター席に座るとつんとそっぽを向いた。

「それよりもあんたは何の用？」

「俺？ 俺はただ相方の様子を見に来ただけ——」

そう言うともえはちらっとうしろのテーブル席を見た。

そこには黒髪メガネメイドとじゃんけんをしているオタクの相方マサシの姿があった。

「まあ無事そうだったからよかったよ。そんだけ」

英太はそう言うともえはまたオレンジジュースをストローで吸った。

それを見てともえは不満そうな表情を浮かべ英太を睨みつけた。

「あんたさ、まさか私の計画をぶち壊そうって思っていない？」

その一言に英太は表情一つ変えずに答えた

「別に」

「じゃあ、何しに来たのよ！ 黙って私の計画を見過ごす気なの!？」

「そうだけど？」

「……意味わかんないし！」

ともえはそういうとつんと頬を膨らませた。

そんなともえを見て英太は深いため息をついてコップの中の氷をいじくりまわした

「だってお前があいつの彼女を連れ去ろうがブツ殺そうが俺にはまーったく関係ねえし。勝手にすればっていうのが本音だな」

その一言にともえは怪訝そうな目で英太を見た。

「と言うことは、本気で黙って見過ごすってこと？」

「そう言うことだ」

そう言うと英太はニヤッと不敵な笑みを浮かべた。

「まあ、精々藤林悠輔の女を欲望のまま痛めつけちゃえば？ まああいつは烈火の如く怒り狂ってお前を殺しに来るだろうけどな」

「そんなことあんたに言われなくたって……」

「あ、でも、これだけは忠告しとく」

英太はそう言った途端、今まではたとえと消していた殺気を爆発させるように放った。

そして、ギラギラと光る瞳でともえをキッと睨みつけた。

「藤林悠輔は俺の獲物だ。お前が先に手を出したら容赦しないからな」

その一言にともえはむっとした表情を浮かべたが、すぐに口元にひやりと冷たい笑顔を浮かべた。

「あら、悠輔はあんただけのものじゃないのよ。あの人はあたしの——」

「それから」

そう言うと英太はカウンター席から立ち上がった。

「仁科ともえ——この前の借りはいつか返させてもらうぞ」

「そうそう、あんたあの時あたしにぼろ負けしたんだよねー。あれでも手加減してあげたのに」

「うっさい。俺だってあの時は手加減してやったんだ。バーカ」

その一言に英太は心外したようにむっと口をへの字に曲げた。

「ともかく、俺の言いたいことはそれだけ。さてと……俺も用事があるからそろそろお暇しようかな」

「用事？ あんたの用はもう終わったんじゃないの？」

「ふん……」

その一言に英太はニヤッと笑った。

「俺も決着がついてないんだよ。お前の追ってる男との最強を賭けた決着がな……」

3 ツイてない悠輔

雨で濡れた東都大学のキャンパス

あれほど人込みでごった返していたその場所は大雨の影響で閑散としていて人っ子ひとりいない。

その滝のような雨の中、悠輔はただたある場所へ急ぐためずぶ濡れになりながら走っていた。

問題のくノ一ともえの元にいる早紀の場所に向かうだけなら簡単だった。それだけなら何の滞りなくことは収まるはずだった。

だけど——今日の僕はどうもツイてないようだ。

絶え間なく他流派の忍者たちに追跡されまくっている——のだから。

その瞬間、悠輔はすっと身体をかがめそのまま前転した。

それと同時に彼の頭上を数個の手裏剣が空を切り裂いていった

「ええいっ！鬱陶しい！」

瞬間、悠輔は踝に隠してあった針を取り出すとそれを瞬くスピードで投げつけた。

雨の中崩れ落ちる人影——だが今回の敵は一人だけではない。

気配は5人か……悠輔はすっと立ち上がるとメガネをすっと取り外した。

「僕は忙しいんだ。相手なら一瞬で終わらせてやる！」

そう言ったその瞬間、悠輔の瞳はまるで燃えるように赤く光った。

そして次の瞬間、濡れたアスファルトを蹴り獣のように襲いかかる5人の影——

悠輔はすっとその場に立ち尽くす赤い瞳で襲いくる影をぎりぎりまで見極める。

彼の瞳には見えていた。奴らがどんな動きをして襲いかかるかどんな軌道で攻撃をしてくるか——

そして、襲いくる影の刃が悠輔の身体を撫で切ろうとしたその時彼は瞬時にその場から姿を消した。

はっと顔を上げる追跡者の影。悠輔は彼の頭を踏み台にしてさらなる高みへと舞い上がっていた。

悠輔の両手には合計十本の針。それを大粒の雨に紛れ込ませるかのように彼らの頭上でうち放った。

雨とともに注ぎ込む針の雨――

それに男たちは急にひるんだ格好を取る。あるものは急所を刺され、あるものは急所を逸れ――だが、今回悠輔はそれだけで終わらせる気は毛頭無かった

悠輔がきれいに濡れたアスファルトに着地したのと同時に彼は両手を横にかざした。

次の瞬間、一度放たれ死んだはずの針たちが立ち上がり男たちに再び襲いかかった。

その動きはまったくもって予想不可能。

下から上へと突き上げる針もあれば左から右へ駆け廻る針もある。

その動きに男たちは翻弄され、そして悠輔の作った罠にまんまとはまっていく。

悠輔は顔の表情一つ変えずに男たちに背を向けたまま手を激しく操った。

すると男の一人が何かによって血を吐き倒れこみ、そしてその隣の男は一瞬で手を切断され叫び声をあげた。

男の周りには行き交う針意外にも光る何かが襲っている。

それは針のすぐ後を追うように男たちを一瞬で取り囲みそして襲いかかってきた。

それは彼の宣言通り一瞬で終わった。

悠輔が手をギュッと握り前にかざしたその瞬間、男たちは一斉に血を吐き出し何も言葉を出さな
いまま崩れ落ちたのだった。

「手間掛けやがって……」

悠輔はそう言うとすっと立ち上がると男たちを襲っていた針を手の動き一つで手元に回収した。

そして後ろを振り向くとため息交じりに一言言った。

「そこにいるのはばれてるよ。いい加減出てきたらどう？」

悠輔は真紅の瞳を光らせ今は姿を見せぬその人物に強く警告した

それと同時にいつでも相手になってやると言わんばかりに彼は身体から禍々しい殺気を発してみせる。

「ふん……気づいていたか」

それを見て観念したのか、その男は悠輔の前にすっと舞い降りた。

大きい——相手はタンクトップを着た筋骨隆々のとてつもない大男だった。

しかし、今まで相手していた雑魚とはわけが違う。桁違いの強さが醸し出す空気だけで伝わってくるようだった。

「しかし、驚いたよ。そのワイヤー付きの針を遠くから操って複数の相手を葬り去るとは——うわさ通りの恐ろしい使い手だな。伊賀の家元は……」

男のその一言に悠輔はハッと息をのんだ。

つまり、この男は自分の術のからくりを言い当てるくらいの眼力がある——それなりの実力のある他流派の幹部だということだった。

「誰だ……」

悠輔はその男から一步引くと彼を真紅の瞳で睨みつけ戦う構えをとった。

それを見て目の細いその大男は鼻で悠輔を笑った。

「馬鹿はよせ。ボクはお前と戦う気はない」

「じゃあ、この男たちは？ 君の配下じゃないのかい？」

「知らないね……」

そう言うと大男は冷めた目で悠輔が倒した男たちを見た。

それを見て悠輔は初めて殺気を弱め、彼を湿った眼で見つめて言った。

「とりあえず名を名乗ってもらえないかな。それからじゃないと判断できない」

「ほう……それもそうだな」

そう言うと男は細い眼を皿に細め柔和にほほ笑んだ。

「ボクの名は応野邦彦。奥州応変流黒頭巾二十代頭目だ」

「応変流——か」

噂には聞いていた。東北にとんでもない使い手がいると言うことは——

おそらくそれは目の前の応野邦彦その人物なのだろう。それを悠輔はすぐに感じ取っていた。

「——で、僕に何の用だい？」

「藤林悠輔——お前に警告しにきた」

「警告？」

その言葉を聞いて悠輔は初めて顔に色を見せた。

「お前はその強さから他流派から狙われ過ぎている。それは重々わかってるな」

「別に……それは悪いことじゃないと思ってるけど」

「いや、お前ら他流派の不毛な争いで迷惑を被る人だってたくさんいる。お前だって表の世界で

友人や恋人だっているだろう——そんな彼らをお前らの利己的な争いで傷ついたらと思うといくら冷酷な忍者であるお前でも心が痛むであろう」

「——」

何を言い出すんだ——こいつ？

その説教めいた言葉を聞いて悠輔は思わず強く困惑した。

「何が言いたいんだ君は……」

悠輔はそう言うため息をつき邦彦をキッと睨みつけた。

「初対面でいきなり説教面か……そんな偉いものなのか？ 応変流ってやつは……」

「お前、本当にそんな冷酷なことが言われるのか？」

「なにが？」

「現に今お前の恋人はある流派にさらわれそうになっている……それでもお前は修羅の道をやめないのか？」

「……なんだって？」

邦彦のその一言を聞いて悠輔は強く動揺した様子を見せた。

早紀が危ない——ずっと思っていた危惧がその瞬間現実味を帯びてきた。

「やっぱり君も僕の敵なのか？」

悠輔がそう言ったその瞬間彼の身体から再び殺気が噴き出した。

そして次の瞬間には彼の手には再び数本の針が光っていた。

「違う！ ボクは警告しに来ただけだ！」

「うるさい！」

そう言った瞬間、悠輔は左右に生えた十数本の針を邦彦めがけて解き放った。

それを見た邦彦はそれを太い両手で身体をガードすると、真正面から悠輔の針を受け止めた。

針は確かに邦彦の身体には当たった。しかし、それは深くは身体に刺さらず乾いた音を出して濡れたアスファルトに落ちて行った。

「なるほど、身体鋼化か……面白い術を持っているな」

そう言うと悠輔は真紅の瞳で邦彦を見て笑った。

邦彦は少し不機嫌そうな表情を浮かべため息をついた。

「一言言っておくが。ボクとやっても結果は無駄だぞ……」

「そんなのやってみなきゃ分かんないだろ」

そうは言ったものの、確かに邦彦の言うとおりの手数では若干こちらが不利かもしれない。

しかも、それを相手は見切っている。

安全を取って引くべきか、それともプライドを取って戦うべきか——雨の中濡れた針を手の中で遊ばせながら悠輔は邦彦と対峙した。

「——無駄な戦いはやめよう」

最初に引いたのは意外なことに邦彦の方だった。

「何度も言うけど今日はお前と戦いに来たんじゃない」

「じゃあ何しに来たの？一体——？」

「僕は——」

そう言うと邦彦はくるっと踵を返し悠輔から背を向けた。

「ある女との決着をつけに来た。それだけだ」

「ある——女？」

「たまたまその女を追っていたらお前の彼女がさらわれるのを見た——それだけだ」

それを聞いて悠輔は目を見開いて驚いた。

仁科ともえ——それが邦彦が狙う女の名前で悠輔の恋人早紀を窮地に追いやろうとしている女の名前。

「ボクは今からその女と決着をつけてくる」

「それで？ 僕に協力しろとでもいいたいの？」

「馬鹿を言うな。お前の力などなくてもあの女など倒せるよ」

そう言うと邦彦はふっと微笑した

「だけど、お前の恋人は無事で助けられる自信はない。そっちの方はお前が勝手に助けてやってほしい」

「そんなこと……君に言われなくたって」

そう言うと悠輔は不機嫌そうに手を組んだ。

「つまり君は仁科ともえを倒す、僕は早紀を助ける——結局はそうやって協力してほしいっていいんだろ」

「お前だって嫌だろう。自分たちの流派の戦いに何の関係のない彼女が巻き込まれるのは……」

邦彦のその一言に悠輔は思わず沈黙した。

確かにその通りだった。

自分が最も恐れていたことそれが早紀が悠輔の恋人ゆえにこの戦いの渦に巻き込まれるというシナリオだった。

それを回避するため今までどれだけの苦勞をしてきたのだろう。

早紀の前で自分を偽ったり、小さな嘘をついたり——だけどそんな小さな努力も今ではあまり意味がなかった

「わかった。今回は特別に君に協力してあげる」

悠輔は小さく笑いながらそう言うと邦彦をきっと睨み返した

「だけど、覚えておくんだな。僕は君に負けたわけじゃない！　いつかこの借り——返してみせる！」

4 邪魔者

「おーっほっほっほ！ これであたしの勝ちよ！」

ともえはアテンザの後部座席で勝利の高笑いをあげた。

すぐ隣にはぐっすりと寝込む愛しの藤林悠輔の恋人である憎き進藤早紀が寝込んでいる。

こんなことをしたらきっと悠輔は怒るであろう。自分の命を狙いに来るかもしれない。

でもともえはそれでも良かった。彼と命のやり合いをしても彼の命を奪おうともそれはそれでいい結果だと思っていた。

ともえは悠輔のすべてが欲しかった。愛も命もすべて自分のものにしたかった。

そのためであれば何の犠牲も払うつもりだった。たとえ表の世界に住む彼の恋人を犠牲にしようとも――

「早紀ちゃん……あなたは好きにはなっちゃいけない人を好きになっちゃったのよ」

ともえは暗く病んだような瞳で早紀を見つめると軽く彼女を小突いた

「残念だったわね。その人を好きになったがためにあなたは命を失う――身分相応の恋をしなかった代償よ」

早紀は答えることはなかった。

ただ後部座席にもたれ気持ちよく寝息を立てるだけだった

「蓮堂！ まだアジトにつかないの!？」

そう言うともえは運転席の戸隠の忍者蓮堂に強い口調で言い放った。

「そうは言いますが、お嬢様。渋滞にはまりまして――」

「ああッ！ もう！ 情けないわね！」

そう言うともえは不機嫌そうにつんと顔をそむけた。

「この間に他流派が襲ってきたらどうしてくれるのよ！　せっかくの人質が奪還されたら元も子もないわ！」

「ですが、お嬢様——！」

「もういい！　どっか抜け道探しなさいよ！」

ともえの痙攣に蓮堂は困った表情を浮かべながらナビで抜け道を検索しはじめた。

きゅっとハンドルを右に切るとアテンザは住宅街に抜ける小さな路地に入った。

——これで渋滞地獄から抜け出せるわね。

そう思い、後部座席にごろりともたれかかったともえだが、アテンザは路地に入って間もなくなぜか動きを停止させた。

面食らったともえは運転席の蓮堂に食ってかかった。

「今度は何よ！」

蓮堂はその問いに緊張した面持ちで答えた

「お嬢様……検問です」

「検問!？」

何でこんな時間に——！

ともえは焦った表情で前を見た。

大雨が降る中、そこにはたった一人の少しだらしのない警察官がともえたちの車を止めていた。

「すみませーん。ちょっと近所で事件があったもんで」

ぼさぼさ頭のだらしのない警察官はやる気がなげに蓮堂の乗る運転席に近づいてきた。

「すこし事情を聴くために外に出てくださいませんか？」

その一言に運転席の蓮堂は警戒の眼差しで警察官を睨みつけた。

だがその迫力ある目に対しても警察官はニコニコとした表情を崩すことはなかった。

(どーするのよ！ 蓮堂！)

後部座席のともえは湿ったような目つきで蓮堂を睨みつけると警官に悟られないよう『心読』で話しかけた。

(ここで警察に捕まったら元も子もないわよ！)

(わかってますって。お嬢様——)

(じゃあどうすんの!?! 強行突破しちゃう?)

(いえ……話をつけてきます)

その一言にともえははっとした。

(ちょっと、あんた正気!?)

(大丈夫ですって。相手はただの警官ひとりですぜ。こっちが本気になれば簡単に始末できるでしょうが)

蓮堂のその一言にともえはどう反論していいのか迷った。

確かに彼の言うとおりに、相手はただの警察官一匹制圧するのはそう難しくない相手かもしれない。

けどともえはこの警察官の真意を測りかねていた。

なんだろう。この嫌な胸騒ぎは……

このやる気のない警察官の顔を見た瞬間覚えた理由なき違和感にともえは激しく動揺していた

「なにかあったんですか……？」

蓮堂は声を口に出してそう言うと雨の降る車の外に出た。

その一言に警察官はニヤッと不気味な笑顔を浮かべた。

「いえ、この辺の大学で女の子が一人行方不明になりましてね……その捜索ですよ」

「それはら我々には関係ありませんよ。この二人は同じ大学の友達でしてね……一人が具合が悪いから家に送ってあげてるところです」

「ほう……本当にそうなのかな？」

その瞬間、警察官の瞳が青白い光を発した。

それを見た蓮堂は初めて強い緊張感で顔をしかめた。

「お前……！」

「『心読』がだれも聞こえないと思ったのが間違いだったな。同業者には筒抜けなんだよ。戸隠さんよ！」

「——！」

その言葉を聞いた瞬間、蓮堂は真っ先に動いた。

上着のそでに隠してあった小型ナイフを手にとるとそれを謎の警察官の顔めがけて突き放った。

自分のスピードなら遜色なく相手を殺れる筈だった。その刃が空を切る感覚を感じるまでは。

蓮堂はハッとした。一撃で葬ったはずの警察官は彼の目の前からぱたりとすがたを消していたのだ。

そして次の瞬間、彼は背後で今まで体感したことのないおぞましい殺気がわき上がるのを感じた。

「お前の力はその程度か——」

警察官は表情一つ変えてはいなかった。

それを見て蓮堂はカッと頭に血が上った。もう一方の手にも仕込み小型ナイフを手の持つと猛烈な勢いで余裕警察官めがけて斬りかかった。

しかし、その刃はまたしても空を切るしかできなかった。

警察官はまるで流れるかのように蓮堂の刃を紙一重でかわして見せたのだ。

「貴様——ッ！」

「雑魚は引っ込んでな」

そう言ったその瞬間、警察官はすっと身体をかがめ獣の如くの勢いで蓮堂に襲いかかった。

そして、彼が足元の水たまりにを蹴りあげた次の瞬間だった。

それは刃——いや、刃にも似た鋭さをもった水しぶきだ。

それが一瞬にして蓮堂の身体を切り裂き貫いていったのだった。

荒い息のままつと口から流れる赤い血。彼はそのまま体中から血飛沫をあげそして崩れ落ちて行った。

「さて……と」

警察官は冷たい表情一つ変えぬまま車の中のある人物を見た。

その眼はギラギラと青白く光り、口元はひやりと恐ろしい笑みを浮かべていた。

「そろそろ、出てきて話をしないか？ 戸隠の姫様よお」

その言葉を聞いてともえは車の外にでた。

その表情は意外にも凜としており、瞳は強く冴えた光を湛えていた。

「水遁とはずいぶんな術使ってくれたわね」

ともえは一言そう言うと警察官をギラリと睨みつけた。

「あんただだ者じゃないわね。何者よ」

「ふ……意外と顔は割れてないようだな」

そう言うと警察官はぼさぼさの髪を掻きあげ青白い瞳でともえを見た。

「俺の名は上月静夜——お前が追っかけている藤林悠輔の永遠の^{ライバル}好敵手である甲賀の頭目さ……」

「悠輔のライバル？ って、ソレ自分で言うの!? 寒ッ！」

ともえは上月静夜と名乗った警察官向って馬鹿にしたような笑顔を浮かべた。

それと見て静夜はむっとした表情を初めて浮かべ黙ったまま彼女を睨んだ。

「……まあいいや。で？その甲賀の頭目さんは何しに来たのかしら？」

「要件を言えば早い——女を渡せ」

「女って悠輔の女のこと？」

「そう言うことだ……」

その一言にともえは狂ったような笑い声をあげた。

「アハハハハ！ なにそれ！ あんたも女使って悠輔おびき出そうって言うの？」

「お前らみたいな姑息な流派と一緒にされたくないな」

そう言うと静夜は深いため息をつき青白く光る目でともえを睨みつけた

「俺はただ藤林悠輔と戦って奴の奥儀を破りたいだけ——お前みたいな疚しい理由と一緒にするな」

「何よお……あたしの理由が疚しいですってえ！」

その一言を聞いてともえの表情がガラッと変わった。

歯を食いしばり、眼には怒りが灯り、そしてツインテールの髪を逆立て彼女は怒りに燃えていた。

しかし、静夜はそんな彼女をさらにたたみかけるかのように言い放った。

「ああ、疚しすぎて醜いね。自分の好いた男に何の力のない女がいて怒り心頭なのはわかるが、そこから何の関係のない彼女を巻き込んでまであの男を振り向かせたいのかと思うとゾッとする。お前は忍者の端くれにも置けない女だ！」

その一言でともえの中で何かがキレた。

彼女は唇を激しく噛むと暗く鋭い瞳をギラリと光らせた。

それはあまりにも一瞬の出来事だった。

ともえがずっと手を横にかざしたその瞬間、煌めく光が静夜の首を横一闪した。

彼は余裕綽々の笑顔を浮かべたまま、首から頭がこぼれおちたのだった。

雨の中濡れたアスファルトに崩れ落ちる静夜の軀と生首——それを見てともえはニヤッと冷たい笑顔を浮かべた。

「あーら。大口叩いた割には手ごたえがないわね」

ともえの手には身体と同じくらいの長さを誇る大きな鎖鎌が握られ、ひゅんひゅんと風を切らせながら彼女はそれを軽々と振り回していた。

「あーん！もう、しずちゃんつまんないじゃーん！ もっと楽しませてくれると思ったのに——！」

そう言ったその瞬間、ともえはその真実に面食らった。

目の前に転がっていた静夜の生首をふと見るとそれはただの身代わり人形の頭でしかなかったのだ。

何故——!? あの短時間で身代わりの術を使ったって言うの——?

ともえは鎖鎌を振り回りながらどこかへ逃げた静夜の姿を目で追った。

しかし、静夜はすぐにもえの前に姿を現した。両手に眠りこける早紀を抱き、住宅の上の屋根の上に立ち尽くして。

「なかなかいい攻撃だったよ。戸隠の姫さん」

静夜はそう言うと青白い瞳でもえを見下ろした。

「一步間違ってたら本当に頭と首が離れ離れになってたぜ……ホント危ない奴だ」

それを見てともえはぎりっと歯ぎしりして彼を睨みつけた。

「ちょっとお! その女返しなさいよ!」

「残念だな。お前が隙を作ったからいけないんだ」

「きい———ッ!! 悔しい!」

そう言い放つともえは激しく地団駄を踏み悔しがった。

それを見て静夜は勝ち誇ったような笑顔を浮かべ言った

「まあ、そう言うことだ。戸隠の姫さんよ……世の中そううまくいかないってことだ」

「うるさいわね! あんた今度会ったらただじゃおかないわよ!」

「ふ……その日を楽しみにしてるぜ」

静夜は一言そう言うと迫りくる夕闇の中へと姿を消して行った

それをともえはただ呆然と見送るしかできなかったが、直後彼女の口元に不敵な笑顔が生まれた。

「しずちゃんったら、馬鹿ねえ」

そう言うと彼女はすっと黒と紫の基調の携帯電話を取り出した。

その画面にはGPS画像とともに赤い点が絶え間なく西へと向かっていた。

「あたしが早紀のポケットの中に発信器入れてたなんて予測できたのかしら……これであなたの居場所は筒抜けってわけよ」

ともえはそういうと携帯電話を両手に抱くとまた病んだようなため息をついた。

「さーって、この情報誰に教えようかしら？ やっぱり悠輔には教えるべきだよねえ～。だとしたらこれって三つ巴の戦いになるのかしら？ うーん、それってとても魅力的!! ともえちゃん萌えちゃうわぁ」

そうきゃぴきゃぴと言いながらともえはその場をスキップで後にする。

鎖鎌をぶんぶん振りまわしながら――

5 嵐が来る

「誰だ——」

東都大学の自転車置き場——悠輔の元にその電話が入ったのは大学を出ようとして自分の大型バイクにまたがったその時だった。

それは非通知の電話だった。

だが携帯が鳴ったその直後から悠輔は何か嫌な予感が身体の中をよぎっていた。

それがどこの誰かからは知らないが、悠輔は携帯に出たとたん威嚇の声を出していたのだ。

「そうピリピリするなよ。家元」

電話の向こうの声は男だった。

否、このねちっこいしゃべり方——どこかで聞いたことがある。

そうだ——あの男だ。自分をここまで追い込んだ張本人のあの男だ。

「上月静夜——！」

悠輔はその名をつぶやくと、ぎりっと歯ぎしりをした。

「お、声だけ聞いて俺だと気づいたか。さすがだな」

その言葉を聞いて電話の向こうの上月静夜は少し嬉しそうな声をあげた。

それを聞くだけで悠輔はなぜか心が搔き毟られそうな気分になったが、あえて冷静を装って彼に声をかけた。

「なるほど、僕の携帯番号まで裏で手に入れる力があるって言いたいんだな」

「そう言うことだ」

——本当に厄介な相手だ。

悠輔はそう心の中でつぶやいたがすぐに冷静になって電話の向こうの静夜と対峙した。

「で、何の用？」

「さっき戸隠の姫様のところからお前の女を助けてやった」

その一言に悠輔はカッと腹の底から怒りがこみ上げるのを覚えたが、それを相手に悟られないようにあえて冷たい反応で返した。

「別に君に助けてもらう筋合いはない」

「おや、彼女を殺しかねないあの女の手から彼女を救ってやったのに——」

「君こそ早紀をさらって何をする気？ それで僕をおびき寄せる魂胆なんですよ」

「おーおーえらい言われようだな。助けてやったのに人さらいみたいな言われ方ってないだろ」

その一言に悠輔は真紅の瞳で前をじっと見た。

そして電話からでも殺気じみた空気がわかるようにあえて低い声で一言言った。

「——早紀に手を出してみろ。それこそ君の身体はバラバラに引き裂かれるよ」

その一言に電話の向こうの静夜は不気味な笑い声をあげた。

やれるもんならやってみろ——悠輔にはそんな挑戦状に聞こえた。

「まあ、ともかく、今から俺の居場所をお前に送る」

「ほう……やっぱりそうきたか……」

そうやって僕を戦いの場に引っ張り出そう——って魂胆か。

悠輔はそう思い口元に蔑んだ笑みを浮かべ言った。

「いいよ。君の挑戦受けてあげる」

その一言に電話の向こうの静夜は深いため息をついた

「それがなあ、家元。この勝負かなりの邪魔が入ると思うんだが……」

「それは覚悟の上だよ。今日はそう言う一日だから」

そう、今日はそう言う一日なのだ。

今日一日でどれだけの忍者に会ったと思っているのだろう。しかもどいつもこいつも油断のならない頭目級の相手ばかりだ。

「ともかく覚悟しとけよ。上月静夜。君だけは僕の手で決着をつける！」

電話の向こうの上月静夜はその言葉に対し鼻で笑うような声を出した。

「やれるもんならやってみなよ。家元」

そのねちっこい声に無性にムカついた。

これ以上それがばれるのがいやだったからこちらから乱暴に電話を切ってやった。

悠輔は深いため息をつくとき合を入れたように真紅の瞳で前を見て、エンジンペダルを踏み大型バイクを起動させた。

「で、君はどうするつもりだい？」

悠輔は独り言を言うようにある人物に語りだした。

それは自転車置き場のすぐそばにある立派な大木のすぐ袂、一人の大男が悠輔の様子を探るように腕を組んで立っていた。

「ボクは——ただあの女を追うだけだ」

その男、応野邦彦は顔色一つ変えずに悠輔にそう言った。

それを聞いて悠輔は蔑んだような笑みを浮かべた。

「君と仁科ともえとどういう因縁があるのか知らないけど、ボクはその関係に関しては介入する

気はない。勝手にすればってというのが正直な感想だよ」

「ああ、そうしてもらう方がこっちも楽だ」

そう言うと邦彦は巨体を揺らしすっと起き上がった。

「ボクもお前の決闘には関知する気はない。勝手に流派同士殺し合いをすればいいさ」

「つまり、君は今回僕の邪魔をしないんだね」

「そう言うことだ」

それを聞いて悠輔は呆れ半分の笑顔を浮かべた。

どうもこの応野邦彦の意図が計り知れない部分があるが今回ばかりはどうやら敵対することはなさそうだ。

「それじゃあ、あとは自分で何とかしてくれる？ 僕は忙しくなったからね」

「お前に言われなくてもやるつもりだ」

「その様子じゃ、仁科ともえの位置をつかんでる様子だね——なかなかやるじゃん」

その一言に邦彦ははっと悠輔を見た。

彼はにやにやと笑いながらバイクのエンジンの回転数を上げた。

「応野邦彦——また相まみえることを楽しみにしてるよ」

悠輔はそう言うとバイクにまたがると爆音を出しながらその場を颯爽と走り去って行った。

それを見送りながら邦彦は徐々に空恐ろしさが身体に渦巻いていた。

その瞬間疼き出す右肩の古傷——その昔、真紅の瞳を持つ男に付けられた傷

その男と全く同じ瞳を持つ悠輔との出会いは邦彦の考え方を若干変えていったのは事実だった

あの男——いつか決着をつけないとこちらが危ない。

いつか、甲賀の頭目上月静夜と対峙した際彼が言っていた言葉。

『俺たちの争いを止めるために力を使いたって言うなら、俺よりもまずあの青年を何とかしないと話のつじつまが合わないぜ』

確かにその通りだ。彼を本気で何とかしない限りこの争いはいろんな人を巻き込んで永遠に続く。

それだけの恐ろしい求心力が藤林悠輔という若者には備わっている。

否、それは彼が生まれ持った^{さだめ}宿命みたいなものかもしれない

どちらにしろ、次こそは自分の手でこの戦いを終わらせなければならない。

邦彦はすっと拳を握り、曇天模様の空を睨んだ。

嵐が来る——！

1 知らなくていい真実

ぴちゃん、ぴちゃん——

冷たい水の音が耳に響き渡る

早紀は深い深いまどろみから徐々に目覚めていく

ゆっくり瞼を開くとそこは東都大学の学園祭でも、メイド喫茶の一角でもない——まったく見たことがない場所だった

「ここ……どこ？」

まだ重い身体を起こしながら早紀は周囲を見回す

赤茶けた錆色の柱、何を作ったのかさえ謎な古い機械、そして冷たい鉄色の床——

その汚れで曇った窓からは東京の夜景が遠くに見える。

廃工場——と言っていいのだろうか。いかにも悪者のアジトと言った感じの——

そう言えばどうして自分はこんな場所にいるのだろうか

早紀は必死にこうなった経緯を思い出そうとした。

最初は恋人の悠輔に誘われて行った東都大学の学園祭。でもいつの間にか悠輔は勝手にどこかへ行ってしまい、最悪なことに大雨が降ってきて、そして——

——ともえちゃん？

そう雨宿り先で同級生の仁科ともえと会った。それで悠輔がくるまでメイド喫茶でゆっくりしていったと言われ——それからの記憶がまったくない

でもどうして東都大学のメイド喫茶からこんな廃工場にまで移動するのだろうか？

その間一体自分の身になにがあったというのか——

「おい……起きたか？」

その聞き慣れない声に早紀は一瞬身体中に緊張を走らせた。

怯えながらそちらを振り向くとそこにはぼさぼさの黒髪の男が立っていた

「そんな怯えることはない。俺は何もしないよ」

そう言うと男は早紀に優しく手をさしのべる

真っ黒なロングコートを羽織り両手にはまるで騎士のような手甲をはめている

どう見たって普通じゃない。普通とは思えない。

早紀はそんな彼の手の誘いに乗ろうかと一瞬考えたが躊躇いつつも彼の手を取った

「ありがとう——」

早紀は俯きながらそう答える。

なんだか、とても気まずい。当たり前だ目の前の黒いロングコート男がもしかしたら自分の誘拐犯火も知れないと思うとおちおち油断も出来ない

「しかし、あんた難儀な彼氏を選んだな」

「——え？」

それどういう事——？ 早紀はそう聞いたかったが男の知らず知らず出す空気を察してなかなか言い出せない。

一体この人誰だろう？ なんて悠輔のこと知ってるんだらう？ そしてどうして私はここにいるのだからう？

「なんか、ものすごく混乱してるって感じだな……」

男は困ったように手甲を付けた手で顔を搔く

その言葉にも早紀はどうしても口から言葉がでなかった。

「わかった……あんたの聞きたいことを好きに聞いてくれ。まあ答えられる範囲で答えてやるよ」

そう言うと黒コートの男はさび付いた柱にもたれかかった

早紀は最初その言葉を聞いても混乱から抜け出せなかったが、徐々に頭を整理していけるようになり戸惑いながら小さな声で訊いた。

「どうして……私はここに？」

早紀の問いに男はまるで遠くを見るような瞳をしながら言った

「仁科ともえの魔の手からあんたを助けてやった？」

「え？」

「何か睡眠剤のような物を飲まされたんだろう……昏睡したあんたは仁科ともえの一味に拉致されるところだった。あのお嬢さんあんたのことが目障りでたまらなかったみたいだし本気で殺しにかかったたのかもな」

男の口から淡々と語られるその言葉は早紀にとっては衝撃としか言いようがなかった。

ともえちゃんが私に睡眠剤？拉致？そして殺す——？

何かの間違いだと信じたかったが、消えた記憶を埋め合わせると男の言葉が一番ふさわしいとしか言えなかった。

「混乱するのも当たり前だよな。俺もあんたの状況に同情する——だけど、あんたがこんな事態に陥ったのはあんたの彼氏に原因があるんだぜ」

「悠輔——？」

その名前を口にしたその瞬間早紀はハッと目を見開いた

そして黒コートの男を見ると動揺した様子で訊いた

「なんであなたは悠輔を知ってるの？」

その問いにも男はポーカーフェイスだった。そしてそのまま一つ息を吐いて早紀を見た

「覚悟はいいか？」

「覚悟？」

どういう意味よ——そう訊く前に男は鋭い眼光で早紀を見て言った。

「あんたの彼氏藤林悠輔の正体を知る覚悟だ」

早紀は思わず息を呑んだ。

表情の乏しい男の顔がその瞬間恐ろしく険しくなった。

たかが彼氏の秘密を知るくらいで何が覚悟なのだろうと疑問に思う暇もなく早紀は思いっきり男の真剣な表情に見入っていた

「世の中には知らなかった方が良くってたくさんある。これから言う藤林悠輔の秘密だってその一つだと思う——だけど、それでもあんたは知りたいと思うか？」

その言葉に早紀は一瞬沈黙した。

だけど、彼女に残された答えは一つしかない。たとえそれが知らなくても良いことでも——

「知りたい」

早紀は男の顔をまっすぐ見てはっきり言った。

そんな彼女を見て男は念を押すようにもう一回同じ事を訊いた。

「本当に良いんだな？」

「いいわよ。だって知りたいもん！ 悠輔の本当のこと……」

早紀のその言葉を聞いて男は深いため息をついた。

そして一瞬の沈黙の後、彼はゆっくり口を開いた

「彼は——忍者なんだよ」

「は？」

その一言に早紀は目が点になった。

そして、彼女は馬鹿にするような乾いた笑い声を上げて男を見た。

「何……その冗談」

「冗談と思うなら勝手だけどな」

「じゃあ何だって言うの!? こんな世の中に忍者なんかいるわけ——！」

その瞬間、男の目が青白く冷たい光を発した

そして早紀の喉元には鋭い刃。

早紀はそれに息を呑むしか出来なかった。

「それがな、このように生きてるんだよ。忍者は」

怖かった。泣きたかった。逃げたかった——だけど、もう知ってしまったからにはそれが出来なかった。

早紀はただただ呆然とするしか出来なかった。

悠輔が忍者だと言う、真実を——

「すまん……驚かすつもりはなかったんだ」

男はそう言うとした爪を手甲の中に収めた。

「だけど、あんたが愛している男は伊賀藤林流次期家元——日本でも5本の指にはいるほどの忍者だ……それでもあんたはあの男を愛せるのか？」

その問いに早紀の答えは返ってこない。

男は小さなため息をつくと踵を返した。

「俺から言えるのはこれだけ。あまりおしゃべりするとあの男が取り返しが付かないくらい怒り出すからな——」

「待って！」

そのまま去っていく男の足を止めたのは早紀のその一言だった。

「あなたは——悠輔をどうするつもりなの？」

その言葉に男は一瞬の間の後、彼女の方を振り向かず言った

「倒すよ」

「え？」

「俺はあの男と戦わなければいけない。そういう星に生まれたんだ」

まったく想像もできない世界だ——早紀は率直にそう思った

だけど目の前に突き付けられた真実はそれを信じなければいけない脅迫感を早紀に与えた

たぶんそれが知らなくてもいい真実を知った代償なのだろうか——

「もしその戦いであんたの彼氏を殺しちゃったらごめんな」

男は早紀の方を振り返るとにっと笑顔を浮かべて言った。

「だけど、それが俺たちがいる世界なんだよ。まああんたには一生解らないだろうけどな」

そう言った男の身体が早紀の前でふっと消える。

まるで風景に解けるように消えていった男を呆然と見送りながら早紀はその場に思わずへたり込んだ。

2 悪い夢

これは悪い夢か何かだろうか――

男が去ってから早紀は呆然とその場に立ち尽くしてそのことばかり考えた。

悪夢としか思えない。

友人でもあった仁科ともえに睡眠薬を盛られて、眠りから覚めたら目の前にいた見知らぬ黒コート男に藤林悠輔の正体を教えられた。彼は忍者であると――

ああ、私おかしくなってる。きっとまだ睡眠薬の影響が残っているのかもしれない。

だから悪い夢のような今が存在するし、幻のような黒コート男が見えたんだ。

夢ならいつか醒めるもの。それならいっそのこと今すぐ醒めてほしい――

早紀はそう思いながらふらつく足でゆっくりと立ち上がった。

とにかくあの男の言うとおりに、ここから出よう。それが一番の夢の醒める道だ。

恐怖と薬の影響で足がとてもふらつく。まるで雲の上でも歩いているかのように足場が不安定に思えた。

だけど一歩ずつ足を前に踏み出して早紀は薄暗い資材置き場のドアへと近づいた。

そして、ぎいっと錆びついた鉄のドアを開けると、そこはだだっ広い大きな空間だった。

おそらく工場が稼働していた時はここに機材や資材がたくさん置かれていたメインの工場だったのだろう。

だけど、工場が引き払った今は何もなくて静寂と暗闇が支配するただの広い空間になっていた。

――やだ、本当にサスペンスドラマみたい。やっぱり私拉致られたのかしら？

早紀はそんな考えが頭によぎったがすぐに考えを変えその部屋を縦断するように出口へと歩きだした。

その時だった。

カツン、カツンと厚底ブーツを鳴らす音がこの広い空間に響き渡る

早紀はその音にはっと顔を上げるとそこには街明かりに照らされた一人の少女の影。

大きなツインテールにフリフリのゴスロリワンピースにリボンがついたヘッドセット——

その姿を見て早紀ははっと息をのみ警戒の表情を出した。

「ともえ——ちゃん？」

その少女の影はどんどん早紀の方へと近づく。

それと同時に彼女の手には鈍く光る何かが握り、それをゆっくりと振り回していた。

それはとても長い鎖、そして、その先には大きな鎌のような刃物がついていた

「あーら、早紀ちゃんもうお目覚め？」

彼女は不気味に笑いながら一言そういった。

「できればずっと寝ててもらいところだったけど、邪魔が入っちゃったわね……」

そんな不気味に笑う彼女をみて早紀は初めて怖いと思った。

だけど逃げようとしても足が自由にきかない。恐怖で完璧に怖じ気づいている。

「どうして——」

早紀はそんなともえに悲鳴に近い声で言った。

「どうしてあなたはこんなことをするの!? 私があなたになにか恨まれることしたの!？」

「やったわよ」

そう言うともえの瞳がその瞬間、暗く光った

「あんたはあたしの大事な^{ひと}男性を盗った。それだけでも十分万死に値するわ」

「何で——！ あなたと悠輔何か関係でもあるっていうの!？」

「ええ、あるわよ……大ありよ」

ともえはそう言うのと急に病んだようにふうっとため息をつくときらきらと瞳を光らせた

「あんたが悠輔と出会う遙か前、あたしと悠輔は結ばれる予定だったの。そう——あたしたちいわゆる許嫁ってところかしら」

「い……許嫁!？」

そのことを聞いて早紀は度肝を抜かされた。

何かの間違いだろう。そう一瞬は訂正しかけたけれどともえはさらに悦に入った表情で語り続けた。

「あれは確かあたしが14の時だったかしら——親に15歳の藤林悠輔の写真を見せられてこの人と将来結婚するのよっていわれたの。まあお見合いの話は両家の思惑のうちにお流れになっちゃったけどあたしはその時から悠輔って人に夢中！ だってすごくいい瞳してるし、なんて言ったらすごくイケメン！ それは5年たった今でも気持ちはかわっていないの！」

「はあ……」

「だから……あんたが悠輔の女だってことがとにかく気に入らないのよ！」

そう言った瞬間、ともえは振り回していた鎖鎌を止めて早紀に向かってそれを構えて見せた。

「あんたみたいな素人同然の一般人が悠輔みたいな高貴な人とつきあうなんて許せない！」

「そんなこと言われたって——」

そう言うともえは声を震わせ反論した。

「私だって知らないわよ。悠輔のことなんて表の顔しか知らなかったのに——」

そうだ。私の知っている悠輔は表の顔なんだ。

あの無愛想で頼りない東大生の姿はすべて彼の表の顔——だとしたら裏は？

「許せない！ そんな覚悟で伊賀藤林流の家元と付き合ってただなんて——！」

そう言ったとたんともえの表情が急に怒りに染まった。

金髪のツインテールを逆立て瞳は恐ろしいぐらいにつり上がっていた。

「進藤早紀！ おとなしくここで死になさい！ それがあなたのため——悠輔のためなのよ！」

ともえがそう言ったその瞬間、彼女は右手に持った鎖鎌を早紀めがけて放った。

風を切って空を切り裂く光り輝く鎖鎌。

ダメだ……私ここで死ぬんだ——

早紀はその瞬間、そう感じ恐怖でぎゅっと目を閉じた。

.....

.....

.....？

あれ——？

一行に襲ってこない刃に早紀は恐る恐る瞳をあけた。

早紀のすぐ目の前には一人の男がいつの間にか仁王立ちしていた。

悠輔——？ 否違う。

あの黒コート男——？ それも違う。

それは彼らとは比べものにならないほど巨大な背中だった。

「探したぞ——仁科ともえ」

大男はともえの鎖鎌を全くの素手で握っていた。

そこから血は出ているのだがそれ以上のダメージは受け付けていないように見えた。

「あんた——！ 誰よ！」

ともえはその大男の顔を見て初めて表情に焦りを見せた。

それを聞いて大男はにやっと笑みを浮かべともえの鎖をぎゅっと引いた。

「応変流——って言えば話が早いかな？」

「応変流ですって？」

その言葉を聞いてともえは大きな瞳をさらに大きくして驚いた。

「——あんたが応野邦彦だって言うの？」

「ああ……そうさ」

その名を聞いてともえは少しだけ心当たりのあるような苦々しい表情を浮かべた。

だがすぐに彼をキッとにらむとまるで牙を見せるように唸った。

「あんたね！ あたしの仲間たちを次々と血祭りに上げてるってヤツは——」

「襲われたからやり返したただけだ……」

「うるさい！ 大体出てくるタイミングが最悪！ せっかくあたしの敵を殺れる絶好のタイミングだったのに！」

そう言うともえは恨めしそうに邦彦と呼ばれた男を見た。

それを見て邦彦は若干あきれた表情を浮かべた。

「この可愛い一般人がお前の敵か——これだから戸隠の忍者は低レベルだと言われるんだ」

「うっさい！ あんたみたいな色のない男にオトメのコイゴコロなんてわかるはずないでしょ！」

「やれやれ……誰のせいでここまでこじれたんだか」

邦彦はそう言うと後ろで震え続ける早紀をちらっと見た。

その糸のように細い目はただひとつここから出て行けと強く言っているようだった。

「とにかく、戸隠の姫さんや。ボクはここで君を殺すよ。それが君たち戸隠との因縁を解決する唯一の方法だからな」

「あたしを殺すう～？ やれるもんならやってみれば」

そう言うとももえはすっと手をかざすと小さく呪文を唱えた。

すると次の瞬間、邦彦の足下からもやっと紫の煙が勢いよくわき上がった

思わず咳き込み煙から目をかばう邦彦——その隙を突きともえは高く跳躍し邦彦の首めがけて鎖鎌を振り抜いた。

それを邦彦は右腕一本ではじき飛ばした。鋼化した邦彦の身体はどんな刃でさえ通さなかった。

だがその手もともえは十分考慮していた。

次の瞬間彼女はワンピースのポケットからたくさんの紙を振りまいた。

ともえが手を振るとそれは意志を持ち白く小さな蜻蛉のように飛び立ち始めた。

そしてみるみるうちにそれは邦彦の巨体にべたべたとくっつき始めた

「小癩な……」

邦彦はそう言うと静かに目を閉じた。

そして小さく息を吸うと次の瞬間彼の細い目はかっと見開いたその瞬間、彼の全身から激しい闘気が勢いよく放たれた

吹き飛び粉々に引き裂かれる小さな紙の蜻蛉たち。

さらに追撃するかのように邦彦は地面を蹴ると猛スピードでともえめがけて岩のように大きな拳を振り上げた。

メリメリっと地面に埋め込まれる邦彦の拳。その瞬間大地は地響きをあげ地面は激しくえぐりあがった。

ともえはまたしても高く跳躍しそれを避けた。そして深く息を吸って次の攻撃に備えた。

邦彦もすぐに体勢を変えた。空を飛ぶともえめがけて手をかざすと、そこから狂おしいくらいの光と衝撃波が放たれた

だがともえはそれを焦ることなく口を大きくあげた。

次の瞬間、彼女の声に大気が震えた。

邦彦の放った闘気でさえかき消すような衝撃波が彼とそして後ろで呆然と戦いを見ていた早紀に襲いかかった。

それは耳の鼓膜を直接痛める超音波のような音だった。

邦彦は思わず耳をふさいだ。そしてよためくように思わず片膝をついた。

——それは、無敵の鋼鉄の身体を誇っていたはずの邦彦が初めてダメージを受けた瞬間だった。

「あーら。身体は硬いようだけどどいやら耳は普通のようなね」

ともえはすっと地面に降り立つと苦痛に顔をゆがめる邦彦を笑った。

「くっ……『音撃』か……」

衝撃でふらふらする頭を上げ邦彦はともえを苦しそうににらんだ。

——噂には聞いていた。戸隠には自分の声を使って相手を攻撃する秘術があると……

だが、ここまでも激し強い力があるとは——邦彦は思いもしなかった

。

「うふふ……あたしの声ステキでしょ。そんなに聞きたいならもう一度聞かせてあげる」

そう言うともえは手を前にかざすとまた大きく息を吸った。

まずい——邦彦はぎゅっと唇をかんだ

ともえの『音撃』をもう一度食らって無事でいられるかわからない。

ましてや——

邦彦ははっと後ろを振り向いた。そこには耳をふさいでそのまま失神した早紀がぐったりと倒れている。

何の訓練もしていない彼女がこの術をもう一度食らえば確実に命はない。

そのためには——何とかして彼女を黙らせないと。

邦彦は右手を横にかざすとそこに自らの闘気を溜め始めた

今度は彼女の声にかき消されないようにフルパワーをぶち込むつもりだった。

しかし、様子が変わったのはともえの方だった。

次の瞬間彼女は何かに気づいたかのように、術を貯めるのをやめて側転して何かをかわした。

直後彼女の頭を正確に狙って通り抜ける二つの細く煌めく光——

ともえ、邦彦——そこにいる誰しもがそちらの方向を振り向いた。

コツン、コツン——

彼はゆっくりとした足取りでこちらに近づいてくる。

真っ黒なTシャツの上に背中に龍をあしらった真っ黒な陣羽織、そして額には目が覚めるくらいの真っ赤な色の長い鉢巻きをくくりつけて。

もはや彼の瞳には眼鏡は存在していなかった。ただ有るのは暗闇に赤く光る真紅の瞳だけ。

昼間の顔、情けないエリート東大生の仮面を脱ぎ捨てた藤林悠輔はその瞬間、夜の顔、日本最大の忍者流派伊賀藤林流の家元『百地悠輔』としてこの場に舞い降りたのだった。

3 百地悠輔という男

「きゃあ！ 悠輔！」

彼の姿を見て真っ先に反応したのはともえであった。

「いやーん。やっぱり悠輔は似合わない眼鏡よりその格好が似合うっ～！ もう、超カッコイイ！」

ともえのその一言に悠輔は無言のまま冷たい視線で返した。

その視線には若干の怒気も混ざっていた。

「お前……ボクを助けたのか？」

邦彦は大きな身体をよろめかせながら悠輔の方を向いた。

だが彼はその一言を笑い捨て言った。

「助ける？ 馬鹿を言うな。僕は早紀を救いたただけだ」

「やだー。悠輔まだあの女に未練があるのお～」

その一言にともえは不機嫌そうに口をとがらせた。

そんな彼女をまるで軽蔑するような視線で悠輔は見下した。

「君は最低の忍者だ」

「え……」

その一言にともえの表情が凍り付く。

だが悠輔は口撃を止めることはしなかった。

「君が僕に何の恨みがあるかは知らない。だけど、一般人の早紀を僕たちの争いに巻き込むなんて僕は君を——否、戸隠流を軽蔑する」

その言葉を聞いて邦彦は言うてはいけないことを言ってしまったなと思った。

その証拠にそれを聞いたとたんともえはわなわなと身体を不気味に震わせていた。

「ひどい……悠輔」

ともえは泣きべそをかいていた。

「だいたいさあ……あんたが一般人と付き合い出すのが元凶じゃないの！ 伊賀藤林流の家元ならそれなりの相手と付き合いなさいよ！」

「誰だよ。そのそれなりの相手って——」

悠輔はその一言に半ばあきれ顔で深いため息をついた

それを見てともえはさらに怒りを瞳に溜めた。

「バカ！ いい加減に思い出しなさいよ！ 元許嫁の顔くらい——！」

「は——？ 元許嫁？」

その一言に自信ありげな悠輔の表情が初めて曇った。

それは全くの寝耳に水だった。

何かの間違いだろう——いつから伊賀藤林流は戸隠流とそう言う関係になったんだ？ 長年対立しあってた流派じゃなかったのではないのか——？

「やだあ……本当に忘れてる」

悠輔のその困惑した表情にともえは不機嫌そうに口を曲げた。

「ねえ、覚えてないの？ あんたが15の時だと思うんだけど。こーんな可愛いくノーのお見合い写真見せられなかった？」

「……？」

その一言に悠輔は首をひねった。

悠輔はどうしても思い出せなかった。過去にあった婚約の話も少女だったともえの面影も――

「ごめん、本当に記憶にないかも……」

「えええ！ そんなあー！」

その一言にともえは衝撃を覚えた。

「何かの間違いじゃない！ あたしは5年間ずーっと悠輔のことを思って生きてきたのよ！ それなのに何？ あんたはそれを知らないで一般人の早紀と付き合ってたの!?!」

「そんなこと言われたって。そんな婚約、記憶にないもんはないんだ」

「あああ！ もういい！ 期待したあたしがバカだった！」

そう言うともえは鎖鎌の切っ先を悠輔めがけて構えた。

「藤林悠輔！ もう一度言うわよ――あたしとあの女どっちが伊賀藤林流の家元にふさわしいと思う!?!」

「そんなこと急に言われても……」

悠輔はその言葉に困惑しきりの顔を浮かべたが、すぐに彼は冷静を取り戻した。

鋭い真紅の瞳でともえを射貫くと重たい言葉で一言言い放った。

「だけどこれだけは言える。僕はくノ一を恋愛対象に絶対にしたくない。君を見て強くそう思ったね」

――ああ、また言ってしまったな。

遠巻きにその様子を見ていた邦彦は悠輔の言葉に対しそう思った。

その瞬間、邦彦が危惧したようにともえの中で何かがキレたようだった。

「ひどい――」

彼女はそう言うと半泣きになりながら悠輔を睨んだ

その瞳は深く暗い闇を湛え、唇をぎゅっとかみ、右手で再び大きな鎖鎌を振り回し始めた。

「こんなにあんたを想っているのにそんな言い方ひどすぎる！　いくら悠輔でも——その言葉は許せない！」

そう言ったその瞬間彼女は悠輔めがけて鎖鎌を放った

ひゅんと風を切り音速のごとく回転し悠輔を襲う刃——

だが悠輔の真紅の瞳はその軌道を完璧に予測していた。

彼は軽く身体を反らしその刃を回避する。そして後に続く鎖を片手一本でつかむと彼は鋭い瞳で彼女を見た。

「これが君の答えかい？」

「ええ、そうよ」

そう言うともえは病的なほどの笑顔を浮かべた。

「あたしはあんたを殺してでも一緒になる。それがあたしの——答えよ！」

ともえはそう言うと悠輔に握られた鎖を強く引いた。

その瞬間、まるで生命が宿ったかのように再び悠輔に襲いかかる鎌。

悠輔は瞬時に鎖から手を離すと軽く跳躍してその一撃を難なく回避した。

「わかったよ」

とんとと軽やかに地上に舞い降りた悠輔は腰ベルトに付けた一对の釵を勢いよく抜いた。

それをまるで遊ばせるように手の中で回転させながら悠輔は真紅の瞳でともえを見た。

「それが君の答えなら僕も答えよう。この刃でね——」

そう言った瞬間、悠輔は地面を蹴りともえめがけて獣のように躍りかかった。

それに対しともえは鎖鎌を自らの頭上で激しく振り回しそして一撃一撃を放ち続けた

ともえの鎖鎌は一直線に走り抜ける悠輔に次々のように襲いかかった。

それはまるで彼女を守るように暴れ回る龍のよう。一撃がくる度に激しく地面をえぐっていく。

しかし悠輔はその龍の一撃の一つ一つを見落とすことはなかった

彼は一撃がくる度に瞬間的に速度を上げそれを難なくかわしてみせる。その様子は瞬間移動でもしているかのようだった。

それを見てともえは瞬時に戦術を変えた。印を結び素早く呪文を唱えると彼女の周りに生命が宿った小さな紙が無数に現れた

それは紙の刃のように悠輔めがけて一気に襲いかかった。

だか、悠輔はそれを見ても焦るそぶりを見せなかった。

悠輔はカッと真紅の瞳を見開いた次の瞬間、彼の周りは激しい灼熱に包まれた。

ともえの紙の刃はあっけなく彼の前で音もなく燃え尽きていった。

「火遁結界——！」

それを見てともえは激しく動転した。

伊賀は火遁を得意としているとは聞いていたが、これほどまで瞬間的に最高位の術である火の結界を作り上げるなんて——なんて言う使い手なのだろう。

「どうしたの？ もう妖術は終わり？」

揺らめく灼熱の陽炎の中、悠輔は真紅の瞳を光らせにやっと笑って見せた。

そして次の瞬間、彼は小さく手をかざすとそこから大きな炎が立ち上った。

「それならおとなしく——死ね！」

そう言ったその瞬間、悠輔の周りをうごめいていた炎がまるで彼の命令を聞くかのように大きく燃え上がりともえめがけて襲いかかった。

まるで巨大な二体の蛇のごとく蛇体をくねらせともえに食らいつく炎。

しかしともえはその炎を高く跳躍し飛び越えると、下界で炎を操る悠輔めがけて手をかざした。

「こうなったら……結界ごと吹き飛ばしてやる——！」

ともえはそう言うと息を深く吸い込み再びあの技の構えをとった。

ともえは自信があった。これが決まれば悠輔の炎の結界も解けるし、彼に深刻なダメージも与えられる。

形勢逆転を狙った一か八かの大技——それが戸隠流奥義『音撃』だった。

彼女が口を開いたその瞬間周りに音の衝撃波の輪が放たれた。

その声は激しく大気を震わせともえの辺り一帯を文字通り吹き飛ばした。

——やった！

その瞬間ともえは勝利を確信した。

土煙の中もはやそこには悠輔の炎の気配もなにもない。

ともえは下に向けてにやっと病的な笑みを浮かべたその時だった。

それは飛び上がったともえの背後に立ち上った殺気だった。

「——！」

ともえははっとしてそちらの方を振り返る。しかし、もうそれは遅かった。

すぐ背後には先ほどの『音撃』を直撃したはずの悠輔の真紅に光る瞳——そして彼の手には鋭い釵が握られていた。

次の瞬間、悠輔は隙のできたともえの首筋に釵を激しく打ち付けた。

ともえは何もできなかった。そのまま地面に叩きつけられることしかできなかった。

立ち上る土煙。

決定的な一撃を食らったともえは痛む身体を必死に起こそうとした。

だが、ともえにもはや反撃する力など残っていなかった。

「くっ……結構効くな。戸隠の『音撃』は」

地面に優しく降り立った悠輔は、その瞬間耳を押さえ身体をふらつかせた。

どうやら先ほどのともえの一撃は全くの無効だったワケじゃなかったらしい——

「——なんで？」

ともえは痛む身体を起こしながら悠輔を見た。

「何で私のあの術をかわせたの？ 意味わかんない」

「ああ……これだよ」

悠輔はそういうと耳から何かを取り出てそれをともえの方に投げた

耳栓——それを見てともえは絶句した。

「しかし、これをしてこのダメージっていうのはちょっと恐ろしいな。なかったらと思うとぞっとするよ」

「……」

その一言を聞いてともえは黙ったまま悔しそうに土もろとも拳を握りしめた。

悔しいがこれ以上の反撃は無理——自分は悠輔に完璧に負けたのだから

「さてと……どうしようかな」

そう言うと悠輔は釵を手の中で踊らせながら蹲るともえの方へと近づいた。

「殺せばいいじゃない……」

そんな悠輔を見てともえは悔しそうにそうつぶやいた。

「あたし、悠輔に殺されるならそれはそれで本望だよ。さあ、早くやっちゃったらいじゃない！」

「うーん、彼女そう言ってるけど……応変流の頭領さんはどう思う？」

そう言うと悠輔は奥で片膝をつき耳をかばう邦彦を見た。

「ボクは……」

「大体、どういう事情があるか知らないけど彼女は君の獲物だったんでしょ？」

その一言に邦彦は怒ったように悠輔を睨んだ

「情けで譲ってやるっていいたいのか！」

「あいにく僕はそこまで優しくない」

「じゃあ、何なんだその態度は——ボクに了解取る必要ないだろ！」

その一言に悠輔はにやっと邪悪な笑みを浮かべともえの手を踏んだ。

徐々に力が入る悠輔の足に、ともえは激痛に苦悶の表情を浮かべた。

「僕は君に借りを作ってやりたいんだ」

「借り？」

「そう、応変流と戸隠流になんの因縁があるかは知らないけど、僕が今彼女を殺さずに君に譲ればそれはそれで借りができる。そうすれば君たち応変流は僕たち伊賀に頭が上がらなくなる……」

その一言を聞いて邦彦の表情が一気に怒りに燃えた。

かっと見開いた鋭い瞳で悠輔を睨み付けると、まるで牙を見せるように歯を食いしばった

「お前——それが目的か！」

その言葉に悠輔は邪悪な高笑いをあげた。

そして真紅に染まった瞳で邦彦をにらみ返した。

「当たり前じゃないか。この状況を利用しないわけにはいかないだろう」

「くそっ！」

そう言ったその瞬間、邦彦は手を前にかざし悠輔めがけて鬨気を放った。

まるでともえから離れろと言わんばかりに——

悠輔はそれを軽く跳躍でかわすと、言われたとおりにともえから離れて着地した

「それが君の答えか……」

そう言うと悠輔の瞳がまた真っ赤に光った。

邦彦はゆっくりと巨体を揺らし立ち上がり彼を睨み返した。

「藤林悠輔——お前を生かしてはおけない」

「ふうん……面白いこと言うじゃない」

「伊賀と戦うことはこの勢力争いに参戦すること——応変流としてそれを避けてこようとは思ったがもう我慢できない！ お前を倒さなければこの戦いは永遠に終わらない！」

そう叫ぶと邦彦は岩のような拳を振り上げ地面を思いっきり殴りつけた。

その瞬間、彼の周りから地面を割るような激しい衝撃波がものすごい勢いで走っていく。

悠輔は瞬間的に側転してそれをすんでの所でかわした。

しかしその次の瞬間土の波のような衝撃波は地面をいとも簡単に引き裂いていった。

「土遁——か」

巻き上がった土煙の中悠輔は釵を構えながら一言そうつぶやいた。

なるほど——この舗装されてないむき出しの地面ならば彼のお得意の土遁が使いたい放題というわけか……

「面白い。ならばこちらは火遁で迎え撃とう！」

そう言うと悠輔は素早く印を結んだ次の瞬間、彼の周りに再び紅蓮の炎が纏わり付いた。

そして手を水平に振ると数個の火の玉が邦彦めがけて猛スピードで放たれた。

それを見て邦彦は瞳を閉じてもう一度手をかざし自らの周りに闘気を纏わり付け始めた。

そして溜めた闘気を解き放つため目をカッと開いた——その時だった。

ザンっ！

悠輔と邦彦の間に一本の真っ赤な棒が突き刺さる。

その光景に悠輔も邦彦も驚きを隠せなかった。

「誰だ——！」

悠輔はキッと虚空を睨んだ。

そこには黒と金のツートンカラーのソフトモヒカンにじゃらじゃらとピアスをした一人の男——

一腕に摩利支天の入れ墨を彫った風魔忍者の風間英太が棒の上に器用に一本立ちしていた。

4 集いし5つの流派

「戦ってるところ邪魔してすまん」

英太は二人をじろりと睨み付けながら一言言った。

「黙って見ていようと思ったんだけど、俺、そういう性格じゃないからさ……ついつい手出ししちゃった」

そう言うと彼は無邪気に笑って見せた。

それを悠輔は苦々しい表情で睨み付けるのみだった。

「——何しに来たの？」

「そりゃ……」

そう言うと英太は棒の上からひょいっと降りると、地面に刺さった棒を抜いた。

「藤林悠輔——お前を倒しに来たんだよ」

英太は棒をゆっくりと振り回しながら悠輔の周りをうろうろと歩いた。

しかし、その一言に悠輔は全くの無反応だった。

「——って！ 完璧に無視かよ！」

そんな悠輔の態度を見て英太はムカッとした態度で悠輔を睨んだ。

「やい！ 藤林悠輔！ 何でてめえは俺ばかり無視するんだ！ ふざけるなッ！ てめえ絶対ぶっ殺す！」

「うるさいな……勝手にほざいてろよ」

そう言うと悠輔は英太と邦彦に背を向けてふと考え込んだ。

「ていうか、僕——君たちと戦うためにここに来たワケじゃないんだよね……」

「何ッ——！」

その一言に英太も邦彦も驚きの表情を浮かべた。

だが悠輔はずっと虚空を見回し睨み続けた。真の敵を探すかのように。

「いい加減高みの見物をやめて出てきたらどうだ！ 上月静夜！」

悠輔のその叫びは広い廃工場内に響き渡った。だがその問いに対する答えはなかった。

「君が僕たち5人をここに呼び寄せようと仕組んでるのはわかるんだ。そこまでして僕たちの奥義が破りたいのかい？ それなら自分の手で試してみたらどうなんだ——！」

「いや……」

その低い声は悠輔のすぐ上から降ってきた。

はっとそちらの方を向くと、真っ黒なコートをはためかせ手に重厚な手甲を付けた背の高い男——甲賀の頭目上月静夜が二階の踊り場に悠然と立っていた。

「今日のお前は忙しそうだから——別に俺が手を下さなくてもいいだろう」

「誰のせいで忙しくさせられてると思ってるんだか……」

悠輔はそう言うときりっと恨めしい瞳で静夜を睨んだ。

「とにかくさっさと降りて来いよ……君だけ神様みたいに高みの見物なんて僕のプライドが耐えられない」

「そんな悠長なこと言ってられるのか？」

「何——！」

その瞬間だった、悠輔の背後におぞましいほどの殺気が猛然と迫った。

悠輔は軽く跳躍してその一撃をかわした次の瞬間、激しい砂埃と突風があたりを吹き抜けた。

「ち……逃げたか」

その砂埃の中にいたのは棒を悠然と振り回す英太だった。

彼は悠輔を金色のに光る瞳で悠輔を睨み付けるとその棒を彼に突きつけた。

「やい！ さっきから散々俺のことばかり無視しやがって——もう我慢できねえ！ てめえは俺の手で殺す！」

悠輔はそれを見て落ち着き払っていた。

ぱんぱんと被った埃をはたきながら深いため息をつき言った。

「仕方ない。面倒だけど相手になってやる」

「ムカー!! その態度が気に食わねえんだ！」

そう言うと英太は棒を翻し地面を蹴って悠輔に躍りかかった。

速い——！

悠輔は生まれて初めて英太の攻撃のスピードにあの発達しきった動体視力がついていかなかった。

はっとした時には彼は悠輔の目の前で棒を振りかぶった。

とっさに悠輔は釵でその攻撃を受け止める。それしかできなかったのだ。

「——なかなかやるな」

英太の棒と鏑迫り合いしながら悠輔は初めて悔しそうにそうつぶやいた。

その一言に英太はまるで勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「まだまだ……俺の実力はこんなもんじゃねえ！」

そう言ったその瞬間、競り合っていた英太の棒が急に軽くなった

——否、彼の棒はその瞬間、三等分にきれいに別れまるで蛇のごとく悠輔に襲いかかったのだ

。

悠輔は速く予測不可能な攻撃をからがら身体をかがめて回避する。

次の瞬間、悠輔のすぐ後ろにあったコンクリート壁が大きくえぐられた。

「ち……まさか、俺の攻撃をかわすとは……」

英太は悔しそうな表情を浮かべそう舌打ちした。

彼の武器は棒から三節棍へと瞬間的に変化していた。

「なるほど、そういう武器——ってわけか」

三節棍を振り回す英太を見て悠輔はにやっと笑みを浮かべた。

彼の棒はただの棒ではない。瞬時に三等分に形態を変える変形棒だということだった。

しかし、とんでもないスピードにとんでもないパワーだ。

悠輔は無残にえぐり取られたコンクリート壁をちらっと見た。

この風魔忍者——思っていた以上に厄介な相手かもしれない。何せ自分のあの瞳でさえ追いつかない攻撃をしてくるのだから。

「今度はこっちから行くぞ——」

悠輔は真紅の瞳で英太を睨み付けると両手の釵を握り直した。

そして地面を強く蹴り上げると三節崑を構える英太めかげて躍りかかった。

英太はそれを見て瞬時に三節崑を元の棒に戻した

そして悠輔の釵の連続する二撃を棒を回転させながら受け止めた。

それにすかさず悠輔は畳みかけるように釵の攻撃の手をやめなかった。

右をの釵を打ち付けると次は左の釵——そしてまた右の釵。

悠輔の畳みかけるような攻撃に英太は棒一本で対応した。

まるで力をきれいに分散させるかのように彼の棒は流れるような華麗な動きで悠輔の攻撃を受け流す。

だが悠輔の攻撃は数を増すごとに重さも増していった。

めり——。

ある一撃を受け止めた瞬間、英太の靴は地面に強くめりこんだ。

そのまま押すかのように悠輔は両手の釵に全精力を込めるかのように英太の棒と鏑迫り合いをした。

英太の足はその衝撃にどンドン地面へと埋まっていく。

彼は少し苦しそうな表情を浮かべ悠輔を睨み付けた。

「くそ……小癩な！」

そう言ったその瞬間、彼は再び棒を三節崑へと変化させた。

その瞬間、一瞬攻撃の手をやめ英太から距離を取る悠輔。英太はそれを見逃さなかった。

英太は三節棍を思いっきり振り回した。

その瞬間、彼の周りに狂おしいほどの風が纏わりついた。

「——風遁!?!」

それを見て悠輔は緊張感を漲らせた。

次の瞬間、英太は三節棍を強く振り纏わり付けた暴風を悠輔めがけて解き放った。

立ち上る砂埃につむじ風に似た衝撃。悠輔は手で顔を覆いながらそれに耐えた。

だがその瞬間、悠輔は英太の姿を完璧に見失っていた。

まさに風に^{かく}遁れる技——英太の姿は風とともにぱたりと消えていたのだ

「くそ——！」

悠輔はその瞬間初めて顔に焦りの表情を浮かべた。

真紅の瞳をカッと見開いてももはや英太の姿を映すことはできなかった。

なぜなら彼は彼の瞳でさえ捕らえられないスピードで完璧に気配を消して悠輔に襲いかかったのだから。

悠輔は自分のすぐ側でわき上がった殺気にハッとしたが、もはやそれは遅かった。

すぐ目の前には三節棍を振りかぶった英太の姿。それは悠輔の頬にクリーンヒットした。

その衝撃はすさまじかった。あの悠輔が軽く10メートルほど飛ばされるほどなのだから。

悠輔は地面にそのまま叩きつけられながらも、即座に起き上がろうとした。

だが英太の一撃はかなりのダメージだった。口の中には血が溜まり身体全身が痛む。どうやら軽い脳震盪を起こしているようだ。

「これが風魔流奥義、風縫いの術——」

英太は冷たい瞳をしながら一言言った。

「俺は一瞬だけの間だったら気配も姿も完璧に消すことができる。それは特殊な瞳を持ってるって言われる伊賀の家元にも見破られないようだな」

それを聞いて悠輔は顔に悔しさをにじみ出した。

彼の言うとおりに、悠輔の瞳は完璧に英太の姿を見失っていた。

それは自分の視力に絶対的な自信を持っていた悠輔にとって衝撃的な負けであった。

「厄介な技ばかり使いやがって……」

悠輔はゆっくりと立ち上がると口に溜まった血を吐き出した。

そして両手の釵を構えると真っ赤な瞳で英太を睨み付けた。

「来い——！ 今度は僕が君の術を破ってやる！」

その一言を聞いて三節棍を振り回していた英太の手が止まった。

そして口元に蔑んだような笑みを浮かべ彼を見た。

「ふん……何度やっても結果は同じだというのに……」

そう言うと英太は三節棍を大きく振りかぶるとまた彼の周りに風が纏わり付かせた

「そんなに早く死にたいのなら、望み通りにやってやる——！」

そう言ったその瞬間、英太は悠輔めがけてまた三節棍を振りかぶっていた。

巻き上がる暴風、立ち上る土煙——だが今回の悠輔の様子は先ほどとは少し違っていた。

彼はずっと瞳を閉じたままだったのだ。

まるで何かに集中するかのよう悠輔は瞳を閉じ釵を構えたまま微動だにしない。

そして呼吸を整えるように深く深呼吸した次の瞬間だった。

——^{とき}時間よ、止まれ!!

その瞬間、悠輔はいつにもまして赤く光る瞳をカッと見開いた。

それはこの空間にいる人物にとっては気づくこともない微かな変化かもしれない。

だが悠輔自身にとってそれは大きなチャンスに他ならない。

なぜなら——あれほど見えなかった英太の姿がピタリと止まって見えているのだから。

悠輔はその隙を逃さなかった。構えた釵を振りかぶると止まってがらんどうになった彼胸にそれを強く打ち付けた。

次の瞬間、時は再び流れ出した。

「な……！」

英太の身体は意に反して真後ろに強く吹き飛ばされた。

彼は何が起きたか未だ理解できていなかった。

今まで悠輔の瞳でさえ追いつかなかった自分のスピード、それをたった一撃にして破るなんて——

「てめえ……何使いやがった……」

英太はゆっくりと叩きつけられた地面から起き上がると咳き込みながら悠輔をじろりと睨んだ。

悠輔は暗闇の中真っ赤に光る瞳でじっと英太を見下ろし平然とした態度で言った。

「時間を止めた」

「は？」

その一言に英太の目は点になった。

彼には悠輔の言っている意味がさっぱりわからなかったのだ。

「冗談はよせよ。時間が止められるなんて忍術超えて超能力じゃねえか！」

「それが僕にはできるんだよ。僕の瞳はね——」

そう言うと悠輔はは口元にニヤリと勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「『視停止』——それが伊賀藤林流奥義にして『紅蓮の瞳』を完璧に使いこなした者にしか使えない秘術。君が一瞬だけ姿を消せるように僕は一瞬だけ対象の時間を止めて見ることもできるのさ」

それを聞いて英太は思わず息をのんだ。

完璧に自分の動きは悠輔の瞳に勝ったとばかり思っていたからその事実には愕然とした。

時を止めるってどういうことだ——？ どんなに彼の前で姿を消そうとも彼の瞳で時を止められしまえばすべて無駄ではないか——？

「どうしたの？ もう終わり？」

「——うるさい！」

そう言うと英太はよろめきながらも立ち上がり棒を振りかざした。

「訳のわからん術ばかり使いやがって——もう許さねえ!!」

その瞬間、英太は悠輔めがけて棒を振りかざして躍りかかった。

時を止めようが止められまいが自分のスピードは最強だ——

この一撃ですべてを終わらせる。その意気込みで英太は棒を分解し三節棍へと変化させそれを振りかぶった。

だがその瞬間、英太の動きは意に反してぴたっと止まった

身体が——動かな——い！

まさかこれが「時が止まる」術だということか——！

否、違う。

完璧に硬直しきった全身の筋肉、棒を振りかぶったまま身体はふるふると震えはじめ、体中から脂汗が垂れた。

——これは別の術だ。

「かかったな……」

目の前の悠輔は地面に右手を付けにやっとなを浮かべた。

英太はハッと足下の地面を見た。そこには縦5本横4本の交差した図形『九字』の結界——

「九字縛り ^{トラップ} 罨術 ——！」

身体を硬直させながら英太は苦しそうにそう言った。

なぜ気づかなかったのだろう。こんな罨に——

それよりも自分のスピードより速くこの罨を用意するなんて不可能だ。だとしたら——

「言っただろ。僕は時を止められるって……」

悠輔はそう言うときで手を泳がせるように印を結んだ。

すると英太の足下の九字結界は赤く光り出し英太の身体をさらに縛り上げた。

「先ほどの攻撃で君のパターンは読み切った。間合いにもよるけど僕に達するまでの歩数は——約4歩ほどだね。その間に君が地面を踏みしめるところを予測してこれを設置した——ただそれだけさ」

「——くそ！」

英太は術に強く縛られながら苦しくはき出すようにそう言った。

見切られてないと思っていた攻撃はやはりすべて見切られていた——ということか

「まあ、君はそこでじっとしておいてね」

そう言うとき悠輔は九字縛りの術をかけた針を地面に突き刺した。

それを見て英太はむっとした表情を浮かべた

「なんだよ！ 俺をこのまま放置させるつもりか！」

「だって、第一君を相手する予定はなかったんだもん」

「ふざけるな——！ てめえのそういう態度が気に食わねえんだよ！ この術解けたら絶対てめえをぶっ殺す!!」

「——はいはい」

呆れたようにそう言うと悠輔はすっと立ち上がった。

「僕の術を破ったら相手になってやるから。それまではおとなしくしてろ」

そう言うと悠輔は英太からすっと背を向けた。

まだ九字に縛られた英太は後ろで何か文句を言っているがもはや悠輔には何も聞こえなかった

。

5 赤い瞳の一族

「あーあ。つまんないなあ……」

ともえは地べたに座って一つ深いため息をついた。

目の前では悠輔と英太が戦っている。なかなかの互角の勝負だ。

だがともえはあまりその勝負の行方に興味が持てなかった。どっちが勝っても自分には関係ない——そんな気がしてならなかった。

「どうした？ お前の愛しの伊賀の家元が戦ってるんだぞ」

その一言を言ったのは先ほどまでともえと敵同士として戦っていた応変流頭目応野邦彦だった。

そんな彼をともえはしめったような視線で睨み付けるとつんとした態度で話した。

「べっつに一。だって悠輔あたしのことなんて興味ないでしょ？ だったらあたしだって——」

そう言うともえはゆっくりと立ち上がった。

先ほど悠輔に付けられた首の傷跡がまだずきずきと痛む。

当たり所が悪かったら首の骨折られておそらくそのまま死んでいたかもしれない。それくらいの衝撃だった。

「ていうかさ、あんた一体何様のつもりよ！」

ともえは首をさすりながらそう言うともえの巨体を見上げるように睨み付けた。

「何様——って？」

「どーしてあたしたち戸隠ばかり狙うのよ！ 意味わかんないし！」

「……お前は知らないようだな」

そう言うと邦彦は深いため息をついた。

「まあ無理もない。いざこざが起きたのは僕たちの親世代の話だからな——」

「親世代？」

ともえはその言葉を聞いて大きな目をさらに丸くした。

それを見て邦彦は淡々とした表情で語り出した。

「お前は本当に何も知らないようだな……まあいい。教えてやろう。今から15年前お前たち戸隠と僕たち応変は友好的な協力関係にあった。あの事件があるまで——はな」

「あの事件？」

ともえがそう聞くと邦彦は暗い表情を浮かべた。

まるで思い出すのも忌々しい——と言いたげな。

「ある日僕たちは瀕死の重傷で倒れていた伊賀の抜け忍を保護したんだ。その男は若かった。ちょうど13歳くらいだった僕と年はそう離れてないはずだった。僕たちは彼の正体を知らずに彼を介抱した。だけど彼はとんでもないタマだった。とんでもない……」

そう言うと邦彦は目の前で赤い瞳を光らせ英太と戦う悠輔を細い目で睨んだ。

「——で、その抜け忍とあたしたちの関係はなんなのよ！」

ともえは訝しげな表情を浮かべ邦彦に高圧的な言葉でそう聞いた。

それに対し邦彦は全く知らないのかと言いたげにもう一度ため息をついた。

「彼の正体を真っ先に気づいたのはお前たち戸隠なんだよ。どういう心変わりがあったのかは知らない。だけど、お前たち戸隠は彼を奪還するために僕たちに宣戦布告してきたんだ」

「え——？」

それを聞いてともえは絶句した。

自分はその時幼すぎたからだろうか——そんなこと今まで全く耳にしたことがなかったのだ。

「それは血で血を洗うような抗争だった。僕たちもお前たちも相当の犠牲を払って一人の傷ついた忍者を奪い合った。馬鹿馬鹿しい争いだよ。ホント——アイツのせいで今日まで戸隠とこうやって因縁関係にあるんだから」

そう言いながら邦彦は苦痛に満ちた表情で右肩を押さえた。

鋼化した身体を貫いたあの刃。あの時の傷が疼く

あの男の瞳は一生忘れない。そう目の前の藤林悠輔と全く同じ色をしていたあの瞳を

そして彼は邦彦だけに本当の名を名乗った。自分は——

「ほう……その話は興味があるな」

背後からわき上がるようなその声に邦彦もともえもはっと後ろを振り向いた。

そこには二階の踊り場から華麗に舞い降りた上月静夜の姿があった。

「お前——いつの間に！」

「ああ、全部聞かせてもらったよ。応野邦彦——お前が戸隠を狙う理由も、そして伊賀の家元に恐れをなす理由も——な」

静夜のその一言に邦彦の表情が一変する。

その細い瞳で静夜をじろりと睨み付けると怪訝そう顔をして言った。

「別に——それはお前の思い過ごしだろう……」

「いいや、俺はずっと疑問に思っていた。何故お前が藤林悠輔のあの瞳を見て動揺を隠せないでいるのか——なるほどね、過去にあの男に相当なトラウマを植え付けられたようだな」

「……」

その言葉を聞いて邦彦の昔の古傷がズキッと痛んだ。

確かにあの赤い瞳は今でも怖い。彼と同じ瞳を持つ悠輔も同じように怖い存在だ。

だけど、何故この男上月静夜はそのことを知っているのだろうか——まるで自分のこの目で見えたかのような言いぶりだ。

「ああ、言い忘れたな」

そう言うと静夜はニヤッと不気味な笑顔を浮かべた

「俺たちもあの男を15年間ずっと追っている。こちらにも浅からぬ因縁があつてね——」

「何——？」

「まあ、生きてるか生きてないかは別の話として、お前ら弱小流派が手を出すには火傷する相手だぞ。また15年前の事件の二の舞になりかねん」

憎たらしい笑い声を上げながらそういう静夜の声を聞いて、邦彦は何とも腹立たしい気分になった。

この男は少なくとも自分よりもあの男の情報を握っている。そう思うだけで邦彦は心を掻き毟られそうな思いだった。

「あの一」

そんなならみ合う静夜と邦彦の間に入るようにともえは腑に落ちない表情を浮かべ言った

「さっきから15年前の事件とかあの男だとか言ってるけどお～一体それって何なの？ あたし、あんたたちよりずーっと若いんだから意味わかんないし！ ちゃんと説明してよ！」

「……説明するのが面倒だな」

ともえのその言葉に静夜は厄介そうに頭をかいた

「ともかくガキは親に事情を聞いて来いよ。それだけしか俺は言えん」

「なにそれ！ しずちゃんの意地悪！」

「……一言、言っただいか」

静夜は顔を引きたらせながらともえを睨み付けた

「いい加減俺のこと『しずちゃん』って呼ぶのやめてくれなないか？ 気持ち悪くて吐き気がする」

「えー！ いいじゃん！ 可愛いとおもうけどなあ〜！ しずちゃん」

「しずちゃん……」

その言葉を聞いて邦彦も思わず笑いをかみ殺した。

そんな二人を見て静夜は顔をひくひくと怒りで引きたらせた

「お前ら……後で絶対に殺す」

「ところで……そんな悠長なこと言っただられるのか？ しずちゃん」

「ああ？」

邦彦のその一言に静夜ははっと顔を上げた。

次の瞬間彼の背後に大きく禍々しい殺気がゆっくりと近づいてきた。

静夜はゆっくりとそちらの方を振り返る。

そこには額の傷の血を拭いながら真紅の瞳を光らせこちらにゆっくりと歩いてくる藤林悠輔の姿があった。

「ほう、もうあの風魔忍者をどうにかしたって言うのか？」

静夜はそう言うのと青白く光る瞳で悠輔をにらみ返した。

その瞬間悠輔はぴたっと足を止め、彼に向かって一言言っただ。

「どうもこうもないよ。鬱陶しいから金縛り食らわせてやっただけ」

「てめえ！ 鬱陶しいって何だよ！」

その声は悠輔のすぐ後ろ。棒を振りかぶったままの体勢で完璧に硬直状態になっている英太が叫んだ。

だがその抗議の声をまるで無視するように悠輔は静夜の方を睨み付けた。

「さて……と。やっと君と再戦できるってわけだ」

「ほう……戦う気満々だな」

「当たり前じゃないか。君は今日のメインディッシュだよ」

そう言うと悠輔はクスクスと笑顔を浮かべ両手の釵を構えた。

「今で僕の研究は十分終わったでしょ？ だったらそろそろ自分で試してみたら？」

「ふん……面白い」

静夜はそんな悠輔を鼻で笑うと重厚な手甲を付けた両手を横に伸ばした。

その瞬間、三本の長い爪が金属の摩擦音を出して勢いよく生えた。

「そんなに俺の手で殺されたいのなら、望み通りやってやろうじゃないか！」

静夜は一对の長い爪を悠輔の方に構えると、真っ青な瞳をぎらりと光らせた。

それを見て悠輔も同じように釵をくるっと手の中で回転させた後、静夜に向けてすっと構えた。

伊賀と甲賀、赤と青、そして悠輔と静夜――

質感の違う殺気と殺気同士がぶつかり合い臨界点に達しようとしたその瞬間、二人は同時に地面を蹴り上げお互いに立ち向かった。

次の瞬間、激しい光と金属が交わる澄んだ音が廃工場内に響き渡った。

釵と爪——激しい鏝迫り合いの中二人は赤と青の瞳でお互いをにらみ合う。

その瞬間、伊賀と甲賀の四〇〇年にわたる因縁の対決の新章が始まったのだった。

6 ともえの提案

「くそー。俺ばかり無視しやがって……」

英太は棒を振りかぶったままの格好で苦々しく顔をゆがめた。

ついついはまってしまった悠輔の仕掛けた九字縛り罫術。

本来金縛りのような術を解くのにそう時間はかからないのだが、彼の術は恐ろしく強力で何とか跳ね返そうと精神力をつかうものの全くびくともしない。

負けた——とはあまり思いたくないが、奴の術一つも破れない自分が情けない。英太はそう思えてならなかった。

「あーあ、まだ俺実力出し切ってないのに……あの野郎に完璧に舐められたじゃねえか」

英太はぶつぶつと誰に聞かれる訳でもない独り言をつぶやきながら、じっと目の前の地面に突き立てられた針を見た

奴はおそらくあの針を媒体にして自分に術をかけ続けている。早く言えばあの針さえどうにかすればこの術から解放されるはず——

——でもどうすれば？

肢体を不自由にされて英太には何の手数も残っていない。あんな離れた場所にある針をどうにかするなんて——無理に決まってる

「あーら。様ないわね。エータ」

その一言に英太はその体勢のままキッとその相手をにらみ返した。

そこにはフリフリのゴスロリワンピースにリボンのヘッドセットをした戸隠のくノーともえが堂々と立っていた。

「なんだあ……てめえ俺を笑いに着たのか」

「そうかもしれないわね」

そう言うともえは英太を挑発するかのようによくくすと笑った。

「あんたは悠輔の挑発にまんまとはまってこんな様になったのよ。いい加減負けを認めたらどうなのよ」

「うっせえ！ あんなのズルだ！ 俺は負けたなんて絶対認めない！」

「ったく……往生際が悪い奴ね」

そう言うともえは足下にあった英太を縛る針に手をかけた。

そして小さく呪文を唱えるとそれを一気に地面から抜き去ったのだ。

その瞬間、急に身体を縛っていた何かの力が抜けふらっと前のめりに倒れる英太の身体。

だが、彼は瞬間的に体勢を変えある方向をキッと睨んで棒を一回転させた。

「あの野郎——許さねえ!!」

「待ちなさいよ！」

思わず悠輔に襲いかかろうとする英太を止めたのは怒気のこもったともえの一言だった。

「あんたねえ……術を解いてやったのにお礼もないの？ 失礼な奴ね」

「うるせえ！ 助けてくれなんて一度も言ってねえよ！」

「ったく……あんた一生金縛りに遭っててもよかったってわけ？」

「そりゃ……まあ……術を解いてくれたのはありがたいけど……」

ともえのその一言に英太の言葉はしどろもどろになる。

それを見てともえはニヤッと笑った。

「じゃあ、エータ。ともえの言うこと聞いてくれる？」

「はあ？」

その一言に英太は呆れた声を上げた。

「ふざけるな！ 恩着せがましいもほどがあるぞ。てめえ！」

「あっそう。ならいいのよ。あなたに悠輔がかけた術より百倍強いのかけるのみだもん——あ、言っとくけどあたしの流派呪術とか妖術やらせると日本一よ。悠輔のかけた陳腐な術も解けないあんただと一生かかっても解けないかも!？」

「……」

その一言に英太は思わず沈黙した

幾分かハッキリはあるのだろうが、彼女の術を目の当たりにしたことのある英太は思わず返答に困った

「大人しくあたしの言うこと聞いてくれる？ エータ？」

目の前には目を潤ませて英太を見るメイド忍者ともえ。

それを見て観念したかのように英太はチッと舌打ちした

「で——何なんだよ。その願って奴は」

それを聞いてともえはニコと満面の笑みを浮かべた。

「早く言えば、今日はなかったことにしたいの」

「はあ？」

その一言に英太はまたも面食らった。

コイツは何を言い出すのだろう——そう言いたげな表情を浮かべ英太はともえを訝しげに見た。

「まあ早く言えば、今日は五流派の頭目クラスが出会っちゃったわけで、お互いがお互いを邪魔しあってるんでしょ～それだったら今日は水入りってことで流しちゃってまた次の機会に相見え

た方が五人ともにとってもいいんじゃないかなあ～ってあたし思ったんだ」

「うーん。確かにそれは言えるな」

英太は珍しくともえの言い分に納得した。

確かにその通りだ。

今日はタイミングが悪かった。こんなにも最強クラスの忍者が集まってお互いの目的を邪魔しあっている——これは一種の不幸な出来事なのかもしれない。

「ね、そう思うでしょ！」

そう言うともえははしゃぐように目を輝かせた。

「じゃあ、約束してくれる？これからあたしのやること絶対に邪魔しないって！」

「お前のやること？」

何するんだよ——

そう言おうとしたその瞬間、ともえはすたすたと前に歩んでいた。

その先には激しくやり合う悠輔と静夜の姿——その前に立つともえは暗い瞳でじっと彼らを睨んだ。

「やだなあ、悠輔としずちゃんあんなに真剣になっちゃって……思わず邪魔したくなるじゃない」

そう言いながらともえは宙を撫でるような手つきで印を結び始めた。

そして口元で小さく呪文を唱え印を結んだ両手を横に突き出した次の瞬間だった

「戸隠流奥義『幻惑霧』——」

その瞬間、ともえの印を結んだ手のひらから勢いよく煙が吹き出す

——否、これは霧だ。高等な幻術の霧だ。

それを彼女はいとも簡単にそれを操りそしてこの広い空間を幻術の霧で埋めようとしているのだ。

英太はどんどん狭くなる視界の中霧の中に消えていくともえを見た。

彼女は笑っていた。病的なほど狂った笑い声を上げて。

そして、程なくしてともえも悠輔も静夜も誰もが見えなくなった。

ホワイトアウト。霧で何も見えなくなって——

7 激突する赤と青

廃工場内に激しい金属が交わる音が何度も響き渡る。

稲光にも似た閃光が闇の中カッとそのたびに煌めき続ける。

悠輔と静夜——二人の実力は甲乙付けがたいほどほぼ互角であった。

それ故に二人ともお互いの好機を見いだせずにいた。

お互いに隙もなければチャンスも与えない——否、それを見せた時点で負けると二人とも重々承知しているように二人はお互いに刃を交えていた

キーン！——と何度目かの刃と刃のぶつかり合い。

悠輔と静夜はお互いの手数を封じ合うかのように釵と爪を交わらせる。

激しい鏝迫り合いをしながらお互いに激しく息が上がっていることを実感した。

「なかなかやるじゃないか……」

悠輔は釵に力を込めながら一言静夜に言った。

「お前もな……」

静夜も両方の爪に力を込め一言言った。

だが二人とも目は全く笑っていない。赤と青の瞳を交わらせるかのように光らせ続けていた。

——これじゃちがあかない

二人ともほぼ同時にそう思ったのだろうか。彼らは瞬時に間合いを取った。

距離を取ったといっても戦いはまだまだ続く。

悠輔はそれと同時に手に針を持ち替える。そして念を込めるかのように力強く睨むとそれを静夜めがけて放った。

その瞬間、針は炎の矢に変わり静夜に襲う。

しかし、静夜もそれを見て次の手を打つ。

爪の下で印を結ぶと静夜はそのままその爪で空を引き裂いた。

次の瞬間、爪の軌道とともに静夜の目の前に大きな水の壁が一瞬できあがる。

それは悠輔の放った炎を纏った針を十分撃ち落とす力のあるものであった。

「俺の前でお前の得意な火遁は効かんぞ……」

静夜は爪を器用に操りながら、目の前の水を宙に浮かべるかのように弄んで見せた。

それを見て悠輔はニヤッと冷たい笑みを浮かべた。

「火は水で制すってわけね……」

悠輔はそう言うともた目をカッと赤く光らせるとまた目の前に炎の結界を作り出す。

静夜はそれを見て「芸のない奴め」と言いたげな表情で笑って見せた

「何度やっても無駄だ！ 家元！」

静夜がそう言った次の瞬間、悠輔は先ほどより激しく大きな炎を静夜めがけて解き放った

だが、静夜はそれを軽くあしらうかのように爪を大きく振りかぶった

すると立ち上るような巨大な水の壁が彼の前に一瞬で現れる

次の瞬間、巨大な炎と水は上空で激突した。激しい水蒸気を上げそれらは一気に相殺し合った。
。

バカめ——静夜はそれを見てさらなる印を手で結んだ。

火遁を使う悠輔なんかより水遁を使う自分の方がずっと有利だ——そう思った矢先だった。

静夜ははっと煙る上空をキッと睨み付けたとっさに爪を構えた

次の瞬間、静夜は空から強い衝撃を受けた。

ズッと地面にめり込む足——静夜は宙に浮く悠輔の身体を睨んだ。

彼は火と水が激突した水蒸気に身を隠しその瞬間、遥か上空から静夜に躍りかかったのだった

。

「くそ——！」

静夜はそう悔しそうに言った次の瞬間、まるで悠輔を嫌うかのように爪を大きく振りかぶった

。

次の瞬間上空の悠輔に激しい疾風が襲いかかる。

それは細かく空を切る風の刃。悠輔はその瞬間、釵で身体を防御しそれに耐えた。

土煙を上げて悠輔は地面に強く降り立つ。

その身体は防御しきれなかった風の刃であちらこちらをに小さな切り傷が付いていた

「ちっ……なかなかやるな」

悠輔は荒く息をつくと手で顔の切り傷から出た血を拭った。

だけど息が上がっているのは静夜も同じ。彼も肩で息をつきながらも一度悠輔めがけて両手の爪を構えた。

それは消耗戦だった。

初めて彼と刃を向けた時感じたのと同じでどちらかが倒れるまでこの戦いは終わらない——悠輔はそう悟った。

悠輔もそれに答えるかのように釵を構え、三度静夜に向かって走り出した。

またしてもしんと静まりかえった廃工場内に金属の交わる音が響き渡る。

悠輔と静夜はどうしてもお互いの壁を越えられずにいた。

それが伊賀と甲賀を率いるべくして生まれた二人の因縁であるのかどうであるのかはわからない。

だが、二人ともここで決着を付けたいという気持ちでお互いに焦っていた。

そしてお互いに対して苛立ちを持ち始めたのは事実であった。

また何度目かの悠輔の攻撃を爪で受け止めた静夜は次の瞬間、ブーツのかかとを強く踏み、つま先から仕込み刃を刺しだした。

そのまま悠輔の頭を蹴り上げようとしたが、悠輔はその刃を鼻の先一つでかわしてみせる。

その瞬間、静夜には悠輔に隙ができたように見えた。

チャンス
好機——！

彼はニヤッと笑って爪を空に突き刺した次の瞬間だった。

ひんやりとした風とともに辺りはみるみるうちに白く輝いていく。

静夜はハッとその手を止めた。

なんだこれは——？ 煙？ 霧？ どちらにしろ人為的に作られた何かの術だ。

だとしたら一体誰が——？ この幻術が悠輔の術だということか？

だが静夜のその予想は見事に裏切られることになる

その術を作っているはずの悠輔は霧の中怒気のこもった大声で叫んだのだ。

「誰だ！ 邪魔する奴は——！」

急に現れた幻術の霧は一気に廃工場内を真っ白に包み込んだ。

その中でも悠輔の真っ赤な瞳はその幻術の正体を見抜いていた。

これが第三者によって起こされた大いなる妨害であることを――

「戸隠の術だね」

せっかくの静夜との決闘を台無しにされた怒りでだろうか――悠輔の声は若干激しい怒りに震えていた。

真っ白な霧の中、真っ赤に光る瞳でその術を施した相手ともえを睨み付けた。

「一体何をしてくれるんだ！ そんなに君は僕の邪魔をしたいのかい!？」

「だってえ……」

仁科ともえの甘ったるい声は工場内に響き渡るようにいろんな方向から聞こえてきた。

まるでこの幻術の霧に包まれた廃工場内が彼女だけのオンステージのごとくのすばらしい音響で。

「どう考えてもつまんないじゃーん。悠輔としずちゃんだけ楽しんで他の人は黙って見てろっていうのお～。そんなの罰ゲームじゃない」

「だから、しずちゃんって言うのやめろよ」

その一言に静夜はむっとした表情を浮かべ一言言った。

どうやら本当に「しずちゃん」と言われるのが嫌らしい。

「――ともかく、本当の目的は何？ 自分に振り向かせるためにはこんな大がかりな幻術なんてしなくてもいいんじゃない？」

「あーん！ 悠輔はわかるう～？ やっぱりあたしが惚れた男はちがうわあ～」

その高く響き渡るともえのこえにいらっと来たのは静夜だった。

「ふざけるな！ 俺たちの戦いをお前の疚しい雑念で吹き飛ばしたって言うのか！ 冗談じゃない！」

「もうっ！ しずちゃんは黙っててよ！ 今から訳をはなすんだからっ！」

「——お前いつか殺すからな」

静夜はそう言うと爪をわなわな震わせながら一言そう言う。

しかしともえは全くのマイペースで切々と語り始めた。

「まあ、早く言えば今日のところはこれまでよって話かなあ？ だってさあ考えてみてよ。今日さあこんな最強クラスの忍者が五人も集まっちゃってさあ～はっきり言って不幸な出来事よ。お互いをお互いにいいところをつぶし合っているっていうか、結局みんな邪魔されまくって実力出し切れてないって感じ？」

その一言に悠輔も静夜も思わず黙り込んだ。

まあ、確かにともえの言う言葉は一理ある。

今日のは場が悪すぎた。これほどまでに頭目クラスの忍者が集まってしまいお互いに邪魔し合う戦いなど——皆本意ではないはずだった。

だけど——こんな終わり方で本当にいいのだろうか。結局は皆これからどこかでつぶし合いしなければならぬって言うのに

「ねえ……」

悠輔は濃霧の中赤く光る瞳でともえを見た。

「とりあえず、この霧どうにかしてくれない？」

「えー何でえー」

「君の話はよくわかったから……これ以上の邪魔したって無駄だよ」

「……」

その一言にともえは一瞬黙り込んだが、すぐに幻術解除の呪文を唱え始めた。

そして濃霧の中小さく印を結ぶと彼女の瞳は冷たく光った。

「——解！」

その瞬間、彼女の広げた小さな両手に白い霧はどんどん吸い込まれていく

徐々に霧の濃度が薄くなり視界が晴れていく廃工場内

霧が解けるやいなや悠輔はその場に残った人物をつぶさに確認し始める。

悠輔、静夜、ともえ、英太、そして——

「あれ……？」

悠輔はその事実に思わず息をのんだ。

いないのだ。その場にいるはずだった自分が当初の目的だったはずの人物がいないのだ。

「君——早紀はどうしたっていうの？」

悠輔はその瞬間、霧を手に吸い込ませ続けるともえを真紅の瞳で睨み付けた

それを見てともえは急に不機嫌になり、つんとすねた態度で言った。

「し……知らないわよ！」

「嘘付け！　じゃあ何で早紀がこの場にはいないんだよ」

「だーかーら！　あたしじゃないし!!」

「あのさー」

その言葉を言ったのは全く置いてけぼりを食らっていた風間英太だった。

それを見てその場にいる全員が彼の方向に注目した

「……君、まだ居たんだ」

「てめえ！ その言い方はねえだろっ！」

悠輔の冷たい言葉に英太はムキになって怒り始めた。

「大体てめえが俺を無視するから話はこじれるんだよ！ てめえがそこの甲賀の暗い兄ちゃんと戦いだしてから連れて行かれたんだよ！ てめえの彼女がな」

「何——？」

その一言を聞いて悠輔はまた周囲を確認した。

そうだ——早紀のほかにこの場から消え失せた人間が一人いる

「応野邦彦……」

悠輔は怒気のこもった小さな声でその名を呼ぶとキッと前を見た。

そして、そのまま何事もなかったかのように引き返すと、去り際に静夜の顔を睨み付けた。

「そう言うことだ。今日の勝負はお預けってことにしてもらいたい」

「それは随分勝手な願い出だな」

そう言うと静夜は蔑んだよな笑みを浮かべた。

だがそれを見ても悠輔の表情は全く変わらなかった。

「君だってあの娘に邪魔されて半分やる気が失せたんでしょ？ お互い様じゃないか」

「……」

その一言に静夜は何も反論しようとはしなかった。

それを見て悠輔はふっと小さな笑みを浮かべまた歩み始めた。

「ま、そう言うことだから。また今度みんな会ったらよろしくね」

悠輔はそう言うと残された三人に対して小さく手を挙げた。

次の瞬間、辺りにあり得ない強い風が吹き渡り、その場に大きな砂埃が巻き上がる

その砂埃に身を隠すかのように悠輔の姿は解けていく。

そして、風が止み砂埃が消えていくともはや彼の姿はその場には消え失せていたのだ。

「ふざけた野郎だ！」

それを見て憤慨したのは英太だった。

「散々俺を無視しておいて最後は俺のパクリのような技でおさらばか？ 今度会ったらコテンパンにしてやる！」

「ってかさ、エータ。あれあんたのパクリって訳じゃないと思うんだけど」

「うるせえ！ 風遁使う奴は全員俺のパクリだ！」

ともえの一言にも英太は延々と文句を言い続ける

それに呆れたのかともえは深いため息をついて今度は静夜の方を見た

「で……どうする？」

「どうするって——お開きにしたいって言ったのはお前だろ」

そう言うと静夜は出していた爪を手甲の中に収納させた。

「俺はもうあの妨害で随分水を差されたからな……正直今日は疲れた。帰る」

「そうだよねー。悠輔もあの女追って帰っちゃったし。なーんかみんな目的見失っちゃった……みたいな？」

その一言に静夜は恨めしそうな瞳でともえを睨んだ。

お前のせいだろ——そう言いたげな青白い瞳で。

「まあ、今日はこの辺で終わりにしとこ。決着は今度って言うことで！」

「……調子のいい奴だ」

静夜はそう言うと黒いコートを勢いよく翻した

その瞬間、彼の姿はまるで闇に解けるかのように消え去った。

「じゃ、あたしもお暇……しよっと」

ともえもそれに準じるかのように掌を前に差し出すとそこから零れ出すかのようにピンクの花びらが湧いて出てきた。

それはどこからとも無く吹いてきた風に乗りやがてともえを優しく取り囲んだ。

そして、彼女がずっとその場から跳び上がったその瞬間、彼女は一陣の風とともに姿を消したのだった。

「——けっ！ 今日忍術の博覧会かよ」

一人残された英太はむかむかした気分を表すかのようにそう言い捨てた。

そして、持っていた棒を宙に向けると誰に向けて言うわけでもない言葉を叫んだのだった。

「てめえら覚えてろよ！ この英太様を無視した代償は大きいと思えよ!!」

8 別れなさい

湿ったひんやりとした風が肌を刺す。

早紀はぼんやりとした意識の中ゆっくりを目を覚ます。

ここはどこだろう——？

すぐ目の前には東京の街明かりがゆっくりと動いていく。

ああ。外に出たんだ——私。

ん——？ 動いてる？

その瞬間早紀はぎょっとした表情を浮かべ自分の身体を確認した。

早紀は誰かに抱きかかえられてゆっくりと移動していた。その身体は驚くほど遅しく、早紀を抱く腕は丸太のように太かった。

「——誰？」

早紀はその巨体の先の顔をのぞき込んだ。

まるで糸のように細い目に大きな鼻——悠輔でもあの黒コート男でもない顔に先は困惑した。

「気づいたかい？」

男は早紀に対してにっこり笑って見せた。だが目が細すぎて笑っているのか否かがよくわからないのは事実だった。

「——放してっ！」

早紀はその瞬間男の太い腕の中で激しく暴れ始めた。

「あなたも私を狙ってるの!? もういい加減にしてよ——！」

だが男の反応は意外であった。

彼は言うとおりに早紀をアスファルトの上に優しく立たせるとふらつく彼女の身体を優しく支えた。

その態度を見て早紀はハッとした。この人は自分には危害を加えない人だ——そう思ったのだ。

「ボクは君に何もしない。安心して」

「でも——」

「あそこにいるととばっちりを受ける可能性があるからね……ボクは平気でも君はそう言うわけにはいかないだろう」

「——？」

その一言に早紀は頭をひねった。

一体何を言うのだろう……彼の言っていることは早紀には全く意味がわからなかった。

「ごめん、急に言ってもわからないよね」

男はそう言うとき細い目をさらに細めにつこりと笑った。

「何も知らない君にどう説明すればいいのか困るけど——とにかく君が寝ている間にいろんなことが起きたんだ。いろんなことが——ね」

いろんなこと——その言葉を聞いて早紀は思わず息をのんだ。

そうだ、まだあの悪夢はずっと続いているんだ。黒コート男が出てきたり、ともえに命を狙われたり——散々な夢が今でも続いているんだ

「あの……」

早紀は小さな声でそう言うと男の顔を見上げた。

「これって、夢——じゃないよね」

「それは——」

「もう、最悪。夢なら今すぐ醒めてほしいよ。もう悠輔やともえちゃんが忍者かどうかなんてどうでもいいわ。これが悪い夢だったってオチになってほしい……」

「残念だけど、その期待は捨てた方がいいよ」

男のその一言に早紀は呆然と彼の顔を見た。

彼が早紀を見る細い瞳は強い痛々しさを感じた。その表情はまるで申し訳ないことをしてしまった——と言いたげだった。

「これは真実なんだ。君にとっては知ってはいけない真実だったのかもしれない——だけど、こうなった以上君は僕たちとの関係を絶つべきだ」

「そう言われても……」

その一言に早紀の頭は混乱した。

一体どうすればいいと言うの——？ それを聞く前に男の口がゆっくりと開いた。

「君、彼氏のことはまだ好きかい？」

「は……？」

「藤林悠輔——彼のことはまだ好き？」

早紀はその一言に困惑した。

この男に何故そんなことを聞かれなければならないのだろうか？ そんな不信感を覚えながらも早紀はふて腐れた表情で答えた

「わかんないわ。そんなの。好きか嫌いかといえど……どっちかと言えばまだ気になるけど」

でも悠輔ってともえの許婚とか言ってなかったっけ——？

嘘かホントか知らないけれども、そのことでともえは自分を目の敵にしている——もう、なんだか訳がわからなくなってきた。

「別れなさい」

男のその言葉を聞いて早紀ははっと顔を上げた。

困惑する早紀を尻目に彼は穏やかな笑みを浮かべ彼女を見ていた。

「何で？」

「彼の正体を知った以上、君はまともに彼と向きあえる？ それどころか今日みたいな事態がまた起きる可能性だってあるかもしれないのに……」

「それは……」

「とにかく彼とは早く別れた方がいい。それが君のためにだってなるはずだ」

早紀はその言葉に思わず黙り込んでしまった。

あの黒コート男もこの大男もそうだ。みんな今日の事態は悠輔が悪いと言わんばかりだ。

でも、そんなのおかしい。いくら悠輔には裏の正体があるとは言ってもそんなの私と悠輔の問題だ。他人に別れろと口出しされる筋合いなんて——ない

「いい加減にしてください！」

早紀は男の手をふりほどくと、迫力のない瞳で睨み付けた。

「あなたに言われなくても自分たちのことは自分たちで解決します！ 悠輔は——どう思ってるかしらないけど」

「そっか……」

「ていうか何で悠輔と別れろなんて言うんですか？ 彼が——忍者だから？」

その瞬間、男の表情が一瞬険しくなった。

そして後ろを気にするかのそぶりをしながらも、早紀に何かを促すようにすっと身体を押しした。

「帰りなさい」

「え……」

「はやく——！ 僕はここまでしか送れないから」

男の細い瞳はとても強い光を放っていた。

もうここは危険になる——そう言いたげな表情で早紀の身体を強く押した。

早紀は困惑しながらも男の顔を振り向いた。

まだまだ聞きたいことは沢山あった。沢山ありすぎて何から聞いたらいいのかわからなかった。

早紀はその瞬間悔しそうな表情を浮かべながらも、アスファルトを蹴り出し走り出した。

彼女が消えて見えなくなるのを確認して、男——こと応野邦彦はすっと後ろを振り返った。

そこにはまるで鬼の形相でその場に対峙する藤林悠輔が立っていた。

「早紀は——？」

彼は怒りで声を震わせながら真紅の瞳でこちらを睨んでいた。

「お前の望み通り帰した」

それを見て邦彦も緊張感を露わにさせる。

臨戦態勢に入るかのようにぎゅっと拳を握り細い目をカッと見開き悠輔をにらみ返した

「——何の真似だ？」

「言っておくが僕はお前みたいに人に借りを作ろうって浅知恵はないからな。ただ、あの場所は彼女にとって危なかったし早めに帰した方が——彼女のためにもお前のためにもなるだろう？」

「——ふざけた奴だ！」

悠輔はその瞬間初めて激しい怒りを露わにした。

おそらく彼は自分がすべきことを邦彦がやってしまったことに激しい憤りを持っているのだろう。

「早紀を無事に帰したからって大きい顔するんじゃない！ それだけでも僕にとっては大きな貸しだ！」

「やれやれ、伊賀の家元はどこまでもプライドが高いな」

そう言うと邦彦は呆れたように髪をかき分けた。

「そう思いたいなら思うがいいさ。だけど、僕はお前と貸し借りなどする間柄にはなりたくないね。なにせ、何を企んでいるのかわからない相手なんだから……」

「何——？」

そう言った次の瞬間、悠輔は手に持った釵を静かに邦彦に向かって構えだした。

彼の瞳は誰の目にも明らかに真紅に染まっている。

一触即発——そんな中邦彦は一瞬身体に入った力を弛緩させ彼に向かい背を向けた。

「今日はお開きにするんじゃないかったのか？」

「それはあのメイド忍者の言い分だろ」

悠輔はそう言うとまるで獲物を狙うかのように釵を手の中ですくんと回した

それを見て邦彦は深いため息をついた。

「やってられん……」

次の瞬間、邦彦は脚力だけでコンテナの上に上がった。

それを悠輔は真紅の瞳でキッと睨みあげた

「逃げるのか！」

「ふん……今日はただやる気がないだけだ」

「ふざけるな！ 僕に借りだけ作っておいて——今度会ったらただじゃ置かない！」

「……」

その一言を聞いて邦彦はもう一度下界の悠輔をちらっと見た。

デジャヴだろうか。その時の悠輔はまさにあの時のあの男と変わらない真紅の瞳でこちらを睨んでいる。

それを見て邦彦は強い緊張感に包まれた。

「お前、兄弟はいるのか？」

「は——？」

「いや……なんでもない」

邦彦は一言そう言うと深い闇の中へと消えていった。

それを見送り一人残された悠輔は、思わず呆然となった。

お前、兄弟はいるのか——？

邦彦のその質問に一瞬どう答えたらいいのかわからなかった。

確かに自分には兄が居た。だけど自分が遠い昔に彼は亡くなったはず——だった。

1 六本木のオフィス

同時刻——六本木

通称六本木ヒルズと呼ばれるこのセレブタウンの一角のオフィスで彼はじっとパソコンのディスプレイを眺めていた。

しわ一つ無いぱりっとしたブランドスーツにきっちりしめられたネクタイ。それに鋭い視線を覆い隠すような眼鏡——

彼は残業のキーボードを打つ手を止め、ふと背後に広がる東京の摩天楼を眺めた。

相変わらず良い風景だ——

彼はそれをみてふっと表情を崩したが、すぐに気を入れ直すようにその視線は鋭くなった。

「社長……」

闇に沈んだオフィスの中その男が急に這い出るように彼の前に歩み出た。

その瞳はどこか虚ろげで病的な光を帯びていた。

「なんだね……」

『社長』と呼ばれた彼はその男を見るなり険しい顔を見せた。

それは企業のトップの顔というより別次元の険しさと鋭さを兼ねそろえた恐ろしい顔だった。

「ついに主要五流派が衝突しだしたようです」

部下の男は彼を前にしてピタリと表情を動かすことなく淡々としゃべった。

それは男自身が機械のような冷たさを放っているかのようであった。

「そうか……」

彼は男の形式的な報告に彼は口元のにやりと笑みを浮かべた。

「ついに始まったか」

それを聞いて彼はまるで気持ちがあうずうずするような気分になった。

この摩天楼の下で現代の忍者たちが生き残りをかけて熾烈な戦いを繰り広げる——その時をどれほど待ちわびたか。

他の流派がつぶし合いをしてくれる中だからこそ、自分たちの躍進のチャンスが巡ってくる。

彼はそれを重々判っていたのだ。

「——俺は出かける」

彼はそう言い残すとオフィスチェアから立ち上がり機械的な男の前に立ちはだかった。

「彼らの後始末はお前たちに任せた。くれぐれもへまをしないようにな……」

彼はそう言うと男の目の前である暗示をかけるように指をパチンと鳴らした。

その瞬間、男は瞳に人間的な光を取り戻したがすぐにその瞳は空虚に濁った。

「わかりました。社長——私はあなたの駒ですから」

男はそう言うと彼に深々と礼をする。

それは上司と部下というより支配者と僕という関係の方がしっくり来る光景であった。

「あとは頼んだぞ……」

その瞬間、彼はふっと笑うとオフィスの向こうの闇の中へと溶け込むように消えていく。

ただ去り際に眼鏡の奥の真紅の瞳だけを邪悪に光らせながら。

2 戸隠の女王

「あーっ！ マジ疲れたし!!」

ともえはピンクで彩られた自室につくとフリフリのレースのベッドに沈んだ。

そして仰向けに体を変えると、その天井に花と一緒に飾られた有る写真を恨めしく眺めた

それはともえが一三歳の時に初めて見た時当時のお見合い写真を引き伸ばしたアイツ——藤林悠輔の一五歳の肖像

今よりか大分幼く鋭さは感じない眼鏡姿の少年だけど、この姿だけ想って今まで五年間生きてきたというのに——

憎らしい。アイツが憎らしい。

ともえは写真から目をそらすようにもう一度身体をうつぶせに転び直すと深いため息をついてくまのぬいぐるみを抱きながら無駄にストラップが付いた携帯電話をいじりだした

そしてともえはそのまま有る人物に電話をかけ始めた

コール音が二三回——そして電話の向こうの人物はいつもと同じようにハイテンションな声でした

「もしもしー。ともえちゃんかしらあ？」

年端に似合わず甲高い女の声。

誰も知らなければ若い娘のような声にも聞こえるがこれでも40歳を過ぎたのオバサンだ。

「どうしちゃったのお？ 自分から電話かけてくるなんて……」

「別に……」

相変わらずな営業トーク全開の母、戸隠温泉旅館「にしな」の女将仁科綾の声を聞いてともえは不満げにベッドの上で身体を横に転がした。

「で、ともえ……今日の成果はどうだったのかしらあ？」

「そんなの知らないっ！ 忘れたくらいよ！」

「あーら、ということは悠輔君にフルボッコにされたのね」

「違うっ！」

母——こと戸隠流筆頭女頭目仁科綾のその言葉にともえはムキになってベッドから飛び起きた

「ともかくあんな奴知らないっ！ 今まであたしがどれだけ悠輔を思って生きてきたか知らなかった上に東京で女作ってそっちの方がいいって言うのよ。もうっ！サイテーよッ！」

その言葉に電話の向こうの綾はクスクスとわらいながら言った

「つまりあなた一般人に負けたのね」

「だーかーらッ！ 違うってば！」

「いいのよー。あたしも昔同じような仕打ちを悠輔君のお父さんにされましたからね」

「悠輔の——お父さん？」

母のその言葉にともえはきょとんとした表情を浮かべた

だがそんなともえを置いて母の愚痴は止まらない。

「本当に藤林家の男どもはひどい奴らばっかよね……あたしも昔、^{けいすけ}圭輔に散々手込めにされて捨てられたのよ。ま、若気の至りってヤツね」

「藤林……^{キングオブニンジャ}圭輔…… 忍者王」

ともえはまるで謔言のようにその名を呼ぶ

噂には聞いていた——伊賀藤林流大家元 ^{ふじばやしけいすけ}藤林 圭輔。最大勢力伊賀藤林流を率いて忍者界のトップに君臨し続ける日本一残酷と言われる忍者王——

「なに……ママ、そんな男と寝たことあるの？」

ともえは引きつった顔を浮かべ綾に真面目に問いかける

だが電話の向こうの綾はいつもと同じ賑やかな口調で笑った。

「なーに。昔の話よ。昔の！ それに圭輔ただのエロオヤジよ」

「そいつ日本一残酷な忍者じゃないの!？」

「そんなに言うなら一度会えばいいわ。セクハラされるわよ」

何その答え——ともえはそんな綾にムツとしながらもベッドの上に座り直し母に話を切り出した

「ねえ、ママ。聞きたいことが2つだけあるんだけど？」

「なあに？」

「一つはね……悠輔のこと。私と悠輔は許婚同士だってママ言ったよね」

その問いに綾の楽しげな声が一瞬途切れ沈黙する。

何その妖しい雲行き……と思いつつともえはさらに話を突きつめた

「なんかおかしいのよね。悠輔みたいな使い手が私の顔見ても覚えがないっていうのよね……とぼけてる感じじゃないし真顔で知らないって言うのよ。ママ、これってどう思う？」

その言葉に綾はさらに沈黙を続けた。

余りにも長い沈黙にともえは「ちゃんと答えて！」と催促しようとしたその時だった。

「ごめんねえ……ともえちゃん」

綾は相変わらずの明るい口調でともえに謝った

「あんたに早く伝えておけばよかったのかも知れないけど。もともと彼とのお見合いは無かったのよ——否、潰された……と言っても良いかしら」

「潰された？」

母のその言葉を聞いてともえはさらに問い詰めようとしたが、その前に綾の怒気を含んだ声が電話の奥から響いてきた

「すべてはあの男——圭輔が悪い。私が切り出したお見合いの話をお見合いの話を悠輔君に話す前に握りつぶしたのはアイツよッ!!」

「はあ……」

「もう絶対に許さないッ!! ウチのともえちゃんを傷つけておいてタダじゃ置かない! 今度圭輔にあったときはコテンパンにしてやるんだからッ!!」

電話の向こうで母が地団駄を踏んでいるのが目に浮かぶ。

自分の母親と悠輔の父親とどう言う因縁があるかは知らないし知る気にもならないけれども、ただ言えること——それは真上のお見合い写真の悠輔はあたし一人虚しく愛してただけ。

なんだ。あたしなんかタダの道化じゃない……

「——ともえちゃん。大丈夫？」

そんなともえを心配してか電話の向こうの綾は初めて母親っぽくともえを労って見せるが、その次にでた言葉はとんでもないものだった。

「悠輔君のこと、そんなにショックならウチの流派が藤林家に宣戦布告しちゃっていいのよ？ 元はといえばあのエロオヤジが悪いんだから——」

「馬鹿いわないでよッ」

母の恐ろしい言葉を聞いてともえはベッドの上に跳ね起きた。

「悠輔のことはあたしが蹴りを付けますッ! もう……ママが関わるとろくな事がないんだから」

「あら、そう言うことは悠輔君の命を奪ってでも一緒になろうって事？」

「そんなこと……ママに言う筋合いはないわッ！」

だけど母の言う言葉は半分正解だった。

もしかしたらあたしは悠輔の死を願っているのかも知れない。

悠輔がああの東京女と一緒にになりたいというならば彼の命を奪ってでもそれを阻止無ければ戸隠の姫と呼ばれる自分のプライドが許さない

ただ、それを成し遂げるには今よりも相当なレベルが必要となる。なにせ相手は日本最大の忍者勢力伊賀藤林流——こちらもそれなりの覚悟で挑まなければ怪我どころでは済まされない。

「それよりもさあ……ママ、もう一つ聞きたいことがあるんだけど」

ともえはベッドの上でごろりと体を変えながら電話の向こうの母に聞いた

「なあに？」

「ママ、応変流って知ってる？」

その一言に綾の言葉が一瞬詰まったが、すぐにいつもの調子で返してきた

「——ええ、知ってるわよ。東北一の忍者集団で闘気術を最も得意にしてるって聞いたことがあるけど」

「そんなことあたしでも知ってるんですけど～」

そう言うともえはうつぶせに寝転がると暗い瞳を光らせ母に確信を突いた。

「ママ、ウチの流派とその応変流って昔何かあったの？」

「え——？」

「私、今日応変流のキモ男に散々邪魔されたんだあ～。その時アイツが15年前戸隠に因縁着けられたって散々言うの。ホント意味ワカンナイし！」

そう言うともえは頬をぶうっと膨らました。

だがそれ以上に動揺していたのは電話の向こうの綾だった。

「ともえちゃん……」

先ほどの楽しげな口調は一転し、綾の声は低く暗く殺気までもが滲んでいるようにも聞こえた

「何から話せばいいのか……よくわからないけど、あなたの言うとおりに我が戸隠流と応変流は15年前ある男を巡って大衝突をしたわ……それは壮絶であたしも数々の優秀な部下を失ったわ」

「それで？」

母の声色の変わりように釣られるようにともえも声も自然と低くなった。

「勝ち負け？ 向こうは東北の弱小集団よ。我が戸隠が負けるはずが無いじゃない……」

「そうじゃなくて……あたしが聞きたいのはその『ある男』の正体よ」

ともえのその低い一言に綾は一瞬言葉を詰まらせたがすぐに声色を変えず言葉を続けた。

「あの男はとんでもない食わせ物だったわ。今考えてみると——何でアイツのために我が戸隠がこれほどまで血を流す羽目になったか、馬鹿馬鹿しくて腹が立ってくるわ」

「だから—アイツとかじゃ全然意味がワカンナイッ！」

ともえはムツとした表情を浮かべ母親の言葉に食ってかかる

しかしそれを止めたのは綾の低く迫力のある一言だった。

「とにかく、ともえちゃん……赤い瞳を持つ一族には気をつけなさい」

「赤い——瞳？」

その一言を聞いてともえは目をぱちくりしながらベッドの上に起き上がる。

ともえは母の言っている意味がわからなかったが『赤い瞳』を持つ人間だけは一人だけが特定できた。

どうやらともえと悠輔、一族的にも深い深い因縁があるようだった。

「はいはい、わかりましたよ。藤林家の皆さんは今後とも注視してますよーだ！」

それに対しともえはイライラした様子で電話の向こうの母に言い放った。

綾はそれを見てクスクスと笑い声を上げいつもの調子で言った。

「あとね、ともえちゃん。伊賀と応変を相手にするなら、こちらも味方を作った方がよさげよ」

「味方!?!」

それを聞いてともえはぎょっとした様子でオウム返しした。

「そうねえ……そうだとしたら残るは協力できるのは甲賀か風魔ね——」

「甲賀と風魔——ね」

それを聞いてともえの脳裏に思い浮かぶのは二人の忍者——上月静夜と風間英太。

静夜は完璧に悠輔と対立しているから協力の話には乗ってくるかも知れない。だが——あの男は何を考えているのかわからないところが不気味。

だとすれば風魔の英太か——彼もまた勝手に悠輔をライバル視してる見たいだし、なんて言っただけであの男はかなりの単細胞だ。

「そうね——味方を作るのもいいわね」

そう言うともえはベッドの上でニヤッと病的な笑みを浮かべた。

「ありがと。ママ。お陰で光が見えたみたいよ」

3 忍者王

「——くそッ！」

戦い終わりシャワーを浴びた悠輔は濡れ髪のまま小さな冷蔵庫を開けた

よく見ると身体中至る所が切り傷だらけ——まあそういう光景を見るのは慣れた方だが、さすがに今日の事態には堪えた

どこかの誰かさんのせいとは言わないが、どうしてあんなに日本で5本指に入るくらいの実力の忍者が集まってしまったのだろう。

腕には自信がある悠輔でもさすがに彼ら全員を相手するのはどんなに命があっても足りない。

だから——戸隠の姫の提案で水入りになったのは最初は頭に来たが内心安心したのも事実だった

彼ら全員が自分を標的にしているならそれは3倍にして返すだけ——でも、そのためには自分をもっと強くならなきゃ無理だ

もしかしたら最も恐れていたこと——大学生生活どころじゃなくなる事態に発展するかも知れない。

早紀にもおそらく自分の正体がばれてるだろうし、本当に踏んだり蹴ったりの一日だった。

「——くそッ！」

もう何度同じ言葉を吐いたかわからない。

悠輔は冷蔵庫の中からスポーツドリンクのペットボトルを取り出すと喉を鳴らしながら一気飲みした。

そんな時だった。

ちゃぶ台の上に置かれていた携帯電話がバイブと共に動き出した

悠輔は不機嫌そうな表情を崩さず携帯電話の方へと歩いて行く

サブディスプレイに映る発信先は——藤林圭輔。

「——父さん？」

その名前を見て悠輔は驚きの色を顔に浮かべた。

珍しい——携帯を使って連絡なんて何年ぶりだろう。

まあ普段父親の連絡と言えば門下の者を使っての連絡ばかりなので、携帯の連絡は別の意味で稀だった。

悠輔は携帯を手にとると表情を変えずに応答した

「よーう！ 悠輔！ 生きてるか？」

開口一番、父圭輔はふざけた台詞を吐いた。

それに対し悠輔は一瞬吹き出しそうになったが、すぐにその言葉の意味を悟った。

「生きてるって……もしかして今日の一件もう父さんの耳に？」

「当たり前だろ～今動画見てるけど、お前も災難だったな一。このメンツで生き残ったのが奇蹟だ」

動画って——その言葉に悠輔は思わず絶句した

今日の戦いの動画をだれが撮ってたというのか？ 門下の者か？ それとも静夜の息がかかった者か——どちらにしる忍者王と呼ばれる藤林圭輔には今日の一件が筒抜けと言う訳だ

「で、今日は何の用？ 今日のダメ出しでもしに来たの？」

「いや。ダメ出しするほどでもないだろ。お前はいつもと同じように完璧だった——ただ相手が悪かっただけ」

そう言うと圭輔は小さなため息をついて言葉を続けた。

「お前、俺が東京行き許したときの約束事覚えてるか？」

「え——？」

圭輔その言葉に悠輔は一瞬ためらいを覚えたが、すぐに言葉を返した

「1. 勉学に勤しむ一方で伊賀藤林流東京支部を率いる事を忘れないこと。2. 一般人に絶対正体を見せないこと。3. 女遊びは大いにしてよし、でも深みにはまるな——」

「お一流石俺の息子だ。ちゃんと覚えてるじゃないか」

「馬鹿にしないでよ。これ高校卒業の夜に一筆書かされたんだよ」

「そうだっけ？まーいいや」

そう言うと圭輔は小さな息を吐くと今までのおちゃらけた態度が一転した

「だけど、悠輔……今日これが破られたの気づいてるか？」

その瞬間、悠輔はハッと息を呑んだ。

一瞬、眼鏡の奥に光る父の真紅の瞳が頭を過ぎった

「まあ成り行きと言えれば否定しないんだが、お前の交際相手——たしか進藤早紀さんだっけか——彼女におそらくお前の正体がばれている。これがどういう意味か解るか？悠輔？」

それを聞いて悠輔は答えに躊躇いを覚えた

だけど、逃げるわけにはいかない。それは突き付けられた現実なのだから——

「うちの掟では正体を知った人間は消す——ってことになるね」

「そうだな……」

圭輔は淡々とした口調でそう肯定した

さすが、日本一残酷な忍者と呼ばれる藤林圭輔だ——正体を知ったならば例え息子の交際相手でも手にかけると平気で命令しかねない。

「こればかりはお前の一存を組まないと言えない。けどお前に残された道は3つ——何

も言わず彼女と別れるか、うちの術で彼女の記憶を消すか——それとも」

「じゃあ、別れる」

悠輔の答えは早かった。

否、これしか最善の方法が無いと言ってもよかった

「お前はそれで良いんだな？」

「例外は認められないでしょう。大家元」

「解ってるんなら何も言わないよ——」

圭輔はそう言うとククと小さく笑った

電話でも相変わらず威圧感たっぷりだ。聞いてて風呂上がりの背中の汗が一気に引いた気がした。

「だけどな一悠輔。女遊びは禁止してるわけじゃないから。また新しい彼女つくればいいじゃないか」

「——そんな気になれるか」

その言葉は悠輔の口から驚くほど綺麗に吐かれた

なんで出たんだろう——一瞬、悠輔は自分のその言葉に驚きを隠せなかった。

「悠輔？」

父圭輔はその言葉に困惑した様子だった。

悠輔は急いで頭を整理し、まるで取り繕うように一言言った

「僕は父さんみたいな女好きじゃない。だから……とっかえひっかえ彼女を返るなんて考えられない」

「まあ、そうだけど……」

「こういう事態になったからには僕は表の生活を投げ打ってでも彼らと決着を付ける覚悟は出来ている——だから……当分彼女なんて——」

その言葉を言いながら悠輔の心に大きな迷いが生まれていた。

掟のために別れなきゃいけない女——だけどそれが正しいのか悠輔には解らなくなっていった

こんな僕にも未練心が残ってるとはな——悠輔は一つ苦笑いをしてまた言葉を続けた

「だから、父さん。僕が引き起こした事態に僕は僕なりの形で片を付ける。だから父さん、もう口出ししないで欲しい」

その一言に電話の向こうの圭輔は小さく笑った。

「ほう……じゃあそのお前なりの片の付け方っていうのを見届けるとするか」

4 アキバのアイドル劇場

翌日——

風間英太は表のお笑いの世界へ舞い戻っていた。

とはいえ駆け出しのトーキョーハンターに待っている仕事はスポットライトの当たらないステージの前座——

「東京タワー！」

決めギャグを繰り出す度昨日の激闘の痛みが身体を軋ませる。

だけど、それを顔に出しては芸としてまずいと思うからいつものように明るく振る舞ってみせる

「おいおい、東京タワーって古いなあ」

「スカイツリーにしろよ。カス」

観客からの痛いヤジが英太たちを襲う。

無理もない。今日の舞台は秋葉原だ。

最近流行のアイドルグループの舞台の前座だと張り切ってやってきたら、とんでもない公開処刑だった

相手はマサシと同じようなオタクばかり——しかも生半可なオタクなんかおらずみんなガッチガチのアイドルオタばかり

これじゃあトーキョーハンターの最強のネタがウケるはずもなく、コテンパンに打ちのめされるだけだった。

「マサシ君今日もやっちゃってくださいッ！」

ああ、この中で俺の真の姿を知ってるヤツなんて誰もいないんだろうなあ——

英太はオタクで埋まったしんと静まりかえる観客席を見つめながらふとそう思った

ここで風魔忍術使ったらどうなるかな？ みんな俺のこと少しは尊敬するかな？ この小憎らしいアイドルオタを打ちのめすことはできるかな——

——そう、こんなメイド姿をしたカワイイアイドルオタ

「……!!」

英太はその瞬間ステージ上で仰天した。

目が——合ってしまったのだ。フリフリのヘッドセットにフリルをたくさん付けたワンピースを着たメイドの少女と。

いや、ここは秋葉原だ。そういうアイドルオタクは山の数ほどいる。

だけど——英太の目に飛び込んできたのはそんじょそこらのメイドさんではない。

金髪のツインテールにくりっとした大きな目の中に暗い炎を灯した戸隠の女頭目その人物だったのだ

(が ん ば れ エータ！)

彼女は声を出さずに唇の動きだけで英太にエールを送る。

なるほど読唇術で読み取れと言うことか——

(あとで屋上で待ってるから。楽しみにしててね)

「……ちょ！エータッ!!」

ぼんやり彼女のメッセージを読み取っていた英太を邪魔したのはレッドリボン軍のTシャツを着たマサシだった

「ちゃんとツッコめお！ オタクたちが笑ってるだろッ」

「あ……」

その瞬間英太は素に戻ってしまった。

その瞬間会場を埋め尽くしていたアイドルオタたちから激しいブーイングが飛んだ。

「さっさと引っ込めチャラ男！」

「俺たちはシスコスフィアが見たいんだ！」

——あの野郎……

ネタに戻った英太は悔しげな表情を浮かべ先ほど彼女が居た席を見た

だが彼女はまるで煙のようにその場から消えて無くなっていた——

5 同盟

『会いたかったー♪ 会いたかったー♪ あなたに会いたかったー♪』

シスコスフィアという秋葉原では熱狂的に愛されているアイドルグループのヒット曲が大音量で外に漏れてきている

何という薄っぺらい歌詞だ。一体何回会いたかったを連発すればいいと思っているのだろう。

英太は劇場の非常階段を一人登りながら不機嫌そうにため息をつきながらそう思った

先ほど英太たちの漫才に散々文句を言い散らかしていたアイドルオタたちは急に息を吹き返し得意のオタ芸を披露している頃だろう

そして英太の相方マサシも、そのオタクたちに混ざってシスコスフィアのアツコちゃんにお熱を挙げているのだろう

だけど英太はそんなことどうでもよかった

アイツのお陰で不始末はあったかも知れないが無難に舞台は済ませた。あとは向こうの要求を聞くだけだ――

英太は劇場の屋上に続く扉をゆっくり開ける。

その瞳は深い夜の帳が降りたかのように暗く光っていた。

そしてその視線の先にいるのは屋上の端にちょこんと座った一人のメイド姿の少女――仁科ともえだった。

「エータ！ おっそーい!!」

彼女は英太の姿を見るなり口を尖らせて一言言い放った

それに対し彼は顔を引きつらせながら拳を握りわなわなと震わせた

「てめえ……あれだけ俺をかき回しておいて言いたいのはそれだけか」

「かき回すって？」

まるでともえちゃんわかんないと言わんばかりに彼女はきょとんとした表情を浮かべ英太を見た

その表情が余計腹立たしく思え英太は鋭くともえを睨み付けた。

「てめえが変なところで心読出すから、漫才の方で素が出たじゃねえか……」

「あら、じゃあ大声で叫んだ方がよかったかなあ？」

「アホかッ！　　そう言う問題じゃねえよ」

そう言うと英太は強い口調でともえに言い放った。

「つまり、俺が言いたいのは俺はステージの上、つまり表の仕事の真っ最中ってワケ！　　そんな時に割り込んで忍者の術使うアホがどこに——」

「まあ、あんたが仕事でヘマしようがしまいがどうでも良いんだけどね」

そう言うともえはツインテールの毛先をいじりながら英太の文句をぴしゃりとはね除けた。

それに対し英太はさらに彼女に対し憎しみを増大させるかのようにじろっと睨み付ける

その視線の中には幾分かの殺気が混ざっていた。

「で、お前の目的はなんだ？　　戸隠の姫さんよお」

「あんたの表の仕事を邪魔しに来たわけじゃないんだけど、たまたまバイト帰りに近く通りかかったらあんたたち見つけたからちょうどいいと思って——」

「だから用件を言えよ」

英太はそう言うと屋上のフェンスにもたれかかると鋭い視線でともえを睨んだ

その顔は風魔の奥義継承者の顔へと一瞬で変わっていた

「もう……せっかちなヤツね……」

そう言うともえは屋上の縁に立つと器用にくるっと英太を器用に振り返った。

「ねえ、エータ。私と組まない？」

「……はあ？」

ともえの急な提案に英太は困惑の色を隠せなかった。

一体いきなり何を言い出すんだ？ 昨日までお互いにかみ合った関係だったのに急に手を組めなど——

「何企んでやがる」

英太はフェンス越しにともえを睨み付けた。

だがともえはいつもと同じように可愛子ぶった表情を浮かべている

「別にい～適当な流派がないからあんたを誘っただけだけど？」

「嘘付け。お前ら戸隠は昨日の件を見てヤバイとでも思ったか？ 応変には目の敵にされ伊賀には袖に振られ——まあお前にとっては散々な一日だったよなあ」

英太の挑発的な言葉は相変わらずのともえの顔に変化を生んだ。

それを聞いて彼女はムツとした表情を浮かべ英太をじろっと睨み付けた

「うるさい」

フェンス越しに英太を見つめるその瞳は闇に覆われたかのように暗くどこか病的にさえも思えた

その瞬間彼女はアキバのアイドルメイドから戸隠流の女頭目の表情に変わった。

「その態度は俺の言ったことはまんざら外れじゃないって事か……」

そんなともえの態度の変化を見て英太はニヤッと笑みを浮かべる

そして更に彼女を挑発するかのよう言い放った。

「伊賀とも応変とも戦う羽目になるから俺たちと組もうって話だったら俺は乗らないね。だって——第一お前との借りがまだ残ってる」

「そんなのどうだって良い！ 今はあんたたちが味方になって欲しいのっ！」

「ほう……そんなに切羽詰まってるのか？ 戸隠さんよ」

英太のその一言にともえはうっと声を詰まらす。

どうやら彼女の状況は相当切迫している。馬鹿な奴だ、顔にわかりやすくそう書いているじゃないか。

「そんなに味方が欲しいのなら他に当たれ。ほら——なんて言ったっけ……甲賀の根暗そうな兄ちゃん」

「上月静夜？」

「そうそう、あいつだって俺と同じ立場だぜ？ そっちの方を先にコンタクト取った方がよくね？」

その言葉にともえは一瞬考え込んでみたがすぐに呆れたようなため息を吐いた

「私、しずちゃんのこと苦手だなー」

そう言うともえは劇場の屋上に小さく腰掛けた

「だってしずちゃん何考えてるんだかさっぱり分かんないんだもん——それならちょっとくらい単細胞でわかりやすいあんたの方が……」

「おい。今俺のこと単細胞って言っただろ」

英太はその一言にムツとした表情を隠さなかった

だがともえはそれを無視してそのまま言葉を続けた。

「それにあんただって味方が居る方がこの先楽だと思うわ。だって悠輔って敵作りすぎだもん。あんたが倒す前に別の誰かが悠輔殺しちゃったらどうすんの？」

「それは——」

それはその時、家元を倒した奴を倒せば最強じゃねえか——

英太はそう言いたかったがその前に、フェンスの向こう側のともえは淡々と言葉を続けた

「この話、正式な同盟と取っていいのよ。エータ」

「は——？同盟？」

「そう、戸隠と風魔の同盟よ。まあそんな話になるとあたしたちの親同士の話し合いが必要かも知れないけど——」

えらい大がかりな話になってきたな——ともえの話を聞いて英太は深いため息をついた。

最初はただ闇雲に最強だけを目指して飛び込んだこの争い——それはもう英太個人では収集着かない大きな抗争に発展しているのは確かな話だ

けどこんなエキセントリックな女と同盟関係になれるのか？ こちらにもちゃんと利があるものなのだろうか——

「そうなる……即答はできかねないな」

英太は一言そう言うとフェンスに身体をもたれかけさせた。

「お前の言うとおりに、同盟となるとまず俺のじいちゃんに聞かないと何とも言えない。だけど……」

「だけど？」

「お前も気づいてるだろ。燃え上がった炎はいきなりは消せない。この抗争——おそらく今よりもっと酷くなるだろう。だから——同盟っていうのは俺自身は賛成だ」

本当に物事を複雑にしてる張本人はだれだ？ 英太はムツとした表情で腕組みした。

自分はただ最強の座さえ手に入ればそれで満足なのに——まるで皆がそれを阻んでいるようにしか英太には見えなかった。

「ホント？　じゃあ、あんた味方になってくれる——」

「ちょっと待った」

そう言うと英太はフェンスを前にして手をかざした

「俺はこの前の借りを忘れた訳じゃないぞ——機会がくればお前と再戦するからな。その時は覚悟しとけよ」

「えー！あんたどこまでもねちっこい男ねー！」

「ねちっこいって言うな！　俺はただお前に負けたことが納得いってない——」

「はいはい。わかったから。あたしは逃げも隠れもしませんよ」

ともえはそう言うと持っていたフリフリレースの日傘を差した

そして英太の方をくるりと向いてニッコリ笑った。

「じゃあ、エータ。今度会うまでに生きていてね」

そう言ったともえはそのまま後ろに軽く飛んだ

そして日傘を落下傘代わりにそのまま地上の大通りへと舞い降りていく

その姿を見て英太は小さく舌打ちすると小さな声で呟いた。

「今度会うとき生きてないのはお前かもよ……」

1 恋人は忍者

あの事件の後、進藤早紀は2日ぶりに大学に出席した。

本当にこの2日間、長く深く悪い夢の中で溺れているような錯覚を起こす日々だった。

夢——と言ってしまえば楽になる。だけどあの日の出来事は完全な現実だった。

それを思い知ったときああ逃げられないんだなという絶望感が早紀の心を支配した

思い出すのはあの情けない東大生の藤林悠輔のことばかり。

否、それは自分に見せていた偽りの顔。本当の顔は——あの時会った男が言うとおりに悠輔は忍者であるはずだった。

一体どうしたらそんな荒唐無稽な話を信用できるのだろう。忍者？フィクションの中の生き物でしょ？

だけどその日起きた事件はそれを信じなければいけないと突き付けられた。

悠輔の他にも忍者は居る。あの黒服の男、大きな身体の男、そして——

——仁科ともえ。

早紀の飲み物に睡眠剤を入れて拉致しようとしてあげくには殺そうとした友達

きっと彼女も忍者なのだろう。そうじゃないと説明が付かない。

この2日——悠輔からもともえからも連絡はぱったりと途絶えていた

ともえはともかく、悠輔から連絡がないことは早紀に苛立ちを覚えさせた。

あんな事があってどうして連絡が来ないのだろう。普通なら真っ先に連絡をくれたっていいだろうに——否、いれるべきだ。

別に自分から入れてもいいのだけど、さすがにあの事件のあとだけになんだか気が引ける

悠輔自身が連絡をくれればどれだけ楽になるかわからないのに——あの人は果てしなく鈍感だ。

「早紀おはよー」

教室に入ると数人の友達に挨拶された

だけとおしゃべりだったはずの早紀は彼女たちに小さく挨拶するだけであまり深い会話に入ろうとはおもわなかった

席に座ると、教科書を出す前に携帯電話を手にとっていた

発信、メール受信一通り確認したけどやっぱり連絡は来てない。

本当にどういふつもりなんだろう——これ以上連絡がなかあったら本気で悠輔との信頼関係が音を立てて崩れていきそうだった。

否——もしかしたら彼はそれを狙っているのかも知れない。

秘密を知った自分に対し悠輔はそのまま関係の自然消滅を願ってるのかも知れない。

だけど——早紀はこのまま悠輔との関係を終わらせるつもりは毛頭無かった

まだ秘密を信じた訳じゃない。だって『忍者』としての彼を実際には見てないのだから——

「さーきちゃん」

また女友達に話しかけられた。

早紀は携帯電話をポケットの中に入れて後ろを振り向いた

その瞬間早紀の全身は凍り付いた。

目の前にいたのは全身白いフリフリレースのドレスに厚底ブーツ、金髪のアインテールに真っ赤なりボンをつけた——仁科ともえだった。

「どうしたの？ 顔真っ青だよ」

ともえはニコニコしながら早紀の顔をのぞき込む

無理もない。早紀を昏睡させ拉致し殺害しようとした張本人が目の前にいるのだから——

だがともえは相変わらずの態度で早紀をいたぶるかのように接してきた。

「なあに？ どうしたの早紀ちゃん？ あたしの顔なにか付いてる——!!」

その瞬間、早紀は思いっきりともえの手を掴んだ

勢いとはなんと恐ろしいものだろう。彼女は忍者だということを忘れていた早紀だったが、そのまま席を立ち上がるとともえをつれて一気に教室の外までかけだしていた。

そしてそのまま近くの女子トイレにともえを連れて行くと逃げられないように壁際に追い込みそして彼女をじろりと睨み付けた。

「何よ！ あんたあたしを誰だとおもってんの!!」

ともえはそれに反発する牙を見せるように彼女を暗い瞳で睨み返した。

「あんたねえ、よもや2日前のこと忘れてなんかないよね!? あたし、あんたを殺しかけたんだよ——」

「そんなの関係ないわ——」

自分を殺しかけた女忍者を前にしても早紀はびっくりするほど冷静だった。

「もう一回聞くわ……あなたどうして私の命を狙ったの？」

「またそれ？ 昨日もちゃんと言ったじゃない——」

「いいから答えて！」

まるで辺り一帯に響き渡るような声で早紀はそう言い放った。

その思いがけない迫力に早紀の命を狙った女忍者ともえは思わずたじろいだ様に見えた。

「——もう二度と言わないからね！」

ともえは一言そう言うと不機嫌そうな顔で言葉を続けた。

「あんたを狙った理由は簡単。ただ一般人のあんたと伊賀藤林流家元の悠輔とじゃ不釣り合いだと思って仲を裂きたかっただけ。それに——」

「それに？」

その一言にともえの言葉は途切れる

しばらくの沈黙の後彼女の表情はさらに不機嫌になり憤りに似た言葉を吐いた

「あたし、中学の時悠輔の写真見せられてそのまま恋い焦がれちゃったんだよね——だからあたしは悠輔の許婚だって……勝手に勘違いして今日に至っちゃったんだよね。あーあ本当に馬鹿馬鹿しい。実際はその婚姻さえ悠輔には知らされてもなかったなんて——」

まるで恨み節のような言葉を吐いたともえはハッと我に返りまるで取り繕うように言い返した

「と、ともかくあたしはあんたが邪魔だった。ついでに言えば悠輔も邪魔だった。邪魔者は潔く消しちゃえっていうのが私のスタンスだから。あんたを狙った理由はそこにあるわね」

ともえの言葉を聞いても早紀はやはりすべてを理解することができなかった。

忍者の世界がどれだけ予想に反しているか想像も付かないのは当たり前。だけど、それ以上に悠輔とともえの関係は複雑そうで何度聞いても理解することができない。

もうちょっと詳しく教えて——そう聞きたいのは山々なのだが。ともえのことだ。「何度言わせるのよ」と今度こそ手の取り返しが付かないくらい怒り出すだろう。

「わかった。もうそのことはもう聞かない」

早紀はそう言うと無理して威圧したような瞳でともえを見た

「じゃあ、悠輔のこと教えて！」

「は？」

「いわゆる……悠輔の裏の顔を教えて欲しいんだ」

その一言にともえはさらに苛立った様子で早紀に突っかった

「あんた悠輔の恋人なんでしょ？ それなら本人つかまえて問いただせば良いんじゃない！」

「でも——！」

悠輔から連絡が無くてこちらか連絡するのも気が引ける——そう言いたかったがそれを言ったらともえに何を言われるかわからなかったのものでそれ以上何も言えなかった。

「——なるほどね」

その瞬間ともえは平然とした表情で一言言い放った

「悠輔からの連絡がないのね。そりゃ聞きようがないわ」

「え——？」

その瞬間早紀は驚きの余り自分の口に手を当てた。

たしか、自分は何も口にしていない。何もしゃべってない——なのに何故ともえに心内を読み取られたのだろう

「忍者を舐めるんじゃないわよ。あんたの無防備な心なんてこちらは筒抜けよ」

ともえはその瞬間勝ち誇った笑みを浮かべた。

それは早紀が初めて怖いと思ったともえの姿だった。

「なあに？ さっきの威勢は何処へ行っちゃったのかしら？ 早紀ちゃん」

一步、また一步退く早紀をともえは優越感を得たように追い詰める

やっぱり私はこの娘には勝てない——早紀はそんなともえを見てそう思った。

物理的にもダメ、精神的にもだめ、勝てる要素なんて何もないじゃない——

「これ以上用がないなら教室に帰るわよ。あたし、単位ギリギリなんだから。これで単位取れ

なかったら早紀ちゃん——わかってるわよね」

ともえはひとつ恐ろしさを感じさせる笑顔を浮かべると、そのまま踵を返し、女子トイレから出て行ってしまふ

早紀は呆然とその場に立ち尽くす。 自然に瞳から涙がこぼれる。

彼女の言う通りかも知れない。何も知らなくていい表社会でのうのうと生きてきた女子大生風情の私が、裏社会を暗躍している伊賀藤林流の家元である悠輔と釣り合いなど取れるはずがない

それが解っているから悠輔はあえて連絡をしてこない。自然消滅という形で別れようとしているのだ

だけど、それなら何故私は泣くのだろう。何故悲しく思えるのだろう。

まだ、悠輔に未練があるの？ 普通の男なんて掃いて捨てるほどいるのにどうしてあなたに惹かれるの——

その時だった。

沈黙に静まる女子トイレに流行のJPOPの着メロが鳴り響く

早紀はハッとした。そしてポケットに突っ込んだ携帯電話を取り出した。

サブディスプレイには——藤林悠輔。待ちに待った彼からの連絡だった

だが早紀は悠輔からの電話に出るか出ないかを少し迷いを見せた。

けたたましくなる着メロだけがただ虚しく響いてく。

早紀はいたたまれない気持ちになったが、彼女がその決断を下すのに時間は要さなかった。

「もしもし——」

思い切って携帯の着信ボタンを押した早紀は恐る恐るそう言った

だが電話の向こうの人物も同じように確かめるように言葉を吐いてきた

「早紀——今大丈夫？」

その言葉に早紀は一瞬授業のことが頭を過ぎった。

だけどせっかくの悠輔の連絡だ。チャンスが無碍に捨てることは出来ない。例えそれが哀しい告白であっても——

「大丈夫」

早紀は引きつったような泣きそうな笑顔を浮かべてそう言った。

泣いてることは悠輔には悟られるわけにはいかない。そればかりが早紀を無理させていった。

「あのさ——」

「早紀、君に話したいことがある」

「え——」

何を——そう言う間に悠輔は言葉を続けた。

「君にずっと黙っていた——僕の秘密さ」

それを聞いた早紀はただ呆然とするしかできなかった。

そして悠輔はさらに言葉を続ける。

「昨日一日考えて僕が出した結果——それを君に聞いてもらいたい。場所は初めてデートした東京ドームシティでいいかな？ 日時は——君に合わせるけど……早いほうが良いかな？ じゃあそう言うことで——」

2 最後のデート

なんで悠輔はいつも勝手なのだろう。

あの電話の後早紀はその事ばかりが頭に来て少しの間無然となった。

だけど、早紀の方も悠輔を求めていることは確かだし、その誘いに乗らない手はなかった。

そしてあの電話から1日後、水曜日のPM17:30——

初夏を迎えたこの時間はまだまだ明るく西日が厳しく地面を照らし続けていた

その日、早紀は珍しく何時より早く待ち合わせ先にやってきた。

こんなに早く来たら恐らくちょっと待ちぼうけかなと思ったが、気持ちが焦っていたのは悠輔も同じだった。

「あ……」

待ち合わせ先の公園には落ち着いた色の茶髪に黒縁眼鏡——いつも先に見せる情けない東大生の藤林悠輔が待っていた

「早紀……今日は早いんだね」

悠輔はそう言うときにこっと笑った。

早紀はその笑顔にどう答えたらいいのか解らず視線を落とし心でもないことを言った。

「べつに……今日授業無かったし……」

それは小さな嘘だった。本当は授業があったけどこのためにドタキャンした。

明日から嫌味な講師に反省文書かなきゃいけないけど、悠輔のためならそれさえも苦ではないような気がした

「じゃあ、行こうか……」

悠輔は一言そういうとその場から立ち上がりそのまま歩いて行く

それを早紀はだまっただま悠輔に付いていく。

端から見る人々からみれば自分たちを見てへんなカップルだと思うだろう

だけど、少なくとも早紀はこれは最後のデートだと覚悟をしていた。もちろん悠輔だって——その覚悟で今日を選んだに違いない。

早紀は確信していた。悠輔の秘密を知るとき——それが自分たちの最後の時だと。

待ち合わせ場所から少し歩いたところに東京ドームシティがある。

今日はどうやらナイトがあるらしくオレンジ色のユニフォームを着た人々がドームに吸い込まれていく。

だけど自分たちが行く場所は東京ドームシティ。ドームの隣の遊園地だ。

最初ここを最後の場所に決めた事に早紀は深い疑問を覚えた

確かに東京ドームシティは悠輔と初めて着たデートの場所だ。思い出もたっぷりある。

だけど、今日は初デートの初々しさとか高揚感などなにもない。ただ別れを告げられるのならこんな陳腐な遊園地なんて不向きに決まってる

なのに悠輔は何故こんな場所を今日の場所にしたのである？

遊園地に入ったって乗り物なんか乗る気など起きないというのに——

そんな疑問を渦巻く中、悠輔は早紀に入場券をおごった

手渡されたのチケットはナイトデーの入場券のみ——当たり前だけど乗り物券はついてない

それを手に取り早紀は悠輔の後を追うように遊園地に入場していく

覚悟はしていたけど、ナイトデーの遊園地は至るかしこに愛を謳歌しているカップルばかり

はしゃぎ回る彼女、優しく微笑む彼、ソフトクリームをつつく彼女、それを横取りしちゃう

彼——

なんで見ているだけでいたたまれない気分になるのだろう

あの日までは自分たちが彼らの立場だったではないか。

それなのに、あの日を境に変わった。悠輔も、早紀も、周りも——

そんな気分になる早紀をよそ目に悠輔はただ目的の場所までひたすら黙って歩いて行く

どこまで行くのだろう——早紀はそんな悠輔をただひたすら追う事しかできない

そして赤い鉄の階段を歩いて行った先——そこで悠輔の足がとまった

「ここ……」

早紀はその店を前に呆然と立ち尽くした

それは悠輔との初デートの時昼食をとった小さなテラスレストランだった。

悠輔はそのレストランの中に入ると真っ先に店員に言った

「テラス席——空いてますか？」

店員は「空いてますよ」と微笑みながら二人をテラス席へと案内する

そこは日暮れ時の水道橋が一望できる眺望の席だった。

もうナイターが始まっている時間だけどドームに駆け込む人の流れは変わらない

そしてぽつぽつとこの遊園地もライトアップが始まっていく

そう、これから始まる夜を告げるように摩天楼は光を帯びていく——

「早紀……好きな事聞いて良いんだよ」

席に着くと悠輔は開口一番そう一言言った

薄暗くなっていく中彼の髪にライトが当たってきらきら光っていた。

「悠輔——」

「今日の僕は君に何も包み隠さず告白するつもりで来た。だから何を聞いても平気だから——」

早紀はその眼差しを見て思わず息を呑んだ。

眼鏡の奥の悠輔の瞳はとても凛々しかった。

「悠輔……」

そう言う早紀の下瞼に涙が集まりだしていた

「あなたが忍者——って本当なの？」

その言葉に悠輔は小さく息を吐いた。

「それ誰に教えて貰ったの？」

「え——？」

「君にはなにもしない。僕が怒ってるのは何も知らない君に僕の断りもなく君に僕の正体を教えた不届きな奴だ」

その言葉を使う悠輔はどこかいつもの表情を少しずつ乖離させていく。

徐々に露わになっていく裏の顔の悠輔——それが少し怖くもありスリルもあった。

「名前は知らない。でも風貌はすごく覚えてる」

「うん……」

「たしかぼさぼさの黒髪に黒いコートを着込んで——そうそう手が騎士みたいなガントレット？
なんかゲームの中に出てきそうな……」

「もういい。大体犯人はわかったよ」

そう言った悠輔の顔は明らかに険しくなっていく。まるで早紀の前で爆発しそうな怒りをじっと我慢しているようにも見えた

「まあ、そいつが何を言ったか解らないけど——確かに僕は忍者だ」

悠輔はひとつ息を吐くとその眼鏡の奥のまっすぐな瞳で早紀を見た

まるで吸い込まれそうな色の朱色だった——

「僕の実家は400年前からずっと続く伊賀忍者を統べる家系——そして、僕は第17代伊賀藤林流家元藤林悠輔だ」

400年前？伊賀忍者を統べる家系？　まるで現実離れした言葉が真顔の悠輔の口から飛び出す。

それを聞いて早紀は今更ながらともえの言った言葉の意味が何となく理解できた

「正直言えば早紀にこれを話す機会は永遠に来て欲しくないと思っていた」

「え——？」

「僕の家にはね壱百条の家訓があるんだけど、その中にはね自分の正体を悟られないことともし悟られたときの対処の仕方があるんだ」

「壱百条……」

その数に早紀は一瞬息を呑んだが、すぐに話を切り出した

「で、その対処に仕方って何？」

「まあ乱暴な言い方をすれば悟られた相手を消すって事だね」

悠輔のしれっと言いかけたその言葉に早紀は思わず絶句した

まさかとは思いますが悠輔もあのともえのように自分の命を奪いに来るのだろうか——そんなとてつもなく嫌な予感が早紀の背筋を凍らせた

「安心して、早紀。僕はそんなことしないから」

悠輔はまるで早紀の心を読んだかのようにそう言うとニッコリ笑って見せた

やっぱり、ともえと話してるときと同じ。悠輔に自分の心の中を完璧に読まれてる——

「でもね、もうこうなった以上今までの関係は続けられないと僕は考えている。僕はなぜか他流派に狙われているし、そこに君が居たらこの前みたいに君まで巻き込んだ戦いが起きるかも知れない」

悠輔はそう言うと小さくため息をついて一言続けた。

「早紀……もう別れよう」

やっぱりその言葉が出てきた——

早紀はそれを覚悟していたつもりだったがやはり実際に突き付けられるととてつもなく重くて深い言葉だった。

「どうして——？」

早紀は率直にそう聞いた。

目の前に映る悠輔の顔はどこことなく哀しい色が見えた。

「僕は早紀を消したくない——消す事なんて出来ないよ！ だから君と綺麗に別れて僕が君の記憶から消えて無くなれば一番君が傷つかない方法だと——」

「——悠輔は勝手すぎる！」

早紀のその一言は初夏の乾いた空気に大きく響いた

悠輔ははっと早紀を見ると、彼女は溜まらず涙を流していた

「なにが一番傷つかない方法よ……あなたのこと綺麗に忘れれると思う？ そんなの無理。だってあなたの思い出こんなに強く焼き付いてるのに——！」

早紀の丸い瞳からぼろぼろと涙が泉のようにこぼれる

悠輔の前では絶対に泣かないと決めていたのにいざとなるとこうだ。自分の情けなさにさらに涙は多く溢れてくる。

「もうやだ。こんな夢なんて早く終わってほしい！ それとも悠輔って存在が夢のようなものだったとでも言いたい。そんなの、やだ。いやだよ——！」

その瞬間、早紀ははっと目を見開いた

唇にあたる優しい感触。そして目の前にいる精悍な一人の青年——

余りに突然すぎてどう反応したらよくわからなかった。でも、その突然のキスは早紀にとってとても心地よいものだった。

「これは夢じゃない」

悠輔は早紀の唇から離れると一言そう言った

「僕はここにいる。夢のように消えてなくなりやしない」

「悠輔——」

「綺麗事ばかり言ってすまなかった……ホント、早紀のこと何も考えて無い身勝手な男だな」

そう言うと悠輔は自分に呆れたように笑った

何故だろう、今日の悠輔はいつもと違う。それは裏だの表だの関係なく、ただ一人の藤林悠輔という人間がとても魅力的に感じた。

「悠輔？」

早紀は涙を拭いて一言訊いた。

「眼鏡——取って良い？」

「え？」

その申し出に悠輔は一瞬戸惑った。

「私、悠輔が眼鏡取ったところ見たことない——そりゃ忍者になるときは外してるだろうけど、この前はそれどころじゃかったし——」

その言葉に悠輔は納得した様子で笑った。

「いいよ」

早紀は悠輔の黒い眼鏡に恐る恐る手を伸ばす。そして優しく耳から放した。

瞬間、露わになる悠輔の本当の顔

いつも情けないと言っていたその瞳はぞくぞくするほど鋭く野性味を感じさせる。

そしてその瞳の色は茶色を乗り越してどちらかと言えば赤に近い。

それは眼鏡というフィルターが覆い隠していた悠輔の素顔。本当の顔。

それを間近に見た早紀は思わず恥ずかしさで顔をうつむけた

「馬鹿。なんでコンタクトにしないのよ」

「え——？」

「絶対悠輔は裸眼の方がカッコイイよ……だって——」

惚れ直したじゃない——そう言いたかったが余りにも恥ずかしすぎて言葉にならない。

そんな赤面した早紀の頬に悠輔は優しく手を這わせた

「僕は目が悪くてこれをしてるわけじゃないよ」

「それならダテ？」

「んーそれも違うな」

そう言うとき悠輔は早紀の手から自分の眼鏡を取った

「僕の家系は生まれつき目に異常があるんだ。それは悪い異常じゃなくて、こういう家業やるために生まれつき与えられる真紅の瞳——」

そう言うとき悠輔の表情が次第に近寄りがたい色をだしてくる。

その瞬間、目の前の彼氏は伊賀藤林流家元の目に変化していた。

「僕は裸眼だとすべてが止まって——否、コマ送りのようにしか見えないんだ。だからあのジェットコースターもフリーフォールも全部止まってしか見えない」

「それ、どういうこと？」

「表世界だと動体視力っていうんだよな——それが異常に発達している状態だと思って貰っていい。だけど自分じゃコントロールもできないからこの眼鏡のレンズを改造してやっと日常生活がおくれてるって感じかな？」

そう言うとき悠輔は手に持った眼鏡をそっと付けた

これでいつもの悠輔に変わった——わけじゃない。もう正体を知ってしまったのだから元の悠輔として見るのは不可能に近かった

「悠輔——私どうしたらいいの？」

早紀は顔をうつむけたまま悠輔にそう聞いた

それを見て悠輔は彼女の頬にもう一度触れた

「僕のことを忘れたくないのなら——それなりの覚悟がいるよ」

「覚悟——？」

悠輔の顔は笑ってなかった。まるで表情が欠陥したかのように彼はただ早紀を見つめ言葉を続けた。

「そう、いつ何時僕は他流派に襲撃されるかわからない身。そんな僕を変わず愛せる？」

「それは——」

「僕だってこれ以上君を危ない目になどに遭わせたくない。だから最初は君と別れることも君を守る手だと思ってた。けど——」

「悠輔！」

そう呼ばれて悠輔は顔を上げると不意に早紀の唇が優しく降ってきた

悠輔はそのまま彼女の身体を抱き寄せた。そしてそれを早紀も応じた

「私、絶対別れないからね！」

「え——？」

「だってこのままじゃ負けたような気がするじゃない……現実とか掟とかいろんなものに」

早紀のその一言にも悠輔はどこか煮え切らない表情を浮かべていた

「君はそれで良いの？」

「どういうこと？」

「僕が伊賀藤林流の家元で強力で多大な敵に囲まれている——それがどういう意味か解る？」

「わかるわよ。それくらい……」

そう言うと早紀はぶすっとふくれっ面で言葉を続けた

「あなたのことでしょ。どうせ僕と付き合ったら君が危ないとか格好つけるような言葉であしらうんでしょ。でもね、悠輔。私はそれでもいいの。それでもいいからあなたの側にいたい
の——」

「早紀——」

その言葉に悠輔は驚きの顔を隠さず見せた

それは今まで完璧を繕っていた彼氏の小さな綻びを見たようで早紀はちょっと優越感を持った。

「ねえ、悠輔——私、消されるのかな？」

「え？」

「だって伊賀忍者の家元を愛してしまったのよ……あなたもさっき言ったように掟を破ったからには消されるんでしょ」

その言葉に悠輔はやっと早紀の知ってる顔で笑った。

そして彼女の身体を強く抱き寄せると一言言った

「消させはしないさ……君を消そうとする存在ならたとえ門下の者でも、たとえ親でも——僕は戦うよ」

「やだ。また物騒なこと言って——」

そう言う早紀の唇を悠輔は優しく奪う。

最初はこの遊園地の幸せそうなカップル達を憎たらしい目で見えていたが、今は自分たちが恋を謳歌する幸せそうなカップルになっていた。

そう、これでいいんだ——早紀は悠輔と唇を重ねながらそう自分に言いつけた

例えこれから二人の前に沢山の壁が立ちふさがろうとも悠輔と一緒に乗り越えていける——早紀はそう信じて病まなかった

3 守ってみせる

悠輔は心と目が覚めた。

水道橋にほど近いホテル。今日はあのまま早紀と一緒にチェックインしてそのまま愛を確かめ合った。

キングサイズのベッドには裸の早紀が薄い布団だけを羽織って深い眠りに陥っている

そんな彼女のサラサラの髪を触りながら悠輔は深い迷いの淵を歩いていた。

「早紀を消す——か」

悠輔はまるで謔言のようにその言葉を言った。

本当は別れを切り出すつもりだった。だけどその決意は自分にも早紀にも足りなかったのが今にいたるのかもしれない。

仕方がない。悠輔は早紀のことが好きだし、早紀は悠輔のことが好きなのだから

むしろ今回の一件で自分たちの愛はもっと深まったような気がする——その結論は悠輔にとっても早紀にとってもグッドな選択だと思った。

だが、一人の東大生の藤林悠輔としてはそれはグッドな選択かもしれないが、伊賀藤林流家元の藤林悠輔にとってはどうだろう？

これから他流派からの攻撃は激しさを増すだろう。その時僕は本当に早紀を最後まで守れるだろうか？

悠輔はベッドから起き上がると脇に置いていた携帯電話を取った

そして表情一つ崩さず彼はある場所に電話を入れていた。

3度ほど呼び鈴が鳴ってそしてその相手は出た。

「よーう！悠輔。彼女は元気か？」

相変わらず父藤林圭輔の声はおちゃらけてる印象が否めない。

だがそのおちゃらけていながら言っていることは穏やかではない。

「まさかと思うんだけど……今日の僕も監視されてたの？」

悠輔は顔を引きつらせながら圭輔にそう聞いた

だが父圭輔はいつものようにケタケタ笑いながら言った

「馬鹿だなあ。息子のデートを監視する野暮がどこにいるんだよ」

「でも今僕と早紀が一緒にいること言ってただろ」

「それは監視じゃない。勘だ。勘」

「勘!?!」

「まあお前も人生経験を積みばすぐ解る勘さ——」

圭輔はそう言うと大きく息を吐くと先ほどのおちゃらけ声から一転忍者王としての声で悠輔に語りかけた

「——で、悠輔。お前なりの落とし前はつけたのか？」

その声にも悠輔は臆することなく返した。

「僕は——早紀を消さない」

「ほう……」

「今日彼女には包み隠さず僕の秘密を話した。本当はそれで別れるつもりだったけど——」

「女の方がそれを嫌がった——と？」

父のまるで刃を喉元に突き当てるようなその言葉に悠輔は一瞬戸惑ったがすぐにいつものようなポーカーフェイスに戻った。

「嫌がったのは早紀だけじゃない、僕も——本心じゃ別れたくなんてなかった。ただそれが二人一致しただけ——今日はそれだけだよ」

悠輔はそう言いながら必死に悩んでもいた。

本当に今日の決断は正しかったのか？今後どのような影響を与えてくるのか？悠輔にも想像が付かなかった

「悠輔——それは茨の道だけど、お前はそれでいいのか？」

圭輔のその問いに悠輔は強い決意で前を見た。

「ご心配なく、大家元。どんなことがあろうとも僕は絶対早紀を守る。それが忍者界全体を巻き込むような大抗争になろうとも——」

その言葉に圭輔の深いため息が電話の奥から聞こえてきた。

「わかった。好きにしろ」

圭輔は捨て台詞のようにそう吐き出す。

それを聞いた悠輔の瞳は自然と赤い光が灯った。

「父さん——否、大家元。もう一つ聞きたいことがあります」

「何だ……」

「大家元はこの状況をどう見ているのですか？ 主要五流派がまるで団子のように争うことになった今の事態を——」

悠輔のその質問に圭輔は一瞬沈黙の間を置いた

だが、次に出た声はあまりにも意外だった。

「おもしろい——俺は率直にそう思ったね」

「おもしろい——ね」

さすが父さん。一番らしい答えだ——

悠輔はそれを噛みしめたあと真紅に光る瞳を前に向けた。

「父さん、僕は彼らと何処までも戦える覚悟は出来ている……だけど、彼らをまとめて倒せるような力量はない。この前の一件で僕はそう悟りました」

「ほう……お前にしてはえらい素直だな」

「だけどこのまま伊賀藤林流が彼らにいいようにされるのを見るのは僕にとっては耐えられない仕打ち。だけど僕は考えました。彼らに我が伊賀藤林流の実力を見せつける方法を——」

そう言うと悠輔は低く息を吐くと真紅に光る瞳を開いた。

「大家元……僕に30人ほど人員をよこしてください」

その願いに父圭輔は特に驚くこともなく淡々と言葉を続けた。

「30人か……結構な人数だな」

「大家元の手は煩わさせません。すべての責任は僕にあると考えてください」

「ほほう……そこまでして我々の実力をどう見せつけるのだ？」

「それは——」

悠輔は一つの勝算があった。

彼らを倒すことはできないけど威圧することはできる——

そのためならどんな手を込んだことだってするつもりだった。

すべては今この場所で平和に眠る早紀の寝顔を守り抜くため——そのためなら僕はどんなに自らの手を汚すことを厭わない

1 警視庁のメッセンジャー

この日警視庁渋谷署の窓際資料係の上月静夜は何故か警視庁本部の官房室に向かっていた。

今日に限ってはだらしのない制服はカチツとしたスーツに替えて、現役のキャリア刑事の誰よりも黒いスーツはさまになっている

もちろん静夜がわざわざここを訪れたのはちゃんと理由がある。

一応アポは取っておいたけど、いざとなると面倒なので途中の衛視たちは催眠術で黙らせて、この警視庁の最深部にいとも簡単にもぐりこんだ静夜は官房室の前に立つとノックもせずにドアを開く

「だれだ——！」

急に扉が開くと中にいた勝田官房長は思わず声を荒げた。

「お前——！何の間違いでここに足を踏み入れた!？」

「あれ？ おかしいですね？」

そういうと静夜はわざとらしくとぼけて見せた。

「一応アポはとったつもりなんですけど……伝わってないようですね」

「アポは取っただと……」

そう言われて勝田は隣にいた秘書に今すぐ調べるよう目で強い圧力をかける。

制服を着た気弱そうな秘書は急いで手帳を広げるとしばらくして困惑した様子で勝田に話しかけた。

「今日の15:00ごろですが——上月さんと面会の予定が……」

「何？ 上月だと？」

誰だねそれは——！ 勝田がそういう前に静夜は彼のデスクに横柄に腰掛けるとじろりと睨み付けた

「それが俺さ、上月静夜——よろしくな」

そんな静夜の態度を見て勝田は今すぐ激昂してしまうほど怒りを覚えたが、何故かそれを抑えようという本能が働いた

この若輩の刑事が怖いとでもいうのか——否、怖いどころではない。

彼の青白く光る瞳を見てるとまるで自分が自分でなくなるような恐ろしさを感じるのだ。

「——で、上月君は一体何の用かね」

勝田は顔を引きつらせながら静夜にそう問いかける

何故だろう普通なら追い返してもおかしい相手なのに——どうしてこんなに下手に出るのだろう

「勝田官房長にこれを手渡しに着ただけ」

静夜は得意げな笑みを浮かべひとつのファイルを勝田のデスクにたたきつけた

「これは——！」

勝田は静夜から出されたファイルをぱらっと見て驚愕した

そこに書いてあったのは現総理大臣、現閣僚、野党党首、有力国会議員等のプライベートやスキャンダルを事細かに書いた大量のレポートだった

「君——！一体これをどこから手に入れたんだ！」

「そんな驚くなよ……それを俺に依頼したのは勝田官房長あんただろ」

「え——？」

静夜のその言葉を聴いて勝田は思わず絶句した

何だというのだ——？ そんなのを頼んだ記憶がまるまるとないぞ？

頑張っと思い出しても目の前の上月静夜もこのファイルもまったく身に覚えがないもののはずなのに——

「あ……そういえば、昔、俺と逢った記憶を消してたっけ」

そういうと静夜は少し呆れたような表情を浮かべて笑った。

「あんたに必要がないのならこのファイル持って帰るけど——？」

「待て——！」

勝田は強い口調でファイルを持ち出そうとする静夜を制した。

「このファイルは——私が預かっとく」

「ほう……」

「君みたいに素性がわからない人間にこれをもたせておくのは危険すぎる——これは我々が厳重に管理しておく」

そう言うとな勝田はそのファイルを自分のデスクの引き出しに閉まった。

こんな危ないものこの男に持たせてみる——今に金に目がくらんでマスコミに垂れ流すに違いない。

「じゃあ、取引成立ですね」

そう言うとな静夜はにっこりと笑顔を浮かべた。

「取引——!？」

その言葉に勝田はぎょっとした表情を素直に出した。

こんな押し売りみたいなマル秘ファイルを出しておいて見返りまで求めるというのか——

「いやだなあ……俺は別に金銭なんか求めませんよ。ただ——」

その瞬間、静夜の瞳に青白い炎が灯った。

「できれば今回の件で俺たち甲賀を警察でもっと取り立ててはくださりませんか？」

「は——？」

静夜のその一言に勝田は思わず凍りついた。

一体なにを言い出すというのだ——甲賀だかなんだか知らないが一体何の目的があって自分に接触したのだろう？

「わからなくて結構ですよ。勝田官房長」

そう言うと静夜はじっと勝田の瞳を見つめた

まるで吸い込まれるように深い蒼の瞳——それを見てはだめだと自分の中の自分が懸命に警告しているが勝田はそれに引き込まれるしかできなかった

「俺たちは警察内での対抗勢力の台頭を防ぎたいだけ。俺たちのやることを黙認してくれるだけでいいんです」

「対抗勢力——やることを黙認——」

次第に勝田のペースは静夜によって支配されていく。

隣にいる気弱そうな秘書も様子がおかしいのに気づきおろおろとするばかり。

だが静夜にとってはすべてが自分の手の範囲内だった。

「勝田官房長。とりあえずこの署名に署名してくださりませんか？」

「署名——」

「俺たちは警察での伊賀の台頭を一番恐れています。それをできないように勝田官房長のお力で何とかならないですかね？」

そう言うと静夜は勝田の目の前にひとつの紙を差し出した

その紙に何が書かれているか——そんなことさえもできないくらい勝田はもはや静夜に精神をコントロールされていた。

勝田は万年筆のキャップをはずすと震える手でゆっくり紙にペンを近づける

しばらく躊躇うかのように紙の上でペンを泳がせていたが、静夜のとどめのような指を鳴らす音で一気にそれに署名した

「ありがとうございます。勝田官房長」

静夜はまるで勝ち誇ったような笑顔を浮かべながら署名した紙を取り上げた。

そして呆然としている勝田の目の前に左手をかざした次の瞬間だった。

「官房長——！」

ガクッと勝田の大きな身体はそのままデスクの上に崩れ落ちる。

そのまま意識を失った勝田の様子を見て、さすがのあの秘書も異常を認めざるを得なかった

「大丈夫、寝ているだけだ」

静夜はそう言うと秘書の顔を見てひとつ指を鳴らした

その瞬間、秘書の身体もまるで金縛りにあったかのようにその場で固まった

「君——名前は？」

静夜は笑顔のままに秘書に向かってそう聞いた

「有田です……」

「じゃあ、有田君。君は今日の証人になってくれるよね？」

「証人——？」

「一部始終は見てくれたよね。それを覚えているだけでいいんだ——！」

静夜はそう言い放った瞬間、秘書有田のみぞおちに拳を振るっていた。

何も言葉を発することなくそのまま昏睡する秘書有田。

それを見届けたあと、静夜は口笛を吹きながら踵を返した——その時だった。

「やれやれ、甲賀のやり方ってのは随分荒っぽいんですね」

その言葉を聞いて静夜は初めて顔に緊張の色を見せた。

「誰だ——」

静夜はそう言うと無駄に広い官房室を見渡した

そして次の瞬間、彼の背後で強い殺気が放たれるのを感じた——

静夜は身を翻すようにスーツの裏に仕込んだ手裏剣を打った。

周囲に拡散しそして広範囲に真っ白な壁に突き刺さる手裏剣。

だが、殺気元凶にはまったくかすりもしなかった

「いきなり攻撃するとは予想外でしたね」

その相手は軽く床に着地すると怒り心頭の静夜を見た

年は30過ぎといったところか——身長は高く顔は表情の読み取りづらい笑顔の仮面で覆われているよう。黒いスーツ姿ということは恐らく警視庁関係者なのだろう。

「家元にあなたと相手するときは注意しろと言われましたが——確かに強いですね。逃げ遅れてたら蜂の巣にされてましたよ」

「家元——」

その言葉を聞いて静夜は口元に不気味な笑みを浮かべた

「ははっ！まさか伊賀の者にこんな場所に出くわすとはな……」

「残念ながら君たち甲賀に警察を好きなようにされるわけにはいかないですからね」

そういうと男は感情が欠けた笑顔で静夜の前に手を差し出した

「僕は警視庁捜査2課の——否、伊賀藤林流東京支部総名代青葉宗司。君のことはよく家元に聞かされているよ。甲賀忍者衆16代頭目上月静夜さん」

総名代か——伊賀の幹部クラスのお出ましって奴か

静夜は突然現れた邪魔者青葉宗司の差し出された手を見つめてすこし悔しそうな顔を浮かべた。

宗司の現れたタイミングといいまるで静夜がこの場所に現れるのを予感していたかのようだった。

「しかしまあ、うちの官房長をこんな操ってまでその紙切れは役に立つのでしょうかね」

「なんだと？」

「何を取り付けたのかは知りませんが、そんなことをしても無駄ですよ。警察幹部はどうやら僕たち伊賀と君たち甲賀のバランスを取りたいらしいですからね」

「それはどういうことだ？」

「早く言えば、一流派の権力の独占は良くないってことです」

宗司はそう言うとデスクの上に覆いかぶさって眠る勝田を見た。

「まあ、少しの官房長にはこのままお眠りになってもらいましょうかね」

一体この男、俺に何の用なんだ——？

彼の實力なら官房長を操る静夜も止められたはず。なのにすべて事が終わってから現れた伊賀忍者青葉宗司。

そんな彼の目的が見えず静夜は静かに攻撃態勢に入った

実力なら自分のほうが勝ってるはず。この男さえ消えれば意味がないといわれたあの念書も効力があるはず——

「僕は今日は喧嘩しにきたんじゃないよ」

そんな静夜をも想定済みと言わんばかりに宗司はにこっと笑顔を浮かべた。

「今日、あなたに会いに来たのは——家元からの言伝を言いに来ただけですよ」

「家元の——言伝？」

その一言に静夜はさらに怪訝な表情を浮かべた

家元こと藤林悠輔は一体この男に何を伝えてきたというのだろう。

ただの決闘申し込みくらいなら他の方法だってあるはずなのに

「そんなに警戒しないでくださいよ。今日はそんなきな臭い誘いじゃありません」

読まれたか——宗司のその態度に静夜はすこし悔しそうな表情を素直に出したがすぐにそれを覆い隠し彼を睨んだ。

「俺も暇じゃないんだ。その言伝をさっさと行って失せろ」

その一言に宗司は笑顔を絶やさずことなく言葉を続けた。

「早く言えば家元はあなたをある場所に招待したいそうです」

「招待？」

「ええ、あなたも良く知っておられるはず——『ハリーアットホテル東京』ですよ」

その言葉を聞いて静夜はまた訝しげに顔を上げた

知ってるも何も——初めて藤林悠輔に相見えた場所ではないか……

何故その場所に改めて自分を招待するというのだろう

「今回は普通にロビーから入ってきてくださいね」

それを察してか、宗司は相変わらずの笑顔で気持ち悪いくらい優しく言った。

「どういう意味だ？」

「またガラス突き破って侵入されるともみ消すこちらも大変なものでね」

笑顔の宗司のその一言に静夜は明らかにムツとした表情を浮かべた。

まるであの時その場にいたような言い草——不気味なくらい自分を知り尽くしていてなんとも気味が悪い。

「断ると言ったらどうするんだ？」

静夜はまるで宗司の腹を探るような低い声でそう訪ねる。

だが宗司の笑顔は変わることはなかった

「あなたには断れませんよ」

「何故そう言い切れる？」

「あなた内心は喜んでいるんでしょう？ 家元のお誘いが来て——」

宗司のその一言に静夜は吹き出すように笑った。

「あんたの家元が何を企んでいるかは知らないが招待ってことは武装してくるなってことだろ」

「——ええ、まあそうとってもらえたら幸いです」

「やれやれ、まるで罠にはまりにきてくださいといわんばかりの茶番だな」

そう言うと静夜は吹き出すように笑った

そして青白く光る瞳で目の前の宗司を睨みつけた

「いいだろう。藤林悠輔のその企み——受けてたとうではないか」

その瞬間、静夜は周りを圧倒するような殺気をまるで宗士に見せ付けるかのように発して見せた

それに対し、宗司も負けじとにこにここと笑顔を絶やさぬよう対抗した

「じゃあ、明日の午後7時——上月さんをお待ちしております」

2 集結した忍たち

『ハリーアットホテル東京』は東京赤坂の超一等地に立地している外資系高級ホテルだった。

場所柄がよく芸能人や政治家の利用が多いと言われ、このホテルに入っている和食の店はミシュランの一つ星を獲ているので有名だ

もちろん赤坂の超一等地というわけだから一般庶民にはまるで接点のない場所——であろう。

そんな高級ホテルに静夜は一人堂々と正面玄関からエントランスホールへと歩いて行く

一度ワイヤーを使って強襲した経験はあるが、堂々と玄関から入ったのは生まれて初めてだ。

しかし、本当に金色にキラキラしたエントランスホールだ。

こんなところ誘われてでも行きたくない場所だというのが本音だ。

静夜は居心地悪くネクタイを少し緩めるとエントランスホールをまっすぐ突っ切りコンシェルジュカウンターに近付いていった

「あの一」

「何でございましょうか？お客様」

静夜の話の途切れさせたようにコンシェルジュの化粧の厚い女性は仰々しくお辞儀する

静夜はそれを見て思わず咳払いしてもう一度彼女に尋ねた

「藤林悠輔さんとの約束で来たんだけど……」

「はい、あなた様は上月静夜様ですね」

コンシェルジュの女性は静夜を見てにっこり笑顔を浮かべた

「藤林悠輔様から後伝言を承ってます。そのままラウンジに来てくれ——だそうです」

「ラウンジ？」

「ええ、当館の25階です。ご案内しましょうか？」

その申し出に静夜は笑顔を引きつらせて「結構です」と断りを入れる

そして釈然としない表情でそのままエレベータホールに歩いていく。

エレベーターを待ってる間、静夜は誰にも向けられない怒りをふつふつと溜めていく

一体藤林悠輔は何を企んでいるのだ？ 一体自分に何をさせるつもりだ——？

その誘いに乗ったはいいが今の状況だと何だか彼に操られているような気もして静夜のプライドは悲鳴を上げそうだった。

チーンとレトロな音を出してエレベーターの扉が開く

皆、無言でその小さな箱に押し込まれていくその時だった。

一人の大男がエレベーターの中に滑り込むように入ってくる

彼のせいで随分エレベーターのスペースが圧迫される。

誰だと思って顔を確認しようとしたその時だった。

「久しぶりだな……上月静夜」

そのささやきに近い声を聞いて静夜は思わず絶句する

その時エレベーターはゆっくりと上昇しだした

「応野……邦彦？」

そのかっちりとした礼服を着こなした大男は奥州応変流黒頭巾二十代頭目応野邦彦だったのだ

(何故お前がここにいるんだ)

静夜は邦彦を確認するなりに会話方法を『心読』に変更した

そうすればこのエレベーターという小さな箱の他の乗客には聞こえないはずだ

(おそらくはお前と同じ理由だと思うけど?)

(同じ理由——)

それを聞いて静夜は顔に苛立ちを浮かべエレベーターの虚空を睨んだ

(伊賀の家元め……)

本当に一体アイツはなにを企んでいるのだ?

邦彦の登場により理由はさらに謎のヴェールに覆われていった。

(そんなに怒ることはないだろ。甲賀の頭よ)

ふと見上げると邦彦の顔は若干こわばっている。恐らく彼も藤林悠輔の真意を測りかねているのだろう。

(俺は怒ってない。ただ——解らないだけだ)

そう伝えると静夜は苛ついた吐息を吐いた。

(でも安心もしたよ……俺と同じようにお前も伊賀の家元に呼び出されてることがな)

(何だ? この場で手でも組もうというのか?)

(バーカ。俺はそんな単純じゃねえよ)

そう言うと静夜はキッとエレベーターの階数表示を睨んだ。

(もしかしたら……風魔の芸人と戸隠の姫も呼び出されてるかもな)

その一言を聞いて邦彦は静夜に語りかけようとしたがその時エレベーターは目的の25階に付いた

静夜と邦彦はエレベーターの狭い箱から出るとまったく会話を交わさず『ハリーアットホテル東京』自慢のラウンジに足を運んだ

さすが東京の一等地に陣取った高層高級ホテルのラウンジだ。

夜の闇の中、億万の宝石の如く摩天楼は輝き続けている。

そしてビルの合間を走る車のヘッドライトとテールライトは真っ黒なキャンバスに垂らされた白と赤の絵の具のようにさえ見える

「いらっしゃいませ」

清潔な制服を着込んだホールスタッフの男が静夜と邦彦に笑顔で話しかける

「えーっとご予約のお名前は——」

「あ……俺は藤林悠輔の——」

「ああ、上月静夜さんと応野邦彦さんですね」

そう言うとホールスタッフは満点の営業スマイルで返した

「こちらの席になります。案内しますよ」

ホールスタッフはそういうと静夜と邦彦を予約された席へと案内する

大きな窓側を全面にしたカウンターバー。その椅子はさしずめモダン家具みたいな風格が漂う。

しかし、半分予想の範囲内だったが——その席には先客が居た

この超高級ホテルのラウンジに到底似つかないあの二人が——

「あれあれー？しずちゃんも来ちゃったわけ？」

「それに……応変流のあの太男もいるじゃねえか！」

戸隠流次期女頭目仁科ともえと風魔党副総帥風間英太は静夜と邦彦の姿を見て驚嘆の声を上げた

「やっぱりお前もアイツに呼ばれたのか？」

静夜は二人を強く警戒しながら一言そう聞いた。

「当たり前じゃない。せっかく悠輔に会えると思ったのにー！」

そう言うともえのファッションはやはり一貫してゴスロリチック。このラウンジにはかなり浮いている存在だ。

「俺もここに来たら真っ先に会ったのがコイツでさー。かなり出鼻挫かれたよ」

ラウンジだというのにオレンジジュースをストローですすっている英太も基本的はフォーマルなのだが短パンに蝶ネクタイをしているものだから同じように浮いている

。「……てか、悠輔に会いに来たいのになんであんた達と一緒になのよ！せっかくいい雰囲気のレストランで悠輔とデートを妄想してたのにー」

「——お前じゃ無理だよ」

その一言を全く感情を出さずに言い放ったのは席に座ろうとした邦彦だった。

ともえと邦彦は対立関係にあるせいか、その一言にともえは過剰に反応する

「うっさい！ あんたみたいなキモ男にはオトメゴコロなんていっしょ——う解らないでしょうね！」

「別に解りたいなんて思わない」

邦彦は冷淡にそう言い放ちながら近くのホールスタッフに飲み物を注文する。

烏龍茶——なるほど、この後何があるかわからないからアルコールを避けたか。

「ああ！ムカツク!! なんで悠輔はこんなキモ男まで招待するかなあ！ ここがホテルのラウンジじゃなかったらあんた真っ先に殺してるわよ」

「まあ、落ち着け。なんか食えよ」

静夜はそんな二人の間に入るとともえにメニューを渡した

「でも、なんか解せないんだよなあ」

そう言ったのはオレンジジュースの氷をストローでつついている英太だった。

「あのインテリ忍者は何企んでやがるんだ？ こんな高級ホテルに俺たちを集めて——」

「それが解ってたら苦労しないぜ」

そう言うとき静夜はホールスタッフを呼び止め邦彦と同じ烏龍茶を頼んだ。

「でもこのホテルに俺たち主要4流派の頭目クラスを呼び出したって事は——なにか大きな仕掛けがあると思うんだけど」

「なるほど、しずちゃんはそれが解らなくてイライラしてるのね」

ともえのその一言に静夜はそれを嫌がるかのようにわざとらしく咳払いをした

まるで無言で「しずちゃん」と呼ぶなと言い放つか如く

「でも本当に悠輔何するつもりなんだろう？」

「まあ、一応は高級ホテルに招待したんだから暴れることは制限されるだろ」

そう言うとき英太はため息混じりにそう言った

「でも、僕はアイツが大人しく話し合いの席を持つのは考えられない」

そう言ったのはじっと外の摩天楼を睨み付ける邦彦だった

「ああ、その件は応野邦彦に賛成だな」

静夜はそう言うときホールスタッフは烏龍茶を静夜と邦彦の前に挿しだした

「さすが忍者王の息子——と言うべきか。アイツは年若いのに修羅の道一直線だからな……大人しく話し合いのテーブルに着くのはあり得ないな」

「じゃあ何よ……何のためにあかし達集められたの？」

「それが解ったら苦労しないよ」

静夜はそう吐き出すと口に烏龍茶を含ませた

戦う気もない、話し合う気もない——だとしたら何のために自分たちを集めた？

話はいつまで経っても堂々巡りだ。静夜は低く息を吐いたその時だった

「なあなあ、一旦話を整理しないか？」

その提案をいきなり切り出したのは英太だった。

「話を整理？」

「そう、もう何が何だか頭ごちゃごちゃでさ……」

そう言うと英太は3人をじっと見た。

「取りあえず俺はあの家元を倒して最強になりたい。俺の望みはそれだけ」

「ほう……でもその家元がこの中の誰かによって先に殺されたら？」

「それは——そいつを俺が倒せば最強だろ！」

英太はそう言い放つと拗ねたようにオレンジジュースをストローですすった

「でも、世の中はそう簡単にできてないんだよな……」

静夜はそう言うとニヤッと不気味に笑った

「じゃあ俺の目的もこの際だから言おうか？」

「しずちゃん。それ多分誰も聞きたくないと思う」

「うるさい。黙って聞けよ」

静夜はともえの横やりをかわすと一つ息を吐いて言葉を続けた

「俺の目的——それは日本にあるすべての忍術流派の奥義をすべて見破ること。だからこうしてお前達が集ってるのは——逆に好条件だ」

「ほう……ということは伊賀の家元含めて僕たち全員敵だ——と言いたいのか？」

邦彦の警戒したようなその言葉に静夜は不敵に笑った

「まー考えようによればそうなるな。とは言えさすがの俺でもお前ら全員相手にするのは何個命があっても足りない」

「じゃあどうすんのよ。誰かと組むと言いたいのか？」

ともえのその問いに静夜は「そうだな」と小さく答えた。

「まだ何処を提携相手にするかは思案中だし——それに上の連中の意見もくまなきやいけないからな。だけどこれだけは言うておく。藤林悠輔は俺の獲物だ」

その言葉を言ったその瞬間、一瞬ラウンジの展望カウンター席は水を打ったような沈黙に包まれる。

だがそれを最初に破ったのはともえの啖呵だった。

「バカ言うんじゃないわ！ 悠輔はあたしが狙ったの獲物なの！ あんたの奥義破りのお遊びに付き合わすんじゃないわよ！」

「こいつに同意するのは意に反してるけど——俺もその発言には異論があるな。だいたいあんたが家元倒したらあんたと最強かけて戦うことになるぞ」

ともえの反論に同意するように英太も静夜を睨み付け牽制する

それに対し静夜は彼らを鼻で笑い突き放すようないい方をした

「こればかりは俺も譲れない。甲賀と伊賀の長年の因縁にかけてもな」

そう言うと静夜はストローで烏龍茶の氷を一回かき回すと隣の席の邦彦を睨んだ

「——おい、応野邦彦。お前もはっきり言ったらどうだ。自分がどう言う大義名分でこの抗争に身を投じているか——」

「僕か——？」

静夜にそう催促されて邦彦は伏し目がちに言葉を続けた

「僕はただそこの戸隠の姫にあの日の代償を払って貰いたいだけ。伊賀の家元には興味なんて——」

「なによ——！あんたまだあたしに未練でも——!!」

ともえのその反論を制すように静夜は彼女の口に手をかざす

そして、青白い光を放つ瞳で邦彦を見据えた

「嘘言うな」

「何を——？」

「伊賀の家元には興味がないだと……ふふっ。おかしい事言ってくれる」

そう言うと静夜はニヤッと口元に笑みを浮かべ言葉を続けた

「お前、戸隠を狙っているのはただの隠れ蓑。本当に狙ってるのは——藤林亮輔だろ」

「——!!」

その一言に邦彦は絶句した。

その狼狽の仕方といったらともえも英太も同じように驚くほどだった。

「別に隠し立てすることじゃないだろ……だけど戸籍上藤林亮輔は10年前に死んでいるのは事実——そんな幽霊みたいな男を追ったって仕方ないだろ」

「何を言う……まるであの男が生きてるような言い方をしたのは——上月静夜、お前だろう」

「あれ？ そう話を取ったか……まあそれはそれで面白いんだけどな」

そう言うと静夜は蔑んだような笑みを浮かべ邦彦を見た

「でも、あんたが真紅の瞳を持つ人間にトラウマを持つのはれっきとした事実。ならば藤林悠輔に興味がないなんてその口で言えるか？」

静夜のその一言にまるで屈したかのように邦彦は黙り込む。

それを勝ち誇ったかのような笑みを浮かべ静夜は見つめていた——が

「すいませーん！ しずちゃんに質問ー！」

沈黙を破るようにともえの甲高い声が響く。

静夜は「だからその名前で呼ぶな」と言わんばかりにともえを睨み付けた。

「ところでさー藤林亮輔って誰よ？悠輔の——」

「兄貴さ」

静夜は冷淡に一番簡潔に質問に答えた。

その言葉にともえは納得したように「ふーん」と頷いた

「悠輔、お兄さんがいたんだ……知らなかった」

「いたと言っても大分前に死んでるけどな——事故で」

「事故？」

その一言にそこにいる全員が顔の色を変えた

静夜は「おしゃべりが過ぎたな」と苦々しく呟くとさらに言葉を続けた。

「だけどこれだけは忠告しておく。お前が幽霊を追うのは好きにすればいいがそれなりの覚悟は

しておくべきだな——例えば今以上に敵が増えるってことかな」

「新たな敵か——まるで僕たちのとは別の勢力がいると言わんばかりだな」

「そうか……その様に聞こえたんたら否定はしないけどな」

邦彦のその鋭い指摘に静夜はあえて否定も肯定もしなかった。

それを聞いて邦彦はただ釈然としない表情で烏龍茶を飲み干した

「しかし、悠輔おそーい!! 一体何分待たせる気よ！」

ともえはその瞬間苛ついた表情でわめいた

それに対し英太は「恥ずかしいから静かにしろ」とともえを注意したが、彼女の言葉を代弁するかのよう言葉が続けた。

「——でも確かに遅いと言えば遅いな。アイツ一体何企んでいるんだ？」

「さあな……それが解れば苦労はしないさ」

そう言うと静夜は怪訝そうに頭をかいた——その時だった。

「藤林悠輔様のお連れの方々ですか？」

その一言を聞いてそこにいる一同すべて後ろを振り返った。

そこにはラウンジのホールスタッフの女性がトレイを持ってニッコリ笑っていた

「お連れって——まあ、そうなのかも知れないけど……」

静夜はその問いに困惑した表情で答えたが、彼らの事情も露も知らないホールスタッフは満点の営業スマイルで返した

「藤林悠輔様から御伝言と預かり物があります」

「伝言と預かり物？」

そこにいる一同はその言葉に強く当惑した様子で顔を見合わせる。

だがホールスタッフは何食わぬ顔で静夜にトレイを渡すとそのままラウンジの奥に消えていった。

そのトレイの上に乗っていたのはおそらくこのホテルのカードキーとそして小さなメモ1枚だった。

「なんだと……？」

静夜はそのメモに書いてある物を読んで絶句した。

それは藤林悠輔が示したあらたな命令であった。

【このカードキーは最上階スイートルームのマスターキー。その場所で僕は君たちを待っている——】

3 悠輔の企み

藤林悠輔は一体何を考えている？何を企んでいる——？

この話が舞い込んできた次の瞬間から今までずっとその理由を考えてきたが、今日に至っても全く目的が見えない

それに対しここにいる4人全員が不安に思い憤っている。

25階のラウンジからスイートルーム専用の豪華なエレベーターに4人全員で乗り込む

全く——何という絵面であろう。日本忍者界の若手トップ4がエレベーターの狭い箱の中で同乗するとは——笑いたくても笑えない光景だ

ただそのエレベーターの中で誰一人として言葉は発しないし心読も使わない

不気味な沈黙のみがこの豪華で小さな箱の中を支配する

だいたい皆思っていることは同じ。会話しても無駄なのは目に見えている。

チーンとレトロな音を上げてエレベーターは目的地の最上階へと到達する

『ハリーアットホテル東京』の最上階は基本的スイートルーム1部屋しかない作りになっている。

豪華で短い廊下を歩くと突き当たりに重々しいオーク材の扉が門を構える。

静夜は受け取ったカードキーをリーダーに読み取らせる

ピピッと読み込み音がした後、カチャッと施錠が解除した音が小さく響く

オーク材の重たい扉を静夜は開くとそこから初夏の爽やかな風がびゅうっと一陣吹き付ける

スイートルームのテラスの大きなガラス窓は開いていて、シルクのカーテンはゆらゆらと妖しく揺れていた。

そしてその豪華で広い部屋の奥——ノイズ混じる沢山のディスプレイを背にして彼は座って待っていた。

「ようこそ——皆さん」

照明が落とされて薄暗いスイートルームにノイズのディスプレイの白い光と藤林悠輔の眼鏡越しの真紅の瞳が光る。

まさか19歳の若輩とは思えぬ静かな気迫が彼を覆い尽くしているが、相手は日本で5本の指にはいるであろう忍者たちだ。そんな威圧に負けるはずはなかった。

「おいおいおいおい。一体てめえは何考えてやがる！」

先に啖呵を切ったのは風魔の英太だった。

「高級ホテルに呼び出しておいてラウンジでのんびりさせた後スイートルームへ——てめえの格好つけの手駒にされるのは心外だぜ！」

「そうかな？ 別に格好つけた訳じゃないんだけどな」

「その態度がいけ好かん！ ここが高級ホテルじゃなかったらてめえをしばき倒したいわ！」

英太は言いたいことを思いっきり言ったが、悠輔の表情は変わらない。

それを見かねた静夜は部屋の壁にもたれかかりながら悠輔を青白い瞳で睨み付けた

「俺も訳を聞きたいな……お前どうしてこんな回りくどい方法を使った？」

「回りくどい？」

「俺たちに真っ先に用があるならさっさとここに呼べばいいだろ。なのに何故わざわざラウンジで俺たちを待たせた？」

静夜のその問いに悠輔は口元にニヤッと笑みを浮かべた。

「じゃあ、ここで種明かしでもしようか？」

そう言うと悠輔は指をパチンと鳴らす。

次の瞬間、ノイズ混じりのディスプレイはある白黒の映像を流し出した

それを見て一同は思わず息を呑んだ。

そこに映し出されたのは『ハリーアットホテル東京』のエントランスに彼ら、エレベータの防犯カメラに映った彼ら、そしてラウンジの席に座り会話する一人一人の映像の彼ら——

「何これ！」

それを見てともえは全身を総毛立たすように叫んだ。

「悠輔……あんたあたし達のことずっとこのモニターで監視してたって事？」

「まあ、そう言うことになるかな」

そう言うと悠輔は椅子を回転させキーボードを使ってモニターを操作した。

「エントランスとエレベーターはホテルの監視カメラを使わせてもらったけど、ラウンジはちょっと違ってね——隠しカメラと盗聴器をそれぞれの席に仕掛けさせてもらった」

「何——ッ！」

邦彦は驚愕の表情で細い目を見開いた。

そして悠輔はキーボードを叩きながらさらに映像と音声を出して見せた

それはラウンジで4人会話していたことが完璧に筒抜けだった

「最初、これは流石に気づかれると思ったんだけど——意外にばれなくてよかったよ」

「ほう、まるで俺たちが無能だと言いたげだな……」

静夜はそう言うと青く暗く光る瞳で悠輔を睨み付けた

「いい加減本当の種明かししたらどうだ？家元。どうしてこんな名高い高級ホテルで盗撮や盗聴がまかり通るのか——」

「まだ気づかないの？」

そう言うと悠輔はパソコンチェアを回転させ4人を真紅に光る瞳で見据えた。

「今日のこの『ハリーアットホテル東京』は僕たち伊賀藤林流が借り切ってる」

「はあ？」

その一言に英太は苛ついた声で返した。

「どういう意味だよ。お前らでこんな高級ホテルを借り切るだと？冗談は休み休みにしろよ！」

「君、今日このホテルで誰と会った？」

「え——？」

その問いに英太は一瞬言葉に詰まったが、すぐに不機嫌そうな顔で言葉を続けた

「まずコンシェルジュの姉ちゃんに会って、エレベーター昇ってラウンジのホールスタッフにあ
って——」

「それ全部僕の配下」

悠輔はそういうとニッコリ笑った。

だが彼以外の4人はその笑顔に空恐ろしい物を感じ絶句した

「貸し切ると言ってもエントランスの一部とラウンジくらい。その場所に伊賀藤林流の門下の者
を配置しておいた。つまりこれがどういう意味か——わかるよね」

「僕たちはお前につぶさに監視されていた——そう言いたいんだな」

邦彦はそう言うと細い目を見開いて悠輔を睨み付ける

それに対して悠輔は手を前に組んで4人を見るだけだった

「なるほどな」

その中でも静夜は特に冷静な態度を突き通した。

「この前このホテルに俺が侵入したとき——えらい綺麗に揉み消したと思ったらそう言うからくりがあったんだな」

「そういうことさ」

悠輔はそう言うと言ったとパソコンチェアから立ち上がる大きなガラス窓の方に歩いてく

そして眼下の東京の摩天楼を見下ろすと言葉を続けた。

「まあ余り詳しくは言えないけど、ここのホテルは伊賀藤林流の息がかかった連中が仕切ってる。だからこのホテルで起きることは大体うまくまとめられる」

そう言うと言ったと悠輔は踵を返した瞳を赤く光らせた。

「でも君たちがうまく口を割ってくれてよかったと思うよ。それだけでも大きな収穫だった」

「ふざけるな！ てめえはただ盗み聞きしてただけじゃねえか」

英太はまるで悠輔に突っかかるかのように問い詰めてきた

「それが目的だとしたら俺はおめえを許せねえ！ そんなことするの忍者じゃない！」

「そうかな……僕は汚いことでも何でもやるのが忍者だと教えられてきた」

「うるさい！ お前のスタイルと俺のスタイルじゃ大分違うってことだろ！」

その瞬間、英太は棒を手にとった。

それはみるみる長く伸びそして悠輔にそれをかざした

「もう我慢できねえ！ 藤林悠輔！ 俺は今この場でお前を倒す——!!」

英太はそう言うと言ったと変化棒を振り回しながら悠輔めがけて猛スピードで突っ込む。

それを見て悠輔は手を宙でゆっくりと泳がせ静かに印を結ぶ。

スピードに絶対的な自信のある英太は悠輔めがけて棒を振りかざす——だが次の瞬間だった

「——ッ!!」

英太の身体は再び悠輔の目の前で止められる

今回も九字縛りトラップか——否、違う。それよりももっと強力な結界だ。

「残念だったね。風間英太」

悠輔は目の前で止まった英太の顔を意地悪そうにのぞき込むとニッコリ笑った。

「今日の僕は君と喧嘩しに来た訳じゃないんだ。だから大人しくしててくれるかな？」

そう言うと悠輔は胸の前で確実に印を結ぶ。そして手を英太の前にかざした次の瞬間だった

一瞬激しい光が走った次の瞬間、英太の身体はいとも簡単に吹き飛ばされた

思いっきり壁に叩きつけられる英太の身体

それを見ていたともえは苦々しい表情を浮かべて呟いた

「止縛結界——ある一定の範囲内に入ると動きを止める上級結界。つまり、悠輔。あんたの近くには寄れない——そういうことね」

「さすが戸隠の姫。得意分野の術には詳しいね」

悠輔はそう言うとゆっくりと4人を睨み付けた

すると悠輔の足元から青白い結界の光が露わになった

「さっきも言っただろう。今日の僕は喧嘩しに来たわけじゃないって」

「じゃあ何なんだよ！ 俺たちを散々監視しといて——一体なんの目的なんだよ！」

悠輔の術に敗れた英太は身体を起こすとキッと悠輔を睨みつけそう叫んだ

それに対し悠輔は初めて視線を床に落とし、憂いに似た表情で語り出した

「僕たちは不幸だ」

「は——!？」

その一言にそこにいる一同すべてが驚きの表情を浮かべた。

だが周囲の驚きを余所に悠輔は伏し目がちに言葉を続けた

「考えてみてごらんよ。何で僕たちはこの現代で忍者として生きている？ こんな平和で争い事などないこの世界で——」

「それは——」

「僕は時々忍者にはもう存在意義がないのかとも考えることがある。じゃあなぜ僕らは戦う？ 自らの流派を守るため？ それとも——」

「は？ 笑わせるな。心でもないことを言うな」

そう言ったのは壁にもたれかかり悠輔を青白い瞳で睨み付ける静夜だった。

「お前さっき俺たちの会話を盗み聞きしただろう？ それで答えは大体出てるじゃないか」

「各の目的で僕たちは争い続ける。どちらかが淘汰されるまでずっと——」

「俺はお前がそれを望んでいると思った。なんせあの男の息子だからな」

その一言に悠輔は赤く光る瞳を上げる

その表情はまるで何かが欠落したように機械的だった。

「君たちがそれを望むのであれば僕は容赦はしないよ」

その瞬間、悠輔の瞳は真紅に光からおぞましい殺気の矢が4人に向かって放たれる。

それは一瞬怯みそうになるくらいだったが4人も負けじと悠輔を睨んだ

「みんな……これを最後にしよう——」

悠輔はそう言うとき赤い瞳を光らせながら4人の元へと近付いてくる

それに対し4人は揃って身構えるように緊張を見せた

「これで400年以上続いた忍者の歴史を終わらせる——そんな覚悟で僕は戦う。だれが笑うかなど恨みっこなしだ」

「結局、伊賀の家元は修羅の道に走る——か」

邦彦は呆れた表情を浮かべそう言った

「つまり、大々的な抗争に発展してもいい——そう言うことか？」

「君達がそう望むのなら——滅ぼし滅ぼされるまで戦うまでだ」

そう言うとき悠輔はふと4人の姿が映るディスプレイに目を移した

「そう言えば……さっきラウンジで僕の兄のこと話題にしてたね」

その一言に4人は一斉に沈黙する。

だが悠輔はそれも織り込み済みかのように言葉を続ける。

「確かに僕の兄、藤林亮輔は10年前に死んでいる——はずだ。もし生きているのなら真っ先に僕たちの元に情報が来るはずだから」

「ほう……お前もまるで兄貴が生きていると言わんばかりの口ぶりだな」

静夜のその一言に悠輔は一瞬ムツとした表情をしたがすぐにいつもの冷静を被ったような眼差しに変化する。

「当たり前だ。兄さんは伊賀の抜け忍という事実は変える事は出来ない。生きてるか死んでるかとは別としてその消息だけは知りたい」

悠輔のその言葉に邦彦は知らず知らずに右肩の古傷を触っていた。

やっぱりあの時の伊賀の抜け忍は伊賀忍者を統べる藤林家の人間に間違いない。

でも何故、彼を救護した自分が彼に襲われなければならなかったのだろう？

それは考えても考えつかない想像だった——

「——ともかく。僕は君たちの意志を確認するためこの場を用意した」

「意志——ねえ」

その一言を呟いたのはともえだった

「こんなまどろっこしい真似しなくてもそんなこと確認するのなんて簡単じゃない」

「ははっ！ 確かにその通りだね」

そう言うと悠輔は呆れたように笑った。

「だけど君たちももう気づいているよね？ 僕たち伊賀藤林流がどれだけ力を持っているかってこと——」

悠輔のその一言に4人は一斉に黙り込む

まるでそれを楽しむかのように悠輔はさらに言葉を続けた

「今日君たちを集めたのは他にもない——君たちを威圧するためだ」

「威圧うー？」

その一言に食いつくかのように英太は悠輔を睨み付けた

「偉そうに……そんな伊賀は偉いって見せつけたいだけだろ」

「まあ平たく言えばそうだね」

そう言うと悠輔はくくっと笑った。

「さて、こんな僕らを敵に回して君たちはどうする？ 大人しく淘汰されるか、それとも——」

「ふん……馬鹿馬鹿しい」

悠輔のその言葉を遮ったのは静夜のその言葉だった

「そんなこと最初から決まってる。俺はお前の奥義を破る——それだけが目的だ」

静夜はそう言うと青白く瞳を光らせる

「俺も、お前を倒して最強にならなきゃ虫の治まりどころがない」

英太は不機嫌そうな表情を浮かべ悠輔を睨む

「あたし？ そりゃ、悠輔のこと好きだから一緒になりたいけど——だってあんたそう言う気ないんでしょ……だったら、あんたを殺してでも一緒になりたい」

ともえは暗く陰湿に光る瞳で悠輔を見る。

「僕は——この力をこんな馬鹿げた抗争に使いたくはないが、お前の一族に強い因縁があるようだな……結局はお前と相見えることになりそうだな」

邦彦は細い瞳で鋭く悠輔を睨み付ける

そんな4人を見て悠輔は深いため息をついた。

だが、その表情はどこかこの状況を楽しんでいるように映るくらい明るかった

「やれやれ……大体予想ついてたけどみんな退くことを知らないんだね」

そう言うと悠輔は眼鏡の奥の真紅の瞳をぎらりと光らせ4人を睨み付けた

「もう話し合いはやめた。みんなそれぞれの目的で生き残りをかければいい。それが悪い結果を招いてもだれも恨まないこと——それだけが決まりだ」

その瞬間また大きく開いた窓ガラスからびゅうっと乾いた強い風が吹き込む。

そんな風に茶髪をなびかせながら悠輔は一言言った。

「今度逢うときはお互い敵同士だ」